

ロクでなし魔術講師とマダオ（まるでダメなおっさん）

嫉妬憤怒強欲

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

仲間を救うために命令に違反し、軍をクビになった男レイモンドⅡバルフェルム。

基本的に無気力かつだらしく適当で、金に汚く、何でも屋としての仕事も大抵は適当にこなして依頼料だけをもろうことしか考えていない家賃滞納の常習犯。それでいて気だるげながらも真っ直ぐな目をしたその男はこう呼ばれていた。

マダオ（まるでダメなおっさんを指す）

「誰がマダオだ！あと俺はまだおっさんじゃねえ！」

むしやくしゃして書きちゃいました。だが後悔はしてない！……たぶん。

目次

第1章：天然パーマに悪い奴はいない	
マダオ、クビになる。	1
やる気なし	14
ダメ（変態）講師、やる気だし	35
崩壊する日常	59
ドSⅡサデイスト	77
そして事件は終わりを迎え……………	104
第2章：会わないとわからないこともある	
東方の少年	124
自己紹介で第一印象が決まる	136
競技決め	147
一時のテンションに身を任せる奴は身を滅ぼす	158
魔術競技祭、開催前	171
魔術競技祭、開催	183
言うは易く行うは難し	196
不穏な動き	220
作戦を考えた	236

第1章：天然パーマに悪い奴はいない マダオ、クビになる。

北セルフォード大陸の北西端に位置する、進んだ文明と優れた魔道技術・工業技術を国家の主幹とした帝政国家アルザーノ帝国。

その首都である帝都オルランドで悲劇が起きた。

数十名の一般市民風の人間が、信じられないほどの俊敏さで、黒い軍服を着た鉄色の髪的男へと襲い掛かる。

誰も彼もが、光灯らぬ虚ろな目、土気色の顔色をしており：包丁や鉈、麵棒、シャベルなどで武装し、病的で剣呑な雰囲気を放っていた。

その死人のような顔色の悪さとは裏腹に、野生の獣のように躍動するその圧倒的な俊敏さは、明らかに人の領分を超えたものだ。

彼らをこんな風にしたのは、錬金術の悪夢とも言われている最悪の魔薬『天使の塵』だ。

被投与者の思考と感情を完全に掌握し、筋力の自己制限機能を外し、ただ投与者の命令を忠実なまでにこなす無敵の兵士を作ることを目的として開発された魔薬。

一度この薬を投与された人間は確実に廃人と化し、もう二度と元には戻らない上、定期的に『天使の塵』を投与されなければ、たちどころに凄まじい禁断症状と共に肉体が崩壊し、死に至る。投与を続けてもいずれ末期中毒症状で死に至る。

たった一度の使用で、肉体的に生きてはいても、人としては死んだも同然となるのだ。

この魔薬の中毒者は、死霊術師が使役する屍人と似たような存在でありながら、生み出すのに、死霊術のような手間暇かけた儀式がまったく必要ない。

他者に投与するだけで、屍人同然の強力な下僕を、お手軽に量産できる凶悪極まりない魔薬であるがゆえに——皮肉をこめてこう呼ばれるのだ。

死者を迎えに来た天使の羽粉——すなわち、『天使の塵』と。
そんな最悪な魔薬が一人の魔術師の手で、都市にいる数百名の住民
達に投与された。

男は右手に握る反った片刃が特徴的な剣を猛進してくる天使の塵
の中毒者達へと振るう。

狭い路地裏の壁に、真紅の血しぶきが飛び散った。

斬られた中毒者は、血飛沫を上げて倒れ、二度と動くことはなかつ
た。

中毒者達に慈悲を与えた男は、返り血を浴びてしまい、鉄色の髪が
一面真っ赤に染まっていた。

「はあ……はあ……ッ！」

自分以外、誰もいなくなった路地裏で、男は息を切らしながら、壁
に寄りかかるように座り込む。

既に何人殺したかは分からない。だがいつまで経っても敵は湧い
て出てくる。斬っても斬っても敵の数は一向に減ることは
無い。

そんな中、がつ、と耳障りな雑音が宝石の形をした通信機に混じる。

『——クソッ！ 誰でもいい！ 誰か援護をッ！』

通信機から、今いる場所から数ブロック離れた場所にいる仲間の声
が雑音混じりに聞こえてくる。通信機からの声を聴いて、誰かが早急
に援護に行かねばならない状況なのは確かだが、援護の指示は一切出
ていない。

しびれを切らした男はもう一つの通信機を取り出す。

「——室長。俺はグレンとセラの援護に行く」

『——ッ！ 駄目よッ！ 貴方はそこで敵を倒しなさい！』

「はあ？なに寝言言ってやがる？このままだと二人共死ぬぞ」

『二人の援護に向かう事は……私が許さないわ』

「大局的に考えても、もう残り少ない戦力をこれ以上失うのは得策
じゃないことぐらいお前ならわかるだろ。俺がいる区画の近くには
アルベルトが居る。あいつの腕前ならここはまだ何とか持ち堪えら

れる。だから——」

『駄目だったら駄目よッ!! 貴方はそこで敵を倒しな——』
『イヴ』

通信機の向こう側にいる相手の台詞を遮りこれまでとは打って変わった静かな落ち着いた声で男は彼女の名を呼んだ。

『何? やつと従う気になった? ならさっさと——』

『誰の指示だ?』

その言葉にイヴは動揺した。

『何を……言って……』

「ここで二人の援護に誰も向かわせないのがお前の作戦なのか?」

『……そ、そうよ! だから貴方はそこで——』

「……イグナイト卿の指示だな。そうだろ?」

『——いえ、私の判断よ』

「お前が仲間を見殺しにするような奴じゃないってことぐらいわかる。二人の援護を提案したがあのクソオヤジに却下された。違うか?」

『——ッ! し、知ったような口きかないで!』

その言葉にイヴは一瞬言葉を詰まらせた。その反応で男は確信を得る。

「今ならまだ間に合う」

『……駄目よ』

「手遅れになるぞ。それでも行くなど命令するか?」

『……駄目よ! 軍のトップである父上の命令に逆らえばどうなるかわかるでしょ!』

「ああ、今度こそクビだろうな。だが、テメエが気にすることじゃねえよ」

『ちよつとレイ! 待ちなさい!』

「なんか聞かれたら途中で道に迷ったとでも言い訳してくれ」

『ちよ——』

ブツン

レイと呼ばれた男は、イヴとの通信を一方的に切り、すぐさまアル

ベルトとの通信を開始する。

「アルベルト、俺は——」

『分かってる。早く行け』

「へっ……そうかい」

レイが用件を伝える前にアルベルトは答えた。どうやら言いたいことは分かっているらしい。

「じゃ、ちよっくら行ってくるわ」

レイはその場をアルベルトに任せるとすぐにグレンとセラの元へと向かった。

◆◆

「——で、無事二人とも助かったが、お前は結局クビになったのか？」

「まあそんなところだ。ムカついてたから去り際にあの老害に中指立ててやったよ」

「ぶふうっ!? それホントか!? ……あっははははは!! ホントお前度胸あるな!」

開店前のバーの、薄暗い店内の奥のカウンター席にて、一年前に帝国軍をクビになったレイモンド・バルフェルムは、隣に腰かける妙齢の女に当時の出来事を語っていた。精悍な長身に着崩した一般人の服装、天然パーマの鉄色の髪、けだるそうにも見える眠たげな目つき。

隣で腹を抱えながら大笑いしている女の外見は二十歳ほどだろうか。黄昏に燃える麦穂のように豪華な金髪、鮮血を想起させる真紅の瞳。その相貌は間近からのぞき込めば、思わずぞつとするほど見目麗しく整っており、仄かに漂う妖しい色香が魔性を感じさせる。すらりと伸びる手足が艶めかしいその肢体は、まるで美術モデルのように、いかにも女性らしく過不足ない完璧なプロポーションを誇っている。身にまとうは丈長の黒いドレス・ローブ。貞淑な雰囲気を漂わせながらも、開放された胸元や、ベルトで強調されたボディラインはそれを

超えてなお、艶美。なんとも派手で妖艶な出で立ちだが、それを着慣らす圧倒的な器量と華がある、どこか浮き世離れた雰囲気娘だ。

妙齢の美女——セリカⅡアルフォネアはレイの仲間だったグレンの育ての親で、魔術の師匠。見た目は20歳ほどの美女だが、真の永遠者（イモータリスト）と呼ばれる原因不明の不老不死体質。40年前に記憶喪失となり、それ以前の記憶を持たないらしい。更に200年前の戦争で外宇宙から召喚された邪神の眷属を殺害した伝説を持つ、人外と評される第七階梯に至った大陸最高峰の魔術師である。

「それでクビになった後はロクに職に就かずにも今も無職とはねえ……まさきに“ま”るで“ダ”メな“お”っさん略してマダオじゃないか。あつはははははは！　こんな……こんな面白い話があるんだなあ！

あつはははははは！

「誰がマダオだ!? 勝手に不名誉な称号つけるな、セリカ！ あと、俺はただおっさんじゃねえし無職じゃねえ！ ちゃんと事業を立ち上げてんぞ！」

「だがほとんど入ってくる仕事はペット探しやらばかりで、経営が危ういじゃないか」

「うるせえ！ わずかでも収入が入るならまだ希望はある！ だいたい、そう言うお前のところのグレンだって今じゃ立派なマダオールト確定じゃねえか！」

レイがクビになった数ヶ月後、ある任務でグレンの相方であるセラが重傷を負い、療養の為に軍を抜けることに、グレンもセラを守れなかった自分を攻め、軍を辞めた。

それ以来セリカの屋敷にずっと引き籠って毎日毎日、食って寝て、食って寝て、何をするでもなくぼんやりとするばかりで時間を無駄にしている状態だ。

「……確かに、あの穀潰しには何度死ねと思ったか」

「おいやべえよ。義理とはいえ自分の息子に殺意抱いちやってるよこのお母さん」

「正直今のアイツは見てられない。そんなわけで……そろそろグレンを働かせようと思ってるな」

「働かせる?」

「ああ。実は今、アルザーノ帝国魔術学院の講師枠が、ちょうど一つ空いてしまったな。急な人事だったものだから、当分、代えの講師が用意できないんだ。で、だ。アイツにはしばらくの間、非常勤講師を務めてもらおうかと思っている」

「おいおい、あいつに学校の先生やらせて大丈夫なのかよ? 一度ニートになった人間は働いたら負けだとか考えを捨てきれない。絶対自習とか言ってるまともに授業やんねえな」

「さすが同じニートの言う言葉は説得力あるな」

「誰がニートだ。一緒にすんじゃねえよ」

グレンと同列扱いされることにレイは不満を漏らしながら、グラスに入っているブランデーを傾け――

「まあ、アイツが無事社会復帰できるよう、家でゴロゴロしながら応援してるよ。グレンくんファイト」

「腹の立つ応援の仕方だな。だけど残念ながらレイ、お前にも魔術学院で非常勤講師をやってもらうぞ」

「ぶふうッ――!?!」

思いつきり吹き出した。

「おい汚いぞ」

「ゲホツゲホツ、は、はあ? お前は突然何言い出すんだ? なにをどうしたらそうなる」

「なにしてグレンがさぼらないか傍で見張るために決まってるだろ」
「だったらお前がやればいいじゃねえか。保護者が最後まで責任持つて」

「そうしたいのはやまやまだが、近々帝都で開催される帝国総合魔術学会への参加準備で皆忙しいんだ。教員免許を持ってないことなら安心しろ。学院内における私の地位と権限でどうにでもなる」

「……それ職権乱用だろ」

セリカの過保護っぷりにレイは呆れる。

「だいたいなんの罰ゲームだよそれ、やるわけねえだろ」

「ちなみに、お前に拒否権はないからな」

「ほう？嫌だと言ったら？」

「稲妻に撃たれるのが好みか？それとも炎でバーベキュー？ああ、氷漬けも候補としてあげようか？」

「すごご、と凄まじい魔力がセリカの掌に集まっていく。」

「ちよいとアンター！人の店ん中で揉め事起こすならただじゃおかないよ！」

そこへカウンターの奥に引つ込んでいた、東方の着物を着こなして50代ぐらいのバーのママが出てくる。その一喝で、セリカの掌に収束しきっていた魔力が砂埃のように霧散していった。

「いやあすまんすまんママム。ちよつとばかり脅すだけだったんだ」

「ふん、アンタは相も変わらず言葉が通じなければ暴力で解決しようとする奴だね。コイツにそんなのが簡単に通じるタマかい」

「おいなんだよバーさん。まさかさっきの話聞いてたのか」

「店の中であんなデカい声で喋ってれば嫌でも聞こえるよ。馬鹿だね」

やれやれと言った風にママはマッチに火をつけ、口に啜えた煙管にうつす。

「ところで、非常勤でもそれなりに給料をもらえるのかい？」

「ああ、私の権限で特別に正式な講師並に出るよう計らえる」

「ならレイ、アンタその仕事引き受けな」

「おいバーさん!？」

「アンタ滞納してる家賃まだ払っちゃいないんだ。来月までに払えないなら腎臓なり売って金作ってもらわないとね」

「ちよつ、それキタねーぞー！」

「嫌なら駄々こねてないで引き受けな。頼まれた仕事はなんでも引き受けるのがアンタの会社方針なんだろう？」

「うぐつ……」

「それに一年ぶりに仲間と会うんだ。積もる話もあるんじゃないのかい？」

痛いところを突かれたレイはぐうの音も出ず、何かを堪えるように……何かを耐えるように……両手で頭を掻きむしること数秒……

「ちっ、わあーたよ。やりやあいんだろやりやあ」

断腸の思いで依頼を引き受けることとなった。

「じゃあ、赴任は一週間後な。学院長には話を通しておくから朝ちやんと来いよ」

「へいへーい……つたく、まさかまたあいつと顔合わせることになるとはなあ」

要件は終えたとばかりに、レイは愚痴りながらバーを出て行く。

バーの残ったのはカウンターにいるマダムとセリカの二人だけだ。

「すまないなマダム。代わりに説得してもらおう形になってしまった」

「気にするんじゃないよ。こつちも貯まった家賃払ってもらわないと困るんでね……それにしても、アンタ不器用だね。魔術が原因で引き籠ってしまった自分の息子を立ち直らせるために魔術学院の先生にさせるって、荒療治にもほどがあるよ」

「わかってる……だが、私にはこれしか思いつかなかったんだ」

「まったく呆れたね。アンタ何年生きてんだい？あたしがすっかりしわくちやな婆さんになっちまってもアンタの方は外見同様中身はまったく成長してないね」

「あれ？マダムにしわくちやな婆さんじゃなかった時期なんてあったっけ？」

「おい！そりやいったいどういう意味だい。ちよいと表出るやこらあ！」

◆◆

アルザーノ帝国魔術学院。

およそ四百年前、アルザーノ帝国が時の女王アリシア三世の提唱により、巨額の国費を投じて設立した国営の魔術師育成専門学校。

常に最先端の魔術を学べる最高峰の学び舎で、魔術を学ぶ者にとつ

ては憧れの聖地とも呼ばれている名門校である。

アルザーノ帝国魔術学院二年次生二組の教室、今日から新たな講師が来ると聞き、周りはざわめき立っている。

その中で一組の女学生も同じく、新たな講師がどのような人なのかを思い馳せていた。

「ねえシステイ、どんな人がくるのかな？」

「どんな人でも私は構わないわ」

「また質問攻めして講師から嫌われないでね」

「ちよつとルミア！」

周りの生徒も同様の会話をしている中、教室の扉が乱暴に開かれた。

「チーっす、ガキ共さっさとテメーの席に着きやがれ」

ドアを開けてけだるそうな口調で入って来た人物がやって来た途端、教室の空気がガラリと変わった。

外見は二十代の男だ。

スーツの上に白衣を着て、足元はサンダルというラフなスタイルで、ポリポリと鉄色の髪の毛の天然パーマを掻きながら、教壇に立ち生徒達を死んだ魚の様な目を伊達眼鏡越しで見下ろす。

この学院の教鞭を執る姿とは正反対の存在に、全員の意味が瞬時に一致した。

”なんか変な人きたあ!!!”

「はい、どオも。今日から一ヶ月間、このクラスの副担任になったレイ
||フェルムです」

レイがやる気なさげに自己紹介を終えると、壇上の丁度一番前の席に座っていた銀髪の女子生徒・システイナが即座に手を挙げる。

「先生！」

「ん？どオしたあ？そこの白髪娘」

「これは白髪じゃなくて銀髪です！あと私にはシステイナ||フィーベルと言う名前があります！つと、そんなことより！先程の発言といその格好！貴方にアルザーノ帝国魔術学院の名誉ある教員としての自覚があるんですか!?!」

「あ？これは非常勤に講師用のローブくれねえから、代わりにそれっ

ぼく見えるよう、保健体育の先生に習って白衣を着てるだけだ。伊達眼鏡も知的っぽく見せるためのものだ。見ればわかるだろう？」

「いや、わからなかったから聞いたんでしようが！ていいうかなんでそこで保健体育の先生をチョイス!？」

「保健体育なんて思春期迎えたガキなら皆自動的に100点取れてこっちは楽できるから決まってるねえか」

「動機が最低ね!？」

「じゃあとりあえず朝のホームルーム始めんぞー……ていうかホームルームって何やんだつけ？あー…よくわかんねえからとりあえずその銀髪娘、ギヤーギヤーやかましいから廊下に立つとけ」

「ええええ!？」

レイの物言いに突っ込み所が多過ぎて、システイナは翻弄される。

周囲の反応も同様だった。

来て早々の無茶苦茶っぷりに、教室中の生徒達がざわめき立つ。

「あーあーもういいよ。前置き無しでお前らの担任紹介するから」

「え？貴方が担任じゃないんですか？」

「さっき副担任だって言っただろ。駄目だぞー先生の話ちゃんと聞かないと」

この瞬間、教室の空気を言葉で表すと『あなたの格好がパンチ強すぎて頭に入らなかったんだよ!』というカンジになっていたことだろう。

だが、レイはそれを華麗にスルーし、廊下の方へとドア越しに口を開いて

「おーいもう入っていいぞー」

やる気無さそうに彼がそう言い放つ。

。

。

。

「あれ？おかしいな。おーいそろそろ入ってこーい」

「どれだけ待っても廊下側に動きがないことにレイだけでなく生徒達も困惑する。」

「まさかあいつ……悪いちよつと確認してくるわ」

ボソツと放たれた言葉と共に、「扉を開けて廊下へと出るレイ。」

『あつ、テメエやつぱ逃げようとしてたか！』

『ぎゃあああ!!ばれたあ!?!』

『待てやおらあ！テメエが俺の追跡から逃れようなんて一万年と二千年早エんだよ！』

『その数字意味わかんねえよ！』

ガシャン！バキツドゴツ、と言う物音が廊下から響き渡る。

廊下で一体何が起こってるのか気になるが、生徒たちは扉を開ける勇気が出ない。

それからしばらくして、教室の扉が開いてレイが顔を出した。

「待たせてすまねえ。改めてお前らの担任を紹介するぞ。おら、さつさと入れ」

「ちよつ、もう逃げねえからせめて自分で歩かせ……ぐえ?!」

レイに投げ込まれる形で、担任講師が教室に入ってきた。

全身ずぶ濡れで皺だらけのシャツ、黒髪黒瞳で長身痩躯であり、目鼻立ちは整っているがそれを台無しにして余りある怠惰な目付き。一目見ただけで真面目とは思えないと思わせる空気を纏っている。左手に嵌めている手袋と抱えてる教本がなければこの男が講師であるとは思えないだろう。

「あ、あ、あああ——貴方は——ツ!?!」

「あ?なんだグレン、お前その銀髪娘と知り合いか?」

「……違います、知りません人違いです」

男は自分に指を差してくるシステイーナの姿を認めると、抜け抜けとそんなことを言い放つてスルーの態勢に入った。

「人違いなわけじゃないでしょ!?!貴方みたいな男がそういてたまるものですかっ!」

他人を装う男にシステイーナが喚き立てる。

「俺はお前みたいな銀髪なんて知りません。『ゲイル・ブロウ』を撃つてきたなんて知りません」

「おもくそ知ってんじやねえか。公園で居眠りしてるところを見つけた時からボロボロだったか、お前なにかやらかしたか？」

「ちよつ、なんで俺が加害者前提で聞いてくるんだ!?一年ぶりに再会した相手にそりやねえだろ！」

「久しぶりだからって甘やかしてくれると思ったら大間違いなんだよ。んなことより、さつさと自己紹介しろ。今までのやり取りでもう10分も時間無駄にしてんぞ。俺の家賃のためにもしつかり働けヒキニート。じゃ、俺は適当にやつとくからあとよろしく」

それだけ言ったレイは隅に座って、いつの間にか取り出した分厚い本を読み始める。

「くつ……くつそーこのドS野郎が、後で覚えてろよ……えー、グレンIIレーダスです。本日から一ヶ月という短い期間ですが、生徒諸君の勉学の手助けをするつもりです。短いですが——」

「挨拶はいいから、早く授業を始めてくれませんか？」

苛立ちを隠そうともせず、システィーナは冷ややかに言い放つ。

「あー、でも、まあ、そりやそうだよな……かつたるいけど始めるか……仕事だしな……」

すると、先ほどまでの取り繕った口調はどこへやら。たちまち素が出てきた。

「よし、早速始めるぞ……一限目は魔術基礎理論I-Iだったな……あふ」

あくびをかみ殺してグレンは教科書を持ってページを開いたかと思えばすぐに閉じて、手に持ったチョークでスタイリッシュにかっこよくコントンコンつー!と、黒板に文字を書き記した。

“自習”と。

「二」……………「二」

クラス全員が我が目を疑い、こすったり瞬きをして眼球の機能を戻す努力をするが……どうにも黒板の文字は変わらない。

「えー、本日の授業は自習にしまーす……眠いから」

グレンは生徒達に向けてそう言った後、教卓に突っ伏してイビキをかきながら寝始めた。

誰もしゃべらない沈黙の数秒後。

「何なのよこの先生達はああああああああああああああああ——

——っ!!」

この日、二組の教室からほぼずっとシステイーナの怒鳴り声が聞こえていたの言うまでもない。

やる気なし

「うわー、見ろよ、ロッド、あの講師を……」

「ああ、スゲエな……目が死んでる……」

「あんなに生き生きとしていない人を見るのは初めてだ……」

教室のあちこちから、ひそひそと響く囁き声。

「で多分、こうだからくきつと、こんな感じで〜で大体、こうで〜」

生徒達の蔑みきつた視線の先では、脳天に盛大なタンコブを乗せた男……グレンがまるでゾンビのように緩慢な動作で教鞭を取っていた。

グレンの授業は最低最悪という言葉が最も良く合うものだった。まず、聞いていて内容が理解できず、説明にすらなっていない。時々黒板に文字を書くが、どうやっても判読不能な文字ばかり。

「レイ先生、その変態の代わりに授業をしてください」

このままじゃ授業にならないと判断したシステイナがすぐにレイに声を掛ける。

彼はやつと二本からスツと目を離して顔を上げた。

「つたく、しゃーなーな。面倒くせえが俺が代わりに授業するか」

頭をボリボリと掻きながら教壇の前に立つ。

「えー先生、教鞭を執るのは初めてなので一応本を読んで勉強しました」

レイの言葉に少しはまともそうだとホッと安心する一同。だが……

「それではまず皆さんには——ちよつと殺し合いをしてもらいます」

「「ぶふうっ!?!」」

（（何の本読んだんだ!?!））

「ふぎけんなあ!!」

「サイコパスう!?!」

気がつけば、レイのボケにぶちぎれたシステイナが手に持っていた教科書の角をアホンダラの顔にお見舞いしたのであった。

非常勤講師としてやってきたグレン＝リーダーダスとレイ＝フェルム。

グレンは見事に適当な説明の授業と自習を繰り返し、死んだ魚のよ
うな瞳でやる気のない授業を始め、質問にも答えないという斬新な授
業という何かで、加えて監視役でいる筈のレイはそれをただ口で軽く
注意するだけで咎めもしないという怠慢を働いた。

これには講師泣かせの悪い意味での称号を授けられているシス
ティーナの怒りを買ったのは言うまでもない。

そして最初の授業が終わった直後。

「痛え……マジで痛え……こ、ここまでやるか？普通……」

「いやそれが普通の対応だからな」

学園の廊下を、全身引つかき傷と痣だらけ、衣服ズタボロの姿と
なったグレンを、面倒くさそうに引き摺っていくレイ。

「まさか授業をやりたくないがために女子更衣室に堂々と飛び込むだ
とはな……いやー、お前の働きたくない精神にはまじ俺も脱帽だわ」

「だからあれは本当に事故なんだって」

「ハイハイ分かっているって、誰だってあんなミスあるわ。お前も男だ
から時には魔が差しちゃうことだってあるだろうよ」

「いや全然わかってねえだろ!?!」

「とりあえずお前の部屋はいるときは必ずノックして、ごみ箱に大量
のカピカピティッシュが入っても気付いていない振りしといたほ
うがいいよな?」

「人の話聞けよ! なんなのその思春期真っ只中のガキへの気の使い方
!?!」

何故グレンがボロ雑巾になっているのかというと、錬金術実験の準
備で実験用のローブに着替えようと更衣室に向かった際、間違えて女
子更衣室に入ってしまった。

事故のようなものだが、グレンは自己弁護のためにラッキースケベ
に巻き込まれたのなら、どうせ殴られて怒られる事が決まっている。
それなら見た男は罪悪感で眼を逸らす事なんてしないで自分の眼に

焼き付けるといふ教師としても、成人男性としてもアウトな主張をした。

その結果、女子生徒達による集団リンチにあったのはほとんどグレンの自業自得である。

ちなみにレイは入る前に更衣室の外のプレートに『女子更衣室』と書いてあるのに即座に気づいたために難を逃れたのであった。

「というかお前俺がひどい目に遭ったのに助けるどころか更衣室の扉閉めて出られないようにするなんてどういうつもりだ!？」

「あ?そんなのお前の苦しむ声が聞きたいからに決まってるだろ?」

「外道だ!仲間を仲間とも思っていない外道が目の前にいるぞ!」

「ギャーギャーギャーギャーやかましいんだよ。それくらい元気ならこつからは自分で歩け。じゃねえとボロ雑巾みてえにゴミ箱にポイするぞ」

「わ、分かったって……………」

これ以上文句を言えば本当にやりかねないため、グレンは渋々立ち上がり歩き始める。

「つたく、一年経つてもお前相変わらずだな」

「けっ、俺にとっちゃまだ一年だよ……………ところで、セラの様子はどうか?」

「白犬か?この間セリカからもうそろそろしたら退院できるつてよ」

「そうか……………悪かったな。大変な時にいなくて」

「いや、レイが辞める事になったのは俺達を——」

「あ?なに勘違いしてんだよ」

グレンの言葉を最後まで聞かずレイは強く否定する。

「あの時はたまたま道に迷ってて、たまたまお前らのところに行くわしちまっただけだ」

「いや?つけ。そんな言い訳上層部が信じるわけねえだろ」

「嘘かどうかなんてもうどうでもいいだろ。どっちにしろ上の連中にとって命令違反が多かった俺を追い出すいい機会だったんだから。ま、クビ程度でお前らが助かったのなら安いものだったか」

その言葉にグレンは黙るしかない。少し暗くなった雰囲気を変え

るようにレイは明るい口調でグレンに声をかける。

「とにかく一か月またよろしく頼むぜグレン先生……俺の今月の家賃のために。ついでにお前が貰う分の給料も依頼料として寄越せ」

右手で頭を掻きながら、もう片方の手で財布を逆さまにしてこれ以上お金が入ってないとアピールする天然パーマ。

「いいハナシ風にまとめて最後はそれかああああああ!!」

「ぶべらあー」

グレンの渾身のツツコミと右ストレートが炸裂した。

「ぎけんなああああ!!ただでさえもう魔術に関わりたくねえのにその上まるでダメなおっさん略してマダオのテメエの分まで働かにないけねえんだよー」

「テメエまで俺をマダオ呼ばわりか!言つとくがテメエの方が一番マダオに近いからな。どつかの年齢詐称女のところで穀潰しやってる底辺のグレン君は一つ上の存在である俺様の役に立て!」

「殆ど悪徳領主のセリフじゃねえか!」

やんのかこらといった感じでメンチを切りあう二人。

「あの、すみません」

「ああ?!」

剣?とした雰囲気の中、一人の人物が話しかけてきた。

二十代前半あたりの物静かそうな若い男性で、柔らかな鳶色の髪をカールにし、眼鏡をかけている。その長めの前髪と野暮ったい黒縁の眼鏡が青年の素顔を衆目から隠しているが、目鼻、顔立ちが整っているのが分かる。黒のスラックスと白のシャツに黒のベスト、黒の手袋……紳士が着るような服をきっちり着こなしていた。

「なんだアンタ?」

「自分は医務室担当教員のデイー||フェルプスと申します。お邪魔して申し訳ありませんが、医務室の前ではお静かに願います」

「……………」

デイーと名乗った人物の横を見ると、『医務室』という表札がついた扉があった。

「すみません」

「そちらの黒髪の方は怪我してるようですが、なにか揉め事でも？」
「あーこいつ女子更衣室に乱入して女子共に返り討ちにあったんすよ」

「は？」

「ちよつ、レイ言い方！」

「ちよつと警備の人呼んできます」

「ちよつと待て！勘弁してください！そんな事したらマジでセリカに殺されちまう!!」

レイの適当な説明で通報されそうになり、グレンは必死に事情を事細かに説明する。

「……………はあ、更衣室を男子のと間違えて」

「いやあ、まさか昔と違って、男子更衣室と女子更衣室の場所が入れ替わってたなんて知らなかったつすよ。事故なんだから絶対俺悪くないつすよ」

「……………」

あまりにもしょうもない理由に、デイーは呆れて頭を抱えていた。

「……………まあ、怪我してるようなのでとりあえず治療しますね」

「あつ、すみません。どうせ治療するならコイツのは徹底的にやっってください。特に腐った性根を」

「ああ？腐ってるのはテメエの頭だろうが腐れ天パ」

「おん？」

「あん？」

「ここで喧嘩するなら本当に通報しますよ？」

デイーから再び注意を受け、舌打ちしながら静かになる二人。

「……………では湿布を取ってきますのでここでお待ちを」

「え？普通中で処置するもんじゃありませんか？」

「そうしたいのですが今少々散らかってますね。転んだりしたら危ないので」

「おいおい。医務室はちゃんと清潔にしとかねえと駄目だろ」

「勿論掃除は毎日かかさずおこなっていますよ。ただ……………」

会話の途中でデイーが医務室の扉を開けた瞬間、中の光景を見たグ

レンとレイは一気に血の気が引いた。

床に広がる真っ赤な水溜り。

真っ赤に染まった寝台。そしてその寝台に横たわる、口から血を流してピクリとも動かない金髪の美女。

「なにぶん。すぐに汚れてしまいますので」

(ええええええええええええええ!!?)

殆ど凄惨な殺害現場にしか見えない状況に、二人は目を思いきり見開いて心の中で思いきり叫ぶ。

(どういう事これえええええ!!? 床とかベッドとかもう殆ど血塗れじゃねえか!?)

(もしかしてこれこいつがやったのか!? 由緒ある学院でやったのか!!?)

「本当はもう少し清潔なんですが、今日はかなり汚れてましてね」

(今日は!? いやあほぼ毎日この部屋血塗れってことじゃねえか!)

「その程度の痣やひつかき傷なら塗り薬ですぐに治りますのでそれで構いませんか?」

「あつ、は、はい……お、お構いなく」

恐怖のあまり思わず声が上がったグレンはレイにアイコンタクトを送る。

「(おいやべえよ。とんでもねえマッドな奴と出くわしちまったよ!ど、どうする? 今すぐここから逃げ出して通報するか?)」

「(馬鹿野郎。んなことしようものなら口封じに二人共殺されちまうぞ)」

「(じゃあどうするんだよ!? これを見た時点でどっちみち殺されちまうだろ!)」

「(安心しろ。既に妙案を思いついた。まずグレン、お前が奴の注意を引いてろ。その間に俺はここを離脱する!)」

「(安心できる要素が見当たらねえ! なにサラツと俺を囿にしようとしてるんだよ!?)」

「(おいコラ、人聞きの悪いこと言うんじゃないよ。いついかなる戦いでも相手の不意を突くために注意を引いてもらう役は重要なんだぞ)」

？それにお前が選ばれたのは寧ろ名誉なことなんだぞ。お前だつて
そう思うよなあ？」

「(ここ戦場じゃねえし！つーか前に似たようなこと言つて酷え目に
合わせたろ！もうそんな手には乗らねえぞ！)」

「うるせえ！もとはと言えばテメエが更衣室間違えなければこんな
ことにならなかつたんだ！ちゃんと責任取つて尊い犠牲になれ！」

平然とかつての仲間を人身御供にしようとするレイとアイコンタ
クトでの睨み合いが続く中数秒で妥協案を出す。

「(じゃあいち、にのさんで二人であいつ取り押さえてから通報する、
それで文句ねえだろ？)」

「(待てwait、“さ”で動くのか？“ん”で動くのか？)」

「(“ん”で動くに決まつてるだろ！)」

「(“ん”つて言つた瞬間か？“ん”つて言つた後か？)」

「(え？え？あれ？どっちだつたっけ？ええい！もう“ん”つて言つ
た瞬間に動くぞ！)」

「(絶対だからな。絶対裏切るなよな！)」

「(そつちこそ絶対だからな。んじゃいくぞ！)」

「(いち、にのさ——)」

「うゝん……………」

「え？」

さんを数えかけたところで、寝台の上で横たわっていた金髪の女性
がむくりと起き上がった。

「起きられましたかセシリア先生。お体の具合はいかがでしょう
か？」

「あつ、はい。少し休んだおかげで大分楽になりました。ありがとう
ございますデー先生。あら？そちらのお二方はどちら様でし
ょうか？」

セシリアと呼ばれた女性はグレンとレイの存在に気づく。

「そういうえばまだちゃんと名前窺つてませんでしたね」

「えっ!?あ、あー…本日から約一ヶ月間、二年二組の担任を勤めますグ
レン＝レーダスと申します」

「そして俺はグレン君のサポートをしますレイルフエルムです」

「ああ、アルフォネア教授の推薦で来た方たちですね。初めまして私はここの医務室に勤める法医師のセシリアⅡヘステイアという者です」

「へ？医務室担当が二人？」

「彼女はかなり腕の立つ実力者ですが虚弱体質でしてね。仕事中に血を吐いて倒れることが多く、自分は補佐兼彼女の担当医としてここにいます」

「お、お恥ずかしい限りです……………」

「……………へ、へえーそ、そうなんだ。じゃあこの部屋の床とかカーテンとかについてるこれも？」

「彼女が吐き出した血です」

「そ、そうなんだ」

「な、なんだよ。紛らわしいなくもう！あはは……………」

自分達の勘違いだったことに気付いた二人は「お邪魔しました」と言って静かに医務室から出る。

「……………何かもう、色々と疲れたな」

「食堂行くか」

「そうだな」

◇◇

「はあ……………結局まともな授業がないまま午前が終わっちゃったじゃないの」

「もう機嫌直そうよ、システイ。せっかくの昼食の時間なんだしさ」

「別に機嫌悪くなんてないわよ」

食堂内には白いクロスがかけられ、燭台で飾られた長大なテーブルが何列もあり、午前の授業を終えて食事を取りに来た生徒達で混雑していた。

昼時から愚痴るシステイナとルミアは厨房カウンターで出来上がった料理を受け取り、空いているテーブルを探す。食事をする生徒

達で賑わい、ほとんどの席が埋まっていたが、向かって右端のテーブルの隅、隣り合う席が二つほど空いているのが見えた。

「あ、システイあそこ開いてるよ」

「じゃあ行きましようか。げっ」

席に向かうと、見慣れた顔が見えたシステイーナは嫌そうな顔をした。

意志の強そうな金色の瞳。短く刈られた薄い蒼髪をツンツンと逆立たせ、細身ながら筋肉質な体躯の少年。

同じ魔術学士二年次生二組の生徒であるアイザックⅡソーントン通称アイザは一人、軽めのサラダとサンドイッチを口に運んでいた。

「もうシステイ、まだアイザ君が苦手なの？」

「だ、だって……」

システイーナとアイザは馬が合わない。

別にアイザが不真面目な不良生徒というわけではない。性格は冷静沈着で成績は非常に優秀。あらゆる科目で彼は首席から外れたことはないほどに優秀で、魔術師の階位は二年次で既に第三階梯までに至っている。優秀であるシステイーナでさえまだ第二階梯に昇格したばかりなのに魔術師として彼は自分よりも先にいる。妬みがないと言えば嘘になる。

問題はただ単に性格の違いである。

生真面目すぎる性格や魔術にかける熱意が人一倍大きいあまり、講師や同級生（主に男子）から「お付き合いたくない美少女」「説教女神」「真銀（ミスリル）の妖精」と呼ばれてるシステイーナを『火』と例えるなら、アイザはその逆の『氷』である。

以前授業中仕事の雑な講師に「待った！」と疑問やら要求やらを真っ向からぶつかった時は「授業が進まないからそういうのは後にしてくれ。それから教えてくれる立場の人間に対して少し敬意を払え」と正論を叩き付けて黙らせたり、別クラスの生徒達から第三階梯であることにいちやもんをつけられたときは「相手が自分より先に一步前に進んだ程度でつつかかるな。まるで自分は劣つてると認めてるみたいだぞ」と冷たい視線で睨んで『す、すみません……これか

ら負けないよう頑張ります……』と一瞬で全員へこませたことがあった。

というわけでシステイーナはアイザに苦手意識を持っているのである。

「でも馬が合わないからっていつまでもそんな態度はよくないよ？」

「わ、わかってるわよ」

ルミアに注意され、システイーナは親に られた子供のようにシユンとしながらアイザのいるテーブルへと歩を進める。

「アイザ君私たちここで食べてもいいかな？他に空いてる席が無くてさ……」

「…構わない」

アイザは特に嫌そうな顔をせずに淡々と答える。

二人がありがとう、と言いながらの前のイスに着く。そして、各々の料理に手をつける。

途中、システイーナのメルガリアントークが炸裂したりした。

「だからおかしいのよ、去年発表されたフォーゼル先生の魔導考古学論文の説は。ルミアもそう思わない？あの人の説だと、メルガリウスの天空城が建造されたのは、聖暦前4500年くらいになっちゃうの。確かに次元位相に関する術式が古代文明において本格的に確立したとされているのが古代中期なんだけど、フェジテ周辺で多々発見された古代遺跡の壁画や発掘された遺物からすると聖暦前5000年にはもうすでにメルガリウスの天空城らしきものが空に浮かんでいたってされてるの。この事実を無視して、魔導技術的に不可能だからってだけで、4500年説をこり押しするのはどうかと思うわけ。あの人が新しく考案した年代測定魔術は、どうもこの5000年を誤魔化すために作られたこじつけのような気がしてならないわ！机の上の思考や文献調査を過剰に重視するあまり、フィールドワークをおろそかにしがちな現代の魔術師らしい説ね。そもそも、古代中期の次元相術式で、本当に天空城が空に隠されているのだとしたら、もうとつくに時間切れになってるはずじゃない？ だって当時の大気のマナ密度からして、エクステンション限界が——(略)——古代文明

が滅ぶ切欠になった二度のマナの冬もあつたし——(略)——マナ半減期の値だつて矛盾——(略)——そもそも表意系古代語の経時進化過程に三つの素流分枝系統があるのは明らかで——(略)——要するに紋章象徴学的な意味合いとしての神と民間信仰の対立が——(略)——
——テレックスの神話分解論でも古代文明が単一文化じゃなくて——(略)——
「そ、そうなんだ……」
「……」

食事も忘れてひつきりなしにまくし立てるシステイーナに、聞き手に徹していたルミアと隣で話が入っていたアイザも魔導考古学議論(やや一方的)で少し脂汗を垂らしていた。

「おつ、空いてる空いてる」

「ここ、座つてもいいか?」

「……聞く前にもう座つてるじゃないですか」

「一応聞いておくのがマナーだろ」

三人がいるテーブルの空いた席に二人の男がどかつと腰を落ち着けた。それでシステイーナはようやく我に返り、二人の存在に気づいたらしい。

「あ……貴方……!!さっきの今でよくも私たちの前に顔を……」

「美味え。なんつーか、この大雑把さが実に帝国式だなあ……」

「露骨にムシしてんじやないわよ!」

勢いよく席を立ち上がったシステイーナがグレンに怒りの声を浴びせるが無視され、唸り声を上げる。

「おいうるせーぞ銀髪娘もつちやもつちや食事中くらいもつちやもつちや静かにできねーのかもつちやもつちや」

「いやレイ先生のそのもつちやもつちやって音も五月蠅いからな」

口に物入れて大きな咀嚼音を立てながらシステイーナを注意するレイにツツコミを入れたアイザの視線が、レイが今食べている物に向いた。

レイだけでなくシステイーナやルミア、たまたま通りかかった生徒がそれを見て気分悪そうにしている。

「あの……レイ先生が食べてるのは一体なんなんですか？ 見てるだけで胸焼け起こしそうですが」

東方の食物であるどんぶりサイズのご飯の上に東方の菓子である宇治金時を乗せた炭水化物に炭水化物をトッピングさせたとんでもない化け物だった。

「決まってるだろ、宇治金時井だよ。欲しいって言ってもあげないからなー、ほれほれー」

「金を貰ってでも絶対にそんなの食べたくないし見せつけるように食べないでください、羨ましくもなんともない」

こちらにドヤ顔を浮かべながら宇治金時井などという奇怪な物を見せびらかすように食べるレイを一蹴するアイザ。

会話がなくなり重苦しい空気のまま食事が続くかと思いきやその空気を変えたのは以外にもルミアだった。

「グレン先生の方はずいぶん、たくさん食べるんですね？」

「ん？ ああ、食事は俺の数少ない至福の時間だからな」

「痩せの大食いだしな」

「極度の甘党に言われたくねえよ」

「グレン先生とレイ先生って知り合いなんですか？」

「知り合いついていうか……腐れ縁だな」

「そうなんですか……そういえばその豆いい匂いがしますね」

「おう、この豆は今が旬なんだ。食べてみるか？」

「ふふ、それじゃ間接キスになっちゃいますね」

「そんなん気にするかよ。ガキじゃあるまいし」

呆れたように肩をすくめ、グレンが豆炒めの皿を差し出す。ルミアは嬉しそうに自分のスプーンで一杯それをすくって口に含んだ。

そんなルミアの様子に口元に笑みを浮かべるグレン。ルミアの人当たりの良さと柔らかな態度は、グレンのひねくれた心をも溶かしたようだ。

「ところで、そっちのお前、そんなんで足りるのか？」

さきほどから刺々しい視線を向けているシステイナに話しかけるグレン。

ルミアのメニューはポリッジと呼ばれる麦粥と、香辛料の効いた鳩のシチュー、そしてサラダ：ルミアが比較的しっかり食べているのに対し、システイーナのメニューはレッドベリージャムを薄く塗ったスコーンが二つ、それだけである。

グレンに問いかけられたシステイーナは一瞬動揺したが、すぐに平静を取り戻して、きつめな言葉で答えた。

「余計なお世話です。私は午後の授業が眠くなるから、昼はそんなに食べないだけです。真面目ですから。まあ、グレン先生にはそんなこと関係なさそうですね」

「……回りくどいな。言いたいことがあるならばつきり言ったらどうだ？」

システイーナの挑戦的な言葉に、グレンの声が少し低くなる。2人の間に流れる空気が重くなってきた。

「わかりました。この際だからはつきり言わせてもらいます」

だが、システイーナは臆することなく目つきを鋭くしてグレンを射抜く。

その様子に、宇治金時井を平らげていたレイがハアとため息をついて口を挟む。

「グレン、お前いくらなんでも察しが悪いんじゃないやねえか？」

「あ？どういう意味だよ」

「さっきの自分の行動を顧みればわかるだろ。こいつが何を言いたいのか」

「……なるほどな。ああ、そうだな。確かにこれは俺が悪い」

申し訳なさそうにグレンは目を伏せ、自分のお皿からキルア豆を一粒掬ってシステイーナのお皿に載せた。

「へ？」

「ほれ、お前も食いたいんだろ？そんなにたくさんあるんだから少しくらい分ける、だろ？……まったく、いやしんぼめ」

「やっぱガキは飯を多く食ってなんぼだろ」

「ち、違います！私は……！」

「代わりに、そっちも一口寄越せ」

思わぬ勘違いに顔を赤くして否定するとシステイーナ。しかし、そんなものは華麗に無視し、グレンはスコーンにフォークを刺すと、そのまま一口で丸々食べてしまった。

「あーちよつと何してるんですか!？」

「何って……まあ、等価交換?」

「ど・こ・が等価なんですか!」

「うわあああ!暴力反対!?!レイ!助けてくれ!」

「お前ら血で床を汚すなよ!」

「貴様あああああ!」

そのまま二人はフォークとナイフで、テーブル越しにチャンバラを始める。グレンの隣にいたレイはタイミングを見計らって「いやー食った食った」とその場から退散した。

それに続いてアイザは食事を途中で切り上げて席を立った。

「あれ?アイザ君もういいの?」

「食欲失せた。俺はもう行くよ」

「あ、うん……」

二人がいなくなり、周りの生徒の何事かという痛い視線の中、ルミアは一人ただ苦笑いだった。

◆◆

グレンが来てから一週間が経った。初日と変わらずに授業に対するやる気はなく授業らしき授業といえは適当に黒板に文字を書き適当に教科書の文を読むといった感じだ。レイが真面目にやれと脅迫まがいの言葉をかけるが「お前の家賃のために働くなんざ真つ平ごめんだ」とグレンが返し、レイがキレて両者メンチを切りあう状態を繰り返してまったく授業にならなかった。システイーナも毎日、毎時間説教しているのだが一向に改善される兆しが見えない。

そんなある日の最後の授業。ついにシステイーナの怒りが頂点に達した。

「いい加減にしてください!」

「いや、見てわからないのか?ちゃんといい加減にやってるだろ?」

「子どもみたいな屁理屈こねないで!」

バンツ！と机を叩きつけ、立ち上がる。

「ほら見てみる。おめえがごねるからあの真面目ちゃん切れちゃった
だろ。見てみる。ストレスで白髪だらけじゃねえか」

「本当だ。あの歳でもう………可哀想に」

「これは白髪じゃなくて銀髪です！二人共哀れむような顔で私を見ないでー！」

「ま、髪の話はおいといて……グレン、そろそろ真面目にやったらどう
だ？」

「うくん……イヤだ」

俺は何も悪い事してないもん、と子どものようにそっぽを向くグレンにレイは呆れて溜息を吐く。

「こんなこと、言いたくありませんけど、私はこの学院にそれなりの影
響力を持つ魔術の名門、フィーベル家の娘です。私がお父様に進言す
れば、貴方の進退を決することもできるでしょう」

教壇の前まで迫り、最後通告のようにシステイーナは言い放つ。

だが、

「お父様に期待してますと、よろしくお伝えくださいー！」

「なっ!？」

グレンはそんなシステイーナの神経を逆撫でするように嬉しそう
に手を握った。

さすがの彼女もこれには絶句だ。

「いやーよかったよかった！これで辞められる！」

「ふざけんな。俺の家賃のために一か月経つまで働いてもらおうぞ」

「あ、あなた達って人は——ツ！」

もうシステイーナの忍耐も限界だった。

システイーナには、このグレンという男が本当に講師を辞めたくて
そんなことを言ったのか、それともフィーベル家の力を侮っているだ
けなのかは判断がつかない。

だが、どちらにせよシステイーナはもはや、このグレンという男の
素行（ついでにそれにレイという男も家賃のためという不純な動機
のためにしか動いていない）を看過することはできなかつた。魔術の名

門として誇り高きフィーベルの名において、魔道と家の誇りを汚す者を許しておくわけにはいかない。ゆえに決断は早かった。システイーナ自身の若さと未熟さもそれを後押しした。

システイーナは左手に嵌めた手袋を外し、それをグレン達に向かって投げつけた。

「貴方にそれが受けられますか？」

「お前……マジか？」

「私は本気です」

その光景を見たクラスにどよめきが渦巻き始める。

今システイーナが起こした行動は「魔術決闘」を挑む儀礼だからだ。

魔術師は呪文を唱えるだけで火球を放ち、山を吹き飛ばし、大地を割ることができる者たち。そんな魔術師が好き勝手に暴れ回れば、好き勝手に争えば国なんて簡単に滅ぶ。

そうならない為に昔、魔術師同士が争うためのルールが設けられた。それがこの「魔術決闘」の儀礼だ。

この「魔術決闘」では勝者が敗者になんでも一つ要求ができるという破格の報酬があるが、ルールは受け手側が決められる。

簡単に言ってしまうえば、客観的に見て公平なルールならなんでもいいのだ。自分が絶対的に自信のある魔術以外の使用をお互いに禁止すれば、どう考えても受け手側が有利になる。

だからこそ、強力な魔術師達の決闘が乱発しない為の抑止的な意味を持つのだ。

「し、システイー！だめ！早くグレン先生に謝って、手袋を拾って！」

グレンを険しくにらみつけるシステイーナの元へ、親友のルミアが駆け寄った。だが、システイーナは動かない。

「……お前、何が望みだ？」

「その野放図な態度を改め、真面目に授業を行ってください」

「……辞表を書け、じゃないのか？」

「もし、貴方が本当に講師を辞めたいなら、そんな要求に意味はありません」

「あつそ、そりゃ残念。だが、お前が俺に要求する以上、俺だつてお前になんでも要求していいつてこと、失念してねーか？」

「承知の上です」

システイーナの意思の強い眼差しに見られ、グレンは生理的嫌悪感が浮かび上がるような笑みを浮かべる。そして、システイーナの体を値踏みするように見回す。

「じゃあお前、俺の女になれ。生意気だが、かなりの上玉だし——」

「よし、さつそくセリカに『生徒に体目的で決闘に挑んだ』つて報告だな」

要求を口にした瞬間、なにやらヤバい独り言をつぶやいて廊下に続く扉に手をかけようとするレイを、グレンは足にしがみついて止めようとする。

「ちよつと待て！勘弁してください！冗談！冗談だつて！そんな事したらマジでセリカに殺されちまう!!」

いくら野放図なグレンでも要求を変えざるを得ない。

そうでなくとも、元よりそんな要求をするつもりはなかった。ただ、ほんの少しこの生意気な娘を怖がらせてやろうという軽い気持ちだっただけで、そんな軽い気持ちで身内に殺されるなんてバカらしい。

「じゃ、じゃあ俺が勝つたらお前は説教禁止な。ほら、さつさと中庭行くぞ？」

「おい。なに俺の手を引いてんだ。俺に野郎と手をつなぐ趣味ねーぞホモン||レーダス」

「不名誉な名前つけるな！おめーがセリカにさつきのこと告げ口しねーか見張つてんだよ！」

なんともグダグダな感じに教室を出て行く二人を一回は呆れ果てた様子で眺めながら、決闘が行われる中庭にぞろぞろと移動した。

等間隔に植えられた針葉樹が囲み、敷き詰められた芝生が広がる学院中庭にて。グレンとシステイーナの二人は互いに十歩ほどの距離

を空けて向かい合っていた。

システイーナはグレンを油断無しに睨んでいる。相對するグレンは、変わらずやる気無さげに片手をポケットに突っ込んで、システイーナの出方を伺うと言ったところか。

「ねえ、カツシユ。君はどっちが勝つと思う？」

「心情的にはシステイーナなんだけど……でも、相手はあのアルフォネア教授、イチ押しの人だからな……うーん……セシルはどう思う？」

クラスの生徒達の他にも、講師と生徒が決闘を行うという噂を聞きつけて集まった野次馬たちが二人を遠巻きに取り囲んでいた。

「…アイザ君はどう思う？」

ルミアが不安そうな目でアイザにこれから始まる二人の決闘について聞いてきた。

「……普通ならグレン先生が勝つだろうな」

アイザが見た感じでは、研究よりも実践——もしくは実戦向きの魔術師だ。

もしそうだとしたらシステイーナの勝ち目はかなり薄い。実戦というのはどれだけ早く相手を無力化するかがミソなのだから、一節詠唱よりも呪文を切り詰めている可能性はかなり高い。

「おいおい、そんなに気負うなよ。いつでもかかってきな」

なによりこの余裕。実戦向きの魔術師は相手を侮るようなことはない。侮った結果足をすくわれて死ぬのは自分なのだから、一見どんなに相手が格下であつても迅速に無力化することを是としている。

両者の向かい合うその中央付近、審判役のレイがだるそうに開始を告げる。

「えー、これから、社会不適合者でまるでダメなおっさん略してマダオ路線にまつしぐらなグレンⅡリーダーズと口うるさい白髪頭の……えーっと、なんだっけ……生徒Aのキャットファイトを始めまーす」

「誰がマダオだこらー！」

「生徒の名前くらい覚えときなさいよー！」

なんていい加減な紹介。グレンとシステイーナがレイに唾が飛ぶ

ほどに叫ぶがレイは聞く耳もたず「うるせーな。どうでもいいからさっさと始めろ」と促す。

気を取り直し、静寂が中庭に流れやがてシステイーナが動く。覚悟を決めたシステイーナがグレンを指指して、呪文を唱えた。

《雷清の紫電よ》——ツ!

システイーナは一節詠唱で「ショック・ボルト」を放った。

「ぎゃあああああ——っ!?!」

それにグレンは直撃してあっさりと倒れ伏した。

「……………あ、あれ?」

あっけなさに、システイーナは声が溢れる。生徒もあり得ないものを見たど、彼女と同じく漏れた。

「はい、しようしやあく、白髪娘え〜」

「だから、私にはシステイーナ⇨フィーベルって名前があるのよ!!」

システイーナの右手を掴み上げ、レイはテキトーに声を上げ、システイーナは変わらぬ渾名に声を張り上げる。喜びよりも驚き、驚きよりもレイに付けられた渾名。上書きの連続で他のリアクションも取れない。

「……………卑怯な……………」

「はっ。」

よろよろと立ち上がりながら恨めしそうにシステイーナを睨むグレン。

「まだ準備ができてない内に不意打ちとは……………お前、それでも誇り高き魔術師か!?!」

「いや、いつでもかかってこいって……………」

「まあいい。この決闘は三本勝負だからね!一本くらいくれてやるよ!」

いきなり出てくる後付けルールにポカーンと開いた口が塞がらない。

その後グレンがあーだこーだ言い訳をしながらシステイーナの決闘を続けるが……………

「すみません。無理です。許して下さい。もう立てません。ていうかこれ以上続けるとボク、何かに目覚めちゃいます」

グレンの惨敗。それもそのはずグレンには「ショック・ボルト」の一説詠唱が出来ないのであった。

「うし、終わった終わった。じゃ俺帰るわ」

「え!? あ、ちょ——」

システイーナが呼び止めるよりも先にレイは中庭から去っていた。

「と、とにかく決闘は私の勝ちです。先生は明日から——」

「え? なんのことでしたっけ?」

「あ、貴方……ッ!」

「とりあえず今日は引き分けてことにしてやるよっ! ふははははははははははは——!」

そのままグレンは高笑いをしながら走り去っていった。何度か転びながら。

「最低だわ」

システイーナはまるで親の敵のようにうめいた。

(時間の無駄だったな……………)

誰もがグレンを酷評するなかで、アイザはグレンがわざと負けたことに落胆していた。

そもそも学院を一刻でも早く辞めたいグレンが勝つ意味なんてない。そんなことをすれば最低一ヶ月は非常勤として働くことになる。逆に負けて態度を改めた授業をしたくないであろうグレンが自分にとって一番都合のいい手段は嫌われ者になることだ。嫌われ者を引き止める奴はいない。逆に留めておく必要性もない。一秒でも早く講師を辞められる手段をグレンは取っただけだ。

だが、それでもあの講師がどんな戦い方をするのか多少なり興味があったが成果はゼロどころかマイナス。完全に無駄足だった。

(大人げなくアレを使うと思っていたが残念だな……)

アイザは小さく溜息をつきながら校舎内へと戻っていった。

ダメ（変態）講師、やる気だし

二組の決闘騒動の三日後。

グレンはあの後もやる気のない授業を結局続け、グレンの地に落ちた評判が少しでも回復することは無かった。

「はーい、授業始めまーす」

その日も大幅に遅刻してきたグレンがだらしない授業開始の宣言をする。

それを皮切りにクラス中が自分の思い思いの教科書を広げ、勝手に自習を始めた。グレンの授業を受けても何も得られないと、自分自身で勉強してた方が有益だという判断だった。

あの決闘以前には、小言ばかり言っていたシステイナやレイもグレンの相手をするのが面倒くさくなって本の黙読をしていた。

もう誰もが自習をするが当たり前になっていいるなか、それでも何かを学ぼうと健気で真面目な生徒がいた。初日の時に、グレンに質問をしてあっさりあしらわれていた、女子生徒のリンだった。

「あ、あの……先生。少し質問があるんですけど……」

「んー？なんだー？」

「え、えつと……その……先生が触れた呪文の訳がよく分からなくて……」

そんな生徒相手でもグレンはただ辞書を渡して辞書の引き方を解説するだけであつて、無関心を決め込むつもりだったシステイナも流石に黙っていられなくなった。

「無駄よ、リン。その男に何を聞いたって無駄だわ」

「あ、システイ」

「その男は魔術の崇高さを何一つ理解していないわ。むしろ馬鹿にしている。そんな男に教えてもらうことなんてないわ」

「で、でも……」

「大丈夫よ、私が教えてあげるから。一緒に頑張りましょう？ あんな男は放っておいていつか一緒に偉大なる魔術の深奥に至りましょう？」

システイーナがうろたえているリンを安心させるように、笑いかけたその時だ。

一体、何がその男の気に障ったのか。

「魔術って……………そんなに偉大で崇高なもんかね？」

ぼそり、とグレンが誰ともなくこぼした。

「ふん。何を言うかと思えば。偉大で崇高なものに決まっているでしょう？ もっとも、貴方のような人には理解できないでしょうけど」

鼻で笑い、刺々しい物言いではつきりとシステイーナは切り捨てた。

「何が偉大でどこが崇高なんだ？」

「……………え？」

「魔術ってのは何が偉大でどこが崇高なんだ？それを聞いている」

「そ、それは…………」

「ほら。知ってるなら教えてくれ」

即答できない自分にシステイーナは苛立った。確かに魔術は偉大だ崇高だとは周りを取り巻く人間がそう連呼するから、そういうものだど認識していた節もある。

だが、決してそれだけでもない。呼吸を置いて言葉をまとめ、自信をもつて返答する。

「魔術は——」

「長くなりそうだからやっぱいいや」

「聞いたんだから最後まで言わせなさいよ！」

「お前どうせあれだろ？魔術とは世界の真理を探究し人をより高次元の存在に近づけるとか、神に近づく尊い学問なのよとか言うんだろ？」

「え、ええ……………そうよ」

「…で？それが何の役に立つんだ？人をより高次元の存在に近づける？そんな事して一体どうするんだ？」

「…え？」

「例えば医術は人を病から救うよな？農耕技術、建築術… 人の為に

役立つ技術は多い。だが魔術は？まともに生きてれば、一般人には見ることさええない代物だ」

「魔術は……人の役に立つとか、立たないとかそんな次元の低い話じゃないわ。人と世界の本当の意味を探し求める……」

「でも、なんの役にも立たないなら実際、ただの趣味だろ。苦にならない徒労、他者に還元できない自己満足。魔術ってのは要するに単なる娯楽の一種ってわけだ。違うか？」

グレンの言うことはある意味真実だ。

魔術を使うことができ、魔術の恩恵を受けられるのは魔術師だけだ。魔術師でない者は魔術を使えないし、魔術の恩恵は受けられない。まるで当たり前前のことだが、魔術が人の役に立てない最大の理由だ。

魔術は冶金技術や農耕技術のように、その行使が直接的に広く人の益となる性質の技術ではないのである。そもそも、魔術は秘匿されるべきものだという思想が、大多数の魔術師達の共通認識であり、魔術の研究成果が一般人に還元されることを頑として妨げている。ゆえに今でも魔術は多くの人々にとっては不気味で恐ろしい悪魔の力であり、普通に生きていく分には見ることも触れることもない代物だ。そう、事実として魔術は人々に直接役に立っているとは言えない。魔術を一般人の俗物極まりない視点で切り捨てた意見ではあるが、それは厳然たる事実だった。

システイーナは齒噛みするしかなかった。どうしてこの程度の俗物的な意見すら切り返せないのか。あつさりと圧倒的に言い負かされてしまっているのか。

「悪かった、嘘だよ。魔術は立派に人の役に立っているさ」

「……え？」

「ああ、魔術は凄え役に立つさ……人殺しにな」

その瞬間、教室全体に緊張が走る。酷薄に細められたその暗い瞳、薄ら寒く歪められた口から紡がれたその言葉は、クラス中の生徒達を心胆から凍てつかせた。

「実際、魔術ほど人殺しに優れた術は他にないんだぜ？ 剣術が人を

一人殺している間に魔術は何十人も殺せる。戦術で統率された一個師団を魔導士の一個小隊は戦術ごと焼き尽くす。ほら、立派に役に立つだろ?」

「ふぎけないでツ!」

流石に看過できなかつた。魔術を無価値と断じられるならまだしも、外道におとしめられるのは我慢ならない。

「魔術はそんなんじゃない! 魔術は——」

「お前、この国の現状を見ろよ。魔導大国なんて呼ばれちやいるが、他国から見るとそれはどういう意味だ? 帝国宮廷魔導士団なんていう物騒な連中に毎年、莫大な国家予算が突っ込まれているのはなぜだ?」

「そ、それは——」

「お前の大好きな決闘にルールができたのはなんのためだ? お前らが手習う汎用の初等魔術の多くがなぜか攻性系の魔術だった意味はなんだ?」

「——それは」

「お前らの大好きな魔術が、二百年前の『魔導大戦』、四十年前の『奉神戦争』で一体、何をやらかした? 近年、この帝国で外道魔術師達が魔術を使って起こす凶悪犯罪の年間件数と、そのおぞましい内容を知ってるか?」

「——っ!」

「ほら、見ろ。今も昔も魔術と人殺しは切っても切れない腐れ縁だ。なぜか? 他でもない魔術が人を殺すことで進化・発展してきたロクでもない技術だからだ! まったく俺はお前らの気が知れねーよ。こんな人殺し以外、何の役にも立たん術にせこせこ勉強するなんてな。こんな下らないことに人生費やすなら他にもっとマシな——」

「ふん!」

「がつ!」

そこまで言いかけたグレンの頬にレイの右ストレートが炸裂して豪快に彼を吹っ飛ばした。

「ったく、黙って聞いてりやギャーギャーやかましいんだよ。発情期かこの野郎」

「いつ……なにすんだレイ！」

「言いたいことは分かるが、ガキ相手に噛みついて大人げねえぞ。ちやんとこいつの顔見てみろ」

「あ？」

システイーナの方を向いてグレンは言葉をすぐに言葉を失った。

彼女の眼は涙で溢れ、表情は悲痛に満ちていた。

「なんで……そんなに……ひどいことばかり言うの……？大嫌
い、貴方なんか」

そう言い捨てると、彼女はとめどなく溢れる涙を袖で拭いながら
荒々しく教室を出ていった。

教室を圧倒的な沈黙が支配した。

「グレン……お前少し頭冷やせ」

「……………悪い。レイ、後は任せた」

そう言って教室から出ていくグレン。

「今日の授業はもう終わりだ。残りたい奴は残っていいし、帰りたい
奴は帰っていいぞ」

「あ、あのレイ先生！」

「あ？」

適当に締めくくって教室から出ようとするレイをルミアが呼び止
める。

「なんだ？」

「レイ先生もグレン先生と同じ考えなんですか？」

「あの馬鹿と白髪娘の主張なんてどっちも極論だ極論」

「じゃあ、レイ先生はどう考えてるんですか？」

「俺か？あー……どうせなら温室育ちの teme エらにや物で説明した方
が簡単か。こいつ見てみな」

ルミアの問いに対して、レイが見せるのは先端の鋭いペンナイフ。
クラス中の視線が集まっているのを知ってか知らずか、分かりやす
いように振ってみせた。

「例えばこのペンナイフ、お前らも持つてるだろ？普段羽ペンの先を
削るのに使う単なる筆記用具も使い方を変えれば——」

レイが軽く振った瞬間、グレンによって黒板に釘で打ち付けられた教科書にザクツとペンナイフの刃先が深く食い込んでいた。

「こんな風に危ない凶器にもなる。だがこれはどこまでいってもペンナイフはペンナイフ、要は使い次第だ。あの白いのは知識の探求に魔術を使う。バカは殺しの魔術が使われると言った。いろんな連中がいろんなことに好き勝手に使ってるから表裏の側面ができちまったってだけの話だ。まあ、何だ……別にただ魔術はあくまで一つの力、手段と言いたいのだ。そこに善悪や意志などないただの“もの”。肝心なのは力を振るう本人ってことだ」

真面目さ皆無の男の言葉ではあったが、淡々とした語り口が寧ろ逆に真実味を増していた。

日常生活でも使うペンナイフを例として挙げてみせたが、結局のところは使って次第という話。

魔術にしたって、人を殺すためのみならず人を癒すために用いられる法医呪文というものも存在する。誰でも受けられるかという点は置いておいて。

結局のところ、担い手次第。

「テメエ等の人生だ。勉強やこの学院を卒業してからのことにとやかく言うつもりはねえがこれだけは心掛ける。本気で魔術を学ぶんなら良い面ばかりに目を向けるな。良い面悪い面全部理解したうえでどう使うかテメエ等自身で決めろ。もし俺やグレン、それからそんなじゃそこのクズよりもちったあマシな奴になりてえなら、魔術の研鑽を深める前にまずテメエの魂を研ぎ澄ませな」

レイはそう締めくくって教室を出ていったのだった。

◆◆

あたりの景色が赤く染まり始めた頃。

グレンが教室に帰ってくることもなく一日の授業時間が全て終了し、アイザはすぐに荷物を片付け帰路に着こうとしたときルミアに引き留められた。

「ねえアイザ君、このあと時間あるかな？ちよっと手伝って欲しいこ

とがあるんだ」

「俺に?」

「うん、アイザ君がいいんだ」

こんなことを言われては断ることなど出来はしない。了承の意を返し、ルミアの後を着いていくと、西館にある魔術実験室の前に着いた。そのすぐ目の前では、ルミアが扉の鍵を開けて、中に入ろうとしている最中だ。

「実験室?」

「実は法陣の授業に最近ついていけなくてね、システイは今いないし、だけどどうしても復習しておきたかったから…」

「それでか……ところでその鍵どこから持ってきた?」

「え、えへへ……じつはちよつと事務室に忍び込んで……」

ぺろつと小さく舌を出しながら、鍵を見せてくるルミア。

この瞬間、アイザは少しだけ安請け合いましたことを後悔していたが顔に出さない。

「あ、大丈夫。もしバレた時は責任は全部私が負うから……」

「そこまでする必要はない。さっさと終わらせれば問題ないだろ」

「そ、そうかな……じゃあ、早速始めようか」

ルミアは教科書を開き、それを見ながら水銀で床に円を描き、五芒星を描いた。さらにルーン文字を五芒星の内外に書き連ね、霊点に魔晶石などの触媒を配置していく。

「流転の五芒……魔力円環陣か?」

「うん、最近法陣の授業についていけてなくて。復習したいなって思ってたんだ」

「だったら別に手伝いなんていらないだろ?」

「あはは……ごめんね、聞きたいことがあって。教室じゃ聞きにくかったし、法陣の復習がしたいってのも本当だったから」

「……そうか、それで聞きたいことは?」

「うん、昼間の事なんだけど……」

昼間のことはグレンが魔術は人殺しの道具だと言い放ったことだとすぐにわかった。

「アイザ君、凄く落ち着いていたから。なんていうか……魔術の事をどう思ってるのかなって……」

「それならレイ先生と同意見だ。学問でも殺人でも魔術はそういう風に見えるというだけだ。ルミアは誰かに魔術を向けようと考えたことあるか?」

「それはないけど……」

「クラスどころか、学院に居る人間の大半は魔術を他人を傷つける為に使う事には抵抗がある。そういうものだ。結局のところどう使うかは使い手である俺たち次第だということだ。だからこそ、魔術を使う人間は自分が何をしてるのかハッキリと理解しておかなきゃならない」

「……アイザ君も色々考えてるんだね」

「そうでもしないといつかとんでもない間違いを犯してしまいそうだからな……それよりもここが綻びてるぞ」

「あ、本当だ」

教科書を見ながら法陣の構築をしていくルミアに時々助言をしながらから完成させていく。

「それじゃ……《廻れ・廻れ・原初の命よ・理の円環にて・路を為せ》
出来上がった方陣を前にして、ルミアが方陣起動の呪文を唱える。

——しかし、方陣は起動しない。何の変化も見られなかった。

「おつかしいなあ……なんで上手くいかないんだろう?」

「ルミア、それ水銀が……」

アイザがルミアに話しかけようとした瞬間——

ばんっ!

突然魔術実験室の扉が乱暴に開かれ、ルミアとアイザが一瞬ビクツとしながら、その方向を振り返る。

「ぐ、ぐ、グレン先生!?!」

開かれた扉の向こうには、グレンが仏頂面で突っ立っている。

「どうしてここに……」

「そりゃこっちのセリフだ、生徒による魔術実験室の個人使用は原則禁止のはずだろう?」

「実は私、法陣が苦手です。最近授業についていけなくて……でも、今日はいつも教えてくれるシステイが居ないし……どうしてもこの法陣を復習しておきたくて……その……ごめんなさい、すぐに片付けます！後でどんなお叱りでもお受けしますから！」

「いーよ。最後までやっちゃまいな。もうほとんど完成してんじやねーか。崩すのはもったいないねーだろ」

しょんぼりしながら答えるティンジェルさんに対しグレンは

「バーカ、水銀が足りてねえだけだ」

グレンは床の法陣のかたわらに歩み寄り、水銀の入っている壺をつかみ上げ、酌をするかのように片手で眼前に構える。目を細めて法陣を凝視し、じわりと手に持った壺を傾ける。その手には震え一つなく、やがて壺の口から水銀が糸のように法陣へと零れ落ちる。不意にグレンが壺を持つ腕を素早く動かした。機械のような正確さで、水銀の糸が法陣を構築する各ラインをなぞっていく。そこになんの迷いも淀みもない。

「……凄い」

「それだけ丁寧に描けるのなら、やはり授業で黒板に字を書く時はわざと汚く書いてたんですね」

「さてなんのことやら……」

「そんなことで仕事を早くやめれると考えるなんて浅はかですね？」
「うっ……」

アイザからの指摘にぐうの音も出ないグレンは聞こえないふりをしてつつ要素の綻びを修繕し終える。

「もう一回、起動してみな。教科書の通り五節だ。横着して省略すんなよっ。」

「は、はい」

ルミアは再び法陣の前に立つ。深呼吸をして、詠うように涼やかな声で呪文を唱えた。

「《廻れ・廻れ・原初の命よ・理の円環にて・路を為せ》」

その瞬間、法陣が白熱し、視界を白一色に染め上げた。

やがて光が収まれば、鈴鳴りのような高音を立てて駆動する法陣が

視界に現れる。この法陣は特に何か起こるものではない。法陣上を流れる魔力の流れを視覚的に理解するための、言わば学習用の魔術だ。

魔力が通っているのだろう。法陣のラインを七色の光が縦横無尽に走っていた。七つの光と輝く銀が織り成す幻想光景。

その、光景は美しく、神秘的なものであった。

「綺麗……」

その単純に幻想的で美しい光景にルミアが思わず声を出す。アイザもその様子を一步退いた位置から黙って見ていた。何度か見たことのある光景のはずなのに、今回はまた一段と綺麗なような気がしたからだ。

グレンはそれを冷めた目一瞥する。アイザからしたら実にグレンらしい興味のなさだと思った。

その後ルミアの提案により三人で一緒に帰ることになった。

「先生って……本当は魔術がお好きなんですよね？」

「ははっ……ねーよ。もうわかっちゃいるとは思いますが俺は魔術が大嫌いなんだ。楽しいだなんて、ありえん」

「そうですか……でも、先生が本当に魔術が嫌いだとしても、今日のはちよっぴりひどいですよ？システイ……システイーナ、泣いていましたし」

ルミアはシステイーナが何故、魔術に励んでいるのかを話す。

システイーナにとって、魔術は大好きだった祖父との絆の証であり、いつか祖父に負けない魔術師になる、と祖父と約束した。そのため、日々魔術の研鑽を積んでいる。

「初めて知った」

「……そうか。それは流石に悪い事をしたな」

自分の尊敬している人を間接的には言え、無価値で下らない物におとしめられたら、誰だって怒るだろう。

「それは置いといて、なんだ？お前は俺に説教するために誘ったのか

？」

「あ、いえ……それもありますけど、そうじゃなくて……ええと……この学院の講師になる前はグレン先生って何をされてたんですか？」

「引きこもりの穀潰しをやってました」

「え？引きこもり？穀潰し？」

「学院にセリカって言う偉そうな女が幅をきかせてるだろ？ガキの頃、そいつにはお袋代わりに世話になってただけど、そのよしみで今までずっとそいつに養ってもらってたんだ。ふっ、凄いだろ？」

「あ、あはは……なんでそんなに得意げなんだろう……？」

「……それって駄目人間の発想じゃないですか？」

「おい蒼髪！お前やっぱ俺をかなり下に見てるだろ!」

「何を今更？それと俺の名前はアイザックⅡソーントンです。非常勤とはいえ生徒の名前くらいちゃんと覚えておいてください」

「うぐっ………」

「あははは………」

ルミアは苦笑いをするしかない。

「でも、それ嘘ですよ？」

どうしてそんなに自信を持って断言するのか、グレンは戸惑いを隠せない。

「嘘じゃねーよ。この俺がマトモに働くような殊勝な人間に見えるか？この一年はセリカのスネを齧りまくりだったんだぞ？」

「屑の鏡ですね………」

「うるせえ！やっぱりテメエ泣かす！今、ここで、公衆の人前で！」

「それなら正当防衛で魔術行使しますよ。先生略式詠唱苦手ですよ？」

「ぐっ……おのれ卑怯な！」

「あ、あの……一年……それよりも前は？」

「……あー、悪い、カッコつけ過ぎた。あの学院を卒業して以来ずっと、だ。どうも働くつてのが性に合わなくてなー、本当の自分探しをしてたっつーか………」

どうにも納得いかなそうにルミアはグレンを見つめている。

「あー、俺の黒歴史を掘り返すのは終わりだ、終わり！今度は俺が聞くぞ！」

この話は蒸し返されたくないの、グレンは強引に話題を変えた。「お前らつてき。なんでそんなに魔術に必死なの？ システイーナつて奴と言い、お前と言い、魔術ごときにマジになり過ぎだろ？」

「それは……」

「今日、話したがな。魔術つて本当にロクでもない術なんだぞ？ 別になくても困らないし、あればあつたでロクなことにならん。何を好き好んでこんなもんやってんだ？」

「俺は特にこれといったものはないですね。ここの魔術学院をいい成績で卒業できれば収入が安定した職に就けるからです」

「ふーん……そうかよ。んでお前は？」

「私は魔術を真の意味で人の力にしたいと考えています。そのために今は魔術を深く知りたい」

グレンはその言葉を自分の魔術否定に対する遠回しな批判と受け止めた。

「やれやれ、力は使う人次第つてありきたりな理屈か？ 剣が人を殺すんじゃない、人が人を殺すんだつてか？」

「はい。でも……私はもう少し違うことも考えています」

「今日、先生が仰つたとおり、人を傷つける可能性を大いに秘めた魔術なんて、きつとない方がいいんです。なければ少なくとも魔術で傷つけられる人はいなくなるから。でも、現実として魔術はすでに在るんです」

「……まあな」

「それがすでに在る以上、それが無いことを願うのは現実的ではありません。なら、私達は考えないといけないんです。どうしたら魔術が人に害を与えないようにするか。でも、魔術のことをよく知らなければ、それを考えることなんて到底できません。知らなければ魔術はどこまでも ただの得体の知れない悪魔の妖術で、人殺しの道具で、法も道もない外法なんです」

「要するに……盲目のままに魔術を忌避するより、知性をもって正しく魔術を制する、と？全ての魔術師がそうなるように働きかける、と？」

「はい。私みたいな凡才にそれができるかどうかわかりませんが……」

「お前、魔導省の官僚……魔導保安官にでもなる気か？」

「ふふ、そうですね。それが私の目指す道に通じるなら……それが今の私の目標です」

グレンは能天気な少女に深くため息をつきながら諭す。

「言っておくが徒労に終るぞ？ いや、努力すりや官僚くらいにはなれるかもしれん。だが、お前の目指している物はあまりにも高過ぎる。お前一人がどうこうできるほど、魔術の闇は浅くない」

「わかってます。それでも……です」

「なんでだよ？ なんでそんな報われない道をあえて行くんだ？」

すると、ルミアはなぜかグレンに優しく微笑みかけ、それから何かを懐かしむように遠くを見た。

「恩返ししたい人たちがいるんです……」

「私……恩返ししたい人達がいるんです」

「恩返し？ なんなんだそりゃ？」

「あれは今から三年くらい前の話です。私が家の都合で追放されて、システイの家に居候し始めた頃。私、家を飛び出したところで悪い魔術師達に襲われて殺されそうになってしまったことがあって……」

「見かけによらず、なかなかハードな人生送ってたな。てか、家の都合で追放って……お前って、ひよつとして、どっかの有力貴族かなんかの生まれ？」

「あ、いえいえ！そんな大層な家じゃないです！ホント！貧乏でした！貧乏！」

「いやそこまで強調する必要ないだろ……」

「待てよ……ていうか、お前……」

ふと、何を思ったのか。グレンが不意にルミアの顔をのぞき込んだ。目を細め、遠くを透かし見るかのような表情だ。

「……先生？どうかしましたか？」

するとルミアは、何かに期待するような表情で、グレンを見つめ返す。だが。

「うんにゃ、なんでもない……で？話の続きは？」

ありえん、とでも言いたげにグレンが頭を振って、ルミアに話の続きを促す。ほんの少し残念そうにルミアは息をつくと、話の続きを始めた。

「私がシステイの家に居候し始めたばかりの時、どうして私がつて塞ぎ込んでたんです」

システイともほぼ毎日喧嘩してたんですよ、と笑いながら言うその顔は、とても懐かしんでいた。

「それである日、私家を飛び出したんです。それでずっと泣いてた私に声をかけてきた人がいたんです」

「おいおい、泣いてる女の子に声をかけるなんて、危ないヤツじゃないのか？」

「いえ、同年代の男の子だったんです」

そのままルミアは続ける。

「顔はよく覚えていないんですが、なんていうかどこか大人びていてすごく安心できたんです。だからか私、ほとんどぶちまけちゃったんです、イライラとか不満とかを言葉にして」

何故自分がこんな目にあうのか、自分には居場所がない、誰も味方なんていない等々、出会ってすぐの男の子に愚痴を吐いたと言う。

「その人は最後まで聞いてくれた後、私に言ってくれたんです。“本当に親に愛想をつかされたのならなんでその辺の森に捨てずに他の家に預けられてる？誰も味方がいないならなんでその家の人たちは悲しみに暮れるお前を根気強く向き合おうとしてくれる？自分は要らない子ならなんでその人たちは引き取った？本当に味方がいないのかよく考えろ”、と。それを聞いて、少し冷静になれた私は言われた通りに考えてみたんです。そしたらすぐにわかったんです。システイやシステイの両親はずっと私のそばに居ようとしてくれていたことが」

「ふーん、そんな奴がいたんだな」

「……その直後ですかね。悪い魔術師達が現れて襲おうとしてきたのは。けど、その男の子が私を守るために悪い魔術師達をためらいなく殺害していききました」

「なんだそりゃ。そのガキただ者じゃねえな」

「途中でどこからともなく現れたも別の魔術師も加わって悪い魔術師たちは全員死にました。その人達がとても恐ろしかった。あの人も悪い魔術師を殺すことが自分達の仕事だと言ってました。でも、あの人は人を殺めるたびに凄く辛そうな顔をしていて……それでも私を守るために最後まで戦ってくれて。なのに、あの時の私は怖くてその人達にお礼すら言えなくて……あの人達と過ごした時間はほんのわずかでしたけど……あの人は本当に優しい人達だったんだと思います。だから自分の心を痛めながら、自分以外の誰かを守るために戦っていた。あんな風に道を外してしまった悪い魔術師達さえいなければ……あの人は、私のためにあんなに悲しい顔をしないで済んだはずなのに……」

「ふーん」

「……………」

「私はあの人達に命を救われました。あの事件の後、今度は私があの人達を助ける番だと思いました。人が魔術で道を踏み外したりしないように導いて行ける立場になろうって。そのために魔術のことをよく知ろうって。そんな道を歩んでいけば……いつかあの人達に、あの時のお礼が言える日が来るんじゃないかって。暗闇の中、ただ一人きりで泣いていた幼い頃の私に光をくれた……あの人達に」

ルミアはそう言いながら、アイザの方を見て穏やかに笑っている。

「何故俺を見る？」

「ふふ、別に〜？何でもないよ」

それからは特に会話もなく歩いて行き、十字路に着いたところで三人は別れることとなった



次の日、授業の予鈴前。

「昨日はスマンかった」

グレンはシステイーナに頭を下げて謝った。その光景に誰もが、システイーナさえも硬直し困惑を隠せずにした。

「まあ、その、なんだ……大事なものは人それぞれっていうか……俺が魔術が大嫌いだっていうのは変わらんが……それでお前のことをどうこう言うのは、筋違いっつーか、大人気なかつたとは思う。まあ、とにかく……悪かった」

マジで誰だこいつ状態だ。

拳句の果てには――

「授業を始める」

「ちよつと待てや、誰だ。テメエ！」

昨日と今日で別人な様子にレイにも疑いを向けられていた。

「グレン……レーダス大先生だよ。なんだ、レイ、トイレか？ 全く、そういうのは授業開始前に済ませておけて。まあ、行つていいぞ、早くしろよ」

「テメエこそ熱があんのか、どうした？ クソ雑魚ニートのお前が授業なんてらしくねえぞ!」

「誰がクソ雑魚ニートだ腐れテンパ！」

「よし本物だな」

罵倒の言葉で本物かどうか判別できるなんてどういうこと?と
いった感じで一同にはグレンとレイの関係が分からなかった。

「授業してもしなくても文句言われるとか魔術講師ブラックすぎない?ととにかく、遊びは終わりだ。授業を始める……最初に言っておくが、お前らバカだよな」

グレンのとてもない暴言にクラス中のこめかみに青筋が立つ。

「いやいやだつてそうだろ? この十一日間お前らの授業態度見てたら分かったわ。魔術の事なんにも分かつてねーんだな。やれ呪文の共通語約を教えるだの術式の書き取りだのお前ら魔術を舐めてんのか?」

「テメエに言われたくねえよ!」

「そもそも、『ショック・ボルト』程度の一節詠唱もできない三流魔術師に言われたくないね」

誰が言ったか。しん、と教室が静まり返る。そして、あちらこちらからクスクスと押し殺すような侮蔑の笑いが上がった。

「まあ確かにそれを言われると耳が痛い」

「つーか真面目に授業をやらずにそうやってガキみたいにアホな事をやるから馬鹿にされてんだろ?」

「ぐっ! た、確かに: 残念ながら、俺は男に生まれたわりには略式詠唱だとか魔力操作のセンスが致命的に欠けてるからな。学生時代は大分苦労したぜ」

レイからの指摘に、ふて腐れたようにグレンはそっぽを向きながら小指で耳をほじる。

「だが『ショック・ボルト』程度だつて? いやーほんとお前らバカだわ。ははっ、自分で証明してやんの」

グレンの煽りに一部を除くクラスのメンバーは苛立っていく。

「まあ、いい。じゃ、今日はその件の『ショック・ボルト』の呪文について話そうか。お前らのレベルならこれでちょうど良いだろ」

あまりにもひどい侮辱にクラスが騒然となった。

「今さら『ショック・ボルト』なんて初等魔術を説明されても……」

「やれやれ、僕達は『ショック・ボルト』なんてとつくの昔に極めているんですが?」

生徒達の不平不満を完全無視してグレンは本を掲げて話し始める。

「はいはい、これが、黒魔『ショック・ボルト』の呪文書です。ご覧下さい、なんか思春期の恥ずかしい詩みみたいな文章や、数式や幾何学図形がルーン語でみっしり書いてありますねー、これ魔術式って言います。お前ら、コイツの一節詠唱ができるくらいだから、基礎的な魔力操作や発声術、呼吸法、マナ・バイオリズム調節に精神制御、記憶術……魔術の基本技能は一通りできると前提するぞ? 魔力容量(キャパシティ)も意識容量(メモリ)も魔術師として問題ない水準にあると仮定する。てなわけで、この術式を完璧に暗記して、そして設定された呪文を唱えれば、あら不思議。魔術が発動しちゃいまーす。」

これが、あれです。俗に言う『呪文を覚えた』っていう奴でーす」
そして、グレンは壁を向いて左指を指し、呪文を唱えた。

《雷精よ・紫電の衝撃以て・撃ち倒せ》

グレンの指先から紫電が迸り、壁を叩いた。

「やっぱり三節詠唱……」

「とつくに究めたつての、「ショック・ボルト」なんて」

相変わらずの三節詠唱に軽蔑の視線が集まるが、グレンは気にする素振りを見せない。たった今、自分が唱えた呪文をルーン語で黒板に書き表していく。

「さて、これが【ショック・ボルト】の基本的な詠唱呪文だ。魔力を操るセンスに長けた奴なら《雷精の紫電よ》の一節でも詠唱可能なのは……まあ、ご存知の通り。じゃ、問題な」

グレンは黒板に書かれた呪文、《雷精よ・紫電の衝撃以て・撃ち倒せ》を《雷精よ・紫電の・衝撃以て・撃ち倒せ》と四節に区切った。

「さて、これを唱えると何が起こる？ 当ててみな」

「その呪文はまともに起動しません。必ず何らかの形で失敗しますよ」

メガネを掛けた少年——ギイブルが即座に答える。

クラスではシステイーナに次ぐ成績の持ち主で言うまでもなく優秀な生徒だ。

しかし、こんなことはギイブルやシステイーナじゃなくても分かる。クラスメイトの全員がギイブルの言葉に頷いているのが良い証拠だろう。

「んな事分かったんだよバカ。その失敗がどういう形で現れるのか聞いてんだ」

「何が起こるかなんて分かる訳ありませんわ!! 結果はランダムです!!」

クラスの生徒の一人、ツインテールの少女——ウェンデイがたまらず声を張り上げ、机を叩いて立ち上がる。

「ブフーツ!? ランダム!? マジで言ってるの!? お前らこの呪文究めたんだろ?」

ウエンデイの反論にグレンは教壇の上だと言うのに腹を抱えて大笑いしている。

この態度に、生徒は更に苛立ちを募らせる――。

「なんだあ？全滅かあ？それじゃあ、答えは――」

「右に曲がる」

たった一人、アイザだけが無愛想に答えた。その瞬間、視線が一斉に移り変わる。

「へえ、わかる奴もいるじゃねえか。なら、えつと……」

「アイザック。アイザックIIソーントン。昨日名乗ったのにもう忘れましたか」

「うるせえ。アイザック、実演してもらおうか」

「………《雷精よ・紫電の・衝撃以て・撃ち倒せ》」

アイザが呪文を唱え「ショック・ボルト」が起動すると、宣言通り狙った場所へ直進するはずの力線は大きく弧を描くように右に曲がって壁へと着弾した。

「バ、バカな……」

「ありえませんか！」

クラス一同も信じられないと言うような表情だった。

「ちなみに序盤を割って五節にすると？」

「射程が三分の一」

「真ん中を消すと？」

「威力大幅低下」

「大正解。まあ、究めたつーなら、これぐらいできないとなー？一人はできてるようだが」

淡々と答えていくアイザに対し誰もが驚きを隠せないでいた。

「そもそもさ。お前ら、なんでこんな意味不明な本を覚えて、変な言葉を口にしただけで不思議な現象が起こるかわかってんの？だって、常識で考えておかしいだろ？」

「そ、それは、術式が世界の法則に干渉して――」

ほぼ脊髄反射で出たギイブルの発言を、グレンは即座に拾う。

「とか言うんだろ？わかってる。じゃ、魔術式ってなんだ？式つてのら人が理解できる、人が作った言葉や数式の羅列なんだぜ？魔術式が仮に世界の法則に干渉するとして、なんでそんなもの、が世界の法則に干渉できるんだ？おまけになんでそれを覚えなきゃいけないんだ？で、魔術式みたいな一見なんの関係もない呪文を唱えただけで魔術が起動するのはなんでだ？おかしいと思ったことはねーのか？ま、ねーんだろ？それがこの世界の当たり前だからな」

グレンの言う通り、生徒達は魔術式を覚え習得した呪文の数を競い、誇ってきた。根本的な事を突き詰め考える余裕は今まで無かった。

「つーわけで、今日、俺はお前らに、『ショック・ボルト』の呪文を教材にした術式構造と呪文のド基礎を教えてやるよ。ま、興味ない奴は寝てな」

「あ、あのグレン先生、レイ先生はもうとつくに寝てますが……」
「は？」

ルミアからの指摘にグレンがレイの方へ振り返ると

「ZZZZ……」

「おいこらー！さっから静かだと思ってたらなに空気読まずに寝てんだあ！」

目をつぶって鼻からちようちん膨らまし、開いた口からよだれをたらしながらも立っているという奇妙な寝方をしているレイにグレンが一喝する。

するとレイはパチツと目を覚まし

「ああ悪い悪い、つい寝ちまった、でなんだっけ？シャツについたシミは大根の皮で拭くと良く落ちるって所まで覚えてんだけど」

「そんな話ーミリもしてねーよ！なんだその豆知識。それで本当に汚れが落ちるのか!?!」

「結構落ちるぜ。仕事で急いできき水洗いするよりも大根の断面をシミに叩きつける方が速く済むぜ。まあ仕事中に大根の匂いが気になるかもしれないねえが（笑）」

首をコキコキ鳴らしながらめんどくさそうに返事するレイの豆知

識を聞いて席の方から「まじで!」「そんな裏技が……」とか聞こえてきた。

「あの、そういうのいいんではやく本題始めてください」

「そうだぞグレン。勝手に話逸らしてんじゃねえよ」

「いや話逸らしたのお前!」

その後グレンはまず、魔術の大原則『等価対応の法則』の復習を始めた。

大宇宙すなわち世界は、小宇宙すなわち人と等価に対応しているというもので、お互いに影響しあっているということだ。つまり、魔術式とは世界に影響を与えるものではない。人に影響を与えるものは人の深層意識を変え、世界の法則を変える。

「要するに魔術式ってのは超高度な自己暗示っつーことだ。だから、お前らが魔術は世界の真理を求めてくなんてカツコイイことよく言うけど、そりや間違いだ。魔術は人の心を突き詰めるもんなんだよ」「ふー!言う事かけー見た目滑稽ー」

「やかましいわ!……つまり、ルーン語は自身の深層意識を効率よく改変するための言語なわけだ。なに?たかが言葉ごときに人の深層意識を変えるほどの力があるのが信じられないだつて?つたく、あー言えばこう言う奴らだな……そんならアイザック!ルミアがお前のこと好きだつて言つてたぞ」

「せ、せせせせ先生!な、何を言ってるんですか!」

「はい注目!ルミアの顔が真っ赤になりましたねえ!見事言葉ごときがルミアの意識に影響を与えました!比較的簡単に制御できる表層意識でもこうなんだ。制御できない深層意識に影響を与えるなんて簡単だろ?他にも…白猫!」

グレンはシステイーナに近付きながら変なあだ名を付けて近づいていく。

「白猫って私のこと!?!私にはシステイーナって名前が——」

「愛してる。一目見た時からお前に惚れていた」

「ふえっ!?!」

「ほら！簡単に引つかかるだろ？今言ったばつかなのに」

グレンはしれつとした顔で講義の続きを行う。残ったのは哀れにも真っ赤になったルミアとシスティーナだけ。アイザの方はグレンがふざけてやると予想していた為特に反応なし。

「まあ、このように言葉で世界に影響を与える。これが魔術の……うがっ!？」

直後、グレンを教科書の雨が襲った。もちろん犯人はシスティーナ。

「おい馬鹿！教科書投げんな！」

「馬鹿はあんたよ！この馬鹿馬鹿馬鹿ー!!」

最後のは流石にないな。おふざけでも公衆の面前とかでそういうのやめといた方がいいと思うよ。だってお前二十歳手前じゃん。もうとつくに青春終わってるじゃん。しかも相手が未成年で生徒じゃん。青春どころか犯罪臭しかしねえよ。なにお前？知らない間に縛り方だけじゃなくそっちにも目覚めてたの？」

「え？縛り方？」

「先生にそんな趣味が……」

「……不潔ね」

「おいこらレイ!!今すぐその周りに誤解を招くような発言をやめろ！俺は断じて変態じゃねえ！」

レイの言葉に劣勢に追い込まれたグレンは、女子生徒達から送られてくる軽蔑の視線に焦りながら術式と呪文の関係について話し始める。

「と、とにかく……核心を先に言っちゃえば、やっぱ文法と公式みたいなのがあるんだよ。深層意識を自分が望む形に変革させるためのな。」

そして、グレンは呪文とは深層意識に覚え込ませた術式を有効にするキーワードと説明する。このキーワードを唱えることで、術式が深層意識を変革させる。

「ま、要は連想ゲームだわな。例えば、その白猫娘と聞けば白髪、と誰もが連想するように呪文と術式の関係も同じだ。ルーンで呪文を括ることで相互——痛えツ!? ちよ、頼むから教科書投げないでおお

ぶはあッ!？」

「プククク…愉悦」

（（コイツ最低だ!?!））

下種な笑みを浮かべてグレンがボロボロになっていく様にレイが満足してる中、グレンの顔にさらに本の痕がつく。

「要するに、呪文と術式に関する魔術則…：文法の理解と公式の算出方法こそが魔術師にとっては最重要なわけだ。なのにお前らと来たら、この部分を平気ですつとばして書き取りだの翻訳だの、覚えることばつか優先しやがって。教科書も『細かいことはいいんだよ、とにかく覚えろ』と言わんばかりの論調だしな」

生徒達も今度こそ、ぐうの音も出ない。

「要するに、だ。呪文や術式を分かりやすく翻訳して覚えやすくすること、これがお前らの受けてきた『分かりやすい授業』であり、ガリガリ書き取りして覚えること、これがお前らの『お勉強』だったんだろ?もうね、アホかと」

グレンは肩をすくめて、呆れ返ったように鼻を鳴らした。

「で、その問題の魔術文法と魔術公式なんだが…：実は全部理解しようとしたら、寿命が足らん…：いや、怒るな。こればかりはマジだ。いや、本当に」

「おいおいここまで持ち上げて説明しないのかよ。マジ引くわー」

「だーかーらー!ド基礎を教えるんだよ。これを知らなきゃ上位の文法公式は理解不可能、なんていう骨子みたいなもんがやっぱあるんだよ。ま、これから俺が説明することが理解できれば…：んーと」

そう言つて少しの間考え込み、

「《まあ・とにかく・痺れる》」

三節のルーンで変な呪文をゆっくり唱える。すると、驚くことに「シヨック・ボルト」の魔術が起動した。

ザワザワと教室にざわめきが広がりました。今までの自分たちの常識では、決められた呪文を唱えなければ魔術は起動しないとされていたのだから当然だ。しかし、グレンが唱えたのは誰がどう聞いてもテキトーな呪文。

「うーん、範囲がちよつと狭いか？まあいい、こんな風に即興でこの程度の呪文なら改変することくらいはできるようになる」

ここに来て、ようやく生徒達のグレンを見る目が変わってくる。

「……じゃこれからいよいよ基本的な文法と公式を解説すんぞ。ま、興味ないヤツは寝てな。正直マジで退屈な授業だから」

「そうか。んじゃ俺寝てるわ。結局のところ一節詠唱出来ないグレン、あとは任せた」

「お前は黒板に文字を書くんだよ!!てゆーか人が気にしてることハッキリ言うな!」

(（気にしてたんだな）)

この時、クラス全員の思いが一致したのだった。

崩壊する日常

ダメ講師グレン、覚醒。

その報せは学院を震撼させた。噂が噂を呼び、他所のクラスの生徒達も空いている時間に、グレンの授業に潜り込むようになり、そして皆、その授業の高さに驚嘆した。

専属講師としてグレンがあてがわれたシステイナ達二年次二組のクラス以外にも目を追うごとに他のクラスからの飛び入り参加者で席は埋まり、さらに十日経つ頃には立ち見で授業を受ける者もいた。

こうして数十日で地のどん底まで落ちていたグレンの評価が同じくらいの日時でそれこそ天に昇るような勢いで上昇していったが……

「……………遅い！」

システイナは懐中時計を握りしめる手をぶるぶる震わせながら唸っていた。現在十時五十五分。本日の授業開始予定時間は十時三十分。すでに二十五分が経過している。なのにグレンとレイが教室に姿を見せない。つまりは、遅刻だ。

「最近が良い授業をしてくれるようになったからほんの少しだけ見直してたのに……！」

「確かに最近遅刻とかも無かったのにどうしたんだろうね？」

「二人とも今日が補講日なのを忘れてるんじゃないのか？」

「そんな……………流石にそんなことは……………ない、よね？」

アイザの一言にシステイナとルミアは完全否定できない。

本来この日から五日間ほどは学院の講師たちがある魔術学会に揃って顔を出すため休校になるはずだった。しかし、1ヶ月前に退職した前任のヒューイによって授業に遅れがでている2組はこの5日間も授業がある。そして2組以外が休校にも関わらず、教室は満席であり後ろには立っている生徒さえいる。

「あいつらが来たら今日こそガツンと言ってやらないと……………」

「あはは。今日こそ、じゃなくて、今日も、じゃないかな？システイ」

「細かいことはいいの！」

システイーナとルミアが会話していると、教室の扉が無造作に開かれ、新たな人の気配が現れた。

「あ、先生つたら、何考えてるんですか!? また遅刻ですよ!? もう……………え?」

説教をくれてやろうと待ち構えていたシステイーナは、教室に入ってきた人物を見て言葉を失った。その人物は、グレンでもレイでもなかった。代わりに、教室に入ってきた見覚えのない二人の男がいた。

「あー、ここかー。いや、皆、勉強熱心ゴクローサマ! 頑張れ若人!」突然、現れた謎の二人組に教室全体がざわめき始めた。

「あ、君達の先生はね。今、ちよつと取り込んでるのさ。だから、オレ達が代わりにやって来たつーこと。よろしく!」

「ちよつと……………貴方達、一体何者なんですか?」

正義感の強いシステイーナが席を立ち、二人の前まで歩み寄ると臆せず言い放つ。

「ここはアルザーノ帝国魔術学院です。部外者は立ち入り禁止ですよ? そもそもどうやって学院に入ったんですか?」

「おいおい、質問は一つずつにしてくれよ? オレ、君達みたいに学がねーんだからさ!」

「……………つ!」

このチンピラ風の男はどうにも調子が狂う。システイーナは苦い顔で沈黙した。

「まず、オレ達の正体ね。テロリストってやつかな? 要は女王陛下サマにケンカ売る怖ーいお兄サン達ってワケ。あ、あと前は連邦にもケンカ売ってたかなー?」

「は?」

「で、ココに入った方法。あの弱ちくくて可哀想な守衛サンをブツ殺して、あの厄介な結界をブツ壊して、そんでお邪魔させていただいたのさ? どう? オーケー?」

クラス中のどよめきが強くなる。

「ふ、ふぎけないで下さい! 真面目に答えて!」

肩を怒らせて、システイーナが叫んだ。

「大マジなんだけどなあ〜」

チンピラ風の男はおどけて、大仰に両手を開いた。

「この学院で守衛を務めている方は戦闘訓練を受けた魔術師です！貴方達みたいな人にそう簡単にやられるわけないし、この学院の境界は超一流と呼ばれる魔術師にだって破ることはできないですよ!？」

「あー、そうなの？天下に名高い魔術学院もたいしたことねーのな。がっかりだわー。」

「……あまりそのようなふざけた態度を取るようなら、こちらにも考えがありますよ?？」

「え?何?何?どんな考え?教えて?教えて?」

「……っ!貴方達を気絶させて、警備官に引き渡します!それが嫌なら早くこの学院から出て行って:」

「きゃー、ボク達、捕まっちゃうの!?!いやーん!」

「警告はしましたからね?」

一向に出て行く気配を見せない男達に、システイーナは覚悟を決め、指先を男に向け——黒魔【シヨック・ボルト】の呪文を唱えた。

「雷精の——きゃっ!?!」

「ズドン」

途中でシステイーナが悲鳴を上げ、バランスを崩して尻餅をついた。アイザが足払いでシステイーナを転ばせたからだ。

「ちよ、アンタ何すんのよ!?!」

「お前こそ相手をよく見る。バカが」

「な、あ……え?」

周りがいきなり静まり返ってるのがおかしいと思ったのか、システイーナはクラスの皆の視線を追って顔を向ける。

向いた先は壁。そこには小さな穴が空いていた。そこから外の景色がくつきりと見える。

ちなみにこの学院の壁もそれなりの強度があり、術式を施されてるから容易に破壊できるはずがない。だが、バンダナの男の指先から放たれた閃光は容易く壁を貫通した。

この恐るべき貫通力。システイーナはもちろん、その様子を見ていたクラスの全員が男の放った呪文の正体を悟った。

「そんな……まさか……」[ライトニング・ピアス]!？」

黒魔 [ライトニング・ピアス]。

指さした相手を一閃の雷光で刺し穿つ、軍用の攻性呪文だ。見かけは「ショック・ボルト」とそう大差はない。だが、その威力、弾速、貫通力、射程距離は桁外れであり、分厚い板金鎧すら余裕で撃ち抜いてしまうほどだ。術に内包されている電流量も「ショック・ボルト」とは比較にすらならず、なんの魔術的防御も持たない普通の人間ならば、触れただけで感電死するだろう。そのシンプルな外見からは想像もつかない恐るべき殺戮の術。かつて、戦場から弓や銃はおろか鎧の存在価値すら奪った術だった。

「ど、どうして……そんな危険な術を……?まさか……貴方達、本当に……」

「だーから言ってるでしょ?テロリストだって。この学院はオレ達が占拠しましたー、君達は人質です、大人しくしててねー?あ、そうそう、逆らう奴は今のうちに逆らっておいてね?ブツ殺すから。」

それから数秒……遅れて生徒達が悲鳴を上げて逃げ出そうと動かないきなりのテロリストの存在。そして自分達との格の違いから来る恐怖の所為でまともな判断ができてないために動きが混乱している。

「あーあ、うるせえな。静かにしろよ……殺すぞ?」

別にそこまで声を張り上げたわけじゃない。普段とあまり変わらない音量だったはずなのに、その言葉に込められた殺気と共に一気に教室内に波をたてるように響き渡り、恐怖で教室内が一気に静まり返った。

「そーそー子供は素直が一番だそんじや全員ちよつと集まりな」

男はシステイーナ達、学院の生徒達を集めていると男はヘラヘラと学院の生徒達に質問していた。

「さて、この中にさ……ルミアちゃんって女の子いる?」

すると学院の生徒達は何故『ルミア』がここで出てきたのか全く分

からなかった。

「ルミア…?」

「何でルミアが?」

「んー……どれがルミアちゃんだ?」

チンピラみたいな男は面白そうに笑いながら学院の生徒達を眺めていた。

「君かな?」

男が声を掛けた生徒は、眼鏡を掛けた少女、リンだった。

「ち…違います…」

「あつそ、じゃどの子がルミアちゃんか知ってる?」

「…し…知りま…せん」

「ホント?俺 ウソつき嫌いだよ?」

男はリンに顔を近づけながら威圧をかけていると

「貴方達…ルミアって子をどうするつもりなの?」

システイーナは男達に質問していた。

「おお さつきの何?お前ルミアちゃんを知ってるの?」

「私の質問に答えなさい!!貴方達の目的は一体、何!?!」

「ウゼエよ、お前」

今までのへらへらとした表情から一転、突如、男は蛇のような冷酷な顔になった。

「うん、お前からにすつか。」

「……え?」

男はなんの迷いもなく、システイーナの頭に向けて――

「やめて下さい!!?」

集められた生徒達の中から大きな声が聞こえた。

「私がルミアです。他の生徒達に手を出すのはやめて下さい」

ルミアの目に怯えはなかった。ただ、こんな自分自身が目当てにも関わらず、他の生徒が巻き込むのは許さないという怒気に燃えている。

「へえ……」

その姿に関心するように、チンピラ風の男は声を漏らした。

「君がルミアちゃんなんだ。うん、実は知ってた。君が名乗り出るか、我が身可愛さに教える奴が出るまで関係ない奴を1人ずつ殺していくゲームしてたんだよね」

およそ、正常な人間の考える事ではない。間違いなくこの男は狂人と呼べる部類の人種なのだろう。

ルミアの目で燃える怒りの炎がさらに強く燃えていることが見て取れた。

「遊びはその辺にしておけ、ジン」

ここで初めて紳士然としたダークコートの男が口を開く。この男も雰囲気で分かりにくいのが、狂人の類いだろう。今のチンピラ風のバンドナの男——ジンの凶行を遊びと言いつつ切ったのだから。

「貴女は私と来てもらう。言うまでもないと思うが、是非はない」
「わかりました」

紳士然としたその男の言うことに素直に従い、ルミアは席から移動した。

そのルミアが、何故か遠くに行ってしまうような気がして……システィーナは声をかける。

「ダメ……ダメよ……ルミア……行ったら殺されちゃう……」

「大丈夫だよ、システィ。きっとグレン先生がみんなを助けてくれるから……」

「あ、そのグレンって奴なら来ないぜ。もう俺らの仲間がブツ殺したからさあ」

「っ!?せ……先生が……ウソ……そんな……」

システィーナはジンのそんな絶望的な事実を告げられ絶望していた。

生徒達の表情が絶望に染まる中、ルミアとダークコートの男は教室を出て行った。

その後、ジンは教室に残された生徒達全員を「マジック・ローブ」で縛り上げ、呪文の起動を封じる「スペル・シール」の魔術をかけ、完全に無力化した。

「あーあー、退屈だーねー。兄貴当分戻ってこねえだろうし……こう

なったらお楽しみといっちゃうか。てなわけでその嬢ちゃんこつちねー」

「え、ちよ……放しなさいよ!」

一作業が終わった後、何を思ったかジンはロクに動けないシスティーナを強引に連れて教室を出ると、ロックの魔術で教室に鍵をかけ、生徒達を完全に閉じ込めた。

◇ ◆ ◇

やれやれ、奇しくも動ける機会到来といったところか。

魔術を発動したいものの、さっきあのバンダナ男がつけた呪符の所為でそれができない。

普通に考えればここにいる普通の学院生にはお手上げなんだろうな。

「カツシュ、おいカツシュ」

「あ、なんだ……アイザ?」

「俺の机の上にペンナイフがある。それを取ってきてくれないか?」

「何でそんな……というか、何をするつもりなんだ?」

「いいから頼む」

「お、おう……」

カツシュは怪訝な顔をしながら俺の机に向かい、ペンナイフを取ってくれた。

あのバンダナ男は面倒くさがって俺たちの両手を背中の方で拘束しただけのおかげで移動には不自由はない。

カツシュが俺の傍まで寄ってペンナイフを渡す。

「で、それどうするんだ?」

「これで拘束を切る」

「は?そんなんで外れるわけが——」

「外れた」

「嘘っ!?!」

ナイフで黒魔【マジック・ローブ】によって生み出された魔力の紐

を切る。

このペンナイフについている刃は真銀（ミスリル）でできている。真銀とは、アルザーノ帝国で刀剣の素材として使われる最高級品、ウーツ鋼のさらに遙か格上の世界最高峰の魔法金属の1つ。剛性と韌性を兼ね備えている故に加工が非常に難しいが、一振りで魔力を遮断することが可能な物質である。

「あ、アイザ……お前、今なにやったんだ？」

「説明したいところだが、悪いが《とりあえず・皆と一緒・眠ってる》俺はそう言つてクラスの皆を「スリープ・サウンド」で眠らせる。

これでいい。正直こいつらを守りながら戦うのは無理だ。軍用魔術——軍に所属する魔導士が使用する戦争用の魔術だ。軍用魔術には軍用魔術でしか対抗できない。生徒達の中に軍用魔術を使える者などいない。大学生に過ぎない生徒達に軍用魔術を教えることは許されていない

仮に使える奴がいたとしても、本当の殺し合いを知らないこいつらのメンタルじゃ何の役にも立たない。

俺はロツクの魔術がかけられたドアからではなく、なんの魔術的付与がされてない窓から教室を出た。

あいつらが結界を書き換えて学校に侵入したのならこのまま馬車でトンスラするのは考えにくい。あいつらはなんでもかんでも魔術に頼ろうとするタイプだと俺の直感がそう告げる。

……とゆうことは一番有力なのはあそこか。

問題はシステイーナの方か。最優先はルミアの救出だが、だからつてあつちを見捨てるわけにもいかない。あともう一人、誰かがいれば迷うことなく行動できるのだが。

どうしようかと悩んでいるとふと遠見の魔術が一人の男を捉えた。

まったく、来るのがいつも遅いんだよあのロクでなしは

◇ ◆ ◇

「ほら、こいつちだ。早くしろよ」

「きゃあっ!?!」

突き飛ばされてシステイーナは硬く冷たい床に倒れ伏した。

「な、何するのよっ!？」

システイーナの両手は背中中、「マジック・ローブ」によって縛り上げられている。そのため一度倒れてしまえば立つこともままならない。

システイーナは床に寝そべったまま、顔だけ動かしてチンピラ風の男——ジンをにらみ上げる。ジンは芋虫のように床で悶えるシステイーナの姿を、舐めるような目で楽しげに見下ろしていた。

ここは魔術実験室。昨日、この部屋でなんらかの結界構築実験が行われたらしい。床には鶏の血で描かれた五芒星がある。血の結界の中心に倒れ込んだシステイーナの姿はまるで悪魔崇拜の儀式に捧げられた生贄のようだった。

「こんな所に私を連れてきて……一体、私をどうする気!？」

内心の不安と恐怖をかみ殺すように、システイーナはジンへと食ってかかる。

「ん? 決まってるだろ? ヒマだし、まだ時間あるし、お前使って一発抜いところかなと思って」

「な——」

「せっかく、なかなかの上玉見つけたんだ。暇な時間に喰つとかねーと勿体ないだろ? ククク……」

まるで昼食の予定でも答えるかのような、あつさりした返答にシステイーナは一瞬、言葉を失った。下品極まりない言い回しだったが、その言葉の意味がわからないほど、システイーナは子供ではない。背筋を、怖気が駆け上がった。

「あ、貴方……何、言ってる……」

「いやー、オレってお前みたいな乳臭いガキ結構、好みなのよ? ロリコンって奴? ぎやはは、捕まっちゃうなー。」

青ざめるシステイーナをよそに、ジンは愉快に笑った。

「うーん、でも、お前くらいの女に欲情すんのもって本当にロリコンって言うんかいな? 一応、ケツコンとかできる年齢なんだろ? どう思う?」

「ふざけないでっ！わ、私はフィーベル家の娘よ！私に手を出したら……お父様が黙っていないんだから！」

「うわー、怖い。でも、関係ねーな。っーかフィーベル家って何？偉いの？」

「きや——」

フィーベルのなをまつたく意に介さず、ジンはシステイナを組み敷いた。

身動きは封じられ、悔しいが何一つ抵抗できない。

今のシステイナはまさしく悪魔に捧げられた生贄そのものだ。

「……好きにすればいいわ。」

システイナが怒りの灯った声色で静かに言い、自分を組み敷くジンをにらみ上げた。

「おっ」

「私を慰み者にしたいなら好きにすればいいわ。だけど、覚えておきなさい。貴方だけは……必ず殺してやる。今は無理でも……いずれ地の果てまで貴方を追いかけて殺してやるわ。この屈辱を晴らしてやる……フィーベルの名に懸けて」

「……」

死神の鎌のように鋭い眼に、ジンはしばらくの間、射竦められたかのように沈黙して。

「ぎやはははははははははははは——っ！」

突然、爆発したように大笑いを始めた。

「な、何が、おかしいの!？」

「ひやはははははっ！いや、だつてき——」

大笑いのあまり、目尻に浮かんだ涙を拭いながらジンは言った。

「実はオレ、ルミアちゃんみたいなの奴は黽つても面白く思わねーんだ。」

「はっ」

前後の噛み合わない言葉にシステイナは困惑する。

「ルミアちゃんって一見か弱い女の子に見えるが、ありや、常時覚悟しているタイプの人間だ。そーゆー奴はどんな苦痛を与えられよう

が、辱めを受けようが、決して心は折らねえ。それこそくたばるまでな。オレにはわかる。」

なぜ、そんなことがわかるのか。

その理由を問えば、あまりにもおぞましい答えが返ってきてきそうできたくない。

「だが、お前は別だ。」

「なんですって……!?!」

「お前は一見強がつて見せちゃいるが…脆いね。自分の弱さに必死に仮面つけて隠しているだけのお子様さ。オレはお前みたいなチョロい女を壊すのが一番楽しいんだ。だって、メツチャ美味しい酒もフタが開かないやムカつくだけだろ?」

「——くッ!」

あまりにも屈辱的な物言いに、システイーナの頭に血が上る。

「私が貴方に屈するとしても……?」

「ああ、屈するね。多分、割とあっさり」

「ふぎけないで!私は誇り高きフイーベルの——」

「はいはい、じゃー、どこまで保つかなー?」

ぱり、と。ジンは何の迷いもなくシステイーナの着る制服の胸元に手をかけ、それを引き裂いた。白い下着に包まれた胸と肌が露になる。

「……え?……あ。」

掠れた声がシステイーナの喉奥から絞り出される。肌がひやりとした外気にさらされ、いよいよこれから自分がどのような末路を辿ることになるのか、強く実感する。

じわりと。だが、もう誤魔化し様もなく致命的な恐怖と嫌悪が心の中で醸造される。

「……う、あ。」

「ひゅーッ!胸は謙虚だが綺麗な肌じゃん!うわ、やっべ勃ってきた……おや?どうしたのー?なんか急に押し黙っちゃってさー、元気ないよー?」

負ける者か。屈するものか。私は誇り高きフイーベルの娘だ。魔

術師にとって肉体などしよせん、ただの消耗品ではないか。唇を震わせながら自分自身に言い聞かせる。

だが、そんなシステイーナの理性とは裏腹に、口は勝手に違う言葉を紡ぐ。

「……あ、あの……」

「ん？何？」

「……やめて……ください……」

その一言が出てしまった瞬間、もうどうしようもなかった。これから我が身を汚されてしまうのだという悲嘆に、初めては本当に好きになった人に捧げたかったという密かな夢の理不尽な終焉に、システイーナは涙をぼろぼろと溢れさせ、身体を震わせていた。

「あ、あの……お願いします……それだけは……それだけはやめて……許して……」

「ぎやははははは——ッ！落ちんの早過ぎだろ、お前！ひやはははははッ！」

ひとしきり笑ってから、冷酷な目でジンは泣きじやくるシステイーナを見下ろした。

「悪いがそりやできねえ相談だ……ここまで来ちゃ引つ込みつかねーよ。」

「……やだ……やだあ……お父様あ……お母様あ……助けて……誰か助けて……」

「うけけ、お前、最っ高！てなわけでいただきまーす！」

「嫌……嫌あああああ——ッ！」

ジンの手が必死に身じろぎするシステイーナの肌伸びて行った、その時だった。

「あくもううるせーなー、あんまでけえ声出すなよ。頭にガンガン響くからよー」

「はっ」

「……えっ？」

実験室の床の隅に転がっていた袋がもぞりと蠢き始める。よく見てみるとそれは寝袋であり、中から人が出てきた。

レイだった。なぜか顔色がすごく悪い。

「れ、レイ先生？」

「えーと？」

レイは身体を重ね合っている二人を見て気まずそうに頬をかく。

「すまん。邪魔したな。ごゆっくり……」

そう言つて、寝袋の中にゆっくりと戻つていき……

「いや助けなさいよーッ!?!?」

システイーナの叫びに、レイは渋々といった表情で寝袋から出てくる。

「んだよ。セリカがしばらく戻つてこねえから教授室に隠してた酒飲んでて、酔いつぶれてそのままここに寝泊まりして目を覚ましたら生徒がチンピラに襲われそうになつてるのに遭遇?マジでふざけんなよ」

「いやふざけてんのはアンタ!なに由緒正しい学院でこつそり酒飲んでるのよ!?!」

「馬鹿野郎。大人つてのはな、飲めるときに飲まねえとやっていけねえんだよ。うぷつ……あく、気持ちわりいく……吐きそう」

「しかも吐きそうになるまで飲んでる!?バカなの!?死ぬの!?!」

一方、レイの出現にあっけに取られていたジンだったが、すぐに我に返つてシステイーナから飛び退き、レイに向かって身構えた。

「何者だテメエはッ!?!?」

「でけえ声出すんじやねえよ。一応、この学院の講師をやつてる者です。じゃなかった。講師をやる奴の監視役か。細けえことはいーや。それより俺頭痛えから水くれねーか?」

「この状況で相手に助け求める!?!助けてほしいのはこつちの方よ!」

切羽詰まった状況だったため、ついレイに助けを求めてしまったが、このジンという男は強大な力を持つ魔術師だ。レイの方は力量は分からないが完全に二日酔い状態で勝てる見込みがなさそうだ。

「うるせえ! 一体、どつから湧いて出てきやがったんだテメエッ!?!」

「だからでけえ声出すんじやねえって、頭に響く」

レイとジンが魔術で争えば……間違いなくレイは殺される。ジンのあの超高速一節詠唱に対抗できるはずもない。

「だ、だめ……ッ！ 先生、逃げて！」

「お前、助けろつたり、逃げろつたり、一体どっちなんだよ？」

「いいから早く！ 先生じゃそいつには敵わない！」

「もう遅えよッ！ 《ズド——》」

「うるせえつってんだろ!!」

「がぼお!」

瞬時に呪文が完成するよりも前に、ジンの顔面に空になった酒瓶が直撃し、詠唱が強制的に中断された。

「さつきからギャーギャーギャーギャー、やかましんだよ。発情期ですかこの野郎。てめえの声が黒板に爪を立てた時の音みたいにガンガン響くんだよひっく」

「て、てめえやってくれたごふお!? って、だから瓶投げ、な!? グフオ!? いや、だから、止めろ！」

「てゆるかどんだけ飲んだのよ!?!」

寝袋の中から次から次へと空になった酒瓶を取り出して「こんにやろ、こんにやろ」とジンに投げつけるレイにシステイーナは啞然するしかない。

このまま容赦なくレイの酒瓶攻撃が続くかと思われたが、それは直ぐに終わった。

「あつ、もう投げる瓶ねーや」

「ええ!?!」

「いい加減にしろこの酔っ払いがッ！」

顔が痣まみれになったジンが激情に任せてレイに指を向けた。

《ズドン》ッ！」

瞬時に呪文は完成し、ジンの指先から迸る雷光がレイに容赦なく――

「……………は?」

黒魔【ライトニング・ピアス】は起動しなかった。完成と共に指先

から飛ぶはずの雷光が一向に発生しない。

「ちよ、《ズドン》！ 《ズドン》！ 《ズドン》！」

ジンは何度も試みるも、起動する気配はなかった。

「ど、どうなってやがる……？」

「お前はもう魔術は起動できねえよ」

実験室の外からこの頃馴染んで来た声が聞こえた。

「お前はもう俺の領域内にいるんだからな」

「だ、誰だテメエ!？」

「グレン先生!？」

なんと入ってきたのはジンから死んだと告げられていたグレンだった。

「ったく……いつもここぞというタイミングで出てきやがって。何お前？ ひよつとして狙ってやってるのかグレン？ ひっく」

「んなわけあるか。てゆうーかレイ。お前ひよつとして酔ってるのか？」

「グレン……非常勤講師だ?!? キャレルの奴はどうした!？」

「キャレル？ ああ、あの毒霧使いね。ちよつと眠ってもらった。

多分もうそろそろ憲兵に捕まる頃じゃね？」

「ふざけんな! 《ズドン》! ……くそ、何でだ!？」

「だから……もう魔術は使えねえって言ってるんだろ？ こいつを使ってるんだから」

「あ？ 愚者のアルカナ?？」

グレンが取り出したのは、総数二十二枚からなるアルカナのナンバード、愚者のカードだ。

「てめえ……なんだ、そりゃ?？」

「これは俺特製の魔導器だ。この絵柄に変換した魔術式を読み取ることで、俺はとある魔術を起動できる。それは俺を中心とした一定領域内における魔術起動の封殺」

「な……」

「残念だった。お前の呪文詠唱速度がどれだけ速かろうが、もう関係ねーよ」

「魔術起動の……遠隔範囲封印だとお？」

確かにシステイーナ達が受けたような、魔術の起動を封印する術式はある。黒魔【スペル・シール】と呼ばれる魔術だ。だがそれは付呪が前提であり、しかもこの魔術に限っては相手の身体に呪文を書き込み、魔術効果付与するという特殊な手順を踏まなければならない。実戦でそんな手間のかかることを許す魔術師はいない。それに対し、グレンは紙切れ一枚をちらつと見るだけで広範囲にわたる魔術起動を完璧に封殺できると言うのだ。

「それが俺の固有魔術【愚者の世界】」

「ま…魔術の固有魔術!?まさか!テメエそんな域に至ってるってのか!?!」

「す、すごい……魔術の遠距離封殺なんて。先生が三節しかできなくてもワンサイドゲームなんてものじゃないわ……」

グレンの固有魔術の特性にシステイーナも驚嘆しているとレイがある爆弾発言をした。

「つつてもそれを展開している本人も魔術使えねえんじや世話ねーわな」

「「え?」」

「てへっ★」

「うわキモ……つつうぶ、吐き気がしてきた」

「大げさすぎだろ!?!」

グレンがテヘペロと気持ち悪い笑顔を浮かべながら頷くと、システイーナとジンから間抜けな声が出た。レイの方は二日酔いの状態でグレンの気持ち悪い笑顔を見て吐き気を催していた。

「ま、マジかよ」

「だって、俺を中心にしてるんだし。俺もバリバリ範囲内にいるんだからさ」

「な、なーなんの意味があるのよ、それ!?!」

システイーナもたまらず突っ込み入れてしまった。

「ギャハハハハハハ! バカかお前! 魔術師が自分の魔術も封印してどうやって戦うってんだよ!?!」

「そりゃあ、魔術使えなくなつて……コレがあるだろ？」

グレンは自分の拳を掌で叩きながら言う。

「はあ？拳だあ？」

「うん……拳っ！」

瞬間、グレンの姿がブレた。と思えば、その時にはもうジンの顔にグレンの拳が叩き込まれていた。

「え？嘘……何、今の動き……」

全然、見えなかった。システイーナは呆然とグレンを見つめる。それからグレンは間髪入れずに掴み、拳、蹴り、投げを見事な流れで見舞った。

「テ、テメエ……多少アレレンジが加わってるが、それは帝国軍式格闘術だぞ。魔術師が肉弾戦なんか、ふざけんじゃねえぞ！」

「はあ、なんでそんな魔術以外で倒されるのが嫌なのかなお前らつて……」

グレンが呆れたように言うが、ジンはそれをほとんど聞くことなく、ただグレンを睨むだけだ。

「おいおい、俺を忘れちゃ困るぜバンダナのお兄さん？」

「あん？」

「はあたアー！」

「ゴ チン！！！！」

「!??!」

瞬時にジンの背後に回っていたレイが今やったことにシステイーナは息を飲んだ。

かつて小さい頃、システイーナは自分の母親に聞いた。

『あのねお母様。昨日お父様に飛びつこうとしたら間違えてお股に頭突きしちゃって、そしたらお父様お股を抑えて泣いてたの。お股の衝撃ってそんなに痛いのか？』

『……システイーナ。男にはね、女の子にはわからない痛みがあるの。そこはいわば急所みたいところだから。もし、システイーナに

変な事しようとした男が来たら、遠慮せず思いっきりお股を蹴ってやりなさい。そうすれば男は立ち上がる事は出来なくなるわ』
『はい！変な事されそうになったらお股を蹴り上げるのね。わかった！』

システイーナがかつてお母さんと会話したこの内容を思い出した時、レイの渾身の蹴りがジンの股間に、思いつき炸裂していた。腐つても鬨みの経験者であるジンも、男である限りソコだけは、鍛えられなかったようだ。直立不動のまま前のめりに倒れた。

「くっそ……このオレがあ……ッ！……こんな……ふざけた奴らに……ッ！」

その言葉を最後に、ジンの意識は完全に暗闇へと落ちた。

「けっ、ガキは家に引きこもってママにでも甘えてな。うぷっ——オエええええええ……ッ!!!」

更にそのジンに追い打ちをかけるように、レイの口から茶色のモザイクが噴出した。ずっと吐き気を催しており、渾身の一撃を放ったことで我慢の限界が来てしまったのである。その結果、出来立てホヤホヤな吐しゃ物が噴水のように噴き出して、失神したジンへと降り注いだ。

「うわあ汚な………」

「お前相変わらず容赦ねえなエンガチヨ」

あまりに衝撃的な瞬間にシステイーナもグレンもほんのちよつとだけ、モザイクまみれのジンに同情していた。

ドSⅡサデイスト

「これでよしと」

グレンは手にレイの吐しゃ物がつかないよう細心の注意を払いながら、気絶したジンに全裸にひん剥いて、さらに亀甲縛りに縛り上げ、全身に見るにも無惨な落書きを書き込んで、最後に股間へ『不能』と書いた紙を貼った。

「ふう、これで完全無力化だ。やれやれ魔術師の捕虜の扱いはこれだから厄介なんだ」

「馬鹿野郎。グレンふざけてんのか？亀甲縛りやんならデルタホースに乗せてやんのが礼儀だろ」

「成程盲点だった。ちょうどこの実験室に木の椅子がそれで……………」
「ついでにロウソクも用意しとくか」

「あんたら学院の備品なんに使うつもりよ!？」

健全な少年少女が聞いちゃいけないような談義をするグレンとレイにツツコミを入れるシステイーナであった。

数分後。システイーナの拘束を解き、テロリストのうちの1人のジンを捕らえてからグレンと情報を共有すること数分。

「ルミアが連れて行かれた？」

「……………はい」

システイーナは悔しそうに、哀しそうに目を伏せる。

「なんでアイツが？」

「わかりません」

「そうか……………となるとやっぱ早まったか？」

「先生？」

「あー、いや、すまん。独り言だ。お前がこうして無事だったんだ。判断は正しかったとしよう」

と、その時だった。

辺りに金属を打ち鳴らしたような甲高い共鳴音が響き渡る。

何事かとシステイーナが身を固くしていると、眉間にしわを寄せた

グレンがポケットから半割の宝石を取り出して耳に当てた。

「てめえ、セリカ!? 遅えぞ! 一体、何やってたんだ、この馬鹿!」

『すまん。ちょうど講演中で着信は切ってた』

宝石から、今はフェジテから遙か遠き帝都にいるはずのセリカの声が聞こえてくる。

「こっちはそれどころじゃねーぞ!」

『……何かあったのか?』

宝石から聞こえてくる声が硬くなった。

「ああ、実はな……」

今学院で起こっていることをセリカに伝えるグレン。

下手人の正体は有史以前から存在し、現在も政府と敵対するアルザーノ帝国最古の魔術結社『天の智慧研究会』。魔術を極めるためならば何でもするような外道魔術師の集まりで、組織に所属する優れた人間こそが世界を導くべきでそれ以外の人間は家畜にすぎないという考えを持つ、魔術師の醜い面を形にしたかのような狂った至上主義の温床。

その構成員二人に結界を掌握され、学院は完全に封鎖された。もう、入ることもできない。

教室には五十人前後いるが、その内システイーナは保護、ルミアはどこかに連れて行かれた。

敵戦力は確認できたのが三人、まだ未確認なのが一人以上。確認できた敵の内、二人は無力化したが、諸状況から察するに先の二人と比較して残りが格下なんてことは恐らくありえない。

「で、最後にこれが重要なんだが……俺もこの学院の魔導セキュリティのレベルの高さは知ってる。だが、ここまで鮮やかにセキュリティを掌握されて所から察するに……いるぞ、学院内に裏切り者がな」

『ああ、私もそれを考えていた』

「なあ、セリカ。そっちにいるはずの教授や講師達の中で不自然に姿が見えない奴っているか? 特に教授格かそれに準ずる能力を持つ講師だ」

『わからん。会場では団体行動じゃない。すぐに確認するのは不可能だ』

「ち……事情を説明してさっさと確認しろ！それから早く帝国宮廷魔導士団を回すように手配してくれ！」

『無理だ。お前も知っているとおおり、魔術学院はとにかく各政府機関の面子や縄張り争いがうるさい魔窟なんだ。呼ぶとしても迅速に：というワケにはいかない』

「アホか、ふざけんな!?生徒達の命がかかってんだぞ!?お前の権限でなんとかしろよ!」

『今の私は市井の一魔術師に過ぎないんだ。人が過去の役職の権限を振りかざしていいなら、国が滅茶苦茶になるぞ』

「じゃあ、お前が早く帰ってこい！学院内に転送法陣があるだろ!」

「落ち着け。てめえがあつくなつてどうするんだ」

『レイの言う通りだ。だいたいそこまで周到に結界を掌握した連中が学院内の転送法陣を有効にしたままにしておくか？私なら最初に壊すぞ？ま、試してはみるがね。期待はするな』

「く……」

確かにそうだ。転送法陣は長距離転送魔術において入り口であり、出口でもある。帝都と学院を繋ぐ転送法陣が生きていたら、帝都から学院内に侵入される。先に拠点の転送法陣を破壊するのは立てこもりテロの定石だ。

グレンはばつが悪そうに頭を押さえてため息をつく。

「悪い…冷静じゃなかった」

『人の本質はやっぱ変わらないな。お前はお前のままだよ。とにかく、こっちは対応を急ぐ、お前は無理をせず、保護した生徒と一緒にどこか安全な場所で隠れている。レイもいるんだからなんとかなるだろ』

「ああ、わかった」

「まったく、仕事先で面倒ごとに巻き込まれるなんてついてねえぜ」

『じゃあ、いったん切るぞ……死ぬなよ?』

「……こんな所で死んでたまるか」

「当たり前だ。まだ依頼料たんまり貰ってねえからな」

通信魔術を解除し、グレンは宝石をポケットに押し込んだ。

「……ん？どうした？」

視線に気づいてグレンはシステイーナに声をかける。

「いえ…その…意外で…」

「はあ？」

「グレン先生ってその…もつと冷めた人なんだって思ってたから……」

どうでもいい、とばかりにグレンは目を背けた。

「そんなことより、これからだ。セリカには一応この状況は説明したが、救援はまず呼べそうにないそうさ。呼ぶにしても時間はかなりかかるだろうな」

それを聞いて、システイーナは消沈したように肩を落としてうつむいた。

やがて、何かを決心したようかのように顔を上げ、部屋を出て行くと踵を返した。

「どこへ行く気だ？白猫」

グレンはとっさに腕をつかんで引き止める。

「ルミアを助けに行きます」

「よせ、無駄死にする気か？」

「だって、……だって、ルミアが…ルミアは私を庇って……」

「お前一人に何ができんだよ？お前自身分かってんだろ？大人しくしてろ」

「でも…でも…ツ！」

「大人しくしてろ」

有無を言わさない、突き放すようなグレンの言葉。

次第にシステイーナの肩が小刻みに震えていく。水滴が床を叩く音が小さく響いた。

「でも……私、悔しくて……だって……」

「お、おい…白猫…？」

「だって…うう…ひつく…うわああああん…」

今まで色々こらえていた感情が、一時の安堵が引き金となって暴発したのだろう。言葉を失うグレンの前で、システイーナは目を腫らして子供のように泣きじゃくっていた。

「あーあ、グレンがまた女の子泣かせた」

「またとか言うなレイ！」

「グレン先生の言う通りだった！魔術なんて、ロクな物じゃなかった！こんな物が……こんな物があるからルミアが……ルミアが……ひっく……う、うう……」

「……泣くな、馬鹿」

ぽん、と。グレンはシステイーナの頭に優しく手を乗せた。

「グレン先生……？」

「魔術が現実存在する以上、存在しないことを望むのは現実的じゃない。大切なのはどうすればいいのか考えること……なのだそうだがお前の親友の受け売りだけだな」

「あの子が……そんなことを」

「大層な夢だよなアホだろ？けど立派だ。そんな奴を死なせるわけにはいかねーよな」

「なら、とつとと動くぞ。連中もそんなに悠長にしているような奴じゃねえ」

「……ああ、そうだな」

グレンは決意を瞳に宿し、そして言った。

「俺とコイツが動く。敵の残りは二人だと決めつけて暗殺する。もう、それしかない。協力してもらおうぞレイ」

「……ああ」

暗殺。その時、システイーナはそんなことをあつさりと言ってのけたグレンに背筋が凍えるような恐怖を覚えた。だが、それ以上にやるせなさも感じた。グレンは人殺しを覚悟した冷徹な瞳をしていたが……どこかでとても辛そうだったからだ。

「くは、くはははは……」

突然その場に乾いた笑い声が響き渡った。

「……暗殺、か。けっけっけ、まさかそんな言葉があつさりと出るとはな

…なんだ、お前もその酔っ払いもコツチ側の人間かよ…クハハ…」

見れば、転がされていたジンが意識を取り戻していた。

「否定はしねーよ。しよせんは俺も下種だ」

「ほう？じゃ、オレは殺さねーのか？それとも可愛い生徒の前じゃ殺せねーか？」

「先生達と貴方達を一緒にしないで！」

ジンの不愉快な言を聞いていられず、システイーナが肩を怒らせて叫んだ。

「先生達は貴方とは違うわ！なんのためらいもなくゴミみたいに人を殺せる貴方達とは——」

「くはは、お前、そいつの何を知っているんだ？そいつらは最近やって来たばかりの非常勤講師なんだろう？」

「そ、それは——」

思わず言葉に詰まった。確かにシステイーナはこの約二十日間ばかりの二人しか知らない。セリカが連れて来た謎の講師達。グレンとレイが過去に何をやっていたかなんて何一つ知らない。

「断言してやる。そいつらは絶対、ロクな奴じゃねえ。もう何人も殺ってきた…オレらと——」

「オボロゲシヤアアアアアアア!!!」

「ぎゃああああ!!」

ジンの言葉を遮るように、レイの口からモザイクが噴水のように噴き出して、目の前のジンへと降り注いだ。

「あー…吐いたらスッキリした」

「てめえふざけんなよ！人の大事なところ蹴るわ、ゲロをかけるわ！この拘束が解いたらぜってーぶっ殺してや…がぼおっ!」

「誰が喋っていいって言った？」

モザイクまみれにされ、ビキビキとこめかみに青筋を浮かべながらギャンギャン吼えるジンの口に太いロウソクを突っ込むレイ。

「お前俺達相手に文字通り手も足も出ねえってのに、よくもまあそんな舐めた口聞けるな？」

ぐりぐりとロウソクを押し込まれそうになるが、身動きが取れない

ジンは苦しそうにもがくだけで何もできない。

その光景を数十秒ほど眺めて、ロウソクを口から抜いてやる。

「ゴホゲホゲホっ……てめえ……」

「何か勘違いしてると思うから言っとくかな？とりあえずお前なんか有力そうな情報持ってるさだから、いろいろ話訊かせてもらおうじゃねーか」

そうやってレイはニヤリと黒いニヒルな笑みを浮かべる。それを見てグレンが「うわー、スイツチ入っちゃったよ」と呟いた。

「わりイが、こつちには話すことなんざなにもねーぞ」

ジンはわずかな抵抗を見せるが、レイは冷血動物さながらの冷たい視線を向ける。

「安心しな。俺は開かない口を開かせんのは得意だ。とりあえずその口がよく開くように、天井につるした状態で後ろの穴からロウソクをじゃんじゃん突っこんで塞いでいくところから始めようか」

「どこに安心できる要素があるんだよ!？」

「ささ、あんま時間ないだろうからとつと始めようぜ。最初は思いきつて5本いくか」

「えっ、ちよっ、まつー!」

ジンは顔を青ざめさせる。喧嘩を売る相手を間違えたと悟るには遅すぎた。

と、その時。突然、場に魔力の共鳴音が響き渡ったかと思うと、グレン達を取り囲む空間が波紋のように揺らいだ。

「何——ッ!？」

空間の揺らぎから何かが無数に出現する。

それらは骸骨だ。二本の足で立ち、剣や盾などで武装している。その数、十数体。いや、今もなお、その数はどんどん増え続けている――

グレンとシステイーナとレイはあつと言う間に、大量の骸骨達に包囲されていた。

「ハッハー！ナイスだレイクの兄貴！これでお前ら終いだなあ！」

さきほどまでの様子はどこへやら。ジンが威勢を取り戻し、歓声を

あげる。

「せ、先生……これは——」

「くそ、ボーン・ゴーレムかよ?! しかも、こいつら、竜の牙を素材に錬金術で錬成された代物じゃねえか?! ずいぶんと大盤振る舞いだな、おい?!」

召喚【コール・ファミリア】。本来は、小動物のようなちよつとした使い魔を呼んで使役する召喚魔術の基本術だが、この術者は自己作成したゴーレムを使い魔として、しかも遠隔連続召喚するなどという、恐ろしく高度なことをやっている。しかもグレン達の前にゴーレムは竜の牙製。それゆえに驚異的な膂力、運動能力、頑強さ、三属耐性を持っている。並みの戦士や魔術師では対処できない危険な相手だ。「てか、なんだこのふざけた数の多重起動は?! 人間業じゃねーぞ?!」
「口を動かす暇があるならまず手を動かせ!」

「わかってるよこんちきしょう!」

グレンが全身のバネと共に渾身の右ストレートを近くにいたボーン・ゴーレムの頭部に叩き込む——が。

「ち、硬え!」

多少、のけぞらせたが、それだけだ。ひびの一つも入っていない。「こいつら牛乳飲み過ぎだろコンチクショウ!? 炭酸水でも飲んどけ!」

「馬鹿野郎! ゴーレム相手にテメエのパンチじゃ太刀打ちできるわけねえだろうが! こういう時は身の回りにあるものを武器にして使え!」

そう言つてレイは近くにいたジンの両脚を掴み——

「えっ、ちょ、テメエなにし——」

「食らええええええっ!! ロリコンストラッシュ!!」

「ぶぎやあつ!」

適当な名前を叫びながらゴーレムの一体に向けて横なぎに振るつた。グレンの時と同様にひびをいれることは叶わなかったが、衝撃で後方に大きく吹き飛んだ。

「オiiiiiiiiii!! お前は何を武器にしてんだ!」

「戦場ではその場にあるすべてのものが武器。こいつらクズを叩き潰す鈍器になるんだよ！」

「人間鈍器呼ばわりするお前の方がよっぽどクズ!!」

全裸で亀甲縛りされた捕虜を武器にして振り回すといふとんでもない絵面を意に返さず、体勢を立て直したボーン・ゴーレムが、再び剣で斬りかかって来る。

竜の牙製のゴーレムに物理的な干渉はほとんど損害にならない。拳打や銃撃のような攻撃はもちろん、攻性呪文の基本三属と呼ばれる、炎熱、冷気、電撃も通用しない。

このゴーレムを打ち倒すならば、もっと直接的な魔力干渉をしなければならぬ。

「白猫！俺に【ウエポン・エンチャント】を！」

「わ、わかりました！《その剣に光在れ》ッ！」

システイーナが一節詠唱で唱えた、黒魔【ウエポン・エンチャント】が完成する。

グレンの両拳が一瞬白く輝き、その拳に魔力が符呪された。

「すまん、助かった！」

礼を言いながら、グレンは素早くステップを踏んだ。

兼三閃。正面と左右から襲いかかってきたゴーレムの頭蓋が今度こそ粉碎される。

「《大いなる風よ》！」

続いてシステイーナが黒魔【ゲイル・ブロー】の呪文を唱える。

猛烈な突風が吹き荒れ、出入り口の扉を塞いでいたゴーレム達を扉ごと吹き飛ばした。

ダメージは無いに等しいだろうが、これで外までの道が開けた。

「ナイスだ白猫！俺が先頭に行く！着いて来い！」

「は、はい！」

「急がねえとまた囲まれるぞ！」

グレンが先頭でゴーレムたちを仰け反らせてシステイーナが真ん中を走り、レイが後ろで迫ってくるゴーレムをゲロまみれロリコンストラッシュ（笑）で押し退ける。

「ぶほああ！な、なんで俺がこんな目に……ぐほおああ!!」

「あ、あのグレン先生……あれはあのままでいいんですか？」

「…助ける義理はないし、余裕もない」

「そうですね」

「誰でもいいから助けてくれエエエエ!!」

捕虜の悲鳴が聞こえても休む暇もなく、三人は廊下を駆けて行った。

「こつちだ!」

「はい!」

廊下の端に到達し、続く階段を駆け上がる。

ボーン・ゴーレムの群れがしつこく三人（ついでに白目を向いているジン）の後を追う。

「くそ、ジリ貧だな……」

魔力強化されたグレンの拳闘とレイの白兵戦で対応するには敵の数が多すぎる。システイーナの知る魔術では時間稼ぎにはなるが決定打は与えられない。

「先生！ゴーレムはカテゴリー的には魔法生物ですよね!」

グレンの後ろに続くシステイーナが息も絶え絶え言った。

「先生のあの固有魔術でなんとかならないんですか!」

「ならん!」

グレンは即答した。

「俺の【愚者の世界】は魔術の起動そのものをシャットアウトするだけだ！すでに起動して現象として成り立っている魔術には意味がない！例えば、あいつらみたいにな!」

「つつかえねえな」

「悪かったな!……それであいつらをなんとかしたかったら、むしろ【デイスペル・フォース】——魔力相殺の術だ」

「それなら私が使えます!やってみましょうか!」

「ちよ!?!できるのか!?!かなりの高等呪文だぞ!?!」

「はい。学院じゃなくて、お父様から手習った術ですけど……」

「マジか……」

「いや、この数でそれやってもすぐにマナが枯渇するだけだろ！」

「だよな！思わず感心しちゃったわ！」

それに、デイスペルしていった所で素材に戻るだけだ。更に再び術者が魔術を吹き込めばゴーレムとなってまた襲いかかって来る。要するに魔力無駄遣いだ。

「こうなったら手はひとつしかねえ！」

それからグレンは廊下の階段を駆け上る。そして登り切ると、また廊下を駆ける。

「先生！この先は行き止まり！」

「ああ、このまま走っても体力が消耗して全員御陀仏だ。だったらここでこいつらを掃除するしかねえ。俺が…いや、俺達がここで食い止める。つうわけだから白猫、お前は先に奥まで行って即興で呪文を改変だ」

「ええ!？」

「改変する魔術はお前の得意な【ゲイル・ブロウ】だ。威力を落として、広範囲に、そして持続時間を長くなるように改変しろ。節構成はなるべく三節以内だ。完成したら俺達に合図しろ。後は俺がなんとかしてやる」

「で、でも……」

不安げにシステイーナが隣を走るグレンの横顔を見上げる。

「わ、私にそんな高度なことができるかどうか……」

「大丈夫だ」

返って来るグレンの言葉はどこか自信に満ちた物だった。

「お前は生意気だが、確かに優秀だ。生意気だがな」

「生意気を強調しないでください！」

「俺がここ最近で教えたことを理解しているなら、それくらいできるはずだ。てか、できれ。できないなら単位落としてやる」

「り、理不尽だ……」

「安心しろ。できなかつたらどつちみち俺達がくたばるだけだから単位なんて気にするな」

「レイ先生はレイ先生で身も蓋もないこと言わないでください！」

だが、こんな状況でもいつも変わらない調子のグレンに、システィーナの緊張は、幾ばくか解れた。それをグレンが狙ってやっているのか本気なのかは、甚だ不明だが。

「……わかりました。やってみます」

「よし、じゃあ、先に行け！」

「はいー！」

グレンとレイは足を止めて踵を返し、向かってくるボーン・ゴーレムの群れに向き直る。システィーナはそのまま二人を置いて先行する。

「これで目の前の骸骨共に集中出来るな。そう言えばグレン、お前この一年引きこもってばっかで身体鈍ってんだろ？本当に大丈夫か？」
「そういうレイこそ俺より先にクビになってからマダオになったじゃねえか」

「誰がマダオだ。テメエと一緒にするな」

互いに軽口をたたきつつ、グレンとレイが肩を並べて構える。

「それはそうとレイ」

「なんだ？」

「お前ちゃんと白猫に【ウエポン・エンチャント】かけてもらったか？」

「………あつ」

両者に数秒だけ沈黙が流れた。

「……………俺用事を思い出したわ。じゃ、これで」

「待たんかい！」

ぐわし、とグレンが逃げようとしているレイの肩を掴む。

「用事ってなんだ!? エスケープか! ずらかるつもりなんだな！」

「馬鹿ちげーよ! あれだよあれ。白髪娘に符呪してもらいに行くんだよー！」

「その間俺一人にあの大群相手させる気か! 数秒ももたないわ！」

「安心しろ。たとえテメエの身が減びようと俺たちの中で永遠に生き続けるー！」

「俺が死ぬ前提にすんな！」

「あーもうわかったわかった。そんなに一人が嫌ならほら、俺のロリコンスラッシュやるからもうそれで勘弁しろ」

「いるかそんなわいせつ物の塊みてえな奴！お前が最初に手にしたんだからもうそれはお前のモンだ！最後まで大事に持つとけ！」

「俺だっついていらねえよこんなゲロ臭い奴！だいたいこんな卑猥な縛り方したのテメエじゃねえか！こういうのは創作者が大事にするものなんだよ！」

「オイイイイイイ！あんたら仲間割れしてる場合じゃないわよ！後ろ後ろ！」

レイを逃がすまいとグレンが羽交い絞めしてる合間にボーン・ゴーレムの大群が怒濤の勢いで迫ってきており、奥でスタンバってるシステイーナが二人に呼びかけるが、声が届いてる様子はない。

「離せよこの腐れニート！ロリコンはロリコンと運命ともにしろや！」

「だあかあらああ——」

「お、おい!?何してんだテメエおい——」

グレンはレイの背後から両腕を回して腰をクラッチし、そのまま後方へと反り投げた。

「俺はロリコンじゃねええええ！」

「ぐはあ！」

レイはちようどそこまで来ていたボーン・ゴーレムの一体を下敷きにして投げ落とされた。

「ちよつとおおお!!?なにやってるんですかグレン先生!?!」

「安心しろ白猫。あの馬鹿なら大丈夫だからお前は呪文改変に集中して——」

「てんめえええなにしやがんだアア！」

「どわあああ!?!」

起き上がったレイが怒りの形相で、廊下に転がったボーン・ゴーレムの一体を掴み上げ、グレンに向けて投げつけた。それに即座に反応したグレンが、驚きながらも魔力が符呪された拳を突き出したことで、激突したボーン・ゴーレムの身体は粉碎された。

「てめえなにしゃがるレイ！危ねえだろうが！」

「危ねえのはテメエだこの野郎！なに人を敵のど真ん中に投げ込んでんだ！それでも仲間か！」

横から襲いかかってきたボーン・ゴーレムの斬撃をひらりと躲し、カウンターでロリコンスラツシユをお見舞いして、怯んだところを頭を掴み上げてグレンに投げつけるレイ。

「仲間一人置いて敵前逃亡する奴が言うな！」

飛んできたそれをグレンはもう一度拳で粉碎。

「そういえば前にお前俺の足引つ掛けて囿にしたこともあつたよな？
転ばされたから逃げるのマジでギリギリだったんだぞ！」

「てめえだつて俺を路地裏に突き飛ばして逃げたことがあんだろうが！狭くて囲まれはしねえが、逃げ場もねえつてんで全員相手させられたんだぞ！」

迫ってくるゴーレム達の無数の剣をなんなく躲しながら、レイが掴んで投げつけたボーン・ゴーレムをグレンが粉碎。

近くにいたのを掴んで投げては粉碎。斬撃を避けて、掴んで、投げて、粉碎。

投げて、投げて、投げて、粉碎、粉碎、粉碎。

二人は互いに罵詈雑言を交わしながらの喧嘩に巻き込まれるような形でボーン・ゴーレムの数が減っていく。

（す、すごい……かなり荒っぽいけど二人共息ピッタリに対応してる。ひよつとしてこのやり取りは敵の注意をそらすための陽動なんじゃ……）

そんな感じでシステイーナが予想していたが……

「……なんか思い出すだけでイライラしてきた」

「……奇遇だな。俺も無性に腹が立ってきたところだ」

「ちよつと表出ろやコラ。あの時の落とし前着けんぞ」

（もう馬鹿どもはほつとこ）

廊下の最奥に到達したシステイーナは息を整えながら、早速、黒魔【ゲイル・ブロウ】の魔術式と呪文を頭に思い浮かべ、呪文の改変に取りかかった。

遙か廊下の先での二人のアホなやり取り見てからなのか、システイーナは焦燥と恐怖でパニック寸前だった自身の脆い心を意外と簡単に御すことができた。

「先生、できた！」

システイーナが叫んだ瞬間、グレンとレイは待っていましたがと言わんばかりに喧嘩を中断して踵を返し、システイーナの方に駆け出していた。

当然、ボーン・ゴーレムの群れがその後を追って来る。

「何節詠唱だ!？」

「三節です！」

「よし、俺の合図に合わせて唱え始めろ！奴らめがけてぶちかませ！」

グレン達が駆ける。駆ける。

ゴーレム達が迫る。迫る。

「今だ、やれ！」

「《拒み止めよ・嵐の壁よ・その下肢に安らぎを》！」

グレン達が跳躍する。システイーナのかたわらを転がりながら通り過ぎる（その際レイは邪魔になったロリコンストラツシュを近くにあつたごみ箱にシュート）。

その瞬間、呪文が完成。システイーナの両手から爆発的な風が生まれた。

それは「ゲイル・ブロウ」のような局所に集中する突風ではない。廊下全体を埋め尽くすような、広範囲にわたって吹き抜ける指向性の嵐だった。

命名するならば、黒魔改【ストーム・ウォール】。システイーナから遙か廊下の彼方に向かって駆け流れる風の壁は迫り来るゴーレム達の速度を劇的に落とした。

だが――

「だ、だめ……完全には足止めできない……ごめんなさい、先生……ッ！」

即興ゆえ威力が足りなかったのか。ゴーレム達は気流に逆らって少しずつにじり寄ってくる。連中がここまで辿り着くのは時間の問

題だ。システイーナは脂汗を垂らした。

「いいや、上出来だ。助かる」

だが、荒い息をつきながらグレンが立ち上がった。

ぴん、と親指で小さな結晶のようなものを頭上に弾き飛ばし、落ちてくるそれを横に薙いだ左手で掴み取る。

そして、グレンはその結晶を握り込んだ左拳に右掌を、ぱん、と合わせて。

「俺が今からやる魔術は何かの片手間に唱えるのは無理なんでね……しばらくそのまま耐えてろ」

一呼吸置いて、グレンは目を閉じ、呪文を唱え始めた。

「《我は神を斬獲せし者・我は始原の祖と終を知る者・——……》」

「……え？　嘘……？　その呪文は……」

グレンは魔力を高めながら、意識を集中させ、一句一句呪文を紡いでいく。

唱えた呪文に応じて、グレンの左拳を中心に、リング状の円法陣が三つ、縦、横、水平に噛み合うように形成され、それぞれが徐々に速度を上げながら回転を始めた。

「《其は摂理の円環へと帰還せよ・五素よりなりし物は五素に・象と理を紡ぐ縁は乖離すべし・いざ森羅の万象は須く此処に散滅せよ・遙かな虚無の果てに》——ッ！」

都合七節にも渡って紡がれた、渾身の呪文が完成する。

「ええいーぶっ飛ば、有象無象！　黒魔改！　イクステインクシオン・レイ」

——ッ！」

グレンが前方に左掌を開いて突き出す。

左掌を中心に高速回転していたリング状の円法陣が前方に拡大拡散しながら展開。

次の瞬間、その三つ並んだリングの中心を貫くように発生した巨大な光の衝撃波が、前方に突き出されたグレンの左掌から放たれ、廊下の遙か向こうまで一直線に駆け抜けた。

そして——殲滅。その射線状にあった物……ボーン・ゴーレムの群れはおろか、天井や壁まで、光の波動は抉り取るように全てを呑み込み、

一瞬で粉みじんに消滅させていた。

やがて、視界を白熱させていた眩い光が、ゆっくり収まっていく。

「……………え？」

あつけない幕切れにシステイーナが忘我する。天井は完全になくなり上階の天井が見える。右手の壁も消滅し、外の風景が丸見えだ。まるで長大な円柱を廊下から切り出したかのようなその光景。ただ、吹きさらしになった廊下に風が吹いていた。

黒魔改「イクステインクシヨン・レイ」。対象を問答無用で根源素にまで分解消滅させる術である。個人で詠唱する術の中では最高峰の威力を誇る呪文であり——二百年前の『魔導大戦』で、セリカIIアルフォネアが邪神の眷属を殺すために編み出した、限りなく固有魔術に近い神殺しの術だ。

グレンはこの呪文を詠唱する際、何らかの魔術触媒を使ったようだが……………それでも詠唱できるだけで掛け値なしの賞賛と驚愕に値することである。

「す、凄い……………こんな、高等呪文を……………」

「あーあ、こりや修繕費かなりかかるぞ」

廊下の有様を一望しながら、レイは床に転がっていたボーン・ゴレムの剣を拾い上げる。

「い、いささかオーバーキルだが、俺にやこれしかねーんだよな……………ご、ほ……………っ！」

その時、グレンが血を吐いて頽れた。

「先生!？」

グレンの異変に、システイーナは慌ててグレンの元へ駆け寄り、その身体に触れる。全身に浮かぶ冷や汗、触って思わずぞっとするほどグレンの身体は冷たかった。

「mana欠乏症ってやつか……………それしかないからって無茶したな」

mana欠乏症とは極端に魔力を消耗した時に起こるショック症状だ。魔力の源は肉体に内包するmana。manaの本質とはすなわち生命力だ。これを急激に消耗すれば当然、命に関わる。魔術とは自らの命と引き換えに振るう諸刃の剣なのである。

「まあ…分不相応な術を、裏技で無理矢理使っちゃったからな…」

いつもの軽口はどこへやら。グレンは苦しそうに顔を歪めていた。マナ欠乏症を差し引いてもグレンの状態はひどい。全身、傷だらけの血まみれだった。致命傷はないが、傷の数はかなり多い。このまま血を流し続けるのは——まずい。

「だ、大丈夫なんですか!?!」

「これが大丈夫に見えたら病院に行け……」

減らず口にもキレがない。

グレンの容体を見てシステイーナは白魔【ライフ・アップ】で回復を図るが、ルミアと違って肉体と精神を扱う白魔術はそれほど得意ではないので回復が思うようにいかない。

「バカ。やってる場合か……急いでここを離れないと……」

「……つつても、もう遅いみたいだぜ」

かつん、と。

破壊の傷痕が刻まれた廊下に靴音が響いた。

「イクステインクシオン・レイ」まで使えるとはな。少々見くびっていたようだ」

廊下の向こう側から姿を現したのは——

ダークコートの男——レイクと呼ばれていた男だった。

その背後には五本の剣が浮いている。

「あー、もう、浮いている剣ってだけで嫌な予感がするよなあ……」

「グレン||レーダス。前調査では第三階段にしか過ぎない三流魔術師と聞いていたが……いや、一番の誤算は貴様か」

レイクはレイを一瞥する。

「レイ||フェルム。どれだけ調査してもその名に該当する魔術師の情報は何一つ手に入らなかった。巧妙に情報を隠してるのだと最初は思っていたが、先程までの戦いでまったく魔術を使ってる様子はないかった……いや、使わないんじゃないが正しいか」

「……え?」

レイクの言葉を聞いて、システイーナの動きが固まった。

「ふーん……鋭いな」

当の本人は何の動揺もせず？ 気に自らのお腹をボリボリとかいていた。

「え、どういう事？ レイ先生、魔術が使えない……………わ、わけが分からないわー！」

「そのまんまの意味だ。俺は魔術師じゃねえよ」

「えええええ——!?!」

このタイミングで明かされた衝撃的な事実には、システイーナは思わず驚愕の声を上げる。

そう言えばこのレイという男が魔術を使う瞬間を一度も見たことがなかった。

「ぐ、グレン先生は知ってたんですか!?!」

「ああ、こいつとは腐れ縁みてえなもんだからな」

「っーかなんだ白髪娘。ひよつとしてお前も魔術が使えない人間を見下すタイプの奴か?」

「ち、違います！ 魔術を学ぶ学院に魔術師じゃない人が講師として来てたなんて予想外で——」

「俺だつてこんなところ来るつもりなんかなかったんだよ。けどな、このニートを見張るようになって依頼を受ける羽目になっちゃったんだからしょうがないって……………まあこの話はあとでするか」

システイーナにそう言うと、レイはレイクに向き直る。

「…で、テメエらクソ蟲どもが家畜以下と見下している一般人にてこずらされて腹が立ったか?」

「私は他の連中とは違う。魔術を使えない者たちの中にも魔導大戦の剣姫や帝国軍の亡き東方剣士といった相当な手練れたちがいたことを知っている。彼らは敬意を表するに値する。最も、貴様はそれほどの実力があるのかは知らんがな」

「あつそ——で? しゃれこうべ共の次はなんだ?」

「しれたこと。貴様らを私自身の手で始末する」

レイとレイクが会話してる際に、グレンはシステイーナに耳打ちする。

「おい、白猫。魔力に余裕は? お前はあの剣をデイスペルできそうか

？」

システイーナはレイクの背後に浮かぶ剣を見る。見ただけで大量の魔力が漲っているのがわかる。当然のように魔力増幅回路が組み込まれているのだろう。

「私が残りの魔力全部使っても多分少し足りない：と思う。そもそも【デイスペル・フォース】を唱えさせてくれる隙がなさそう……」

「そうか。ならレイが持つてる剣に【ウエポン・エンチャント】かけてやってくれ」

「え!?戦わせる気なんですか!?!」

「お前の言いたいことは分かる。だがあいつはそんなじゃそこのやつと一緒に考えるな」

「わ、わかりました」

グレンに言われた通り、システイーナはレイが手にしているボーン・ゴーレムの剣に【ウエポン・エンチャント】を符呪する。

「これでよし。あとは——」

とん、と、グレンがシステイーナを壁に向かって突き飛ばす。正確には、つい先ほどまで壁があったところに向けて。

グレンの【イクステインクション・レイ】で吹きさらしになった壁の外は、当然。

「え? ……わ、きやあああああ!?!」

四階もの高さから突然突き落とされたシステイーナが悲鳴を上げる。

なんだか呪文と草木を掠める音に混じって恨み言が聞こえた気がするが、気がするだけだとグレンはすっぱりさっぱり聞こえなかったことにした。

「……逃げたか」

「さすがに、お前相手じゃ庇いながらはキツそうなんでね。で、なんだ?その露骨な剣の魔導器は俺対策か?」

「知れたこと。貴様は魔術の起動を封殺できる——そんな術があるのだろうか?」

「あら…やっぱりバレてます?」

どこで見ていた？などと野暮なことは聞かない。遠見の魔術、使い魔との視覚同調、残留思念の読み取り……魔術師にとって情報を収集する手段など、いくらでもある。

「あのジンが何もできずに一方的にやられるなどそれしか考えられん。加えてボーン・ゴーレム達に対して貴様はその妙な術を使わなかった。つまりは魔術起動のみを封じる特殊な術、ということだ。ならば、最初から術を起動しておけば問題はない」

「ジン？ウオツカかテキーラの親戚か？」

「誰が酒の話をした。命令違反した上に今もごみ箱でのびてるやつのことだ……とにかく、行くぞ」

レイクが指を打ち鳴らすと、背後に浮かぶ剣が一斉に二人に切っ先をむけた。

そして、二人目掛けて飛来し、真っ直ぐ踊りかかる。

グレンの前に素早く割って入ったレイが三本の剣を剣で受け止め防ぐ。

残りの二本はレイを避けグレンに襲い掛かる。

「ちっ……っちは手動式か」

グレンがシステイーナの黒魔「ウェポン・エンチャント」で強化された拳でその剣を受け止め、違和感に気づく。

レイが相手している三本の剣は、達人の技量に匹敵する速さと鋭さがあるが、その動きは単調で無機的。

それに対しグレンが受け止めた二本の剣は、技の鋭さそのものは三本の剣にやや劣るも、まるで意思を持ったように違った動きを見せていた。

「なるほどな……両方か？」

そう。レイクの操る五本の剣は、術者の自由意志で自在に動かせる二本の剣と、手練れの剣士の技が記録され自動で敵を仕留める三本の剣で成り立っている。

「ご名答だ。しよせん手練れの剣士の技を模した所で自動化された剣技は死んでいる。五本揃えた所で真の達人には通用せん。かと言って五本全てを私が操作すれば、しよせん私は、魔術師、やはり真の達

人には通用せん。私はこれまで何十人もの騎士や魔術師を暗殺し、三本の自動剣と二本の手動剣の組み合わせが最も強い、と結論した」
「そおゆうことかよー！」

三本の剣を弾き飛ばしたレイはレイクへと駆け出していき、猛獣の突進の如き勢いと共に突きを放つ。しかしレイクは数々の修羅場をくぐり抜けた魔術師でありその攻撃に対する反応は早かった。

「《光の障壁よ》」

レイクは冷や汗一つかくことなく冷静に対抗呪文を唱え、魔力障壁で突きを防ぐ。

僅かにピシツと障壁にひびが入ったことに驚くレイクだったが、さかさ指を打ち鳴らして五本の剣を操作する。

頭上から飛来する五本の剣が次々と床に突き立っていく。レイは跳び下がり、剣の追撃から逃れる。

「《紅蓮の獅子よ・憤怒のままに——……》」

「《霧散せよ》」

グレンが隙を見て黒魔【ブレイズ・バースト】を唱えようとするがグレンは三節詠唱までしか出来ない。レイクの一節詠唱で紡がれる対抗呪文【トライ・バニツシュ】に打ち消される。

「く、そ」

「遅いぞ、グレン！ レーダス。呪文の撃ち合いにおいて三節詠唱が一節詠唱に勝てるわけあるまい。【ブレイズ・バースト】とはこう唱えるのだ」

冷酷な目で歯噛みするグレンの姿を捉え、レイクが呪文を唱える。

「《炎獅子——》」

一節詠唱による黒魔【ブレイズ・バースト】の超高速起動。これができるば、たった一人で一軍とも渡り合えるとされる高等技術である。

この魔術師が三節でしか魔術を起動できないことを早々に看破していたレイクは、この一手で勝負を決めてしまい、あとはレイを倒そうと考えていた——が。

「どこを向いてんだおらあ！」

「！」

横つ跳びに五本の剣の包囲網から抜け出したレイは槍を投擲するかのようになり、レイクの心臓めがけて剣を一直線に投げた。

レイクは起動しかけていた「ブレイズ・バースト」の魔術を解除し、跳び下がる。グレンはその隙を逃さず、レイクに向かって突進し、三節詠唱を開始した。

「《猛き雷帝よ・極光の閃槍以て——」

「ち——」

レイクの掃除屋としての鋭敏な判断力は瞬時に二人の狙いを看破した。

「・刺し穿て——ッ！」

跳び下がった隙を狙い打つかのように、グレンの呪文が完成する。

黒魔【ライトニング・ピース】。グレンの指先から一条の電光が迸り、レイクの身体を中心目掛けて真っ直ぐ突き進む。

が——レイクがとっさに操作した二本の手動剣が辛うじて間に合い、レイクの眼前で交差し、それを弾いた。

「ち——通らねえか」

舌打ちするグレンは、壁に突き刺さった剣を抜いてレイに投げ渡す。

「なにやってんだよグレン。お前の雷槍全然貫通してねえじゃねえか」

「あの剣に【トライ・レジスト】まで符呪されてたみてえだぞ。やーれやれ、周到なこった。最悪一本は取れると思ったんだがな」

「……貴様ら」

三本の自動剣も呼び戻しながらレイクは内心、今の二人の立ち回りに舌を巻いていた。

もしあのまま【ブレイズ・バースト】を撃てばグレンを消滅させることはできても、自分は心臓を剣で貫かれて死ぬ。

かと言って、レイが投擲した剣を避け、剣の魔導器でグレンを迎え撃とうとすれば、今度はグレンの【ライトニング・ピース】にレイクが撃たれる。

今思えば、最初にグレンが唱えた無様な三節【ブレイズ・バースト】も、恐らくこの『誘い』のための布石だろう。

あの一瞬で咄嗟にレイクに突きつけた死の二択。

少しでもタイミングを過ぎてば、絶体絶命の不利に追い込まれるというのに、それをやってしまえる胆力と判断力と連携力。

「貴様ら、一体何者だ？」

片方はマナ欠乏症で死にかけているのを除いても、魔力容量平凡、最速詠唱節数三節の三流魔術師。もう片方は魔術の才がないどころか行使もできないただの人間。

どちらも取るに足らない者たちの筈だったのだが——下手をすれば逆に狩られかねない『強敵』だ。

「お前に言う義理はないね」

「……………まあ、いい。貴様らの実力は認めるが、二度目は通用せんぞ？」

レイクは五本の剣を浮かせ態勢を立て直すと、身構える。

「……………おい、グレン」

「ん？」

再び場に沈黙が降りた時、レイが隣のグレンにしか聞こえない声で話しかける。

「このままじゃジリ貧だ。今はどうにかなってるが、決定打に欠ける。早いとこケリをつけるぞ」

「つつても、どうするんだよ」

「決まってるんだろ。いつものやつだ」

「——ああ、いつものやつか」

「それじゃ、終わりにしようぜ」

先にレイは重心を低くし、剣を腰に溜めて駆け出した。

「馬鹿め、血迷ったか！」

勝利を確信したレイクが、レイに刃を向ける。

「——死ねッ！」

「悪いが、死ぬのはテメエの方だ」

正面、左右、上下から飛来する剣がレイの一振りで一斉に弾かれた。「なにっ——!?!」

「テメエの剣は軽すぎる。重みがまったくねエ。そんな空っぽの太刀筋じゃあ効かねエよ」

「何を訳の分からないことを。いいだろう、まずは貴様から血祭りにあげてやる——!」

レイクが腕を振った。それに応じ、今度は二本の手動剣が先に体勢を立て直し、肉薄してくる。

手動剣の動きは素人ものではない。超、とまではいかないだろうが一流の剣技だ。遠隔操作でこの動きができるということは、レイク自身も相当の剣の使い手のはずだ。レイクに剣を持たせれば、並みの剣士ならば瞬殺されるだろう。

だが——

「もう当たらねエよ。空っぽの剣技なんぞに負ける気はしねエ」

レイは背後から二本の斬撃を背後を見ずに躲し、左、右、正面からの新たな三閃を受け、回避し、弾き、流す。まるで自動剣に記録されている剣技の持ち主であった虚像を相手に行っているようだ。

「馬鹿な!」

レイクはレイの動きに驚かされていた。レイと切り結ぶ三本の剣は腐つても達人の剣術だ。それを、当たり前のように避けていく。型がなく、荒々しいが洗練された無駄のない動き。流派はないが完成されていた。

そして、僅か一分でこの勝負は決された。

「——獲ったアツ!!」

パキンッ!!という激しい破碎音がする。レイは雄たけびを上げて横なぎを放つと、数秒遅れて見事な太刀筋で切り裂かれた自動剣三本が廊下へと落下した。

既にレイはレイクの元へ駆け出している。

「後ろががら空きだぞ!」

背後から二本の手動剣がレイを襲うが、レイはそれを気にも止めない。

「——均衡保ちて・零に帰せ」——!!」

「なにっ!？」

グレンから放たれた淡い魔力の輝きが、魔術によって駆動する魔剣とぶつかって白熱する。レイが戦っているこの隙にグレンが完成させたグレンの「デイスベル・フォース」によってレイクの剣はただの剣となりその場に静かな音を立て落ちた。

「おおおおおお——ッ——」

レイが剣を大上段に構えながら迫ってくる。

「くッ・《光の障壁》——」

「遅えッ!」

レイクが身を守るために咄嗟に「フォース・シールド」を目の前に張ろうとするも、グレンの持つ愚者のアルカナ——広範囲の魔術起動を完全封殺する固有魔術【愚者の世界】によって不発に終わってしまう。

「……これで！終エだ!!!」

レイは袈裟斬りに渾身の力で振り切った。

ぴしゃ、と滴る緋色が床を叩いた。

「……ふん、見事だ」

レイクは微動だにしない。直立不動のまま、自分を斬った者に賞賛を送った。

不意打ちが卑怯だとかそんなことを言うはずもない。魔術師は騎士じゃない。魔術師の戦いは一対二だろうが一対三だろうが、あらゆる手段と策謀を尽くして相手を陥れ、出し抜き、そして最後に立っていた者こそ正義で強者なのだから。

「そうか……思い出したぞ」

レイクは何かを納得したようにつぶやいた。

「つい最近まで帝国宮廷魔導士団に二人、凄腕の魔術師殺しがいたそうだ。いかなる術理を用いたのか与り知らぬが、魔術を封殺する魔術をもって、反社会的な外道魔術師達を一方的に殺して廻った帝国子飼

いの暗殺者」

「…」

「活動期間はおよそ三年。その間に始末した達人級の外道魔術師の数は明らかに増えていて、合わせるだけでも合わせて百人。その誰もが敗れる姿など想像もつかなかった凄腕ばかり。裏の魔術師達の誰もが恐れた魔術師殺し、コードネームは——『愚者』と『悪魔』。ペアネームは確か……『ドSⅡサディスト』」

「いや違うし」

「グレンとレイの容赦ない蹴りが炸裂し、レイクは今度こそ息を引き取った。」

「なんだよドSⅡサディストって？つか誰だそんな不名誉なネームつけたのは？第一こいつとペアにされるなんざ真っ平御免被るぜ」

「俺も御免だぜ」

「あ、あれ？もう終わったの？」

「せっかく背後の廊下の先、遙か向こうに辿り着いたところ悪いが、システイナは少々遅かったようだった。」

そして事件は終わりを迎え……………

レイクを打倒したグレンとレイ。しかし、グレンの魔力は底を尽きかけていた。

「ク、クソツ……………こんなときに」

「グレン先生!？」

「お、おいグレン!」

膝をついて息を荒げるグレンに駆け寄るレイとシステイーナ。

「早く……………行かねえといかねえのに」

「先生!」

グレンは無理やり起き上がろうとするが、すぐに倒れ込んでしまう。

「おいグレン。予備の魔晶石はあるか？」

「……………ない……………さっきので最後だった……………こんなことになるって知ってたから……………」

「だ、だったら私のをを使って!このペンダントの魔晶石に普段から少しずつ蓄えてあった予備魔力がまだ残っているから」

そう言って、システイーナは手に握っていた結晶のペンダントをグレンに見せる。

「……………馬鹿……………ただでさえ……………追撃が来るかもしれねえんだ……………お前が使え」

「その前に貴方が死んじゃうわよ!」

「だ……………が……………」

「いいからはよ飲め」

「ぐぼっ!？」

しびれを切らしたレイがシステイーナから魔晶石を奪い、グレンの喉奥に突っ込んだ。魔晶石に込められた魔力が流れ込んできて、マナ欠乏症の苦痛が徐々に和らいでいく。

「ゲホツゲホツ……………お前、一応病人だからもつと丁重に扱えよ」

「ただでさえクソ雑魚のくせに意地を張るなよ。クソ雑魚のくせに」

「二度も言うな……………」

相変わらすのやりとりをしながら、グレンがよろよろと立ち上がる。

「……んじや、ルミアを助けに行くとするか」

「つつても、まだどこにいるのかわからねえぞ」

「とりあえずゴミ箱でのびてる変態から居場所を吐かせて——」

その時ポケットに入れていた通信用魔導器が鳴る。

グレンはズボンから宝石の片割れにも見えるそれを取りだして、魔力を流した。

『グレンか!?今どうしている!?!』

「あーセリカ、俺だ。ついさつき三人目をレイと俺で排除したところだ」

『……そうか』

消沈したような声が聞こえてくる。二人が何をしたのか察しがついているのだろう。

『それで、お前に頼まれた件だが、点呼を取ってみたものの不自然に姿を消したような者はひとりもいなかった。だが単純に結界の術式の情報も横流しして後は実行犯に任せるって手もある。まだ楽観視はできない』

「……そうか」

『それと、まだ時間はかかるだろうが、軍の奴らがようやく腰を上げてくれたよ。今宮廷魔導師団のそちらの支部が対テロ用の部隊を編成して向かわせてる。私もそっちへ行ければよかったのだが、やはり学院の法陣は潰されてたよ。全く、あれ相当の金と時間と素材が必要なんだぞ……』

セリカが愚痴らしいことを言うが、テロリストに言っても無駄だとすぐに言葉を止める。

『ああ、それと妙なことがわかったんだが。帝都のモノリス型魔導演算機から魔力回線を通してそちらの結界を確認したんだが、外からは特別な術式を刻むなり呪文を唱えれば入れるが、内部から外には一切出られない仕様になっている』

「は？なんだそりや？……それってつまり、入る事は出来ても脱出は不

可能ってことか？」

『そうだ。学院の結界を弄ったところから相当空間系魔術に通じている奴だというのに、この欠陥だ。一体何を考えてるのやら……』

「つまり、今回のこれは自爆テロか？」

『ゼロではないだろうが、それだったら人質を取る意味がない。内側から出られないのなら抵抗したところで無意味になるからな』

「だよな……」

セリカとの会話から、疑問がいくつも浮上する。

——結界で外に出ることは出来ない。じゃあ奴らは一体どうやって出るつもりなのか？

——学院の結界をいつ改変したのか？

——敵は何故今攻撃を仕掛けてこない？

全くわからず途方に暮れようとしたその時。

「つーか、その転送方陣で逃げるんじゃないか？」

ゴミ箱からのびているジンを引きずり出し、目を覚まさせようと頬を叩いていたレイが声を上げる。

『……今のはどういう意味だレイ？』

「いや、戦場じゃ使えるもんがあったら敵が持ってたもん奪い取って活用するのが常だからよ。一瞬で遠くに移動できる便利なもんがあるならそれで遠くに逃げることでだってできるんじゃないか？」

「つー…そうか。コートの中の時はあれだけ素早かったのに、ここに来て敵の対応が遅いのは今も転送法陣の座標の書き換えをしている真つ最中だからか」

『それこそまさかだ。いかに結界の設定を変えた下手人がその手の天才だとしてもそれを実行するのにどんなに周到にモノを用意しても半日はかかるぞ』

「俺達が来る以前から進めてたんならもういつ半日経ったっておかしくないだろうが」

それだけ言っただけでグレンは通信を切る。

レイの一言から、相手のシナリオが浮かんできた。

さすがに具体的な犯人まではわからないが、あながち自分たちの考

えも間違いではないだろう。

「転送塔……行ってみる価値は十分にあるな」

「まずはそこへ行ってみるか」

「そうだな——」

方針を決め、行動しようとした矢先、

「その必要はありませんよ」

「「ッ!?!」」

あさつての方角から、全く予想もしていなかった第三者の声が響き、三人して肩を跳ねさせる。

背後の廊下の先、遙か向こうに見覚えのある人影に三人は驚きを隠せない。

………遡ること数分前。

レイクによって連れ出されたルミアは校舎から中庭へ出ると、並木道を抜けて真っ直ぐ白亜の塔へと向かわされた。学院と帝都を繋ぐ転送法陣のある場所である転送塔だ。

「これは………」

普段は遠目から見ただけの転送塔の周囲に、本来あるべきではないものがあつた。有事の際に自動で起動し、侵入者を迎撃するガーディアン・ゴーレムだ。それらが何故か塔を守護するように徘徊している。

侵入者を撃退するよう設定されているはずのゴーレムが、しかしレイクを認識しても動かない。学院内のセキュリティが完全に敵方の手に落ちていることを示していた。

ゴーレムの防衛網を素通りし、塔内に入ると螺旋階段を上っていく。長い長い石階段を上り終えるとルミアとレイクを最上階の大広間、転送法陣のある部屋が迎えた。

レイクが開き戸を開け視線で入れと促す。大人しく従って部屋に入るが、中は薄暗くよく見えない。背後でパターンと音を立てて開き戸が閉められた。どうやらレイクの役目はルミアをここまで案内する

ことだったらしい。

監視の目がなくなりルミアが僅かに気を緩めた直後、薄暗闇の中からこつこつと硬い靴音が響いてきた。

「だ、誰ですか……？」

「僕ですよ、ルミアさん」

暗闇に慣れ始めたルミアの視界にぼんやりと男の姿が浮かび上がる。二十代半ばぐらいの優男。髪色は金で顔立ちは涼やかに整っている。暗碧の深い瞳を持つ青年であった。

「うそ……ヒューイ先生がどうして……!？」

暗がりから現れた青年をルミアはよく見知っていた。何を隠そうこの男、一ヶ月前まで二組の担当講師として教鞭を執っていたヒューイルイセンその人である。

表向きには一身上の都合で退職、真実は突然の失踪からの行方不明となっていたが……

「すみませんがルミアさん、大人しく僕に従ってもらえますか。あまり手荒な真似はしたくありませんので」

「ヒューイ先生……」

悔恨を滲ませつつもヒューイはルミアを部屋の中央に設えられた転送法陣の上に立たせる。手早くルミアに魔術の封印を施し、そして目を瞞るほどの手並みで法陣の改変と構築を始めた。前もって用意しておいた高価な触媒や道具を用いて作業に没頭するヒューイ。ルミアは法陣の中心で蹲ってしばらくその様子を見守っていたが、やがて話を切り出す。

「どうしてなんですか、ヒューイ先生。生徒達からも慕われていた貴方がどうしてこんなことをするんですか？」

「……そうですね、ここまで来た時点でルミアさんにはもう何もできない。せめてもの誠意として話してもいいでしょう」

ルミアを一瞥し、作業を続行しながらヒューイは語る。

「我々の目的はただ一つ、ルミアさんを誘拐することです。そのために僕は今日まで講師として潜伏し、学院の結界とセキュリティを完璧に把握。転送法陣の書き換えに必要な素材や道具を密かに蓄え、講師

と教授がいなくなる今日この時を狙って計画を実行したのです」

「私を誘拐……でも、それだとおかしいです。私が学院に来たのは一年前。ヒューイ先生は十年以上も前から学院に勤めているじゃないですか」

「ええ、そうですね。厳密には、僕の役目は将来的に入学するかもしれない王族、もしくはは政府要人の身内を自爆テロで殺害するために用意されていた人間爆弾です」

「——!?!」

明かされる衝撃の事実ルミアは言葉を失う。つい最近まで生徒達から慕われていた人気講師が、その実十年以上前から仕組まれていた人間爆弾だったなんて到底受け入れられないし、こんなことを考えつく人間の正気が疑われる。

「ですがルミアさんが入学したことで少々事情が変わりましたね……：貴方は少々特殊な立場なので生け捕りになりました。ですので転送法陣の転送先を改変し——」

「ルミアを奴らのところに転送した後、自分は魂を起爆剤にこの学院を生徒諸共自爆するってところか?」

ヒューイに割って入り声を発した人物がいた。

入り口にもたれかかっているその男を見た二人は驚きを隠せない。

「…アイザ君!」

「……まさか貴方でしたか…」

しかしアイザの姿は二人が知っているアイザとは違っていた。

要所要所を金属板やリベット、護りの刻印ルーンなどで補強されており、明らかに魔術戦用のローブを羽織っており、普段より冷淡さを色濃く感じさせ、ナイフのように触れてはならない致命的な鋭さでヒューイの事を見据えていた。

「その黒いコート…なるほど。帝国宮廷魔導士でしたか…」

「正確には帝国保安局情報調査室の諜報員だ。俺はそのルミアを護衛する任務を彼女の肉親から受けてる」

「えっ………?」

アイザの言葉を聞いて、ルミアは固まる。

追放された日、自分に冷たい目を向けた肉親が自分の為に護衛をつけていた——ルミアはその事実に驚きを隠せなかった。

「その話は後だ……」一応警告しておくが、ヒューイールイセン。無駄な抵抗は辞めて大人しく投降しろ」

「一応貴方の講師でもあつたんですがもう呼び捨てですか……」

「テロリストに加担した時点であんたはもう俺たちの講師でもなんではない。もう一度言う。今すぐに投降しろ。あんたじゃ俺には勝てない」

「ええ、私じゃあなたには傷一つつけられないでしょう。ただ……転送方陣の書き換えは終わっていても、この魔術は起動済みです」

そう言うヒューイとルミアの周りに巨大な魔法陣が出現した

「白魔儀《サクリファイズ》か……厄介だな」

「ええ、貴方にこれを解除できますか？」

書き込まれた五層構造からなる白魔儀「サクリファイズ」は通常なら一層ずつ解呪していくしかない。グレンが来ていれば魔力が足りなくても迷いなく自身の血を簡単な魔力触媒に黒魔「ブラッド・キャタライズ」で解呪術式を書き込み、黒魔儀「イレイズ」で儀式魔法陣を解呪するだろう。

「ああ、もちろん僕を殺すのは無しですよ。すぐに魔術が発動してしまうので」

ヒューイは余裕そうにつぶやく。今から死のうとしているのに……

「そんな……逃げて……アイザ君……貴方だけでも……」

ルミアがヒューイの言葉を聞き、アイザに懇願するように叫ぶが、アイザは部屋から出ない。

「……だから最初に無駄な抵抗は辞めろと言ったんだ」

アイザは右手にペンナイフを握り、ルミアを囲う法陣に向かって大振りに振るう。すると銀色に輝く小さな刃先がバターをきるように易々と魔力でできた障壁を切り裂いた。

「え？」

「なっ!?!」

一層目の障壁をあつさりと砕き、二層目、三層目、四層目と続けぎ

まにペンナイフを振るい、硝子が砕け散るような音と共に障壁を突破していく。

そして、最後の障壁を切り裂き、呆けたルミアを囲んでいた魔法陣が消えていった。

「そんな馬鹿な……その法陣は転送用でもあると同時に強力な結界でもあるんです。無理矢理壊そうものならアルフォネア教授の神殺しの術でもない限り……」

「それは魔術に対して魔術で対抗するのが前提の話だ。相手が常に自分と同じ土俵で勝負を挑んでくると思ったら足元をすくわれるぞ」

いまだ目を丸くしているルミアの拘束を手早く解くアイザが手に持つペンナイフの刃を見て、ヒューイは気づいた。

「まさか……そのナイフの刃は真銀（ミスリル）製ですか？」

「ああ。混じりけなしの本物だ」

「……成程。真銀のような魔力遮断物質なら魔力でできた強力な結界も軽々と切り裂くことができるでしょう。それをペンナイフにしてしまうのはどうかと思いますが……」

「学院に刀剣で持ってきたら嫌でも目立ってしまうだろう？」

「まあ、確かにそうですが……」

ツツコミしなければならぬ部分が色々あるが……

アイザはヒューイを拘束しようと【マジック・ロープ】で動きを封じ、【スペル・シール】で魔術を封じる。

その間ヒューイに抵抗の様子は無い。ただ諦めたのだろう。

「…僕の負け…ですか……不思議ですね…計画は頓挫したと言うのに…生徒達が無事でほっとしている自分があるんです……僕は、どうすれば良かったんでしょうか？」

「知るか」

ヒューイからの問いをアイザはバツサリと切り捨てた。

「同情はするが共感はしない。自分の生き死にを他人に委ねた上に、間違ってると思っても踏みとどまろうとしなかったのはあんた自身だ。自分の不幸ひきずって苦しむくらいなら、自分を変えることに苦しめ」

「手厳しいですね。でもそうですね。確かに、その通りだ。生徒に教わるなんて教師、失格ですね」

「スリープ・サウンド」でを発動させてヒューイの意識と動きを封じる。

「さて、戻るぞ」

「……………あの、アイザ君」

捕えたヒューイをつれてグレンたちがいるところに戻ろうとするアイザに、ルミアは言葉を詰まらせる。

「さっきの話本当なの？あの人に私を守るように言われたって……………」

「事実だ。あの方がお前の事を本当に愛していなかったら俺にこの仕事をやらせない」

「仕事……………」

淡白な物言いにルミアは微かな寂寥を覚える。

「三年前のあの時も、仕事だから助けてくれたの？」

「いや、あの時は別の仕事でたまたまあの場に居合わせたただけだ。あの時はお前がどこの誰かなんて知らなかった」

「……………そうなんだ」

今から三年前、母親に捨てられフィーベル家に身を寄せ始めた頃に起きた事件。屋敷を飛び出し森で泣いていたところを励まされ、更にシステイーナと間違われて魔術師達の手で誘拐されかけたところを救い出してくれたのは他ならぬこの男とグレン＝レーダスだ。命の恩人である二人を忘れたことなど片時もやはりはしない。

たとえ男にとって仕事の一環であつたとしても、ルミアが救われたことに変わりはない。

「ずっとあの時のお礼が言いたかった。アイザ君の言葉があつたから、私は今もこうして前を向いて歩けてるの」

訥々と紡がれるルミアの想い。今日この日まで胸の内に秘めていた感謝の言葉が自然と溢れ出す。

混じり気のない純粹な感謝の念を向けられ、アイザは動揺を誤魔化すように頭を掻く。

「……大袈裟すぎだ」

「あれ？アイザ君もしかして照れてる？」

「照れてない」

「照れてるでしょ？」

普段見れないアイザの反応に、ルミアは物珍しそうにする。

「それより、さっさとここを出るぞ」

先導して部屋を出るアイザの背中を、ルミアはにこやかな笑みを浮かべながらちよこちよここと子犬のようについていった。

そして時間は現在に戻る。

「ルミアあ……私、わたし……！」

「よく頑張ったねシステイ。私のせいで、ごめんね」

「ううん、私こそあの時なにもできなくてごめん！」

泣き崩れる親友に寄り添い、ルミアは震える背中を優しく抱き締めた。

しばらく廊下に少女の嗚咽と慰める声が響く。

男どもはそんな二人の邪魔にならないよう脇にいた。

「しっかし、お前……帝国保安局情報調査室の人間だったのかよ。にしちゃあ若過ぎだろ」

「特務分室にだって未成年の子供がいるのをご存知でしょ？元『愚者』のグレン＝レーダス先生に元『悪魔』のレイモンド＝バルフェルム先生」

「ちよっ!?!なんで俺らの正体を!?!」

「おい馬鹿グレン。その反応はイエスだって答えてるみてえなもんだぞ」

「あつ」

自分達が特務分室に所属していたことをアイザが知っていることに驚きを隠せないグレンとレイ。

「……どうして俺達のことを知ってる？俺達の特務分室時代の情報とかは全部消されてるはずなんだがな」

「あそこはなにかとメンバーの不祥事が多い部署なのでウチは警戒してるのですよ。特に去年の帝都であんなことがあれば」

「あー……まあ、そりゃそうなるわな」

一年前に帝都オルランドで起きた悲劇。

特務分室の1人の執行官による帝国政府の要人や軍の高位魔導士達の殺害。多くの一般市民たちが巻き込まれて犠牲になった。国に仕えるべき帝国軍の魔導士が引き起こしたこの凶行をきっかけに、一般市民の間で魔導士への信頼が揺らぎ、魔術に対する忌避感が増長し、「人間は人間に許された力だけで生きよう」と反魔術師主義を掲げる団体の政府に対する抗議活動が活発化することとなった。

それだけの影響を与えたとして、魔導省を含む反国軍省は帝国軍に監督責任を問い、国軍省や強硬派議員を筆頭とする『武断派』と、魔導省や穏健派議員を筆頭とする『文治派』との対立が深まった。さらに、他の特務分室の執行官が同じようなことをしでかさないと国軍省以外のところが警戒するのも当然だ。

「まあとにかく、俺が諜報員であることは軍に知られるとなにかと面倒なので、俺がルミアを助けたこともくれぐれも内密に願います」

「内密について……教室に残ってる連中はお前がいらないの心配してるだろう？」

「心配には及びません。拘束を解いてすぐ全員眠らせたので」

「うわあ…抜け目ねえー」

感心したような、呆れたような顔でグレンは頬を引きつらせていた。

「というわけで皆が目覚める前に教室に戻りたいのでこれで」

「ちよつと待った」

教室に向かってその場を去ろうとするアイザの肩を、レイがガシツと掴む。

「……………なにか？」

「確かに教室にいる連中も拘束されてたんだろ？なら目を覚ました時、お前だけ拘束がなかったら不自然だろうが」

「まあ確かにそうですが……………」

なんだか嫌な予感がする。

「おいグレン。ちよつと手伝つてやれ」

「……ああ、合点承知ぐへへへ」

「あ、あのグレン先生？拘束は【マジック・ロープ】と【スペル・シール】だけでいいのになんで縄を出すのですか？」

「あ？安心しろ。別に他意はない」

絶対嘘だ。

「あの、結構なので……」

「遠慮するなつてしつかりキツく縛つてやるからよ」

「今ならロウソクが五本つくからよ」

「どつちもいりません」

ジリジリとにじり寄ってくるグレンとレイに対して危機感を感じたアイザが、真顔で全速力で廊下を駆けだす。その後ろを縄とロウソクを持って2人が追いかけてくる。

その様子をようやく落ち着いたシステイーナとルミアが苦笑いしながら窺っていた。

「なにやってんのよアイツら……」

「あ、あはは……元気があっていいね」

ちなみに宮廷魔導師団がようやく結界を解呪したときもリアル鬼ごっこが続いており、グレンとレイを不審者として身柄を拘束しかけて二人は弁明するのに長い時間を費やした。

◆◆

呆気ない終息を迎えた、天の智慧研究会によるアルザーノ帝国魔術学院への襲撃事件。最悪の結末を迎えずに済み、全員の無事が確認されたのは不幸中の幸いだった。

実行犯グループはレイクを除いた全員が後から来た宮廷魔導師団に引き渡された。引き渡しの際、ジンとキャレルは終始レイとグレンに怯えながら小刻みに震えていた。担当者は二人に一体何をされたのか疑問だったが、知らぬが仏ということと特に追求しなかった。

とにかく二人の非常勤講師の活躍により未遂に終わったこの事件

は、関わった組織や諸々の事情を考慮して内々に処理された。学院の破壊痕なども魔術実験の暴発として片をつけられ、公式にも事件の存在は隠蔽された。

さて、天の智慧研究会がルミアを誘拐しようとした件についてだが、事件から数週間が経ったあと、グレンとシステイーナとレイの三人は、事件の功労者として帝国政府上層部に密かに呼び出され、ルミアの素性を聞かされた。(アイザは関わっていないことにしているため呼び出されていない)

彼女は3年前に病死したと公表されていたエルミアナ女王本人であり、また「異能者」でもあった。

「異能者」とは、生まれながらにして魔術とは別の力を持った人間のこと。

それは魔術と違い原因が解明されておらず、アルザーノ帝国では悪魔の生まれ変わりとされて忌み嫌われきた。

そんな悪魔の生まれ変わりが王室に生まれてしまい、彼女は様々な政治的事情で放逐された。

そして、帝国上層部からの要請はそんなルミアの素性を帝国の未来の為に秘密にしておいてほしいとのことだった。

真しやかに囁かれていた出所不明な様々な噂で、世界を滅ぼす悪魔の生まれ変わりとして密かに存在を抹消されたはずの廃嫡王女が事件の裏に関わっていたという内容があった(ダメじゃん)。だが、人は飽きる生き物、一ヶ月も経てば誰の話題にも上がらなくなった。

学院には以前と変わらぬ穏やかな時間が流れ、全てが元通りに収束していく――

――わけではなかった。

ある晴れた日の朝。

久しぶりの平穏が帰ってきているが、平穏なものにも関わらず二年次生二組の教室はどこか暗い雰囲気だった。

そこにいつも通りガタンツと二年次二組の教室のドアが乱暴に開かれた。

「チーっす、おいガキ共さつきとテメーの席に着きやがれ」

ドアを開けてくれたるそうな口調での人物が入って来た途端、ある知らせを聞いていたシステイーナとルミアが血相を変えてその人物に詰め寄る。

「ちよ、ちよつと、レイ先生！どういふことなんですか!？」

「あ？なにが？」

「なにがって、グレン先生は正式に講師になったのに、どうしてレイ先生はやめることになってるんですか!？」

「なんでもなにも依頼の期間はもう終わったからに決まってるだろ？」

そう。グレンは正式に講師になったが、レイは依頼期間が終了したということとで学院を去ることになっていた。

「そもそも俺はこの馬鹿グレンのお目付け役として来てたんだよ。ニートからティーチャーにジョブチェンジした今、もう俺にできることはねえよ」

「そんな、先生でもできることはきつと——」

「魔術師じゃない人間がここで何ができるってんだ？」

「っ！そ、それは……………」

グレンと違い、レイには魔術の行使ができない上に、魔術の知識も戦闘の中で見たもの以外皆無に等しい。そんな人間が魔術師育成機関であるこの学院で居場所があるのだろうか？

「わかつただろ？俺がいてもいなくても現状そんなに変わらねえ。グレンの負担が増えるだけだ」

「それはそれでどうかと……………」

「それによ、なにもこれで今生の別れってわけじゃねえんだ。もしかしたら街でばったり会うかもしれないねえし」

俯くシステイーナとルミア。席についている他の生徒達からも哀愁が漂う。そんな様子を見て、レイは気まずそうに頭をボリボリ掻く。

「はあ…それじゃあ餞別にこれ渡しとくよ」

そう言つてレイはズボンの尻ポケットから小さな紙切れを出して二人に渡す。

「なにこれ？名刺？」

『万事屋レイちゃん社長レイモンドⅡバルフェルム』？』

「浮気調査やペット捜索、頼まれればなんでもやる商売やってな。この俺万事屋レイさんが何か困ったことがあったらなんでも解決してやる。あつても学生価格のサービスや契約延長はなしで…面倒くさいから」

結局面倒くさいから辞めるんじゃ…。とクラス全員が内心思いつながらも口にしない。

「それじゃあ、最後だからテメエらに言っておくことがある」

そう言つとレイは改まった様子でザツと教室にいる生徒達を見渡す。

「ここにいる奴なら知ってるだろうが、ここはテロリストの襲撃を受けた」

一か月前の恐怖を思い出したのか、顔を青ざめているのが何人かいるがレイは話を続ける。

「ここじゃ魔術は崇拜だ偉大だとか華々しく言われてるがな、それで簡単に人を殺せることがあるのは実際に体験したテメエらならもうわかっただろ？連中はその偉大なものの探究のためならガキを殺すのもモルモットにするのにも一切躊躇がねえ。どこかで道を踏み外してしまえばテメエらも連中みたいになることだってあり得る」

以前のシステイーナなら真向に噛みつこうとするだろうが、実際に自分達には関係ないと思つていたことをその身で体感し、さらに前任のヒューイが人間爆弾として学院に潜伏していたことから何も言い返せない。

「確かに俺は魔術は使えねえが物事の良し悪しぐらいは大抵わかると自負してる。そこで俺からテメエらにもう一度アドバイスしてやる。ただ周りに流されるままなんとなく魔術を学ぼうなんてするな。危険な面があることを知つたうえで何のためにここで魔術を学ぶのか

を自分に問え。それとどつかの馬鹿の言葉を借りるが、人生で突き詰めるもんがあるとすれば魔術じゃねえ。テメーの魂だ。これからは魔術だけじゃなくテメー自身が強くなるよう心掛ける。覚悟と信念がありやあ、人間つてのは何処までも突き進む事が出来る単純な生き物なんだよ」

今の言葉がどれだけ伝わったのか。

両手を白衣のポケットに入れながらハッキリと言うレイに、しばし生徒達が真剣な表情で沈黙していると……。

レイはいきなりポケットから両手を出して強くパンパンと叩き

「はい、と言う事でそれじゃあ新しい副担任の講師を紹介しまーす」

「え!?!この流れで!?!」

唐突な話題の切り替え方に困惑するクラス、システイーナも慌てて席から立ち上がって声を上げる。

「ビシッと締めたと思ったのにここで!?!」

「締めた後もグダグダ続くのがウチの業界の常識なんだよ、これもまた俺の教えの一つだ」

「そんな教えはいらなんですけど!?!もっと役に立つ事教えて!」

「それは今から現れるやつが教えてくれるかもな」

「へ?」

気になる事を言いつつレイは廊下の方へとドア越しに口を開くと話し声が聞こえてくる。

「だあああああああああ!何でお前がここにいんだよセラ!」

「教員採用試験受けたら受かつちやった!そしたらセラカさんに誘われて入ったんだよ!よろしくね、グレン君!」

「そういうの聞ってるんじゃないくてだなあああああ!」

何やらグレンが叫びながら女性と共に教室に入ってくる。

「!?!うおおおおお!すげえ美人来たあああああ?!?!?!」

「ありがとう。神様。ありがとう」

長く美しい銀髪と羽根の髪飾り、赤い紋様を顔料で刻み、教師服を着て入ってきた美女にクラスの男子どもは大興奮。そんな彼らを冷ややかな目で見つめる女子生徒。

「ねえあの人システイに似てない？」

「あつホントですわ。髪の色や顔立ちとか似ているところがありますわ」

「実は生き別れの姉妹とか言われても信じてしまいそう」

「でもシステイーナよりも優しそうだな」

「ああ」

「確かに」

「そこー今のどういう意味よ！」

案の定と言えば案の定だが、システイーナと瓜二つの容姿をしている女性を前に、教室内は男子生徒を中心に、ざわざわと騒がしくなりつつあった。

「こらこら私語は慎めーそれじゃ自己紹介頼むわ……」

「うん！みなさん、初めまして！今日からグレン先生の助手を務めさせていただきますセラシルヴァースです。長い付き合いになるだろうからどうぞよろしくね！」

セラシルヴァース。彼女は元帝国宮廷魔導師団執行官No. 3《女帝》に位置していた人物で、グレンの相棒だった。

「えーセラ先生は以前の勤め先で大怪我をしてしまい、以来ずっと療養をしていましたが先月無事退院し、こちらに転職しました。皆仲良くしろよ〜」

「おいレイ！お前セラがここに来ること知ってたな!!なんで黙ってた!?!」

「そりゃその方が面白そうだから」

「こ、こいつ……!?!」

グレンからもものすごく睨まれるが、レイは悪びれもせず話を進行させる。

「はい、それじゃあセラ先生への質問タイム」

「!!」「セラ先生！質問です!!」「!!」

「え、何お前ら俺の時と違うじゃん……」

これに関してはグレンが悪い。セラも生徒達からの質問を笑顔で答えておりグレンの時のような空気にはならなかった。

「あつ、そう言えば私もグレン君に聞きたいことあるんだつた」

「あ？なんだ？」

「ねえグレン君……レイ君から聞いたんだけど、着替え中の女子更衣室に堂々と入ったり、決闘で未成年の女の子に身体を要求したり、その女の子にその後告白したって本当？」

「……………え？」

セラの方を見ると、セラはグレンへと笑顔を向けていた。笑顔だがセラの目の奥は全く笑っていないのが分かった。

「そんじゃ、二人共積もる話があるだろうから俺退散するわ」

「おいこら待て！テメエなんつーことセラにチクってんだあー!!」

「へーということは本当だったんだ。もう詳しい話聞きたいな」

「ぐえつ!!」

退散しようとするレイを止めようとグレンは手を伸ばすが、背後からセラに首根っこを掴まれた。

「ちよつ、落ち着けセラ！誤解だからー！」

「五回？五回もそんなことしてたんだ。これはちよつときよせ……矯正しなきゃいけないかも」

「今去勢って言おうとしなかった!?!ダメだ全然話を通じねえ！おい白猫！本人がちゃんと説明してくれ！」

「知りません！」

「なんで!?!」

グレンがシステイーナに助けを求めるが、システイーナは何故か不機嫌になってふんつとそっぽを向いた。

「クソツおいレイ！逃げねえでちゃんと説明しろ！おい！聞こえてんだろ！こっち向けええええええ!!」

学院にグレンの断末魔の叫びが響いたが、レイは清々しい顔をしながら校門を抜けるのだった。



一筋の光も差さない暗闇の中を一つのランプの灯が照らしていた。ランプはオーク材の巨大な円卓の中央に置かれており、その円卓の周りを囲むように質素な椅子が複数均等に据え付けられている。

ただ空席が目立つ。

全員が揃っていない中、今席に座る影は四つだけだ。

「この前の帝国新聞見たかい？」

艶のある黒髪を腰まで伸ばした見目麗しい少年が片手に持ったアルザーノ帝国の新聞を見せびらかすように広げ、三人に問いかける。

「ああ。フェジテにある例の学院で実験失敗による爆発事故があったと書いてあったが、情報源の話によると天の智慧研究会がああ少女を攫おうとしていたってハナシだ」

まるで影法師のように、頭の前から足の先まで赤で縁取りされた漆黒のローブに身を包んだ男性が飄々と答える。

「ということとは、彼らは遂に動き始めたかと捉えてよろしいのかな？ 傀儡師殿」

白いスーツを身に纏う、金髪金目で肥満体の男性がニタニタと笑いながら奥に座る人物に問いかける。

「ああ」

自身の背後に人型の金属製のゴーレムを一体控えさせ、奥の席に座る白い無貌の仮面をつけた人物がその問いに淡々と答えると、少年は薄笑いを浮かべる。

「そうか。もう始まったか」

「ああ、始まった。遂に始まった。今までのものでは済まない。死ぬよ。もっと死ぬよ。あの国の連中には流れを止めることはできない」
「それで傀儡師の旦那。連中が動いたとなると、此処にいないメンバーも含め俺達の方針はこれからどうするんだ？」

指示を仰ぐ黒いローブの男に答えようと、仮面の人物は口を開いた。

『既に終末時計の針は動き出した。針がゼロを指すまでのタイムリミットは残り僅か、それまでの間、お前たちはなにもせずただ眺めているだけで満足か？』

「否！断じて否だ！」

「ないね。あの国の連中が何人死のうとどうでもいいけど、あいつの計画を台無しにするために色々準備してきたんだからね」

「はははっ、坊やは相変わらぬ人間嫌いだな。ま、俺もここまで来てはいおしまいはずがに面白くないってハナシだ。続けさせてもらうぜ」

『それは重畳。では諸君、来たる日に向けて我々の道が違えないことを祈る』

そう言うと、ランプの灯がふと消え、辺りは真っ暗な闇と静寂に包まれたのだった。

第2章：会わないとわからないこともある 東方の少年

クイバーク街

商店街・繁華街・商館・倉庫街・ブラックマーケット街からなる経済の中心となるフェジテの南地区のはずれにある歓楽街。政府の統制を外れており、街の中には普段絶対にお目にかかれないであろう店があちらこちらに当然のように置かれている。

住んでる住人は魔術とは縁のない人間が殆どで、表の世界から追放され行き場を失った者、敷かれたレールの上に乗せられる事に嫌気がさした者、街そのものに魅了されて抜け出せなくなった者、なんかいつの間にか住人になってた者などの訳が多い。

そんな訳ありの住民の巣窟となってる街に、レイモンドⅡバルフェルムが拠点にしているなんでも事務所『万事屋レイちゃん』があった。

「こらレイモンドおおお！ぐだぐだ言ってるで耳揃えて家賃払えって言うてるだろうが！」

「だあかあら、今月はまだ無理だっつってんだろうが！もうちょい待ちやがれ！」

「五か月も同じこと言ってるだろうが！」

10時を過ぎた時間帯。マダムとレイモンドⅡバルフェルムが口論をしていた。

「大体この前セリカから請け負った分はどうしたんだい!？」

「セリカの酒隠れて飲んでたのが本人にバレて、その弁償代にあてがわれました」

「お前馬鹿だろ！」

「うるせえ！飲まなきゃやっていけねえ年頃なんだよ俺は！」

通りを歩いていた住民はまたかと苦笑しながら通り過ぎる。

レイの事務所はマダムが営んでいるバーの上の階にある。マダムはその建物の大家であり、毎月家賃の取り立てに来てるが五か月も支

払いは滞っていた。

「知るかあ！いいから家賃寄越せつつうんだよ！ないなら腎臓でも肝臓でも腰にいつもぶら下げてる玉でも売り飛ばして金つくりな！」

「俺に臓器売買しろってか!?っーか最後のやつ一度取ったらもう生えてこない奴だぞそれ！」

「それが嫌ならさっさと大口の仕事見つけて報酬もらいな！」

「わかった！わかったから！首を長くして待ってろ！」

そう言っつてレイは逃げるようにその場から去った。その姿を見ながらマダムはため息をつく。

「まったく……セリカのところはなんか収入の安定した職場にたったってーのにウチの馬鹿ときたら」

愚痴を溢しながら郵便ポストの中を確認していると、国外からの一通の手紙が入っていた。

「おや？随分と懐かしい人からきたじゃないか。なにになに……」

一方、マダムのところから離脱したレイは街道を歩いていた。

「つたく、ババアめ。そう簡単に大口の仕事が見つかるかっての」

『万事屋レイちゃん』の請け負う内容は、ざっくり言えばなんでも。

人探しや物探し、ペット捜索から浮気調査まで探偵事務所のような仕事から、屋根の修理といった大工仕事の依頼など多岐に渡る。

一回で多額の報酬が貰える仕事など本当に稀なことだ。

「やつば賞金首でもとっ捕まえてギルドに引き渡した方がたんまり貰えるか?いや、ギルドにはあいつがいるから一番高い奴は難しそうだな」

そう愚痴っていると、前方に変わったものを発見してしまう。それは人ばかりであり、だれもが困ったように様子を眺めている光景だった。

「おいなにがあった?」

「あつ、万事屋の旦那」

近くにいた住民に声を掛けると状況を説明してくれた。

どうやら1人の子供が帝都から来たゴロツキ達のリーダーと思しき人物とぶつかってしまい、一触即発の状態にあるというのだ。

「そりゃマズいな」

レイは「通してくれ」と言いながら人だかりの中を掻き分けるように無理矢理体を押し込んでいく。

掻き分けた先でレイの開けた視界に飛び込んできたのは、大きな風呂敷を肩に担いだ1人の少年の姿である。そしてそれを取り囲もうとする男達だ。

少年はこの街では見かけない顔で、東方系の整った顔立ちに首元まで伸ばした黒髪、線の細い華奢な体つきをしている。そして少年を取り囲もうとする男達は皆、屈強であり、酒に酔った雰囲気を漂わせている。

「だから悪かったって言うてるだろ」

「おいおい人様にぶつかつといて態度がなってねーなア！見た事ねーか？俺アおたずね者でな帝都の裏の奴は俺が仕切ってる。土下座して泣いて謝ったほうがいいぜ？ま、もうおせーけどな？」

「いや帝都からここまで三日以上かかるだろ。なんで帝都で仕切ってる奴が此処にいるんだよ？」

「うるせえ！ガキが細かいことごちやごちや言うな！」

男の1人、最も屈強そうなりーダー格の男が拳を強く握り締める。少年と男、比べればその差は圧倒的だ。その胸板、腕の太さ。そして漂わせる暴力の匂い。男が殴りつければ、少年の体なんか簡単に吹き飛ばさるだろう。それが予測できる周りの人間達は、少年の身にこれから起こる悲劇を思い、微かな悲鳴を上げる。

ただ、その中であってレイだけが、微妙な違和感を感じていた。

確かに男の方が屈強そうに見える。だが、あの中で一番の強者の雰囲気は、少年の方から漂ってくるような気がしたのだ。

一瞬だけ呆け、その短い時間の間に少年に対して男が暴力を振るおうとするのを、止めるチャンスがレイは失う。そして――

「ぶへえっ！」

——少年は勢い良く迫りくる拳を難なく躲し、虚空を掴んだまま男は勢い余ってすつ転んだ。

レイの周りから驚きの声上がる。これで驚くなという方が嘘だろう。

「急に殴りかかってくんなよ。危ないだろ」

「ンのガキヤツ！」

少年の態度に逆上した男は立ち上がって再び殴りかかる。だが少年にまたもやひらりと躲され、ちょうど近くにいた子分にぶつかり、そろって地面に倒れこんだ。

「このお！」

その光景を見て頭にきたのか、残りの男達が怒号にも似た叫び声をあげながら少年に襲い掛かった。

その数は、5人といったところか。

だが少年はまるで闘牛士のようにヒラリと彼らの拳を避け続ける。

そんな彼の姿に男達はますます頭に血を上らせ、形振り構わず少年に突っ込んでいった。そしてそれを少年に避けられ、それでも勢いが止まらない彼らは、互いに体を衝突させてその場に崩れ落ちていく。

そして気がついたときには、5人ほどいたゴロツキ全員が、地面に倒れ伏したまま息も絶え絶えになっていた。そしてそれを見下ろす少年は、息が上がるどころか汗1つ掻いていなかった。

「ガキがツ……！調子に乗るなよ！」

少年の後ろで倒れていたゴロツキ達の頭目が息を切らしながら懐からナイフを取り出した。

（いかん！）

痛めつけるどころか殺す気でいると察知し、レイはすぐさま行動に移した。

「ん？」

「死ねやガ「ほわたあ！」ぶへらあ!」

駆け出したレイが途中で大きくジャンプし、少年に襲いかかろうとしていた頭目の頭へキックを繰り出した。

「にや、ぬわんでまた俺がこんな目に……」

地面に頭がめり込んだ状態でそう嘆きながら、頭目はガクツと気を失った。

「つたく、ガキ相手にナイフ使うとかアブねえな。おい坊主、怪我ねえか……って聞くまでもないか」

「お、おう。すまん助かった」

レイの乱入に少年は驚きつつも、助けてくれたレイに感謝の言葉を告げる。

「あ、アニキ……!」

「お、おい逃げるぞ」

「誰が逃げていいって言った?」

「ひいっ!?!」

地べたに転がった男を抱え逃げようとする男達へと一気に詰め寄るレイ。男達はレイの威圧感に恐怖で固まった。

「てめえらどうやら此処に来たばかりの新顔みてえだな。帝都じゃそれなりに幅を利かせてたみてえだが、訳ありが集まるここじやんなのは通用しねえぞ。つーかてめえらお尋ね者だつて?ならこの後の展開わかってるよな?」

ニヤリと黒いニヒルな笑みを浮かべるレイの顔を見て、男達は来る街を間違えたと後で後悔するのだった。

「いやー儲かった儲かった」

男達を簀巻きにして街近くのギルドに突き出したレイは、受付で受け取った報奨金が詰まった袋に舞い上がっていた。

「まさかあのゴロツキども、一度捕まっつてすぐ脱獄して賞金が一桁上がってたとはな。こりや滞納していた分の4割は払えるぜ」

ちなみにいくらかは酒の飲み代として隠そうと企んでいる。

「………しっかし、あのガキはいったいなんだ?あの身のこなし、どう見てもただの一般人じゃなさそうだったが……まあ、いいや」

どうせすぐに会うことはないだろうと、レイは思考を切り替え、ギ

ルドハウスから出る。

すると、玄関付近に見たことのある人物が立っていた。

「テメエは……」

「さつきは危ないところ助かったぞ」

先程ゴロツキに絡まれていた少年だった。

「わざわざ礼を言いにごここまで来たのか？」

「それもあるが……オツサン、どんな依頼も引き受ける万事屋をやっているんだってな？」

「誰がオツサンだ……で、それを聞いてくるってことは俺になにか依頼したいってことか？」

「そうだぞ。実は人を捜しててな」

「悪いが俺この後色々予定があるからなあ」

「金ならあるぞ」

「それで、誰を捜してるんだ坊主？」

「切り替えはや」

何とも現金なレイの態度に少年は呆れつつも話をする。

「説明の前にまずは自己紹介からだな。オイラの名前は倉麻……じゃないや、シヨウソウマだ。東方の日の輪の国出身だがこっちの学校に留学することになったな。それでこっちにいる婆ちゃんの古い知り合いのところに居候させてもらうことになったんだが……」

「あーはいはい。つまりその肝心の居候先の人がどこなのかわからない、と？」

「まあ、そんなところなんよ。クイーバーク街にいるアヤメって女の人なのは聞いてるんだけどな」

「……おいおい、よりにもよってこの街かよ」

シヨウウから告げられた言葉に、レイは嘆息する。

「お前のばあさんの古い知り合い……見つけるの難しいぞ」
「?どうしてだよ?」

「いいかがキ、この街の住民になるのならまず先に説明しておく。このクイーバーク街には沢山の住民が集う。その中には過去と決別し、名前を変えている人間もいる。そのアヤメとかいう女も、今じや

別の名前を名乗ってるかもしれないぞ」

「ええなんだよそれ……そんなの聞いてねえぞ婆ちゃん」

ここにはいない祖母に愚痴をいいながら項垂れるシヨウに、レイの対応はというと………。

「まあそう落ち込むな。俺には祈ることしかできねえが……頑張ればそのうち何かの巡り合わせで見つかるよ」

「いやいやいや待たんかい!」

手を振りながら去ろうとするレイの肩を掴んで引き止める。

「なに良いこと言いながら逃げようとしてんだよ!?どんな依頼も引き受けるんじゃないのか!」

「ああ?まだ引き受けるとか言ってるねえし、それに幅広く仕事を引き受けるがこつちにだって仕事を選ぶ権利はあんだよこらあ。つーか早く酒飲んでえし」

「はああ!?こんな真昼間に酒!?ここまで説明させておいて難しいからやらないって、ふざけんな!!」

あまりのレイの対応に、怒りのあまりシヨウは声を荒げ、レイの胸倉をつかむ。

「助けてくれたからいい奴だと思ってる頼ったら、アンタただの“まるで”ダ”メな”オ”ッサン、略してマダオじゃねえか!」

「あつ、テメエまで俺をマダオ呼ばわりするか!」

「じゃあ”マ”ジで夢も希望もない、”ダ”ラダラ生きてるだけの”オ”ッサン、略してマダオ!」

「略称変えただけじゃねえか!上等だからあ!どつかの国の留学生だか何だか知らねえが、大人を怒らせると怖えぞ!」

マダオ呼ばわりされてカチンときたレイは、シヨウの胸倉を掴み上げるとき

『気安く若に触るなモジヤモジヤあ!』

突然下から別の声があったと思いきや、レイの股間に強い衝撃が奔った。

「●※〒∞◆∴∵♂♀♣♠\$??#▼&*@★!」

声にならない声をあげて苦痛の表情と脂汗を浮かべながら、レイは

その場に崩れ落ちていく。その時、視界に珍妙なモノが見えた。
『けつ、汚ねえもん蹴つちまったニャー』

え？

二本の尾を生やし、黒の着物を着た白黒の猫だった。しかも二本足で立ち、人語をしゃべっていた。

「おいタマフミ、なに勝手に出てきてるんだよ」

『すみません若。ですが、このモジャモジャの無礼な態度には我慢できず……』

猫とシヨウが普通に会話している。

「あ、あのうシヨウ君、その喋る猫はいつたい……？」

「ん？オツサンタマフミが見えるのか？」

奇妙な光景に、レイは思わず畏まった態度でシヨウに問いかける。するとシヨウと猫の方もレイの反応に驚いている様子だ。

「なら説明しとくか。こいつはタマフミっていつてオイラの……うーん、付き人ならぬ付き猫かな」

『従者が正しいですニャー。まあもつとも、この国ではみゃーたちの関係を使い魔とマスターと呼んでるみたいですニャー』

「い、いやそうじゃなくて……なんで猫が直立歩行して喋ってるの？」

「なんでって猫又だからに決まってるだろ」

「ねこまたつてなに？」

「妖怪……この国でいうところの、妖精、みたいな？」

「なんで疑問形なんだよ……」

『若様……あまりみゃーたちのことを喋り過ぎぬよう……』

「おつとそうだった。スマン、これ以上は詮索しないでくれると助かる」

あやふやな返答だがなんとなくわかった。

タマフミという喋る猫は精霊種なのだろう。

精霊種とはこの世界に存在する自然現象から発生した超自然的な存在の事で、基本的に人から知覚出来ない程度のものを妖精、人に知覚出来る規模のものを精霊と呼ぶ。

前者であるタマフミを認識できるということは、レイもそれなりに

靈感のようなものが強いということなのだろう。

『それより、若の依頼を蹴ったおみゃーに聞きたいことがあるにゃー』

「あ？なんだよ猫」

『おみゃー……………右と左、どっちを残してほしいにゃ？』

「なんの右と左!?!」

タマフミのドスの効いた声での質問にいろんな意味で身の危険を感じ、土下座しながら（股間を押さえたまま）謹んでシヨウからの依頼を受けることにしたレイであった。

◇◇

「結局わからずじまいか……………」

「だから言っただろ。見つけるのは簡単じゃねえって」

時は流れ、空が赤く染まった時間帯。

クイーバーク街の住民の何人かに聞き回ったものの、誰もアヤメという女性のことを知らなかった。

「…今日はもう遅いし、探すのは明日にするか」

「お前今日どこに泊まるんだよ?」

「うーん…どつかその辺にある旅籠屋に泊まるさ」

「そんなのここにはねえぞ」

「ええ…………」

どうなってるんだよこの街、ガラの悪いのが多いし、女装したオッサンたちが経営してるバーがあるし、とブツブツと独り言を呟くシヨウに、レイはため息をついて頭をボリボリと掻きながら一つの提案をする。

「じゃあうちに泊まるか?」

「え?」

『にゃ?』

レイからそんな言葉が出るとは思わなかったのか、シヨウとタマフミは一瞬固まる。

「…いいのか?」

「ガキを野宿させるほどドSじゃねえんだよ」

『面倒臭がつて依頼を断ろうとした奴の口から出るセリフとは思えないニヤー』

「うっせ、とにかく探し人が見つかるまでの間は泊まってけ。ただし居候する分依頼料は上乘せさせてもらうぜ」

「あんた抜け目ないな……」

呆れ顔でレイを見ながら、シヨウはタマフミとごよごよによと小声で相談をし、

「……わざと時間をかけたりするなよな」

『寝込みを襲ってきたら切り落とすにやー』

「するか馬鹿！」

どこぞのロリコンダスじゃないから間違いなんか絶対起こらないと断言し、レイはシヨウたちを事務所へと連れていく。

「ば、ばんじ、や?..」

『「よろずや」と読むのではないですかにや。簡単に言いますとなんでも屋という意味になりますにや』

事務所前の看板に書いてある文字を見てシヨウは「おおそうか」と納得する。

「でもなんで万事屋なんだ?」

「……まあ簡単な話が、なにもやることがなかったから………だな。それより先にここの大家に挨拶するぞ。結構口うるさいから覚悟しとけ」

事務所の下にあるバーの扉を開く。

「おや? 帰って来たってことはようやく家賃を払えるのかい?」

「そっちの方は安心しろ。それより婆にちよつと相談がある」

「なんだい相談って? そっちの小さい客人と関係あんのかい?」

「まあな、ほれ。お前から説明しろ」

「お、おう……」

レイに促され、シヨウは煙管から煙を立てるマダムに事情を説明する。

「ふーん、わざわざ遠いところから遠路はるばるとご苦労なことだね」

「……まあ、アヤメって人が見つかるまでの間だけしばらく世話になるが……その、いいんかね？」

「安心しな。もう探す必要はないよ」

「そうか。助か……え？」

なにを言ってるんだ？

「えつとどういう意味だ？」

「だからレイモンドへの依頼が無事完了したから見つかるまでの間じゃなくていいって意味だよ」

「えつと、スマン…何言ってるかわからん」

「察しが悪いね。アンタそれでもキノさんの孫かい？」

「えつ、どうして婆ちゃんの名前を——」

ここにきて、シヨウとタマフミ、レイがある答えに辿り着く。

「ま、まさか婆……ひよつとして？」

「よくマダムと呼ばれてるけどね……あたしの名前は班目彩芽……まだらめあやの東方だと名字が先で、こっちの連中が班目を上手く発音できないってんでマダムって呼ばせることにしたんだ」

「『ええええええええええええ！』」

店内に二人と一匹の驚嘆の声が響く。

「朝郵便を確認したらキノさんから久し振りに手紙が届いてね。孫がこっちの魔術学院に通うから居候させてくれないかって書いてあったからレイが戻ってきたら見つけるよう頼もうと思ってたけど……どうやら先に見つけたようだね」

マダムが懐から出した手紙を見て、シヨウは確かに婆ちゃんの字だと確認する。

「んだよ。完全に灯台下暗しってやつじゃねえか。俺の時間をかけて依頼料上乘せ作戦がパーにしやがって」

「知るかいそんな頭がパーのアンタの作戦。そんなことよりシヨウ、あんた今日からレイのところで泊まりな」

「え？」

「いや、はつきり言っただけの駄目さつぷりときたら呆れてものが

「言えないぐらいでね……一緒に行動してたんだからわかるだろ？」

「……まあ、な」

「おい、本人が傍にいるぞこらあ」

「まあやるという時はやる奴だけだよね………監視も含めていろいろと世話してやんな」

「うーん……まあ、ぼちぼちとやるよ」

「あれ？なんか居候と家主の立場逆じゃね？」

「兎にも角にも、シヨウとタマフミの宿泊先が無事決まったのであった。」

『というわけでしたらく世話になるニヤー』

「えっと………これからよろしくなオツサン」

「オツサン言うな………同居するならちやんと名前で呼べ………シヨウ」

「………そうだな。わかったよレイ………さん」

自己紹介で第一印象が決まる

平日の朝靄の漂う早朝。クイーバーク街にある万屋レイちゃんという事務所にある寝室にて。

「うーん、頭痛いよ〜一睡もできていないよ〜」

社長であるレイが絶賛魘されていた。前日遅くまで酒をしこたま飲んで二日酔いになったという自業自得の理由で一睡もできていない。

だが現実とは残酷なものだ。レイが苦しんでいる間も時計の針は進み続ける。

そして……

ジリリリリッ!

苦しむレイの側で、無慈悲にもマヌケな顔をしたコケシ人形の形をした目覚まし時計から、セツトした時間になったと知らせる合図のベルが鳴った。

「うるせえええ!もうとつくに起きてるわあ!」

ガシャアアアン!

あまりの五月蠅さにイラついたレイは目覚まし時計を掴み、盛大に壁に叩きつけて大破させた。

「ちよオオおおお!!何やってんだあアンタあああ!」

目覚まし時計が粉碎された壁の横にあった押入れが開き、中からレイのところろに居候することになったシヨウが東方風の寝間着姿で出てきて悲鳴を上げた。

「それオイラが実家から持って来た目覚まし時計だろ!なに壊してんだ!」

「うるせえなあ、大きな声出すな。頭にガンガン響くんだよ。つーかなんでそんなもんが俺の側にあんだ?」

「今日仕事があるからって昨日アンタが無理矢理取ったんだろうが!」

「そうだっけ?俺過去は振り返らない男だから覚えてねえよ」

「こ、こいつ……!」

まったく悪びれない家主に、怒りで眉間にシワを寄せるシヨウだが、壁にかけてある時計が目に入っただけで、すぐに我に返った。

「ヤベツ、もうこんな時間か！」

「あ？なんか用事でもあんのか？」

「昨日話しただろ。今日から学校に行くんだよ。学校」

シヨウは一度押入れを閉じ、数秒して学校の制服のような衣装に着替えて玄関へと向かった。

「それじゃあ行ってくるからな！」

「おう、行って来い行って来い」

レイは布団から出ずに手をひらひらと振るだけだった。

玄関のドアがバタンとしまったのが聞こえた後、レイはふとあることに気づく。

「あれ？そういやアイツどこの学校に行くって言ってたっけ？つーかあの制服なんか見覚えが………ウプツ」

考える間もなく吐き気を催したレイはトイレへと駆け込み、胃の中の物をリバーズしたのだった。

『そう言えば若』

「あ？どうしたタマフミ？」

『学校までの道はわかってますかにや？』

「あつ」

クイーバーク街をですぐのところまでタマフミに指摘され、シヨウはフェジテの地理に疎かったことを失念していた。

「まずい。初日早々迷子になって遅れましたなんてシャレになんねえぞ………」

『誰かに道を聞くしかないですよにや』

「そうだな」

シヨウは周りをキョロキョロ見回す。すると、前の道を自分と同じ制服を着た少年が歩いているのが見えた。

「お、おーい！ちよつといいか？」

「？」

シヨウが呼びかけると、少年は振り返り此方に気付く。

「なにか用か？」

「いやあ、実は今日からお前と同じ学校に通うんだけど道が分かんなくてな」

「奇偶だな。オレも今日から転入だ」

「え!？」

「だが安心しろ。道は把握してる」

「そ、そうか」

助かったと安堵したシヨウは少年の後をついていく。

「オイラ、シヨウソウマ…お前は？」

「オレは——」

◆◆

アルザーノ帝国魔術学院、東館二階。

ある日、魔術学士二年次生二組の教室ではある話題が上がった。

「アイザ君聞いた？このクラスに新しいメンバーが増えるらしいよ」

SHL前。ペンナイフで羽根ペンの先を尖らせていたアイザにル

ミアが話しかけてくる。先の事件以降最近ルミア

「ああ、噂で聞いている。どうやら日輪の国からの留学生らしいな」

「どんな子だろうね？男子か女子かはわからなかったし」

「さあな。そもそも他の学院ならともかく他国からののは非常に珍しいからな」

何年か前は他国との交流でそれはあったが、アルザーノ帝国にいる外道魔術師の犯罪件数の増加や隣国の宗教国家レザリア王国との緊張状態などの関係からすつかり無くなっていった。自国の人間が他国で巻き込まれるのを避けたいたいのには当然だ。

「…ところで、さっきからお前の親友大丈夫か？」

ルミアがいつも座る席の隣では、彼女の親友であるシステイナーナが物凄くそわそわしていた。それを見てルミアは苦笑いを浮かべる。

「あはは……システイってば留学生の話聞いてすごく緊張してるんだよ」

「なんであいつが緊張するんだ？」

アイザが口にした疑問にシステイナがピクリと反応して此方を向く。

「知らないのアイザ？日輪の国ってことは陰陽師が来るってことなのよー」

「ああ、向こうではそう呼んでいるらしいな」

「いい？陰陽師よ？そもそも住む大陸が違うからまずお目にかかることができないって言われるような人達よ？彼等の使う陰陽術って詳しいことがまだ分かっていないのよッ。できることなら一度は見てみたいもの！」

「あ、ソウデスネ」

システイナの熱の入った弁にアイザは返しが片言になる。

キーンコーンカーンコーン

予鈴が鳴るとともに教室の前のドアを開けて担任……ではなく副担任の先生が入ってきた。

「皆さーん、おはようございまーす！」

「二おはようございますセラ先生！」

「今日も一日勉強に励みましょうね」

「二はーいー」

セラⅡシルヴァースが副担任となつて数週間が経ち、彼女はクラスから慕われていた。容姿端麗なことと担任のグレンと違って人当たりがよいことからクラスに馴染むのにそう時間はかからなかった。

そして肝心のグレンの姿がいまだに見当たらない。というのも、グレンがいつも適当なのでセラが担当しているのだ。

「それでは、SHLを始めましょう。まず最初に皆さんも知つての通りこのクラスに新しいメンバーが加わります。しかも二人も！」

「二え？」

セラから発せられた予想外の情報に教室がざわつく。

「…一度に二つの教室に二人も来るなんてないよね？」

「だよな、普通。例の留学生が二人ってことなのか？」

「いや流石にそれは……………」

「はいはい、静かにしてっ」

セラが手を打ち鳴らす。

「私もよくわからないんだけど、なんかもう一人の方は前から来ることは決まってたけど偶々留学生と来る日が被ったみたいだよ。まあとにかくクラスの仲間が増えることに変わりはないから皆さん仲良くともに学びましょうね」

「はーいー」

セラの言葉に生徒達はソワソワする。

「今日から来る転校生、可愛い女の子かな」

「俺は可愛かったら放課後誘おうかな」

主に男子が。

「セラ先生、グレン先生はまた遅刻ですか？」

「ううん、今グレン君は学院長に呼ばれてるの」

「えっ…今度はいったいなにやらかしたんですか？」

このクラスでは『グレンが学院長に呼び出されたイコールなにかやらかした』が共通認識になっていた。

「あ、あはは、今回は違うの…」

「悪い悪い遅れたわー」

そこに教室前方の扉が開かれ、教室にグレンが入ってきてきて教壇に立つ。

「先生遅いですよー」

「だから悪いって学院長に呼び出されてたんだから大目に見ろよ白猫」

「だから私の名前はシステイーナですって！」

「はいはい知ってるって。えーSHLを適当に始める前にこのクラスに新しいメンバーが加わるぞ」

「先生、それももう知ってます」

「え？マジで、俺はついさつき知ったばっかなのに」

「なに言ってるのグレン君。この前の講師会議で説明されてたよ」

「あ？そうだったけ？話が長いから聞き流してたわ」

「なにやってるのグレン君……」

「先生はもう私達の担任なんですからしつかりしてくださいよもう」

グレンの怠惰さに、セラ（白犬）とシステイーナ（白猫）は呆れる。質の高い授業はともかく、面倒臭がって試験は実施はしない、魔術研究はやる気なし、学院の講師会議はサボる、魔術実験の後片付けから逃げる、違法な魔術をこっそり生徒達に教える、怠惰で、いい加減で、子供じみた悪ふざけを繰り返す、そして魔術を小馬鹿にした数々の問題発言……例を挙げれば枚挙に暇がない。

「まったく……毎日きちんとしなさいって言ってるのに、人の言うことをたまには聞いて——」

「はいはいそれ何度も聞いたから。というか、今から紹介するから静かにしろ。廊下ですつと待たさせる気か」

「うぐつ……」

グレンにしては最もな指摘に、システイーナは押し黙る。

「おーい、入ってくれ」

グレンの呼びかけにあまり間を置かない内にガタンという音と共にドアが開き、男子用の制服を着た二人の生徒が入ってきた。

一人は身長が160くらい、前髪を長めの二つ分けにしたセミショートの黒髪、たれ目のふわつとした柔らかい印象の表情をした中性的な顔立ちの少年。

もう一人は身長170くらい、中肉中背の体格で外ハネの茶髪。目立った特徴は無く地味ではあるが整った顔立ちをしている少年だ。

「どっちがそうなんだ？」

「なんだどっちも野郎かよ」

生徒達の反応は様々で、どっちが留学生か予想したり、落胆するのもいた。主に男子が。

「本日から新しくお前らの学友となる。まあ、仲良くしてやってくれ。ほら、自己紹介しろ」

「はい……オイラは日輪の国から留学生としきたショウソウマ

だ。趣味は…のんびりすること。わからないことも多いから、色々と聞くかもしれないけど、教えてくれると助かる。よろしくなー」

のんびりとした口調で自己紹介したショウ。

「こつちが留学生か」

「なんかゆるい奴だな……」

「趣味がのんびりすることって……なんかグレン先生みたいだね」

「けど目は腐ってませんわ」

「はいはいまだあと一人残ってるから静かにしろ」

グレンはざわめくクラスの生徒達の注意を強引に集めた。すると、クラス中が静まり返り、注目が茶髪の少年に一斉に集まった。

そして、茶髪の少年の言葉に傾聴しようとする。

「えー……えつと、アヤトキヨハラです………えー、趣味や得意なことは特にありません。えー、皆と仲良くなれるように頑張りたいです」

茶髪の少年、アヤトの自己紹介に生徒達は

「」「」「」「」「」「」「」

……沈黙。

(……失敗した)

「あー………自己紹介が終わったみたいだから授業を始めろぞ」

グレンにまで滅茶苦茶気を遣われる始末。

多分、良くてコミュ障、悪くて根暗そうな奴だと認識されたに違いないとアヤトは確信した。

◆◆

「………とまあ、おさらいするとこんな感じだ」

グレンは黒板上にチョークで呪文と魔術式を書き連ねながら、来たばかりのショウとアヤトにも分かるように今までやった授業の内容を懇切丁寧に解説した。

「二人共わかったか？」

「おお、頭の悪いオイラでも内容がするすると頭に入ったぞ」

「……分からない所もちゃんとわかるように砕いてるので助かりま

す」

「ふふん！そうだろそうだろ。このグレン大先生の手にかかればこんなもんよ」

席についているシヨウとアヤトの絶賛ぶりにグレンは有頂天になる。ウザいくらいに。

「いやあ、オイラここに来る前に参考書読んでもチンプンカンプンでどうしようかと不安だったけど助かったあ〜」

「…………というより、書いてることが抽象的過ぎて参考書というよりただの暗記本じゃないかかと思つた」

「そうだよなくそうだよなく暗記しただけで極めたつもりになつてるとか恥ずかしいよなく？ぷぷぷ」

((…、こいつ……………！))

席を見回しながら小バカにするようなグレンの物言いに、生徒達は苛立ちを覚える。とはいえ事実のため大きく出れないでいた。

「もう、グレン君ふざげないの」

セラに注意されて、グレンは「えーもうちよつと楽しませろよ」と不満そうにしながらもやめる。

「まっ、ここの教科書は『細かいことはいいんだよ、とにかく覚えろ』と言わんばかりの論調だからあんま参考になんねえと思うぞ」

「えっ、これ買うのに結構金かかったのにとんだ詐欺じゃん。後で返却して金返してもらお」

「シヨウ、それは流石に言いすぎだ。せめて紙資源の無駄遣いだと言え」

「いや、アヤトも大概だろ」

「ぷぷぷ、確かにそうだよなく」

「グレン君ものらないの」

二人の意見に生徒達はぐうの音も出ない。

「あ、あはは……………凄いハッキリ言う二人だねシステイ」

「事実なだけに言い返せない。それより早く休み時間にならないから。陰陽術について聞きたいことがいっぱいあるのに……」

「お前はぶれないな」

知識欲の強いシステイナが、まるで草むらから獲物を狙って構えている猫型の獣に見えて呆れるアイザの視線が、アヤトの方に向く。

(……アヤト＝キヨハラ。何者なんだ?)

時間は早朝にまで遡る。

落ち着きのある小さなカフェのテラス席に一人の少年が腰かけていた。簡素な服装にベレー帽といった装いのその少年、手に持った新聞の内容に目を通していたところに、頬に引っ掻き傷がある40代くらいの中年男性が声を掛けてくる。

「すまない若いの。今日の新聞を少し見せてくれないか？」

「ええどうぞ。今日はとてもいい天気ですね」

「ああ、だが傘は持っている」

少年が新聞を手渡すと、受け取った中年男性は少年に術式が描かれた小さな紙切れを渡し、少年の背後にあった椅子に座る。

『連絡は例の爆破未遂事件ぶりだな。あれから調子はどうか?』

と、少年の頭の中へ直接、声の様なものが聞こえてきた。

『愚者と女帝の二人が俺の担任だという以外なら今のところ問題はな
いですよ長官』

『念話用の護符は問題ないようだ。それにしても相変わらず無愛想な
奴だなエージェント77』

エージェント77と呼ばれた少年と長官と呼ばれた中年男性はお互い顔を合わさなのまま念話で会話を始めだす。

『次の定期報告まではまだ2週間もあるのになぜ呼び出したのです?
同窓会があるわけでもないし』

『無視できない事態が起こってな』

『とどうと?』

『どうも政府内の情報が外部に漏れているようだ』

『はっ?』

思わず振り返りそうになるも、少年はぐつと堪える。

『いきなりのことで信じられないのも無理はない。だが本当のことだ。最近、どうにも宮廷魔導士団の動きが天の智慧研究会に読まれているようだ。しかも捕虜の搬送ルートも筒抜けだったらしく、待ち伏せを受けてメンバーのジンとキャレルの二人が死んだ』

『内部にミゲール・ブラッカー千騎長のようなスパイが?』

『または他の派閥が奴らと手を組んでいるかのどちらかだ』

アルザーノ帝国の政府内は一枚岩ではない。王室直系派、王室傍系派、反王室派、過激極右派、保守的封建主義者、マクベスの革新主義左派、帝国教会右派……アルザーノ帝国は様々な思想主義と派閥が渦巻く混沌の魔窟だ。しかも一年前の帝都での惨劇以降も責任問題で武断派と文治派との諍いが絶えない。

『長官は魔導省あたりが裏で天の智慧研究会と繋がっているとお考えで? 去年の件で軍との仲は険悪ですし』

『まだはつきりとは断定できない。そもそも狂人連中が元王女を攫おうとしたのが政治的な目的とは思えない。またなにか仕掛けてくる可能性もあるからお前にはいつも以上に注意してほしい』

『情報漏洩の方は?』

『こつちで調べるからお前は護衛に集中しろ』

『了解』

『おっと、まだ伝えることがあった』

『なんですか?』

『今日お前のクラスに二人、留学生と転入生が入るみたいだな』

『そうですが……調べたのですか?』

『用心のためだ。留学生の方は身元が確認できた。日の輪の国で由緒正しい家柄の人間で、怪しい連中との繋がりはない』

『…もう一人の方は?』

『まだ何も分からない。そつちの身边調査を引き続きやるが、お前の方でも注意しろ』

『……もし、そいつが天の智慧研究会と繋がっていたら?』

『——やるべきことをやれ』

『……………了解しました』

『話はこれで終わりだ』

「新聞を貸してありがとう」

「どういたしまして」

話は終わったばかりに、念話を解除して長官は新聞を少年に返して立ち去る。

少年もしばらくしてから席を立って近くの人気のない路地裏へと歩を進める。

路地裏に入ったところで少年の周囲の空間が一瞬、ぐにやりと揺らぎ、少年の姿の焦点があやふやになり……再び焦点が結像した時には蒼髪の少年へと姿を変えた。

(もしも奴が天の智慧研究会の人間だったらその時は——)

長官との会話を思い出したアイザの考えを他所に、今日の授業は続く。

競技決め

「……はあー」

「もう、システイ元氣だしなって」

午前の授業が終わり、昼食タイムの時間になった。

生徒達で賑わう学院の食堂にて。テーブル席について大きなため息を吐いたシステイーナに、隣の席に座るルミアが声を掛ける。

「だって……」

なぜシステイーナの気分が沈んでいるのか。

少し前の休み時間で、システイーナは早速日輪の国からの留学生であるシヨウに陰陽術について聞いてみたのだが、シヨウの説明にいまいち理解できなかった。

日輪の国とアルザーノ帝国の魔術基盤やが異なっているのもあるが、シヨウの説明が抽象的すぎて要領を得られなかったのが一番の原因だ。

式神を召喚する時のコツの説明のときも……

『ひゅーつとやってひよいっだよ、ひゅーひよいつ、分かんない？ センスねえ〜』

という始末。

グレン含むクラスの誰も理解できず、数日間なんとか粘ったシステイーナでさえも音を上げてしまった

「陰陽術について聞けると思ったのに……」

好奇心の強いシステイーナの落ち込み具合は酷いものであった。

「でも切り替えないと。今度の魔術競技祭の選手決めをやらないといけないんだから」

「あー…もうそんな時期だったわね」

魔術競技祭とはアルザーノ帝国魔術学院で年に三度に分けて開催される、生徒同士による魔術の技量の競い合いである。各クラスから選出された選手達が様々な魔術競技で腕を比べ合うお祭り、であるのだが。何時からか出場するのは成績優秀者ばかり、挙句同じ選手の使い回しが当然のように行われるようになり、お祭りという楽しい印象

からは掛け離れた代物へと成り下がっていた。

システイーナは事実、学年で五本の指に入る成績優秀者だ。当然、去年もそんなお決まりに従って、一年次生の部の魔術競技祭に出場したのだが……面白くなかった。父親から聞かされていた話とずいぶん違った。

昔はクラス全員が参加して、全員一緒に盛り上がったお祭りだったらしいのだが、そんな競技祭はいつの間にか廃れてしまったらしい。

「今回は皆で頑張りたいわ」

「うん、そうだね。放課後に呼びかけてみよつか」

◆◆

「…なあ、アヤト…」

「……どうした、シヨウ？」

「今、クラスで何してるんだ？」

「魔術競技祭の種目決めみたいだな……」

「……そうか、ところでオイラは今、ある疑問を持っている」

「…何だ？」

「何で、こんなにもこのクラスはテンションダダ下がりなんだ？」

「オレが知るわけないだろ」

シヨウが疑問に思ってたこと、それはクラスの雰囲気がびっくりするほど沈んでいることだ。

「はーい、『飛行競争』の種目に出たい人、いませんかー？」

壇上に立ったシステイーナがクラス中に呼びかけるが、誰も応じない。

クラスメイト達は皆、一様にうつむいたまま、教室は葬式のように静まり返っている。

「……じゃあ、『変身』の種目に出たい人ー？」

やはり、無反応。教室は静まり返ったままだった。

「はあ……」

一向に参加種目が決まらない現状にシステイーナからため息が洩れる。

競技祭の開催はあまり時間が残っていないため、何としても今日中に決めなければならぬ。

「ねえ、みんな？せつかくグレン先生とセラ先生が『自由にして良い』って言うてくれたんだし思い切つてみんなで頑張つてみようよ！ほら、去年出られなかった人も出られる機会なんだよ？」

ルミアはみんなに対して呼びかけるが誰も反応を示さない。

「……無駄だよ、二人とも」

その時、この膠着状態にうんざりした眼鏡の少年が席を立った。

少年の名はギイブル。このクラスではシステイーナに次ぐ優等生だ。

「皆、気後れしてるんだよ。そりやそうさ。他のクラスは例年通り、クラスの成績上位陣が出場してくるに決まってるんだ。最初から負けるとわかっている戦いは誰だつてしたくない……そうだろう？」

「……でも、せつかくの機会なんだし」

むつとしながら反論しようとするシステイーナを無視し、ギイブルが続ける。

「全く、お情けでみんなに出番を与えようとするから滞るんだ。そもそも今回は女王陛下が御来臨されるんだぞ。そうでなくとも、魔導省の官僚や宮廷魔道士団の団員の方々なども数多く来る行事なんだ」

「え？・そうなのか？」

「う、うん……」

「そりやあ委縮するわけか」

編入生であるアヤトとシヨウは内容は知らないし、わざわざ観戦する人達がどんな集まりかなんて尚更なのでルミアに確認してみるが、どうやら近年の競技祭は将来の進路のため、教師達の顔を立てるための足掛かりとして、各方面のお偉いさんにアピールする数少ない魔術系の行事のようで、どの競技でも成績上位者を出場させて勝ちを狙いにくるのが定石のようだ。

「なんだそれ。競技祭とは名ばかりの生徒を使った品評会みたいなもんじゃん」

「そうよ。そんなの決して競技祭だなんて言えないわ。毎年そんな勝

ち方でつまらなくないの？」

「はあ……システイーナ、いい加減にしないかい？」

システイーナの言葉に呆れたように、ため息混じりに呟きながらギイブルが席を立つ。

「つまるところまらないの問題じゃないだろう。今回の競技祭の優勝クラスには女王陛下から直々に勲章を賜る栄誉が与えられるんだ。みんな躍起になって優勝を狙う筈さ。特にハーレイ先生率いる一組は一番の難敵と言っている。足手纏いにやらせるくらいなら他のクラスと同じように、全競技を僕や君などの成績上位者で固めて出場すべきだ」

「ねえ、貴方、それ本気で言ってる……？」

怒りを露にシステイーナがギイブルを睨みつける。

だが、ギイブルはどこ吹く風で、さらに持論を展開していく。

「それにさ、今回の優勝クラスには、女王陛下から直々に勲章を賜る栄誉が与えられるんだ。これにどれだけの価値があるのか、君にもわかるだろう？システイーナ？だから、だだこねてないで大人しく出場メソバを成績上位陣で固めるんだ。これはこのクラスのためでもあるのさ」

「ギイブル……貴方、いい加減に——」

システイーナの我慢も限界だった。今この瞬間の空気が最悪になろうともギイブルに物を申したいと怒声を上げようとした時、廊下から駆け足のような音が迫って来たと思つた瞬間、ばあん！と教室の扉が勢いよく開かれた。

「話は聞いたぞ！このグレン＝レーダス大先生にここは任せろ！」

グレンがキメ顔で飛び込んできた。

「ややこしいのが来た……」

ピリピリした空気が霧散したのはいいが、厄介なのが来たと言わんばかりにシステイーナが頭を抱えた。

「喧嘩はやめるんだお前達。争いは何も生まない。なにより……俺達は、優勝というひとつの目的を目指して共に戦う仲間達じゃないか！」

「うわ、気持ち悪っ。なんか生理的に無理」

「シヨウ、それは先生に失礼だぞ。いくら本当のことでも」

「お前も大概だな」

『『言っちゃったよー!』』

爽やかな顔をして普段なら絶対言わないような台詞を前に、クラスの皆の気持ちを代弁するように、シヨウが心からの言葉を言い放った。そんなシヨウを諫めながら、サラツと自分も失礼なことを言うアイザにアヤトがツッコんだ。

「テメエら後で表出ろ。まあ、なんだ……随分と難航してるみてえだな。たく、やる気あんのか？ 他のクラスはとっくに各種目の出場選手決めて来週に向けて練習してるつつうのに、意識の差が知れるぜ」
「やる気出してなくてメンバーも自由にしろって言ったの先生なんだけど……」

「……え？ 俺、そんなこと言ったか？ マジで覚えがねえんだが」

「あんたは……」

グレンの相変わらざるの平常運転ぶりに、システイーナは激しく脱力して突っ伏してると、教室にセラがフラフラしながら入ってくる。

「はあ……はあ……グレン君速すぎ……。急に学院長室から出て来たと思えば……急にどうしたの……?」

「いやー、仕方ねえから今回の魔術競技祭はやる気出してやろうとか思ったわけよ。んで、お前からまだメンバー決まってるなら総監督のこの俺が決めてやる! 今回の競技祭……俺が総指揮を執るからには勝ちに行くぞ? 全力でな。俺がお前らを優勝させてやる。だから、そういう編成をさせてもらう。遊びはナシだ。心しろ」

ざわざわ。普段の低温動物ぶりからは想像もつかないこの熱血ぶりに、クラス中の生徒達がどよめきながら顔を見合わせる。

「おい、白猫。競技種目のリストをよこせ。ルミア、悪いが今から俺が言う名前と競技名を順に黒板へ書いていってくれ」

「人を猫扱いするなって言ってるのに……もう!」

システイーナの呟きも耳に入らず、グレンは競技種目とルールが書かれたリストに目を通す。

「なあ、白猫。これって、毎年同じ競技なのか？」

「違うわ。大目玉の『決闘戦』とか他一部を除いて内容が一部変わってたり、全く新しい競技を作られたりなんかもあるからほとんどが去年と同じなんてのは早々ないわ」

「なるほどなく……そうなるここは……で、これは今年初の競技か」
それから数分間ブツブツと目を通すと、顔をあげる。

「うし、決まった。一度しか言わねえから自分の名前出たら絶対覚えろよ。まず、最大の目玉の『決闘戦』なんだが、こいつは白猫、ギイブル……そしてカツシュで行け」

えっ？と。その時、アヤトとシヨウを除くクラス中の誰もが首をかしげた。

「ん？何で皆首かしげてるんだ？」

事情が分からないシヨウがアイザに聞く。

「競技祭の『決闘戦』は三体三の団体戦で実際の魔術戦を行う。目玉競技であり、各クラス最強の三人を選出するのが定石だ。成績順で選ぶならばシステイナー、ギイブル、ウエンディもしくは俺だな」

「へえ、やっぱりアイザも良かったんだな」

「論点はそこじゃないぞ」

カツシュを見ると、カツシュ自身もこの謎の選抜に戸惑いを隠せないようだった。

だが、グレンはクラス中に渦巻く困惑を完全に無視し、さらに続ける。

「えーと、次…『暗号早解き』、これはウエンディ一択だな。『飛行競争』……ロッドとカイが適任だろ。『精神防御』…ああ、こりやルミア以外にありえんわ。えーと、それから『探知&解錠競争』は——『グランツィア』は——」

(これは……)
アヤトはグレンの意図がわかった。成績上位陣で固めるのではなく、全員出場させるつもりらしい。

ただ、全力で勝ちに行く、遊びはナシなのに、なぜあえてそれでやろうと思ったのか。

ここ数日グレンの人となりについて分かったことと言えば、授業は分かりやすいのだが、面倒くさがって魔術実験の後片付けから逃げ、こつそり違法な魔術を生徒たちに教える、怠惰で、いい加減で、子供じみた悪ふざけを繰り返す、そして魔術を小馬鹿にした数々の問題発言……いろいろな問題のある講師だ。

まさに、まじでダメな大人……略してマダオだ。

そんな人間が授業以外で真面目に取り組もうとしているのかも気になる。

(何かろくでもないこと考えてるな)

『変身』はリンに頼むとして……今年の新競技に『殲滅戦』はアイザ、『タッググロワイヤル』はショウとアヤトだな。よし、これで全部埋まったな。何か質問は？」

グレンのメンバー発表が終わった。結局、あぶれた生徒は一人していない。四十三人全員、最低一回は何かしらの競技に出場することになっていた。

「納得いたしませんわ！何で私が『決闘戦』の選抜から漏れていますの?!」

「私は納得いたしませんわっ！」

生徒達がざわめく中、いかにもお嬢様然としたツインテールの少女、ウエンデイが早速、言葉荒々しく立ち上がる。

「どうしてわたくしが『決闘戦』の選抜から漏れているんですの!?! わたくしの方がカツシユさんより成績がよろしくってよ!」

「あー、それなんだがな？お前、確かに呪文の数も魔術知識とかも凄えけど、ちよつとドジだからなあ。たまに呪文噛むし」

「なっ……!?!」

「だから、使える呪文は少ねーが、運動能力と状況判断のいいカツシユの方が『決闘戦』やるなら強えって判断した。気を悪くしたんなら謝る。その代わり『暗号早解き』、これはお前の独壇場だろ？ お前の【リード・ランゲージ】の腕前は、このクラスの中じゃ文句なしのピカ一だしな。ここは任せた。ぜひ点数稼いでくれ」

「ま、まあ……そういうことでしたら……言い方が癪に障りますけど」

……」

怒るに怒れず、反論もできず、ウエンディはさすがと引き下がる。他にも、どうして自分がこの種目選ばれたのか、疑問に思った生徒達が次々と手を上げ、グレンに問いかける。

それをグレンはセラに協力してもらい、的確に返していく。

「そりゃ【レビテート・フライ】も【グラビティ・コントロール】も結局は同じ重力操作系の黒魔術だし、黒魔術は運動とエネルギーを操る術ということでもどれも根底は同じだ。カイ、お前ならいけるはずだ」「テレサちゃんはこの間、錬金術実験で誰かが落としかけたフラスコを、とつさに【サイ・テレキネシス】で拾ってたでしょ？自分で気付いてないだけで念動系の白魔術、特に遠隔操作系の術式に相性がいいんだよ」

「グランツィアは、個々の能力うんぬんよりチームワークだ。アルフ、ビックス、シーサーいつも仲良し三人組のお前らがやるのが多分、一番いいんじゃないか？お前から同調詠唱（シンクロ）も上手いしな」

——と、そんな感じで生徒の質問に答えていく。

グレンだけでなく、セラも皆の尖っている長所を見抜いている。

システィーナはその光景に驚きつつも、黒板に書かれた名前を見ていた。

基本的には、各生徒の長所を最大限生かせるようにし、得意分野ではなくとも、各々の長所からの応用が効くように良く考えられている。

生徒の得意不得意を熟知していなければ到底叶わない編成だ。セラはともかく、普段自分の生徒に興味がないようなグレンも一応ちゃんと見ていたらしい。

基本的には各生徒達の得意分野を生かし、得意分野から外れていたとしても、得意分野からの応用で対応できるよう、よく考えられている。これは常日頃から生徒達のことをよく見て、得手不得手を細かく熟知していなければできない編成だ。

普段、自分が教える生徒達のことなどまったく興味がないような素振りのグレンだが、一応、きちんと見ていたらしい。

(先生って、基本ダメ人間だけど……たまにはこういうこともあるかなあ……)

システイーナはどこか微笑ましい笑みを浮かべていた。

『殲滅戦』は1対1の『決闘戦』と違って各クラスから1人ずつ計10名でのバトルロワイヤルだ。この場合、1対1になるとは限らねえ。一時的に手を組んで複数対一もあるかもしれないし、1対1でやりあってる最中に第三者が突然乱入してそいつらを討ち取ったり、つまり、なんでもありだ。要するに目の前の相手に集中するだけでなく、周りの状況にも注意を払い、それで立ち回らないと生き残れねーってことだ。アイザはその辺大丈夫そうだから」

アイザが密かにルミアの護衛をしているため、周囲への気配りができてるのだろうという考えをグレンはあえて語らない。

「はい、先生。『タツグロワイヤル』ってなんだ？」

「ああ、そうだな……これ、今年から初めてやる競技らしいが、各クラスから2名ずつ出して、ゴーレムの大群がいるフィールドで最後の1組になるまで戦う競技だ」

「最後の1組になるまでって、そのゴーレムやられたら負けってことか？それとも他のクラスにか？」

「まあその両方だな。手段は問わない。一時的に組んで特定のクラスを撃破するのもアリだし、漁夫の利を狙うのもアリだ。しかもこの競技、ゴーレムを1体倒せば1点スコアがクラスに加算される。ただし途中で撃破されれば倒して得たスコアがゼロになるなんてルール付きだ。これはハイリスクハイリターンだ」

「うわ……マジか……オイラ達ここに通って数日しか経ってないんだぞ。なんでそんなヤバそうなのにおイラ達選んだんだよ？」

「シヨウ、お前この前の魔術戦教練で戦闘訓練用のゴーレムが攻撃してきた時難なく避けただろ。この競技は魔術をどう使うかよりどういなすかが重要になってくる。このクラスで一番反射神経がありそうな奴が適任だ。アヤトはシヨウと仲が良いみたいだからその補助ってところか」

「……オレはついで扱いか」

「あついや、別にそんなつもりで言ったつもりじゃねえからな」

「別に気にしてませんよ。自分一人だけハブられるなんてことになればクラスで浮いてしまうでしょうし」

「そ、そうか——さて、他に質問は？」

グレンが辺りを見渡す。

「やれやれ……先生、いい加減にしてくださいませんか？」

ゆらりと、生徒の一人が立ち上がった。ギイブルだ。

「何が全力で勝ちに行く、ですか。そんな編成で勝てるわけないじゃないですか」

「なんだよギイブル。これ以上いい案があるのか？言ってみろ」

「……あの、先生、本気でそれ言ってるんですか？そんなの決まってるじゃないですか！成績上位者だけで全種目を固めるんですよ！それが毎年の恒例で、他の全クラスがやってることじゃないですか！」

苛立ちを隠そうともせず、吐き捨てるようにギイブルは言い放った。

「……………え？」

グレンの動きが止まる。

(知らなかったのか……)

その様子から、アヤトは先の疑問が、すとな、と腑に落ちた。グレンはただ知らなかったただけなのだ。

「うむ……そうだな、そういうことなら……」

グレンがギイブルの意見に首肯しようとした、その時だ。

「何を言っているの、ギイブル！せっかく先生が考えてくれた編成にケチつける気!？」

ギイブルに真っ向から反論する少女がいた。システイーナだ。

グレンが焦燥に満ちた顔でシステイーナを見るが、システイーナはそんなこと露知らずクラス一同に向き直ると、真摯な表情で訴えかける。

「皆、見て！先生の考えてくれたこの編成を！皆の得手不得手をきちんと考えて、皆が活躍できるようにしてくれているのよ!?!先生がここまで考えてくれたのに、皆、まだ尻込みするの!?!女王陛下の前で無様

な姿を見せたくないとか、そんな情けない理由で参加しないの!?!それこそ無様じゃない! 陛下に顔向けできないじゃない!」

システイーナの必死の訴えに、クラス中がざわめく。

そう言えば……とか。確かに……とか。あちこちからひそひそと声が漏れる。

グレンの顔から血が引いていく。

「大体、成績上位者だけに競わせての勝利なんて、なんの意味があるの? 先生は全力で勝ちに行く、俺がこのクラスを優勝に導いてやるって言ってくれたわ!それは、皆でやるからこそ意味があるのよ!」

そして、システイーナはグレンに振り返って言った。

「ですよ、先生!」

その表情は、グレンに向けるものとしては珍しく険の取れた、朗らかな笑顔だった。

「お、おう……」

「ふん、やれやれ。君は相変わらずだね、システイーナ。…まあ、いい。それがクラスの総意だというなら、好きにすればいいさ」

ギイブルは皮肉げに冷笑して着席してしまった。

「ま、せいぜいお手並み拝見させていただきますよ、先生?」

ギイブルが挑発的に言う。

「あはは、よかったですね。先生の目論見どおりに行きそうですよ?」

システイーナがそんなことを言って、くすりと笑った。

「ま、せっかく先生がたまにやる気出して、一生懸命考えてくれたみたいですから、私たちも精一杯、頑張つてあげるわ。期待しててね、先生」

「お、おう……任せたぞ……」

珍しくご機嫌なシステイーナと、どこか引きつった笑みを浮かべるグレン。

「なあアヤト、なんか二人の会話噛み合っていないような気がするんだが」

「奇遇だな。オレもそう思う」

一時のテンションに身を任せる奴は身を滅ぼす

「……うーん、駄目だな。掠りもしねえ」

「シヨウには遠距離攻撃は向かないな」

魔術競技祭開催前の一週間は、授業が三コマのみとなり残りの時間は練習時間に当てられる。それぞれのクラスが担当講師の監督の下、魔術の練習に励んでいた。

シヨウとアヤトも最近授業で覚えた攻性呪文アサルト・スベルを唱え、植樹に向かつて電光を撃つ練習をしているのだが、紫電は的に掠るところか、的に寄る気配すらない。

シヨウの魔術狙撃の技量は、クラスの中ではぶつちぎりワースト一位だ。

「はあ…やっぱ代役頼んだ方がいいんじゃないか？」

「……誰に頼むんだ？」

「誰ってそりゃあ……」

シヨウは周りを見渡す。

空を飛んでいる生徒がいれば植樹に魔術を打ち込む生徒がいる。女生徒の何人かはベンチに集まり呪文書を片手に魔術式の調整中だ。

中庭の向こう側では、システイナーナとルミアがベンチに腰掛けて呪文書を広げ、数人の生徒達とあれこれ話しながら、羊皮紙に術式を書き連ねている。時折、セラに術式について質問しているらしく、セラは羊皮紙を指差しながら答えている。

グレンのクラス一同は今、一週間後の競技祭に向けて静かに盛り上がっていた。

「皆楽しそうだな」

昨日までは気後れして尻込みしていたようだが、皆、なんだかんだで少しでもいいから競技祭に参加したかったのだろう。生徒達は生き生きとしながら、自分が出場する魔術競技の練習をしていた。

「…で、なんで全員参加させることにした張本人が疲れた顔で眺めているんだ？」

「単純に、選手を使い回していいことを後で知った上に、あの状況で編

成変えると言いつい出せなかつたからだろ」

「殆ど自滅じゃん。というかなんで怠け者講師があんなやる気になつてたんだ?」

「それも単純に欲だろ。さつき魔術競技祭について調べてみたが、どうも優勝したクラスの担任は特別賞与がもらえるみたいだぞ」

「特別賞与?」

「簡単に言うと金だな。それで位階を上げるために講師たちは研究費に当てるそう。まあ日頃の行いから研究にあてがったりしないだろうが」

「じゃあ金目当てってことか? いやいやいくら怠け者講師でもさすがに………ちよつと本人に確認してくる」

「え? 今から?」

シヨウがグレンのところに駆けて行ってなにか話していると、グレンが大慌てでシヨウを捕まえてアヤトのところまで駆けてきた。

「おいアヤト! なんでお前俺が特別賞与目当てだつてわかつたんだ?!」

「やつぱりそうだったのか」

アヤトの予想が当たっていた。

「……それで、なんか金が入り用なんですか? 学院の魔術講師として収入があるはずでしょ?」

アヤトの問いに、グレンは憂いを湛えた表情で、雄大な幻の城―フェジテの象徴、メルガリウスの天空城が浮かぶ夕焼けの空に目を見る。

「全額未来へと投資したんだよ」

「未来に投資?」

「ああ……明日という無限の可能性のため、そして、より多くの希望を掴むために――」

「ひよつとしてギャンブルでスツたのか?」

「やめてよね、せっかく人が格好良く決めてるのに水を差すの」

「うわあ……マジか。まじで駄目な大人、略してマダオだ」

「誰がマダオだ。最近マダオって言葉よく聞くけどプチ流行してんの

？」

身もフタもないシヨウの言い草に、グレンは口を尖らせて抗議した。

「大体、俺が悪いんじゃないぞ!?あそこでハートの3が来るのが悪いんだッ!4以上のカードだったら、俺はあーッ!」

「……」

シヨウとポーカーフェイスを崩さないアヤトもグレンを冷めた目で見る。

「——というわけで、このことは黙ってください、お二方。クラスの連中に、特に白猫と白犬にバレたらどんな目に遭うか」

「……まあ皆やる気出してるみたいだから水を差すようなことはしませんよ。それで、勝算はありそうですか?」

「……微妙だな。さつき【コール・ファミリア】で他のクラスを偵察していたんだが……やっぱりどのクラスも成績上位者で全種目固めていやがった……ちくしょう、ずるいだろ……優秀な奴ばっか使うなんて、どいつもこいつも勝ちやそれでいいのかよ!?勝利よりも大切なものってあるだろ、くそう!」

(さつきまで自分も同じことやろうとしてたくせに……)

「……ま、いつか」

誰へともなく呟くグレンの顔は、どこかさっぱりしたものだだった。

「ともあれ、当面の食料はなんとか調達しないとな。特別賞与とかも期待してねーが、餓死はごめんだぜ。この学院、シロツテの木とか生えてなかったかな……あれの小枝がありゃ、次の給料日くらいまでならなんとか……」

「さつきから勝手なことばかり……いい加減にしろよ、お前ら!」

突然、激しい怒声が耳に飛び込んでくる。

「……なんだ?」

グレンが面倒臭そうにその方向へ目を向けると、どうやらグレンのクラスの生徒達と他のクラスの生徒達の何人かが、中庭の隅で言い争っているらしかった。

「……おーい、何があっただんだ?」

放っておくわけにもいかず、ため息混じりにグレンがその場所へ向かった。件の生徒達は、今まさに相手へ掴みかからんばかりの一触即発の雰囲気を放っていた。

「あ、先生!? こいつら、後からやってきたくせに勝手なことばかり言ってる——」

2組の生徒、カツシユが興奮気味にまくし立てる。

「うるさい! お前ら二組の連中、大勢でごちゃごちゃ群れて目障りなんだよ! これから俺達が練習するんだから、どっか行けよ!」

カツシユに相対する他クラスの男子生徒も、やはり興奮気味に言葉を吐き捨てる。

「なんだと——ッ!」

「はいはい、ストップ☒」

グレンは取っ組み合いを始めたカツシユと男子生徒の首根っこを掴んで、左右へ強引に引き剥がした。

「あがが……く、首が……痛たた……」

「うおお……い、息が……く、苦し……」

「ったく、くっだらねーことで喧嘩してんじゃねーよ……お前ら沸点低過ぎだろ」

生徒達が大人しくなったのを確認して、グレンが手を離す。

首を解放された二人がむせながら地面に這いつくばった。

「えーと? そっちのお前ら……その襟章は一組の連中だな。お前らも今から練習か?」

「え……あ、はい。そうです……その……ハーレイ先生の指示で場所を……」

比較的大柄な生徒二人を、腕力だけであっさり制したグレンの姿に萎縮してしまっただけらしい。一組の生徒達は先ほどまでの威勢を引っ込め、殊勝に応じる。

「ふーん、そう……」

がりがりと頭を掻きながら、周囲を見回す。

「うーん、まあ、確かに俺ら、場所取り過ぎか……悪かったな。全体的にもちっと端に寄せさせるからさ、それで手打ちにしてくんね?」

「ば、場所を開けてくれるなら、それで……」

なんとなく丸く収まりそうな雰囲気には、様子を見守っていた生徒達が安堵するが――

「何をしている、クライス！ さっさと場所を取っておけと言っただろう！ まだ空かないのか!?!」

怒鳴り声と共に二十代半ばの男がやってくる。学院の講師職の証である梟の紋章が入ったローブを羽織り、眼鏡をかけた神経質そうな男だ。

「あ、ユーレイ先輩、ちーっす」

「ハーレイだ！ ハーレイ！ ユーレイでもハーレムでもないッ！

ハーレイ！アストレイだッ！グレン！レーダス、貴様、何度、人の名前を間違えれば気が済むのだ!?!てか、貴様、私の名前を覚える気、全ッ然！ ないだろッ!?!」

二人の間で、このやりとりはもうすっかりお馴染みらしい。

気楽に挨拶したグレンに、学院の講師ハーレイはもの凄い形相で詰め寄った。

「……で？ ええと、ハー………なんとか先輩のクラスも今から競技祭の練習つすか？」

「……貴様、そこまで覚えてくれないか、私の名前」

ぴきぴきと拳を振るわせるが、ハーレイはつき合ってられんとばかりに話を続ける。

「ふん、まあいい。競技祭の練習と言ったな？ 当然だ。今年の優勝

も私のクラスがいただく。私が指導する以上、優勝以外は許さん！

今年も女王陛下が直々に御尊来になり、優勝クラスに勲章を賜るのだ。その栄誉を授かるに相応しいのは私だ!」

「あつはつはー！ うわー、凄い熱血すねー、頑張ってください、先輩!」

道化じみたグレンの態度に、ハーレイは忌々しそうに舌打ちした。

「それよりもグレン！レーダス。聞いたぞ？ 貴様は今回の競技祭、クラス全員をなんらかの競技種目に参加させるつもりなのだと?」

「え？ ああ、うん、はい、まあ、そうなっちゃったみたいすね………不本意ですけど」

「はっ！戦う前から勝負を捨てたか？負けた時の言い訳作りか？それとも私が指導するクラスに恐れをなしたか？」

グレンが困ったように頭をかいていると。

「あの、話が脱線してますよ？これ場所取りの話ですよね？」

セラがこの状況を打破しようとし、ハーレイとグレンの間に割り込んだ。

「ちっ……まあ、いい。さっさと練習場所を空けろ」

「あー、はいはい。あの木の辺りまでで充分ですかね？」

セラに乗るようにグレンが練習用の面積を考慮して、場所割りを提案するが――

「何を言ってる？お前達二組のクラスは全員、とつとこの中庭から出ていけと言っているんだ」

「は？」

「え？」

そんなハーレイの一方的な言葉に、その場にいた二組の生徒達が凍りついた。流石にグレンも渋面になり、セラは憤慨しながら抗議する。

「それは流石に横暴ですよ！こつちも真剣に練習しているのに！」

「何が横暴なものか」

ハーレイが吐き捨てるように言い放つ。

「もし、貴様に本当にやる気があるのであれば、練習のために場所も公平に分けてやってもいいだろう。だが、貴様にはまったくやる気がないではないか！なにしろ、そのような成績下位者達……足手まとい共を使っているくらいなんだからな！」

「――っ!？」

「勝つ気のないクラスが、使えない雑魚同士で群れ集まって場所を占有するなど迷惑千万だ！わかつたならとつとと失せろ！」

その酷い言い草に二組の生徒達は一気に表情を暗くする。そんな

中――

「《雷精の紫電よ》」

シヨウから放たれた紫電がハーレイの頭の上スレスレを飛んで行

き後ろの木に当たる。ちなみにハーレイの前髪が何本か焦げた。

「お、少し掠った」

「なっ!? 誰だ今のをやったのは!？」

「あつ、オイラっす」

「なっ…東方からの留学生、シヨウソウマ貴様! 何をしたか分かって…!」

「いやーすみませーん、狙撃の練習してたんすけど、間違えてそっちに飛ばしてしまいやしたー別にさっきの先生の発言にムカついて後退を始めてる生え際に当てようとしたわけじゃないっすよー」

(絶対当てる気だったな…)

「き、貴様…留学生だからと…ふざけるな!」

「ふざけるなだど…?」

普段ののほほんとしたような感じが鳴りを潜め、どこか冷めたような目でハーレイを見るシヨウ。

「ふざけてるのはそっちだろ? グレン先生を目の敵にするのはまあしょうがない。日頃の行いがあれだからな「おい」けどな、他の皆を悪く言うのはお門違いだ。『足手まとい共』だ? 『使えない雑魚』だ? 講師以前にいい年した大人が子供にそんなこと言うなんて最低だぞこのハゲ!」

「は、はげ…」

『『ふっ!』』

何処からか笑いを堪えようとしたのが間に合わずに吹き出した音がいくつかした。

「き、貴様…学生の方で講師である私に暴言を…!」

ハーレイも流石に我慢の限界なのか、決闘用の手袋を外そうとしていた。

そんな張り詰めた空気の中、二人の間に割って入る影があった。
「あく、はいはい…シヨウもハーなんとか先輩も落ち着いてくださいな」

「何だグレンリーダーダス。私はこの無礼者に灸を据えねば…」

「ハーなんとか先輩、うちの生徒が失礼しました。ですがお言葉です

が、うちはこれが最強の布陣なんすよ。もちろんうちは、優勝を狙ってますよ。油断して寝首をかかれぬことつすね！」

「フン…口ではなんとでも…」

「給料三ヶ月分だ」

「な、何イ…ツ!?!」

「俺のクラスが優勝する、に俺の給料三ヶ月分だ」

グレンの宣言に、ハーレイは当然、周囲全員がどよめいた。

特にグレンのクラスの生徒達が、ぽかんとした表情でグレンを見つめている。

「しよ、正気か、貴様…ツ!?!」

「さて、どうしますかね？ 先輩。この賭け乗りますか？ いやあ、三ヶ月分は大きいですよねえ？ もし負けたら先輩の魔術研究が、しばらく滞つちまいますよね…?」

「ぐ…う…ツ!」

(金欠の癖に何見栄張ってるんだ?)

大方ムカついたから後先考えずに強がったんだろう。ギャンブルでもこんな感じだったんじゃないかというのがアヤトによる見解だった。

「くつ…そこまで言うならいいだろう。私も自分のクラスに給料三ヶ月分だ！」

「や、さくつすが先輩。そうこなくつちや面白くないですよね。いやあ…先輩くらいの教師なら給料も俺と違って相当なんでしょうねえ…ごつつあんです」

「き、貴様…」

「そこまでです、ハーレイ先生」

凜と涼やかに通る声が、ハーレイの言葉を封じた。

「それ以上、グレン先生を愚弄するなら、私が許しませんから」
声の主は、いつの間にか駆けつけてきたシステイナだった。

「貴様、システイナ…フィーベル!?あの名門フィーベル家の…くつ!?!」

ハーレイはシステイナの介入に明らかな狼狽を見せている。

「そもそも、練習場所に関する貴方の主張にはどこにも正当性がありませんし、グレン先生に対する侮辱行為も不当です！これ以上、続けるなら講師として人格的に相応しくない人物がいることを学院上層部で問題にしますが、よろしいですか？」

「ぐう…ッ!?こ、この親の七光りがあ…ッ！」

明らかに余裕をなくしたハーレイに、システイーナは余裕の笑みを向ける。

「今、ここでそんな低俗な争いをせずとも、グレン先生は逃げも隠れもしません。一週間後の魔術競技祭で正々堂々とハーレイ先生率いるクラスと戦うでしょう……」

そして、どこか嬉しそうな、期待に満ちた表情でシステイーナはグレンに振り向いた。

「ですよね、先生!？」

「お、おう……この俺が教えるんだ。必ず勝つぜ」

「く、精々首を洗って待ってろ、グレン!!レーダス！ 集団競技になった際には、まずお前のクラスから率先して潰してやるからな！」

そんな捨て台詞を置いてハーレイは中庭から去っていった。

「……………なあ先生、あのクズに喧嘩売ったオイラもだけど、あんな賭け持ちかけて大丈夫か？」

「大丈夫なわけねえだろ」

「じゃあなんで？」

「いや、勢いというか……ついな……」

「それにしても、少し見直したわ。グレン先生……もなんだけど、シヨウまで教師相手に随分な啖呵を切ったじゃない」

「いや、別にお前らのためじゃないんだが……」

「んー……オイラもただむかついたただけだからな」

「何？照れ隠し？」

もちろん、照れ隠しとかではなく、紛れもない事実である。

「いや、先生。アンタ漢だよ！」

「いつものほほんとしてるシヨウが俺達のために怒って……」

「僕、見てて感動しました！」

二組の生徒たちがグレンとシヨウに欣快の言葉を浴びせる。

「ほら、みんな！二人があそこまで言ってくれてたんだもの、絶対に負けるわけがないんだから！みんなで競技祭、勝ち抜くわよ！」

『『『おおおお——っ!!』』』』

システイーナのあとりに、セラ含むクラスの生徒達皆のテンションが最高潮に上がっていた。

珍しくグレンへ、ご機嫌な笑みを向けるシステイーナ。

そんなシステイーナへ、グレンは恨めしそうに引きつった笑いを向ける。

「…なあアヤト」

「なんだシヨウ？」

「気が変わった。『タツグロワイヤル』に勝ちに行く。気張っていくぞ」

なんやかんやで、シヨウの方にも火が点いていた。

「……………まあ、オレができる限りフォローする」

そんなシヨウにアヤトはポーカーフエイスを崩さずに淡々と告げる。

◇◆◇

「そういえばあんた、来週学校の方で競技祭があるんだって？」

下宿先に戻ったシヨウが下のバーで晩飯を食べていると、ママであるマダムから話題を振られた。

「おう、オイラのクラス全員で参加するんだ」

「へえ、あそこは少人数を使い回すのが恒例になってたのに、あんたのところは随分とももの好きな講師がついてるんだね」

「もの好きっていうか、授業以外はてんでやる気のない駄目人間だけだな」

「あら、駄目人間ならここにもしもいるじゃないか」

カウンター席の方を見ると、しこたま酒を飲んで酔い潰れているレ

イがいた。

「おいおい、オレのいったいどこが駄目人間なんだよ。今日もちゃんと仕事こなしでこうして酒で自分を労ってるってのに」

「自分を労うのに今日の報酬分使い果たす馬鹿が駄目人間以外なんだって言うんだい。あんたもう少して来月分の家賃払う日だつての忘れてないだろうね」

「ああ、大丈夫大丈夫。そのうち払うから」

レイの適当な返事にマダムは溜息を吐く。

「あー……なんていうか、レイさんとうちの先生って似てるどころあるな。やる気出したのもギャンブルですっちゃまった給料の代わりに特別賞与ってやつで食いつなごうとしてるし」

「ギャンブルで給料すっちゃまうたとんだ駄目人間だな。一度顔を拝んでみたいぜ」

「拝みたいなら競技祭に観に行ったらどうなんだい？ どうせあんた仕事がなかなかこないから暇だろ」

「えー、面倒くせえ。つーか俺こいつがどこの学校に通ってるか知らねーし」

「なんだい聞いてないのかい。アルザーノ帝国魔術学院ってあんたがこの間まで行ってたところだよ」

「……………え？」

マダムからの思いもなかった情報に、レイの動きが止まる。顔には今日一番の驚愕を貼り付けていた。

「え？ レイさん学院に行ってたの？」

「こいつの前の仕事の同僚がその講師を勤めるってなった時にサポートにまわってたんだよ」

「……………おいシヨウ、その駄目講師って、ひよっとしてグレンって名前か？」

「そうだが…………」

「へえ……」

それから顎に手を当て、数秒。何かブツブツ言ってるようなのでシヨウがレイの顔を覗き込むと、とんでもなく悪い顔をしていた。

(い、嫌な予感――)

「はあ〜い。というわけで、二組のクラスの元副担任の万事屋レイさんが期間限定で戻って参りました」

「二「なにがというわけなんだ!」二」

翌日。数ヶ月振りに現れたレイに、グレンとセラ含む二組の面々は戸惑いを隠せないでいた。

「誰だ?」

「あそつか、アヤト君はその時まだいなかったね。グレン先生がうちのクラスに来た時に副担任として一緒に来たんだよ。その後セラ先生と交代して辞めたけど」

レイと面識のないアヤトに、女顔の小柄な男子生徒セシルが簡潔に説明してくれた。

「えつと…レイ君久し振りだね。どうしてここにいるの?」

突然の再会に戸惑いつつも、セラがクラスを代表して問いかける。

「いやーシヨウから魔術競技祭の話聞いてよ。元副担任としてなんとかしてやらんととはせ参じたわけよ」

「は?お前シヨウと知り合いなのか?」

「知り合いもなにも、俺のところには居候してるぞ」

「二「ええええええええええええ!」二」

教室内が驚愕の声で反響した。

「今の話本当なのシヨウ!」

全員シヨウの方を向くと、なんとも気まずそうな表情をしていた。

「お、おう。オイラもレイさんがここに仕事で来てたのを昨日初めて知った…:よくよく考えたら、酒飲みながら知り合いについてよく愚痴ってた知り合いってグレン先生のことだったんだな」

「は?俺についてなに言ってたんだ?」

「年下の子供に発情する変態ホモン||ロリーダスだって」

「表出ろや腐れ天パああああああ!今日こそ決着つけてやらあああ

あ！」

自分の知らぬ所でとんでもないあだ名をつけられたことを知りグレンは叫ぶが、レイは悪びれた様子はない。

「ままま、怒るなよ。ほんの冗談だって。そんなことよりもだ。シヨウの話だとお前クラスのこと馬鹿にしたハゲに啖呵を切ったんだって？ いやあ、それ聞いて俺まじ感動したわあ。だから俺も一肌脱いで協力してやろうと」

「協力だあ？ 別にお前の助けなんて——」

レイは断ろうとするグレンのそばに寄り、

「……特別賞与」

「——!？」

誰にも聞かれないようにぼそりと出た単語にグレンが凍り付いた。

「シヨウから聞いたぜえ。優勝したクラスの担任は金が貰えるんだろお？」

「お、お前……」

「山分けとしては2対8が妥当だな。あつ、8は俺の分な」

「ちよつ、何勝手に——」

「まあ取り分の詳細は後にして、だ。お互い金欠で困ってたんだ。仲良くやっていこうぜえ」

レイは他の人間からは見えない角度でグレンに笑顔を向ける。

ニヤリと黒いニヒルなその笑みはまさしく悪魔の笑みだった。

「そ、そうか。来てくれて本当に助かるぜ。お前がいたら百人力だ」

もし断ればセラ辺りにバラされる。そう悟ったグレンは作り笑いで快くレイを迎えた。

(先生、本当にすまん)

それを見てシヨウは秘かに心の底でグレンに謝罪するのだった。

魔術競技祭、開催前

「よし、いいかテメエら。この俺が来たからにはテメエらのクラスは優勝したも同然だ。当日までに鍛えてやる」

「ふん、何を言い出すかと思えば……冗談はその辺にしておいてくださいよ。レイ先生は魔術が使えないというのに、僕達をどう鍛えるのですか?」

強引な形で戻ってきたレイに、インテリ然と澄ましているギイブルが相変わらず嫌味な物言いので茶々を入れてくるが……

「おいおい、そう小馬鹿にするような言い方しているとモテねえぞ新八」
「誰が新八ですか!? 僕の名前はギイブルです!」

「八みたいな眼鏡かけてるだろ」

「八みたいな眼鏡をかけてる生徒僕以外にいるでしょうが!」

「ごちやごちやうるせえな。話が進まねえから黙ってる。眼鏡がち割るぞ」

脅迫紛いの言葉でギイブルを黙らせて、話を続ける。

「まあ、俺に魔術なんて教えることはできねえが、知恵を授けることはできる。この俺が確実に優勝するための秘策を考えてきた」

「えっ、マジで!?!」

「なんなのレイ君。その秘策って?」

いつになく頼もしげなレイにグレンとセラ、クラスが注目する。果たして、自信ありげな彼が思いついた方法とは一体何なのだろうか。

「なに、簡単なことさ。当日までに」

「当日までに?」

「他クラスの出場選手全員闇討ちすればいいんだよ」

「二「アホかああああああああ——ッ!?!」」

途轍もなく酷い策だった。当然クラス中が非難轟々となる。

「え? 気に入らなかつたか? 競う相手がいなければ自動的に優勝になるだろ」

「ふざけんじゃないわよ! そんな汚い手段で勝っても全然楽しくない

わ！」

「卑劣にも程がありますわよ！」

「人として最低だぞ！」

「そうだそうだ！」

「成程その手があった「グレン君？」却下じゃぼけえ！」

全員（？）の反対意見が出てレイの策は即却下された。

「真面目だなあ……じゃあ相手と直接対決する競技に出る奴俺が見る方向で」

「結構絞られたな」

「最初からそんな感じで真面目にやってく下さい」

「さっきのはほんの軽いジョークだって。お前等が本気か試したんだよ」

（（絶対にやりそうだった……））

レイの手のひら返しに不満を抱きつつも、『決闘戦』と『殲滅戦』、『タッグロワイヤル』に出る面々がレイのところを集まる。

「よし、これからテメエらを担当するぞ。やることは簡単だ。シヨウトなんかパツとしない茶髪の奴の二人で、あとの奴は一人ずつ俺が相手する。遠慮なくかかってこい」

「………はあ？」

システイーナ達はレイが出してきた訓練の内容を理解できなかった。

「僕達を舐め過ぎじゃないですか？こっちは魔術を使えるんですよ」

決闘に出場するギイブルが再び茶々を入れる

「バーカ。使えると戦えるは全然違うわ。座学しかほとんど学んでいねえテメエらには足りねえ要素だ」

「足りないって…魔導教練には真面目に取り組んできますが」

「あんなの予め想定された状況下を用意したもんじゃねえか。本当に求められるのは、常に変化する状況下で咄嗟の判断ができる行動力なんだよ」

「くっ、だ、だとしても」

口喧嘩では誰にも負けないレイの言葉に負けじと食いつく。

「じゃあ実際にやって見せるよ。いいだろグレン？」

「言つとくがやりすぎるなよ」

「わあーてるって。ほら、シヨウに根暗そうな奴、先ずはお前からからだ」

「あの、ちゃんとアヤトつて名前があるんですが」

悪口に近い呼ばれ方に文句を言いながらも、アヤトはシヨウと共に前に出る

「名前知らなかったから仕方ねえだろ。あつそっぴいば俺他の奴等の名前覚えてなかったわ」

「「おい」」

「じゃあこれを機に全員の名前覚えたらどうですか？」

「へっ、気が向いたらな！」

レイはそう呟いて、腰に差していた木刀に手を掛けた。

そして次の瞬間、レイの姿は二人の前方50センチほどの位置に移動していた。木刀を水平に振るい、二人の胴辺りめがけて薙ぎ払う。

異変に気付いたギイブルとカツシュ、システイナーが息を呑み、アイザが視線だけで彼を追う。

「ちよちよちよちよちッ!?何やろうとしてる!？」

グレンが止めに入ろうとするが――

「うお!？」

「――」

バックステップ1歩だけで、シヨウはレイの攻撃を易々と避けた。それは意識的に1歩後退ったというよりは、例えばタンポポの綿帽子が振るわれた木刀の気流に乗って移動したような錯覚すら生まれるほどに自然な動作だった。

アヤトの方は、上体のみを後方に仰け反らすことでギリギリで避けた。

しかしレイも、自分の攻撃が避けられた驚愕で動きを止めることはしない。ほとんど反射的に木刀を振り上げ、もう1歩踏み込んで即座に2撃目を繰り出した。だがアヤトは上体を後方に反らした状態から両手を地面につけ、バク転をしてそれも回避した。

振り下ろされた木刀が空を斬り、そのまま地面に激突して土煙が舞う。土煙が晴れた時には地面に大きな窪みができていた。

後方へとアヤトが距離を取った後の追撃はない。

「……………」

クラス中の生徒達が目を剥き、口をあんぐり開けて硬直する中、レイの顔がシステイーナ達の方へと向いた。

「とまあ、こんな感じで対処できればいい。わかったか？」

「なにが『わかったか？』だあ？このボケがあああ！」

「べぎらまあ!？」

レイの後頭部にグレンのドロップキックが叩き込まれた。

「いてえな。何すんだグレン！」

「それはこっちのセリフじゃぼけえ！やりすぎるなって俺さつき言っただよな!?!なのに初っ端からなにやらかしてんだよ!?!当たったら二人共確実に死んでたぞ！」

「は？制服になんかの術式がついてるってお前この前言ったじゃん。だからこれくらい大丈夫だと思つて」

「エンチャント永続付呪されてるのは気温・湿度調節魔術黒魔【エア・コンディショ

ニング】で、防御用じゃねえよ！」

「えっそうなの？」

「そうなのって、人の話ちゃんと聞いとけよ!？」

グレンからもたらされた情報に、レイは冷や汗をダラダラと流し始めた。

（や、やつちまった！これじゃあ俺誤つて生徒を殺しかけたやべえ奴じゃん！誰も教わろうなんて思わねえよ！は、早くなんとかしねえと——）

「い、いやー、ちよつと小突く程度の力しか出してないのにこの辺の地面思つてたより柔らかくない？落とし穴でも仕掛けられてたのかもしれねーな。きつとどっかのクラスが仕掛けた罠なんだろう。うん、きつとそうだ。危ない危ない。お前ら気を付けろよー」

「……………」

「やめて！そんな目で俺を見ないで！」

棒読みで誤魔化しだしたレイを見て何とも言えないシステイーナ達の視線が痛い。

「ま、まあ二人共怪我が無くて良かったね。レイ君手伝いに来たのならちゃんと加減とかもしないとメツだよ」

「…はい。すみませんでした」

フォローに入る形でセラがレイを軽くしかる中、グレンはやれやれと呆れながらシヨウとアヤトに声を掛ける。

「にしてもお前らすげーな。レイの初撃を避けれる奴なんて早々いねえぞ」

「いやーそれほどでも」

「あれですかね。火事場の馬鹿力つてやつ」

「いや、火事場の馬鹿力であんなアクロバティックな動きできるか。サーカスにでもいたのか?」

「いえ、ここに通うまで普通のところにいました。そう言うグレン先生達はあのレイ先生とどういう関係なのですか?」

「は?..どういうつて?」

「さつき言いましたよね? 『レイの初撃を避けれる奴なんて早々いない』と。どういうところにいればあんな言葉が出たか気になったので」

「(こ、こいつ妙に鋭い!) あ、あつれ? 俺そんなこと言ったつて?」

「いや、言ってたぞ。そういえばグレン先生はレイさんと前の仕事の同僚だって聞いたが、どんな仕事についてたんだ?」

「えっ、いや、その……」

流石に帝国軍が一翼、帝国宮廷魔導士団、特務分室に所属して外道魔術師をぶっ殺してましたなんて言えるわけもなく………

「あ、遊び人やってました」

グレンは思いつきり納得できる職業を答えた。

「遊び人?」

「それただの無職じゃん。なんかピッタリだけど」

「だああああ—— ツ! この話は終わりだ、終わり! 今は練習の時間だ

ぞ！」

後になつて恥ずかしくなつてきたグレンは強引に話題を変えた。

「さっきのを見てお前らの回避能力が高いのは改めてわかつた。あと必要なのは攻めと連携だな。出場するのはクラスの数だけチームがあるから、合計十チーム。それに加えて魔導用ゴーレムがいるんだ。よそのクラスをちよいと使い魔に偵察させてきたんだが、正直回避にばかり徹してばかりだと正直勝率が低い」

「けど先生、オイラの『シヨック・ボルト』全然当たらねえぞ」

「あー……そりゃあれだ。マトモに使えないなら、マトモに使わなければいいって話だ。ようするに——」

グレンが少し考え込んで、シヨウとアヤトにとある提案をした。

「……まあ、確かにそれならいけるかもな」

「問題は完全にものにするための時間ですよ。本番まであと数日ですし」

「そこなんだよな……練習を見てやるにも、俺とセラは他の競技に出る奴につきつきりになつてしまふし……」

ちらりと、暇そうな人間の方に横眼を向け、はあと思いたため息を吐く。

「仕方ねえ。猫の手どころか、マダオの手も借りてえところだ」

本当は頼りたくねーがな、とグレンは頭をボリボリ搔く。

結局、クラスに危ない奴という印象がついたレイはシヨウとアヤトを担当する運びとなつた。レイからは攻撃しないという条件付きで。

そんなこんなで、瞬く間に一週間が過ぎた。

今日はアルザーノ帝国魔術学院、魔術競技祭、開催当日。

そして、アルザーノ帝国女王アリシア七世を来賓として学院に迎える日である——



帝国北部イテリア地方と、フェジテのある帝国南部ヨクシャー地方を南北に結ぶ、アールグ街道を南下する馬車があった。

「ああ……かつたるう、ねえこれまだ着かないの？」

馬車の中にて。窓の外の光景を眺めながら気だるそうにぼやく奇妙な青年がいた。白い髪、190台の長身、目を黒い目隠しで覆うという不審者スタイルの20代の男性だ。

「こうも長い時間座ったままだと尻が痛くなってくるよ」

「文句ばかり垂れるなノクティス。それでも速い方なんだぞ」

目隠しの男性の向かいの席に腰掛ける40代の男性が咎める。刈上げ頭でアゴヒゲを蓄え、サングラスを掛けた、強面の男性だ。

「いやね。それはわかってますよネイモス部長。ただね、転送法陣があつたときは移動が凄く楽だったから」

転送法陣とは、離れた場所と場所を繋いで一瞬で移動することを可能とする、超高等儀式魔術を補助する魔導施設である。敷設に適した土地の霊脈の関係上、世界中のどこにでも自由に敷設できる代物ではなく、おまけに敷設には莫大な金と時間がかかる上に、法陣を活用できるのは魔力操作に長けた人間——魔術師だけという欠点もある。

だが、それでも都市間移動を駅馬車や徒歩、船に頼るこの世界では便利極まりない代物だ。近年開発された蒸気機関という新しい動力源を利用した鉄道列車の整備も現在、政府の開発条項にあがっているが、実用化はまだまだ当分先、転送法陣に代わる物ではない。

「帝都オルランドと学院を繋ぐ転送法陣は一ヶ月ほど前のテロリスト襲撃で使い物にならなくなって復旧のめどは立ってないって話じゃないですか。なのに陛下もわざわざ馬車で遠出する必要ないでしょうに……ていうかあの人戦争回避の為の和平協定締結とかで忙しい上に魔術師への世間の風当たりが強いでしょ？」

「不安定な情勢だからこそだ。由緒正しい学院の競技祭に来賓として顔を見せることで大衆に陛下の威厳を示す必要がある。それに

……

「それに？」

「……親がしばらく会っていない子の顔を見たいというのに理由なん

ているか」

「あー……そうだった」

馬車の中がしんみりとした空気になる。

「でもなくあそこの魔術競技祭すつごくつまらないんだよなく毎年特別賞与目当てで優秀成績者ばかり使い回してて……僕ら面倒くさくてよくばつくれたんだっけ」

「そういうえばお前達の母校だったな……だが今回ののはひと味違うみたいだぞ」

「ん？」

「なんでも二ヶ月くらい前に来た新しい魔術講師はクラス全員を出場させるらしい。東方からの留学生も含めてだ」

「へえ？そりや随分な物好きだね。どんな奴か見てみたいよ」

「名前は確かか……グレン＝レーダスだったか」

「……………マジ？」

「マジだ」

魔術講師の名前を聞いた途端、

『グレン、お前やっぱ講師目指せ』

『ちよっ、いきなりなんてこと言うんですか先輩』

『だっってお前魔術で戦うことに向いてねーし、まともにやろうとすればマジで死ぬぞ。死んだらマジビンタな』

『デリカシー!?!』

「……………そうか。あいつ講師になったんだ」

目隠しの男性、ノクティスの気だるそうな表情が一変。口角を上げて、楽しそうに笑みを浮かべていた。

「きつと楽しくなるな」

◆◆

——夢を、見る。

それはルミアにとっては、もう何度見たかわからない夢。

だから、ああ、またあの夢だ……と胡乱な意識の中、ルミアは漠然
と思った。

「うう…ひつく……おかあさあん…私を捨てないでよお…いい子に
……いい子にするから…わがまま言わないから…私のこと嫌いにな
らないでえ……」

幼い頃の私にとって母は私の世界の全てだった。だから母から捨
てられた私は、世界の全てから嫌われてしまった、要らない子になっ
てしまった、そんな風に感じていた。

母に捨てられたと思つて僻み、お世話になつていた家の人達に毎日
当たり散らして屋敷を飛び出した。

しばらく森で泣いていると、誰かが声をかけてきた。

フード付きローブを纏つていて、顔が見えなかったが後で男の人だ
と分かった。

『こんなところで何してる。早く家に帰れ』

「帰る家なんて、ないっ……」

私は半分ヤケクソ気味に自分の中に溜め込んでいる物を彼に吐き
出した。母親に捨てられた嘆き、誰からも必要とされない悲しみ、誰
一人として味方のいない絶望。全部、全部、吐き出した。知りもしな
い相手に私は本音をぶつけていたのだ。

全ての話を聞いた彼は私に告げる。

『母親に捨てられたのは偽りない事実だ。そこは変えようがないし、
そのあたりの事情を理解しろつても無茶な話だ。本当に親に愛想
をつかされたのなら、なんでその辺の森に捨てずに他の家に預けられ
てる?』

まるで全て知っているかのように彼は言葉を紡ぐ。

『誰も味方がいないならなんでその家の人たちは悲しみに暮れるお前
を根気強く向き合おうとしてくれる?自分は要らない子ならなんで
その人たちは引き取った?本当に味方がいないのかよく考えろ』

彼の言葉に私は思い当たる節があった。私のことを引き取ってく
れたフィーベル家の人達。どんなに私が当たり散らしても、酷い喧嘩
をしても、あの家の人達は私を追い出したりはしなかった。いつも私

のことを心配して、守ろうとしてくれていたのだ。それにどうして気付けなかったのだろうか。

『ちゃんと話し合って謝ればいい……………無事ここを切り抜けられたら話だが』

周りを見渡すと、何十人というかもしれない悪い魔術師達が出てきた。

どうも私をシステイと間違えて攫いに来たらしい。

『事前調査も碌にできない馬鹿どもの集まりか……………雑魚だな』

すると彼は私を庇うように魔術師達の前に出る。

『言っておくが俺は正義の味方じゃない。だが、もし、俺とまた会えたなら……………』

「ルミアア？ ほら、そろそろ起きないと……………」

「……………むにゃっ。」

ゆさゆさと揺さぶられ、ルミアの意識が夢の中から現実世界へ舞い戻る。

「あれ？……………ええと」

ルミアが寝ぼけ眼をうつつすらと開ければ、そこはシステイナと共同で使っている、いつものフィーベル邸の一室だ。華やかな文様が描かれた絨毯、壁の燭台、磨かれたオーク材の机に椅子など、部屋に据えられた調度品の数は控えめだが、どれも品が良い。

自分はゆったりと丈の長いネグリジエ姿で、ふわふわの羽毛布団を抱きしめ、ベッドの上で寝そべっている。

そのベッドのそばにはシステイナがいた。

ゼンマイ式の壁かけ時計へ目を向ける。朝の七時過ぎだ。窓から差し込む朝の陽光と、カーテンを揺らしながら吹き込む爽やかな風。本日はよい日和になりそうだ。

「……………早いね、システイ」

「ほら、まあ、私はその、やることあったから……………そんなことよりもほら、今日は魔術競技祭なんだし、お父様とお母様は仕事でいないし、もう起きなきゃ」

「うん、そうだね……」

ふわ、と小さくあくびをしてルミアは身を起こした。

「私、下で待つてるから。……二度寝しちやだめよ？」

「……しないよー」

「と、言つて二度寝したことが今まで三回あつたわよ」

「あはは、そうだったっけ？」

互いに苦笑いを交わしながら、システイナは部屋から出て行き、ルミアはベッドからのそのそとした動作で降りる。絨毯の柔毛がルミアの足の裏を微かにくすぐつた。

「久しぶりにあの夢、見たなあ……」

ルミアはまだ少しはつきりしない頭のまま、夢の内容に思いを馳せた。

今からおよそ三年前、エルミアナとして生きていた今までの人生を全て否定され、ルミアとして生きていくことを余儀なくされ、フィーベル家に引き取られた頃の話。

母親から捨てられたという負い目から、何もかもが信じられなくなり、この世界に自分の味方はいない、自分は一人ぼっち、自分は世界で最も不幸な子、と荒れていた頃。

ルミアはアイザと出会った――

「どうして今になつてまた、あの頃の夢を見るんだろう……？」

もう、全て吹っ切ったはずだ。

考えようによっては母親がしたことはルミアにとって悪いことばかりではなかった。システイナと友達になることができたし、なにより自分を助けてくれたアイザと出会うことができた。

助けたのは任務だったからと言うアイザの返答にほんのちよつとだけ不満だけど、

それでも今の自分はその頃よりも前向きに生きている。エルミアナとして何不自由なく生きていた頃とは違い、人生に新しい目標もできた。

全て、吹っ切ったはずなのだ。

「……ううん、吹っ切ったって……思いたいだけなのかな……？」

なんとなく、またこんな夢を見た原因には心当たりがある。

今日、学院にあの人が——かつて、自分を捨てたあの人があるのだ。夢の中の出来事を体験する切欠、全ての元凶が、今日、学院にやって来る。どうやらその事実は自分にとって、思っていた以上の心労だったらしい。

「……………」

ルミアはベッド横に据えてある小さな丸テーブルの上に置いてあった楕円形の真鍮製ロケットを手に取り、その蓋を開く。中には何も入っていない。否、正確には、かつてそこには何かが入っていたらしく、その何かが剥ぎ取られたような痕が残るのみだ。

ルミアはしばらくの間、無言でそれを見つめ、やがて何かを振り払うかのように、軽く頭を振りながら、その蓋を閉じた。

ロケットに繋がる鎖の端を両の手でつまみ、首の後ろに回して留め具を合わせる。

「よし、今日は頑張ろう」

一つ、小さく気合を入れて、ルミアは自分の衣類が納められたクローゼットに向かって歩き始めた。

魔術競技祭、開催

いよいよ女王陛下を歓待するその時が近づいていた。

魔術学院正門前は、女王陛下の行幸を出迎えるため、学院関係者でごった返していた。

「な、なんかグレン先生？せこけてるな」

「……ダイエツト中なんだろう」

シヨウとアヤトが担任のグレンの方をちらりと見ると、この一週間で随分とやつれている様子だった。しかも校庭に生えてるシロツテの木の枝を口にくわえている。

賭け以前に今日生きられるのかすら怪しい。

ちなみにレイは正式な学院関係者ではないためこの場にはいない、

正門から本館校舎の来客用正面玄関に向かって人垣の道ができている。先発で到着した王室親衛隊の面々が周囲に目を光らせ、あふれかえる生徒達を仕切っていた。

「女王ってことは、この国のトップってことだよな？」

「まあ、そうなるな。帝国を建国した初代国王タイタスの後の歴代全ての王が女王らしい」

「え？全員女性？ずっと王家に男が生まれなかったのか？」

「さあ？どうなんだろうな」

シヨウがふとした違和感に気づいたその時だ。

「女王陛下の御成りいっッ！女王陛下の御成りいっッ！」

人垣の道の中央を、馬に騎乗した衛士が叫びながら駆け抜けて行く。

それを受け、待機していた楽奏隊が歓迎のパレードマーチを演奏し始めると、生徒達一同は大歓声を上げながら盛大な拍手を巻き起こした。

爆音が辺り一帯を支配する。やがて、人垣でできた道の間を護衛の親衛隊に囲まれた豪華な馬車が悠然と進んで行く。女王アリシア七世が窓から身を乗り出して、生徒達の歓声と拍手に応えるように手を振ると、さらに拍手と歓声の音量が上がった。

そんな盛況ぶりの最中、アイザはふと、ルミアを流し見る。ルミアは首にかけられたロケットらしいものを手に、それを開いていた。

(……まあ、そう簡単に割り切れないか)

彼女はルミアアインジェルが本名ではない。本当の名前はエルミアナイレルケルアルザーノ。帝国王室直系の正統な血筋を引く、元・王位継承権第二位——つまりはアルザーノ帝国の王女様だ。

ルミアは本来ならば、このような場所にいるはずのない貴人なのだ。だが、三年前、ルミアが『感応増幅者』と呼ばれる先天的異能者であることが発覚し、様々な政治的都合から表向きは病で崩御なされたとして、その存在を抹消されたのである。

その裏事情はとても複雑だ。

アルザーノ帝国王家の始祖は、隣国のレザリア王国王家の系譜に連なっている。それゆえにアルザーノ帝国とレザリア王国は、互いの国家の統治正統性や国際件以上の優位性について、常に揉めに揉めてきた関係だ。おまけに帝国王家の統治正統性を保証する帝国国教会を、レザリア王国を事実上支配する聖エリサレス教会教皇庁は異端認定しており、両教会の関係もすこぶる悪い。

そんな中、帝国王室の血筋から悪魔の生まれ変わりであると、いまだ広く堅く信じられている異能者が生まれてしまったことが明るみになりかけたのだ。

もし、エルミアナの存在が外部に漏れれば国内混乱は避けられず、神の子孫であるとされる帝国王家の威信は地に堕ち、常に帝国の併合吸収を狙うレザリア王国や聖エリサレス教会教皇庁が知れば、第二次奉神戦争勃発の引き金になりかねない。

アルザーノ帝国は良くも悪くも神聖なる王家に対する民衆の絶対的な威信でもっている国である。エルミアナの存在は帝国を根幹から揺るがしかねない猛毒だったのだ。

そのためエルミアナ王女は表向き病死とされ、密かに処分されることとが決定した。国家を背負い立ち、国民を守らねばならない女王と帝国政府の苦肉の決断だった。

そして、様々な思惑と権謀術数の果てにエルミアナ王女——ルミア

は今、システイーナのそばにいる。

(別にルミアが悪い訳じゃないのにな)

……自分の意思に関係なく家族の下を去ることを強いらられ、環境をぐるりと変えられ、当時の彼女はどんな気持ちだったか……否、その複雑な気持ちはきつと今も彼女の中に傷として残っているんだろ。だからアイザからは何も言えないし、姉妹同然の関係であるシステイーナですらどんな言葉をかけていいかわからないといった様子だった。

◇ ◆

『我が国の未来を担う若き魔術師の卵達よ。その溢れる才気のまま、存分に力を競い合ってください。それでは、アルザーノ帝国女王アリシア七世の名のもとに、魔術競技祭の開催をここに宣言します』

「二「わあああああああ！」」

魔術競技祭開催式では、魔術学院の敷地北東部にある魔術競技場にて、開式の言葉、国家斉唱、関係各者の式辞、生徒代表による選手宣誓——式は粛々と進んでいく。

そして、女王陛下の激励の言葉と共に開会宣言を行われ、競技場が拍手喝采で響き渡った。

まるで石で作られた円形の闘技場のような構造の競技場の中央、芝生が敷き詰められた競技用フィールド上に競技に参加する生徒一同が集合整列している。

観客席にいるのは学院の生徒達だけではない。生徒達の両親や、学院の卒業生など、学院の関係者が続々と集まっている。

「おや？ 競技に参加する生徒の人数がやけに多いクラスがありますな」

「二組……ああ、最近入った新任講師のクラスですな。確かグレンIIレーダスとかいう……」

フィールド上にいるグレンのクラスは、他クラスだけでなく観客から奇異の目を集めていた。

「なんでもクラス全員を参加させるとか」

「全員!?それはまた豪気な……」

「思い出作りのつもりですか?陛下の御前で礼を欠いてるのでは?」

「はは……まあまあ」

「それよりも見るべきは一組でしょう?」

「ええ、あの若さで第五階梯にまで至ったハーレイIIアストレイ率いる大本命の組、あそこがいる以上勝負を投げる組も出てくるでしょう」

「確かに」

誰もグレンの担当しているクラスに期待などしていなかった。勝負になるとすら思っていなかった。

だが、

『そして、さしかかった最終コーナーッ! 二組のロッド君があ、ロッド君があああ——ぬ、抜いた——ッ!? どういうことだッ!? まさかの二組が、まさかの二組が——これは一体、どういうことだああああ——ッ!?!』

二人で一チームを作り、広大な学院敷地内に設定されたコースを、一周毎にバトンタッチしながら何十周も回る『飛行競争』の競技のラストスパートで驚くべき番狂わせが巻き起こっていた。誰もが期待などしていなかったグレンの担当クラスである二組が、次から次へと好成績をもぎ取っているのだ。

『そのまま、ゴオオオオル——ッ!? なんとおおお!? 飛行競争は二組が三位! あの二組が三位だあ——ッ! 誰が、誰がこの結果を予想したアアアアア——ッ!?!』

魔術の拡声音響術式による実況担当者、魔術競技祭実行委員会のアースの熱狂的な実況のゴール合図と共に会場に用意された席に座していた観客達からの実況にも負けない拍手喝采。トップでゴールした一組よりも盛り上がった。

『トップ争いの一角だった四組が最後の最後で抜かれる、大どんでん返し——ッ!』

一位は当然のようにハーレイ率いる一組だったが、前評判で勝って当たり前前のハーレイの一組より、負けて当然だったグレンの二組の奮闘の方が会場の注目の的だった。

一方、競技祭参加クラス用の待機観客席にて。

「うそーん……」

「いや、アドバイスした本人が何一番意外そうな顔してんだよ」

目を点にして呆然とするグレンに、シヨウが思わず突っ込む。

「ああ、正直ここまで奮闘できるとは思ってたからな」

「まあ、この『飛行競争』に勝つ条件が二つも揃ってたから当然か」

「え?なんだアヤト、その二つの条件って?」

「まず一つ目は参加する競技を一つに集中させたことだ。この一週間、この競技だけを練習してきた奴と、複数の競技の練習の片手間にしか練習してこなかった奴や練習する暇がまったくなかった奴とでは必然的に差が出てくる」

「まあ当然だな」

「二つ目はペース配分だな。去年の『飛行競争』がごく短距離の速度比べだったらしいが、今回は二人で交代しつつの長距離レースになっていた。一周だけ見るなら瞬発的な飛行速度が重要だろうが、二十周ともなれば相当の魔力消費と疲労が予想される持久戦だ。練習不足の他クラスの選手が去年と同じペースで飛行し続けていれば、当然後半で失速、自滅するのは分かり切っていた。魔力切れで途中脱落してしまう奴がいたから、そいつは次の競技棄権するしかないな……:……:グレン先生がペース配分だけを教えていたようだから、漁夫の利みたいな形でこんな結果になったんだろう。このことを読んでいたんですか?グレン先生」

アヤトは冷静に分析してグレンに話を振る。

「え?……:……:あつ、お、おう。と、当然だ。いやあ楽な作戦だったぜ」

(まぐれだったんだな)

グレンは余裕の態度を装って最初からこうなることを見越してい

た風に話した。

周りで聞いていた生徒たちは、アヤトとシヨウ、アイザを除いて勘違いして尊敬の眼差しを向け始める。

「ひよ、ひよっとして俺達……」

「ああ……まさか……とは思ったが、先生についていけば、ひよっとしたら……」

（やめて、君達。俺にそんな期待に満ちた純粋な目を向けなくて。心が痛いから）

また、観客席通路の向こう側から、土壇場で負けてしまった四組の生徒と二組の生徒達が言い争いをしているのが聞こえてくる。

「……ちっ！ たまたま勝ったからっていい気になりやがって……ッ！」

「たまたまじゃない！ これは全部、グレン先生の策略なんだ！」

「そうだそうだ！ お前らはしよせん、先生の掌の上で踊っているに過ぎないんだよー！」

「な、なんだと!? くっ……おのれ二組、いきがりやがって！ 俺達四組はこれから、お前達二組を率先して潰しにいくからな！ 覚悟しろよッ!」

「返り討ちにしてやるぜ！ なんてったって俺達にはグレン先生がついているんだ！」

「ああ、先生がいる限り、俺達は負けない！」

（やめて、君達。本当にやめて。もうこれ以上、ハードル上げないで、お願い）

グレンは心の中で冷や汗をかいていた。

それから、グレンのクラスは快進撃を続けた。

『あ、中てたー！ ツ!? 二組選手セシル君、三百メートル先の空飛ぶ円盤を見事、「シヨック・ボルト」で打ち抜いたー！ ツ!? 『魔術狙撃』のセシル君、これで四位以内は確定！ これは盛大な番狂わせだああああ!』

「や、やった……動局的に狙いをつけるんじゃないで、動局的が狙っ

ている空間にくるまで待つてろってグレン先生の言うとおりで……
これなら………ッ！」

成績が平凡な生徒達は予想外の活躍を見せ——

『さあ、最後の問題が魔術によって空に投射されていく——これは……
おおっと!?まさかの竜言語だああああーッ!?これはえげつない!
さっきの第二級神性言語や前期古代語も大概だったが、これはそれ以上!
さあ、各クラス代表者、「リード・ランゲージ」で解読にかかるが、
これは流石に無理——」

「わかりましたわッ！」

『おおっと!?最初にベルを鳴らしたのは二組のウエンデイ選手!先ほどから絶好調でしたが、まさかこれすらも解いてしまうのかーッッ
!?!』

『騎士は勇気を宗とし、真実のみを語る』ですわ!メイロスの詩の一節ですわね!」

『いったーッッ!?正解のファンファーレが盛大に咲いたあーッッ!
ウエンデイ選手、『暗号解読』圧勝ーッッ!文句無し的一位
だああああーッッ!』

「ふふん、この分野で負けるわけにはいきませんわ。とはいえ……もし、神話級の言語が出たら、いきなり共通語に翻訳するのではなく、一旦新古代語あたりに読みかえろっていう先生のアドバイスには感謝しないといけませんわね………」

成績上位者は安定して好成绩を収め続ける。

自分達でもできる、戦える。そんな二組の生徒の士気の高さに加え、使い回される他クラスの成績上位者は魔力を温存しなければいけないのに対し、グレンのクラスの生徒達はその競技だけに全魔力を尽くせるという構造的有利が働いていた。

さらに、過去に生きるか死ぬかの軍生活が長かったグレンとセラは、表向き精神論を掲げていたが、勝つという一点に関してはどこまでもシビアな戦術を指導していたことも、他クラスとの地力の差を埋める要因となっていた。

『………までの競技で一位は一組、二位は五組、そして三位は意外に

も二組だああ！ トップはみなさんも予想した通りハーレイ先生率いる一組だが、三位がまさかの二組だなんてこんな展開誰が予想できたことかあ！　すごい、すごいぞグレン先生率いる二組い！』

実況も観客もトップの一組よりも二組への応援が多くなってきている。しかも他クラスの観客までもが二組の奮闘に見入って応援しているのがチラチラ見えた。成績上位者が出るのが当たり前という認識があるとはいえ、出られない人達は自分もこういった舞台に立ちたいという思いがあった。だから自分達と立場の近い二組が全員出るというのが意外と思う反面、羨望と共感が出てきたということだろう。

『さあ、盛り上がってますねー！現在トップのハーレイ先生率いる一組！　彼らを追い抜く展開が訪れるのかー!?!』

二組の奮闘に盛り上がっているが――

「二組はもう三桁稼いじやったねグレン君」

「ああ……今はあいつらの奮闘ぶり見てやる気が向上してるから誤魔化せてるが、やっぱり地力の差が数字に出てきてんな」

二組の待機観客席にて。自分達のクラスの生徒達がハイテンションで盛り上がり盛りに上がる中、グレンとセラは冷静に戦況を見つめていた。

競技場の端に据えられた得点板にも映ってる通り、グレンのクラスは十クラス中の三位。ハーレイのクラスは一位である。一位から三位までは、それほど大きな得点差はない。だが、じりじりとハーレイのクラスに離されている感は否めなかった。

「ていうか、よくここまで食い下がったもんだ」

「そりゃあこの一週間、皆、本気で一生懸命頑張ってたからだよ」

「……まあ、そうだが」

思い返せば、グレンは当初、魔術競技祭になど欠片も興味なかった。そもそも、この学院出身だというのに、素で競技祭のことなど忘れていたし、さらに競技祭に熱を入れることになったのも、元はと言えば金のためだ。それが嘘偽りない事実だった。だが、こんなにも皆で一丸となって、楽しそうに、一生懸命に勝負に挑み、皆で応援し合っ

いる自分のクラスの生徒達の熱い姿を見てると――

「……つたく、勝たせてやりたくなつちまうだろうが……ああ、面倒臭え」

「ふふ」

独り言ちるグレンを見て、セラは微笑む。

「だが、どうする？他のクラスとの地力の差は歴然としているぞ……」

「そうだね……でもこのまま高順位を保てれば……！」

「でもそれだと優勝できないよ？二組が一位になるためには二組が勝つて一組が負ける状況を作り出さないと、二組の上位者が出てる競技以外は一組に一位を取られてるからどれだけ好成绩を収めていても点差は縮まらないと思うよ」

「そうなんだよな。できれば午前中に後、一つ順位を上げておきたい………ん？」

途中でセラじゃない人物の声が会話に紛れてたことに気づいたグレンは後ろを振り返る。

「や」

目元を目隠しで覆うという不審者スタイルの白髪の男性がいた。

「ちよつ、ちよちよちよなんだあんた!?!いつからいた!?!」

「え!?!いつの間!?!」

セラや生徒達も白髪の男性の存在に気づいて戸惑う。

「久しぶりだねグレン、元気そう……には見えないね」

一同が警戒する中、そんなことは知らないと言わんばかりに、白髪の男性はグレンに馴れ馴れしく声を掛けた。

一同が即座に、グレンへと視線を向けた。その男をじっと見つめる彼の両目は、驚きで大きく見開かれていた。

「あんた、まさか――」

「グレン君、知ってる人？」

「……………誰だっけ？」

一同思わずズッコケた。アイザとアヤトはそんなキャラではないため体勢を崩すことは無い。

「へ？嘘でしょグレン？僕だよ僕」

「新しの僕僕詐欺か？俺の知り合いに目隠しして歩く不審者なんていねえけど」

「あー……これ着けると分からないか」

そういうと男は目隠しに手を掛け、目元から外した。

そして目隠しによって上がっていた前髪は落ち、男の素顔が露になる。

「これでどう？」

「ええ……!?!」

白髪に透き通るような碧眼、長いまつ毛、そしてまるで彫像のように整った甘く美しい顔立ち。

まるで『美』という文字の体现。神秘的と言っても言いかもしれない。

あまりの美しさに殆どの女子が心を奪われていた。

目隠しの有無で人はここまで印象が変わるモノなのだろうか。

先程までは不審者にしか見えなかった男は今や絶世の美男だ。

その評価は天と地ほどの差がある。

「あつ！ひよつとして、ノクティス先輩!?!」

「改めて、久しぶりグレン」

「いやあ、ホント久しぶりッスね。何年振りでしたっけ?」

「ん〜大体七年くらいかな」

誰か気付いたグレンが白髪の美男と親しそうに話す。普段の彼の振る舞いから、生徒たちは戸惑いを隠せない。

「あ、あのグレン先生、その人は?」

「あつ、紹介するぜ。この人はノクティスⅡファイフスって言って、俺の3個上の先輩だったんだよ。お前等の先輩でもあるぞ」

「やあ、初めまして後輩諸君、大先輩のノクティスⅡファイフスだよ」

「はあ、どうも。先輩ってことはこの卒業生?」

「ていうかグレン先生この卒業生だったんだ」

「そぞ。僕が三年生の時にこいつが新生でね。しかも11歳で入学するぐらいのやつだったんだ」

「11歳で!?!」

「やっぱりグレン先生って凄い人だったんだ」

「おお！とクラスの歓声と共に全員が尊敬の眼差しをグレンに送った。

「あつでも、優秀だったのは座学の方だけで、実技とか略式詠唱とかで駄目だったね。友達もろくにいなかったし」

「「あー……」」

地味に寂しい過去をお持ちだったグレン。クラスの尊敬の眼差しが一気に憐憫に変わった。

「ちよつ、やめて！俺をそんな哀れむような目で見ないで！」

変な空気になるが、つくった元凶であるノクティスはお構いなしにヘラヘラ笑う。まるで中身が無邪気な子供のようだ。

「いやあ、それにしてもグレン随分と変わっちゃったね。昔は一人称が僕だったし、死んだ魚の目じゃなかったのにすっかりグレちゃって」

（（一人称が僕で死んだ魚の目をしていないグレン先生………：…：想像できない））

「そう言う先輩も昔は一人称の俺だったじゃなかったすか。雰囲気もなんか違いますし。デリカシーがないのは相変わらずみたいですけど」

「あはは、そうだっけ？時間の流れは不思議なもんだね」

最後のは皮肉のつもりで言ったが、本人は全く意に返さない様子にグレンはため息を吐く。

「で、なんで先輩がこんなところにいるっすか？」

「そりゃあ、魔術競技祭の観戦に」

「観戦について、先輩よく競技祭当日よくばつくれてたじゃないっすか」

「僕これでもちゃんとした部署についててね。顔を出さなきゃいけないって部長に引つ張り出されてさ。そりゃあ、来る気全然なかったよ。どうせ例年通りクソな講師達の顔を立てるためのクソつまんねえ行事だろうから途中で抜け出してどっかで適当に時間潰そうと考えてた」

「この人本当にここの卒業生!?!さっきから問題発言ばかり出てくるけど!?!」

「あ、あはは……きつといい思い出がなかったんだと思うよ」

優等生で通つてるシステイーナは卒業生である筈のノクティスの口から出てくる言葉にドン引きする。ルミアも苦笑いを浮かべる。

「でもグレンが講師になってるって聞いてさ。きつと今回は楽しくなるだろうなって来たんだ。せつかくだしグレンが受け持つ生徒達の顔を見ようと………んん？」

ルミアを見て、何かに気づいたように眉根を寄せるノクティス。

「んん？」

「あ、あの……私の顔に何かついていませんか？」

戸惑うルミアに構わず、ノクティスははずいずいと顔をルミアに寄せていく。いきなり、ぶしつけな視線をぶつけられてルミアは目を瞬かせた。

透き通るような碧い瞳にまるで全てを見透かされているように錯覚する。

「んん？」

「えつ、ちよ!?今度は私!?!」

一通りルミアを観察し終えたのか、今度はシステイーナの方に顔を寄せて観察しだす。

「え!?なんだなんだ!?!」

システイーナのが終わったら今度はシヨウに……

「じく……」

「……」

次にアヤトを観察し、最後に女王がいる貴賓席の方をちらりと一瞥してから離れる。

「いやあ、グレンのクラスには面白い子がいるね」

「あの、なんか見えたんすか?」

「ほんの微かだけだね。きつとこの子達今よりもっと強くなるよ」

一同が戸惑う中、はぐらかすような物言いをするノクティスは自身の目元を目隠しで覆って元の不審者スタイルに戻った。

「それじゃあ僕は戻るよ。あんまり長居しすぎると部長から怒られるからね。今度ゆつくり話そう」

「あつ、はい」

「つと、そうだ——」

ノクティスは誰にも聞かれないようにグレンのそばに寄り——

「しばらくしたら少し厄介なことが起こりそうだ。いざという時は手を貸すよ」

「は？」

「それじゃあね〜」

「いや、ちよつ」

グレンの制止の声も届かずノクティスは去ってしまう。

「……なんか、嵐の様な人だったね」

「そうね。人の顔じろじろ見てなにか分かったのかしら？……そういえばレイ先生はどこにいるんだろ？」

一方、レイはというと、

カランツ

「あり？」

便意に襲われ個室の男子トイレで用を足していたが、トイレットペーパーがないことに今気づいた。

「か、紙がねえええ!？」

言うは易く行うは難し

(まさかあの男が来るとはな……………)

ノクティスが去るまでの間、彼の視界に入らないように気配を殺していたアイザは少なからず動揺していた。

ノクティスⅡフィフス。

彼の実家のフィフス侯爵家は、イグナイト公爵家に次ぐ帝国古参の貴族であり、かつ、帝国の平穩を乱す魔物、不死者を祓う呪術師の家系である。

彼はそのフィフス家相伝の術式と特異体質を併せ持つて生まれた数百年ぶりの天才であり、帝国で二人目の第七階梯魔術師だ。

一人で帝国を壊滅させることが可能な程の実力者で、加えて普段の唯我独尊っぷりの性格から古典的貴族主義のイグナイト家現当主から過剰敵視されている。そのため、イグナイト家はノクティスの情報が広まらないように情報を統制している。

だが世界最高峰の第七階梯魔術師セリカⅡアルフォネアを歴代最強と呼ぶなら、ノクティスⅡフィフスを知る者達は彼をこう呼ぶだろう。

現代最強と。

(しかも愚者と親しい間柄なのは初耳だぞ……………)

これはアイザも予想だにしていなかった。

実はアイザはノクティスと仕事上何度か面識がある。

もしノクティスにアイザのことが気付かれれば、潜入任務はそこで失敗。しかもノクティス「制服姿とかうける」と笑われること間違いなしだ。

というのもあって、アイザは彼に気付かれないように隠れていたのだ。

それにしても――

(あの男はルミアとシステイーナ、シヨウ、そしてアヤトに反応をしていた。いったいあの目で何が見えたんだ?)

「あ、アイザ君！どこ行ってたの？」

ノクティスの行動の意味を考えているとき、ルミアが声を掛けてきた。

「すぐそばで隠れていた。あの不審者と関わりたくなかったし？は言っていない。」

「不審者って……一応グレン先生と私たちの先輩なんだけど」

「子供の顔を近距離でまじまじと見るような奴だぞ。というか、目隠しした状態でなんで普通に歩けるのやら」

「そう言えばそうだね。なんでだろう？」

「……それより、ルミアはどうした？」

「次私の競技だから向かうとこだよ！」

「ルミアの競技……『精神防御』か」

「うん、ちよつと緊張してるかな……」

ルミアはそう苦笑で返す。

「……必要なら俺が代ろうか？」

「ううん、大丈夫だよアイザ君。それに、クラスのみんなが一生懸命頑張ってるんだもん、私だけ出場しないで黙って見てるのなんてできないよー！」

「……そうか。まあ、無理しない程度に頑張れ」

「うん、じゃあ行ってくるね。」

そう言つてルミアは小走りでフィールドへと向かった。

◆◆

『まったく、若の手を煩わせるなんて……』

「いやあ、本当助かったぜシヨウ。お前は命の恩人だ」

「んな大げさな」

用を足した後、尻を拭くトイレットペーパーが無く個室トイレから出れない状態にあったレイだが、トイレに来たシヨウとタマフミに紙を持って来てくれたおかげで運良く出ることができた。

「大げさじゃねえよ。もしあのまま誰も来なかったら、片手を犠牲にするか、ビッグフットのフリして外へ出るところだったぜ」

「んなことしたら一生他人の振りするわ」

『エンガチヨ、だにや』

偶然居合わせて本当によかった、と心の底から安堵するシヨウはタマフミを引つ込め、レイを連れて競技祭参加クラス用の待機観客席に戻り、アヤトに声をかける。

「おつすアヤト。今どんな感じだ？」

「ちようど次の競技が始まるところだ」

午前の部も残り二つの競技を残すのみとなった。

競技『精神防御』。グレンのクラスからはルミアが選手として出場する。

精神汚染攻撃への対処法は魔術師の必須技能の一つであり、この競技はその能力を競うためのものである。具体的には精神作用系の呪文を、白魔【マインド・アップ】と呼ばれる自己精神強化の術を用いて耐えるという形で競わされる。そして、少しずつ受ける精神汚染呪文の威力は上がっていき、最終的に正常な精神状態を保って残った者が勝者となる敗者脱落方式の耐久勝負だ。

「出てるの殆ど男子ばっかだな」

中央のフィールドに佇む出場者十人、いかにも精神的にタフそうな男子生徒達が揃い踏みする中、ルミアだけが紅一点だ。

その紅一点の女子生徒を観客は困惑の目で見ていた。

そんな状況でもルミアはにこにここと笑い二組のクラスメイト達に手を振っている。

「おい、なんだあれ？なんか一人変なのがいるんだけど」

レイの指摘通り、ルミアの右隣にやたら迫力のある生徒がいた。魔術師らしからぬがっしりとした体格はルミアの二回り三回りも大きい。赤く染めた髪に、日焼けした浅黒い肌。顔立ちは常に何かに苛立っているかのような強面、夜道で不意に出会った女子供の誰もが泣いてしまうこと請け合いだ。指輪やネックレス、ピアスにブレスレットなど、なんの魔術的効果もない銀細工のアクセサリを体の至る所に身につけており、制服の袖はまくりあげられ、肩に入れ墨の入った筋肉質な腕がさらされている。

「五組のジャイル。没落貴族や商家の次男三男が集まる不良チームの

頭だの、暴力事件を起こしてよく警備官のお世話になっているだの、色々悪い噂が絶えない生徒ですよ」

近くにいたギイブルが、道を歩けば往来の札付きチンピラすら避けて歩きそうな、威圧感と迫力をまとうその生徒について話し出した。「だが、それでも彼は去年の『精神防御』の勝者だ。他の追隨を許さぬほどの大差をつけた、ね。やれやれ、素行はともかく精神力の強さだけは本物らしい」

「えっ、なに？なんか人間眼鏡かけ機が解説者みたいに喋り出したんだけど」

「きつとオイラ達にわかるように教えてくれてんだよ。冷めてるように振る舞ってるけど実は親切な奴？」

「そ、そんなんじゃないぞ！ていうか人間眼鏡かけ機ってなんですか!?!……ちっ!」

ひそひそと話すシヨウとレイに顔を真っ赤にしながらシャウトするギイブルは忌々しそうに舌打ちし、前方にいるグレンに話しかける。

「まさか……とは思いますが。先生、彼女……ひよつとして捨て石のつもりですか?」

「はあ……?」

「彼女は治癒系の白魔術は得意ですが、それ以外はそうでもない……そこそこ、こなしはしますがね。今回、治癒系の呪文が役に立つような競技がない以上、他の戦力温存のために、彼女をここで使うのは実に合理的だ……」

「ルミアが捨て石?……何言ってるんのお前?」

『あー、あー、音響術式テスト、テスト。えー、時間になりましたので、ただ今より「精神防御」の競技、開始します!』

響き渡る実況の音声に、観客席から歓声が上がる。

『ではでは、今年もこの方にお出まし願います!はい!学院の魔術教授、精神作用系魔術の権威!第六階梯、ツェスト男爵です!』

すると、参加生徒達が組んでいる円陣の中心に、突如どろんと煙が巻き起こり、燕尾服にシルクハット、髭といった伊達姿の中年男性が現れた。

「ふっ、紳士淑女の皆さん、ご機嫌よう。ツエストⅡノワール男爵です」

比較的紳士な短距離転移魔術で、芝居げたつぷりに現れた男が一礼する。

「さて、それでは早速、競技を開始しよう。選手諸君、今年はどこまでこの私の華麗なる魔術に耐えられるかな……?」

「ごくり、と。参加選手達の何人かが唾を呑んだ。」

『それでは第一ラウンド、スタート！ツエスト男爵お願いします！』

「それではまず、小手調べに恒例の「スリープ・サウンド」の呪文あたりから始めてみようか……いくぞー！」

こうして、『精神防衛』の競技が始まった。

「《身体に憩いを・心に安らぎを・その瞼は落ちよ》」

ツエストが白魔「スリープ・サウンド」の呪文を唱える。

「《我が御霊よ・悪しき意思より・我が識守りたまえ》」

同時に、生徒達が対抗呪文として白魔「マインド・アップ」を唱えていく。

生徒達が呪文を完成させた直後、ツエストが自分を取り囲む十人の生徒へ、等威力で一斉に術をかけた。音叉を叩いたような音が波紋のように周囲に染み渡っていった。

呪文の威力が場に拡散していき――

『ね、寝た――ツ!?第一ラウンドでいきなり脱落したのは一組、ハーレイ先生のクラスだああああ――ツ!?』

地べたに倒れ伏してぐっすりお眠りになった生徒に、観客の失笑が集まった。

『ちよ、これ完全に捨て駒だ――ツ!?やる気なさ過ぎでしょハーレイ先生ッ!』

「うーむ、私としては、もうちょっと耐えて欲しかったのだがね……」
『まあ、去年の覇者、五組のジャイル君がいますからねー、きつと主力

「次は白魔【マリオネット・ワーク】だ！皆を私の操り人形にしてせんじよう！さあ、踊れ！」

『ぷっ！だっははははーっ！耐えきれなかった十組の生徒が踊り出したーっ！ていうか男にセクシードダンス踊らせんな、馬鹿男爵！キモいんだよっ！』

「・・・ちっ」

『ちよっ、男爵、あんた何ルミアちゃんの方見て舌打ちしてんの!?!いい加減にしろよ、この変態エロ親父っ!?!』

「だ、男爵・・・俺、実は男爵のことがずつと好きで・・・」

「ぎゃあああーっ?!嫌あああーっ?!じ、尋麻疹がああああ!?!」
『く、腐ったあああーっ?!男爵の下心全開の白魔【チャーム・マインド】！ド裏目だあああーっ?!ていうか、ホント誰かなんとかしろよ！この変態犯罪貴族！救護班はとりあえず精神浄化！ついでに男爵の頭も浄化したれ！早く！ていうか毎年思うんだけど、何でこの競技禁止になんないの!?!』

「うえっ・・・あんな気持ち悪い競技を毎年やってんのか」

「……………女子が出ない理由がわかった気がするな」

「うぷっ、なんか俺気持ち悪くなってきた」

「ちよっ!?!大変だ！レイ先生が二次被害受けてるぞ！」

観戦者は最初は冷めた目で見ていたが、段々と盛り上がりを見せていた。

なぜなら、早々に脱落すると思われるルミアが、ジャイルと同じように平然として立っていたからだ。

「う、うそ…………」

観客席でルミアを見守っていたシステイーナは啞然としていた。

「こ、こんなことが……………ここまで強かったのか…彼女…………」

常に冷めた態度を崩さないギイブルも動揺を隠せないようだった。

そんな二人にグレンは面倒臭そうに言った。

「白魔【マインド・アップ】は、素の精神力を強化させるだけの呪文だ。元々の精神制御力が強い者ほど……………要するに肝が据わっている奴ほ

ど大きな効果がある。で、うちのクラスにルミアより精神力が強い奴はいない」

「あの子が……?」

ん、とグレンは頷いた。

「あいつは常人とは心構えっつーか、在り方がなんか違うんだよ。まるで平時からいつだって死ねる覚悟を固めているような……ある意味、異常な人種だ。素の精神力の強靱さでルミアに敵う奴はなかなかいやしない」

（一ヶ月ほど前に学院で起きたテロ事件……あの時のルミアはテロリストの外道魔術師達を相手に一步も引くことなく、毅然としていた。少し間違えばすぐに殺されるかもしれないというのに。あいつは平時でも常に死の覚悟ができています。それがあいつの強みでもあり、同時に危うい面でもある……生い立ち故か）

そう内心で呟くアイザの予想では、もう勝敗はルミアが勝っていてもおかしくはないと踏んではいたが、ジャイルもよほどの修羅場を潜っているように見える。

「……グレン先生、万が一の時は……」

「ああ、わかってる」

一方のフィールドでは、この予想外の展開に男爵も困惑気味だった。

「むう、なんと……ジャイル君はともかく、ルミア君がここまで粘るとは正直予想外だったよ……ちっ」

『……あの、男爵?なんで微妙に悔しそうなんですかね?』

ツエスト男爵の「マインド・ブレイク」を耐えたルミアだったが、額から脂汗が浮いており、今もやせ我慢で立っているようなものだ。

洪水のような歓声と嵐の拍手の中、ジャイルがルミアに声をかける。

「ふん。お前……女のくせにやるじゃねえか。ここまで気合の

入っているやつは野郎でも、めったにいやしねえ」

「そ、そうかな？」

「へっ。だが、そろそろきついんじゃないか？ 脂汗浮いているぜ？」

「あ、あはは……………わかる？ うん、実は結構、きついかも……………今も一瞬、くらつとしちやつたし……………」

「棄権したらどうだ？ 三日昏睡は嫌だろ？」

「心配してくれてありがとう、ジャイル君。でも……………だめ。私だって負けるわけにはいかないんだ」

気丈に笑うルミアにジャイルはやれやれと肩を竦める。

「はっ……………わからねえな。どいつもこいつも自己顕示欲と名誉欲にまみれたこのクソくだらねえ競技祭ごときに……………一体、何がお前をそこまでさせている？」

「……………信じてくれている。私が勝つことに疑わないで信じてくれているんだ」

観客席にいる親友であるシステイーナの隣にいるテラスに視線を向ける。

「だから、それに応えたいの……………」

自分の勝利を疑わずに信じてくれている。それを裏切らずに応えたい。

その本心を聞いたジャイルは小さく口角を上げた。

「なるほど、男か」

「ち、違うよ!？」

慌てて否定するもその顔は赤く染まり、ジャイルの呆気ない一言にルミアに精神は簡単に揺さぶられた。

それからもラウンドが重なるごとに威力が上がって行く【マインド・ブレイク】に耐えていく二人の膠着状態は続くも、第三十一ラウンドでルミアの身体がぐらりと傾いた。

それに対してジャイルは全く動じず仁王立ちしたまま。

「大丈夫かね…？ギブアップするかい？」

「……………い、いえ」

少し意識が朦朧としていたらしい。

返答にラグが数秒あったが、ルミアは頭を振って気丈に顔を上げ、立ち上がった。

「……………大丈夫です。まだ、行けます！」

力強く言い放つその言葉と目にはまだまだ力が灯っている。

『な、なんととおおおおおお—— ツ!? 続行です、続行——

—— ツ!? まだまだ勝負の行方はわからない—— ツ!?』

実況のアナウンスに観客が総出で大歓声を上げた。ここまですれば誰もが見てみたいのだろう。可憐な少女が屈強な男に勝つその光景を。

「もういい」

「棄権だ！」

だが、突然上がったその叫びに、会場は水を打ったように、しんと静まり返った。

「え…アイザ君、先生…?」

ルミアが振り返るとそこにはアイザとグレンがフィールドに上がってきていた。

「え、えーと。二組の担当講師グレン先生…?今なんと…」

「棄権だ、二組は三十一ラウンドクリアした段階で棄権する。これ以上はルミアが無理だ」

『な、なんと!二組のルミアちゃんは棄権!今年の『精神防御』もジャイル君の勝利だあああああ!』

実況がそう告げるがルミアの番狂わせが観れると期待していた観客たちからはブーイングの嵐が起きてしまう。しかし、アイザとグレンはそんなことをお構い無しにルミアに対して労いの言葉をかける。

「よくここまで頑張ったな、ルミア」

「ふ、二人とも!私はまだ…」

「無理しない程度に頑張れって言ったはずだ。本当は、わかってるんだろ?」

「そ、それは…」

凶星なのかルミアはしゅん、と俯いてしまった。

「お前が負い目を感じる必要はない。全部采配をミスったグレン先生

が悪い。無理をしてルミアを三日間も昏睡状態にしたら先生がシステイナーナにタコ殴りにされるだけだ」

「お前やっぱ俺のこと舐めてるだろ……………そういうことだ。マジですまん」

「ううん、そんなことないです、先生、アイザ君。楽しかったですよ？負けちゃったのはちよつと悔しいけど……………私も皆のために戦えているんだって気持ちになれたから」

「……………そうか」

そうこうしているうちに、実況の話題は勝者インタビュに移ったようだった。観客の意識を、なんとかブーイングからそらそうと実況は必死のようだ。

『えー、それでは、去年に続いて見事、「精神防御」の勝負を制した五組代表ジャイル君。何か一言お願いします』

「ふっ、流石だね、ジャイル君。……………ん？……………ジャイル君？」

呼びかけても、まったく微動だにせず終始無言を貫くジャイルを不審に思い、ツエスト男爵がジャイルの顔を覗き込んだ。途端に、その顔色が変わる。

『おや？ どうかしましたか？ 男爵』

「じゃ、ジャイル君はすでに——」

『え？ ジャイル君がどうしたんですか？』

「た、立ったまま気絶している——」

その言葉でブーイングが一気に収まる。

『えーと？ということは……………？』

「…………ルミア君の勝ちだろう。棄権したとはいえ、第三十一ラウンドをクリアできなかったジャイル君に対し、ルミア君は一応、クリアはしたからね」

数瞬の間。そして——

『…………な、なんとおおおお——ッ!?なんというどんでん返し!この勝負を制したのは紅一点、二組のルミアちゃんだったあああああ——ッ!?!』

再び爆音のような大歓声が渦巻いた。

「やったあ！やったよ！アイザ君！」

「…なっ!？」

ルミアは自分が勝ったことを聞いて興奮のあまりアイザに抱きつく。

「「「な、何イイイイイイイ!？」」」

それを見ていた男子生徒たちはおいこらそこ代われ状態になっており大歓声の中に悲鳴や叫び声が聞こえたとか何とか…

「おーおー昼間からお熱いこって」

「あつ…ご、ごめんアイザ君…つい」

「……………いや」

状況に気づいたのか慌てて離れるルミア。

「おーい！早く戻るぞ！」

グレンに促されてそそくさと観客席に戻ると、

「「「アイザ、ちよつとオハナシしようか？」」」

「「「ルミアはこつち！」」」

男女それぞれに連行された。

◆◆

『精神防御』が終了し、オレとショウが出ることになっている午前の部最後の競技『タッググロワイヤル』が始まろうとしていた。

「ルミアが勝ったおかげで三位から二位に繰り上がった。この流れ、切るわけにはいかねえ。つうわけでお前ら、頼んだぜ」

「簡単に言ってくれますね……」

競技出場以前に、学院に編入して2週間ぐらいしか経っていないオレ達にトップを取れとか。

「『言うは易く行うは難し』ってことわざを知らないのですか?」

「あ?なんだ?東方のことわざか?」

「何かをしろと言葉で言うのは簡単だが、それを実際にするのは非常に困難であることが多い事、だろ」

グレン先生が首をかしげている中、天然パーマのあの男が代わりに

答えた。

「レイさんよく東方のことわざ知ってたな」

「あー……昔知り合いに東方人がいて、そいつから教わったんだよ」

「へー」

レイ先生の話にシヨウウが興味を示している。

「まあ、んなことはいいいんだよ。難しいなんて言うが、テメエらは鍛えたこの俺から見ても他の連中に後れを取ることはねえよ。てゆーか、負けたらテメエら一ヶ月女子の制服で登校な」

「は？」

今なんて言った？

「ちよつ、ちよつと待て！オイラ達にあの露出の多いあれを着ろつてのか!？」

「そうだよ。単位取り上げるよりこれぐらいの罰ゲームがあつたほうがモチベーションが上がるだろ？」

「いやモチベーションより男として大事な何かを失う危機感が上がったんだが！」

なんて残酷な脅迫をしてくるんだこの天然パーマ。クラスメイト達もドン引きだ。

魔術学院の女子用の制服はかなり変わっている。腹が出るように裾が滅茶苦茶短い涼しげなベストに膝上までぎりぎりの短いプリーツスカートとガーターストッキング、その上から羽織るケープ・ローブ………学院を創設した人間の趣味なんじゃないかと疑いたくなる。

正直、思春期の男子には刺激が強すぎる衣装は可愛い女子に着せればある意味良い絵になる(鼻からケチャップをぶちまける)だろうが、それを男子が着るとなると………酷い絵面しか想像できない。

「本気ですか？」

「本気も本気。それが嫌なら絶対勝ってこい。ついでに他の連中が午後の競技に出れねえよう再起不能にしてやれ」

「それは反則になるから駄目でしょ」

類友のグレン先生同様特別賞与を狙ってるのだろう。醜い欲望で

目がくらんでいる。

だが先生と違いかなり卑劣な手で優勝させようと色々吹き込んでくる。

駄目さ加減ではグレン先生の上位互換みたいだ。

加えて魔力ゼロなのに練習中に見せたあの異常な身体能力………天与呪縛【フィジカルギフトッド】かなにかか？

『えー、まもなく「タッググロワイヤル」が始まります』

「ほら、さっさと行って勝ってこい」

「シヨウ！アヤト！このままトップもぎ取るぞ！」

「ここで負けたら承知しませんことよ！」

「が、がんばって……っ！」

「しつかりしなさいよ！」

「負けたら単位取り上げるのと一ヶ月女子の制服で登校な」

「もう！グレン君、悪乗りしないの！」

いよいよオレ達の出る競技の時間となり、クラスメイト達からの声援を受ける。

オレ達が学院に編入して2週間ってことが頭から抜けているな。

とはいえ、クラスのこの空気が台無しになるようなことをする勇氣はオレにはない。

「……はあ、行くか」

「おう」

シヨウと共にフィールドへと上がる。他のクラスの競技者達も舞台へ集まると、あちこちに石柱や樹木が現れた。

この競技場は魔術的ギミックを組み込んだ建築物でもあり、管理室からの制御呪文一つで、フィールドをなみなみと水の張られたプールにしたり、樹木が乱立する林にしたり、炎の海にしたり、石造りの舞台を出現させたり、あらゆる条件・競技に対応可能とのこと。

この現象もその一つだ。

『さあ！午前の部の最後は、今年からの新競技「タッググロワイヤル」！ルールは簡単！ゴーレムの大群がいるこのフィールドで最後まで残ったクラスが勝者です！片方が脱落した時点でそのクラスは負け

となります。また、ゴーレムを倒せばスコアがクラスに加算され、小型サイズの人型ゴーレムは倒せば1点、中型は3点、大型は5点とサイズによって得られるスコアが異なります。ただし、途中で撃破されればせっかく倒して得たスコアがゼロになりますので注意を』

内容はグレン先生が言っていた通りだな。

やたら視線を感じる。視線の方を向けば、40体以上の大きささまざまなゴーレム達がフィールド上に配置されていく傍ら、オレ達を除く各クラスの代表全員がオレ達を睨んでいた。なんて分かりやすい。

『えー各クラスのメンバーはーつと！おつと二組から出るシヨウソウマ君は東方からの留学生、相方のアヤトキヨハラ君の方はシヨウ君と同じ時期に編入するまで魔術に触れたことがないようです！二組はいつたいどうやってこの状況をどう捌くんだ!?!』

プライバシーの侵害だな。

盛り上がる実況を他所に会場はあいつ、死んだなって目を向けてくれる。

「あの実況煽るの上手だな」

「言わせておけ。それでシヨウ、どういう作戦でいく?」

屈伸運動をしているシヨウに作戦の確認をすると、シヨウは簡潔に答える。

「ん〜他のクラスの連中もあの岩人形も全部ぶっ飛ばす方向で」

「簡単に言ってくれるな」

「なんとかなるって、オイラとアヤトならいけるさ。頼りにしてるぞ相棒」

そう言つてシヨウはニシシと笑った。頼りにされても困るんだが………まあいい。どっちにしても負けるわけにはいかない。自分達の尊厳を守るためにも。

『それではゴーレムの準備も完了したようなので、試合開始!』

「近い奴からいく。練習通りいくぞ」

「おうー!」

司会者の開始宣言と同時に、オレ達は近くにいた人型のゴーレム一体に向かって駆けだした。

ゴーレム達は視界内に入った者、もしくは攻撃された場合に対象を追跡・攻撃するように設定されている。

当然、オレ達を認識したゴーレムが狙いを定めて右手を振り上げた。

「フォーメーション『雷』」

「承知！」

ゴーレムの攻撃が当たる前にオレはシヨウに指示して二手に散開。ゴーレムの右側面、シヨウは左側面に移動し、至近距離で呪文を同時に詠唱する。狙いは勿論人型ゴーレム。

「《雷精の紫電よ》」

左右同時に放たれた輝く力線がゴーレムに直撃し、バチンツと電気が弾ける。

二発分の【シヨック・ボルト】を受けたゴーレムはあっさりと倒れ伏した。

『い、いったあああ！二組が早速一体目を撃破！二組に1ポイント加算されます！』

グレン先生がシヨウ用に考えた戦法は、当たらないよう動き続ける、当たらないなら当たる距離まで近づいて撃てという、実際に通用するか相当怪しい戦法である。

こんな戦法、シヨウとオレ以外でやる等無謀の極みだ。

シヨウの相手の攻撃を受け流す回避能力を生かし、かつ一応の戦力にするには十分であった。

「次、十時の方向の中型いくぞ。フォーメーション『爆』だ」

「ならもつとタイミングを合わせるぞ！」

「ああ」

こつちから行かなくとも、中型のゴーレムが向こうから来た。

オレは振りかぶってきた拳を屈むことで躲し、シヨウは横つ飛びで躲してゴーレムの背後に回り込む。

前後から挟む形になり、今度はゼロ距離、つまりゴーレムに左手で触れる形で次の呪文を詠唱。

「《弾ける》」

発動させたのは「スタン・ボール」。激しい音と震動が発生する球がゼロ距離で、しかも前後同時に放たれ、ゴーレムはいとも簡単に崩れ落ちた。

「次、まだまだ行くぞ」

「おう！」

◆◆

『おーっと、二組またまた撃破だ！フィールド上を駆けながら次々とゴーレム達を倒してスコアを獲得していく！なんとというコンビネーション！本当に学院に来て2週間しか来ていないのか!』

「はは、日輪の国の陰陽術が見れると期待してたけど………これはこれで面白い」

あまりの予想外の展開——ほぼ二組の独壇場と化している展開に、観客達がどよめいていている中、ノクティスは愉快そうに笑っていた。

「ノクティス、さっきのあれは「スタン・ボール」だったはずだ。なのに何故ゴーレムがいつも容易く砕けたんだ？」

ノクティスの右隣の席に座る彼の上司、ネイモス部長が全て彼に問う。

「簡単なことですよ。確かに「スタン・ボール」って、激しい音と震動が発生する球をぶつけて、相手を気絶させ無力化させたりするのが目的の学生用の攻撃呪文なんすけどね……それはあくまで遠い方向、それも一方向から球をぶつける前提の話なんですよ。前方から受ければ当たった人間は少なからず後方へと飛ばされる。それに伴い力がある程度逃げるわけ」

「ああ、だがあの二人は至近距離で——まさか」

「そういうこと」

ニヤリと口角を上げるノクティス。

「前方と後方、それぞれの方向から同じタイミングで同じ衝撃を与えれば力を逃がそうにも逃がすことができない。しかもゼロ距離とも

なれば、震動に全身を歩き渡って大ダメージを与えたってわけ」

「な、なんともえぐい……人間が受けられただではすまないぞ」

「そうっすねえ。しばらくトマトが食べられなくなるかも……」

例え護身用の攻性呪文でも使い方次第では人を殺せることを認識し、ネイモスは戦慄する。

「まあ、人に使わないのなら良しとしましょうよ。それはひとまず置いていて、もっと見るところがあるっすよ」

いちいち説明するのも面倒臭いと言わんばかりにシヨウを顎で指し示してみんなに見るのを促すと、丁度動きがあった。

「『『雷精の紫電よ』——！』」

「『『大いなる風よ』——！』」

「『『白き冬の嵐よ』——！』」

ゴーレムを倒して着々とスコアを獲得していく二組に向けて他クルスが一齐に攻撃を仕掛けた。どうやら結託して二人を……というよりは二組を最優先して狙いを定めに来ているようだ。二組を本格的にダークフォースとして認識したのと、二組の参加に対する姿勢が面白くなかったからだろう。

次々と魔術が殺到するが、二人には届かない。

「『大気の壁よ』」

アヤトは対抗呪文黒魔「エア・スクリーン」を起動し、空気の障壁を広く張り、迫り来る突風と冷気を受け止め、飛んでくる紫電をそらして防御。

シヨウの方は一発も当たらない。かすりもしない。見てもいないのに次にどこに当たるか読んでいるかのように全ての攻撃を受け流してしまうのだ。なんと対抗呪文を使わずに、である。

「あれはいったい……」

「奇門遁甲……いや、巫門遁甲か」

「巫門遁甲だど!?!」

ノクティスの口から出たワードにネイモスは大きく反応する。

日輪の国の陰陽術には、占術「式占」によって相手の一手先を視ることが出来る術がある。

太乙神数、奇門遁甲、六壬神課、そして……………巫門遁甲。

巫門遁甲は他の3つの原型で、五感で感じ取る相手の力の波を見極め、受け流す技術だ。

ただ、その技術は門外不出のもので、陰陽術でもごく一部に限られている。

「ちよ、ちよつと待てまさかあの少年は…」

「でしょうね。ソウマって名字でなんか引っかけたけど、やっぱり倉麻家の人間だったのか」

倉麻家。

千年前に存在した日輪の国最強と謳われる大陰陽師を先祖に持ち、今も朝廷に意見を言える程の影響力がある一族。

VIP中のVIPである。

「それが確かなら、何故向こうは彼を留学生として送り込んだんだ？」

「さあ？向こうの事情は僕でもわかりませんよ。第一僕等が深入りすることじゃないですし、試合の観戦に集中しましょう」

「はあ、まったく……………」

ノクティスのあつけらかなとした態度にネイモスは重い溜息を吐く。

(まあ、もう一人の方も普通じゃないね……………)

一方、競技祭参加クラス用の待機観客席にて。

『二組のアヤト選手！「ウエポン・エンチャント」を付呪した拳で大型ゴーレムを撃破！5ポイント加算され、現在二組のスコアが19ポイント！他クラスが攻撃をしますがスコアの加算が止まりません！』
「うそ……………」

「す、すごい……………」

フィールド上の光景を見ていた二組の生徒達も、息ピッタリの連携攻撃でゴーレムを着々と撃破していく二人の戦いぶりを啞然として見守っていた。

「シヨウはともかく、アヤトなんてかなり魔術を使いこなせてるぞ」

「本当に習って2週間程度なんですか?……」

「これもやっぱりグレン先生の指導のおかげか?」

「いや、俺は基礎しか教えてねえぞ」

「「え?」」

グレンの声が聞こえたのか、システイーナにルミアと他何人かの視線がグレンに集中する。

「冗談言わないでくださいよ。習って2週間程度なのに、他のクラスと渡り合えてるじゃないですか」

「別に冗談言ってねえよ。本当にあいつにはお前等に教えた範囲の基礎部分しか教えてねえ。練習を少ししか見てねえからはつきりとしたことは言えねえが、多分あいつはクラスの中で一番飲み込みが物凄く早いうえに、揃えた手札を出す速度……つまり前にレイが言っていた、常に変化する状況下で咄嗟の判断が下せる能力がクラスの中じゃずば抜けている。それに、予め用意したいくつかのフォーメーションをショウと連携を取ったり、レイの攻撃を躲してしまう程の身のこなしを見た限り実戦向きだなあいつ」

「けっ、あの時の俺は本気出してなかったんだ。本当だったらあいつの骨がバキバキになってたぞ」

「もう、変なところで強がらないでよレイ君。皆が怖がるでしょ」

「マジかよ……」

「あいつ凄いな奴だったんだな」

グレンの説明を聞いてクラス全員は動揺を隠せなかった。自分達よりも魔術にかけた時間も短い上、人畜無害、影が薄い、コミュニケーションが薄く、暗そうなお奴という印象が強いクラスメイトが他クラスや自分達を圧倒する實力を見せたのだから。

「無理もねえな。俺も正直最初はショウのサポート役ぐらいが適任だろうっていう認識程度だったんだ。アイツ自己主張の強いタイプじゃないし。どこぞのナルシストの眼鏡と違って」

「ちよっ、なんで僕を見るんですか?」

「確かにどこぞの天翔けるメガネのひらめきみたいな存在感はないな」

「レイ先生もなんで僕を見るんですか!?!ていうか、いい加減その眼鏡
ネタやめてくれませんか!」

グレンとレイに眼鏡ネタで弄られるギイブル。

ドSコンビにターゲットにされたら碌なことにならない。哀れギ
イブル。

「まあとにかくだ。意外と実戦派のアヤトと回避力が凄えシヨウが
タツグを組んだ時点で、この競技は二組の勝ちで決まったも同然だ
な」

「勝ち誇った顔で言ってるどころ水を差すようですすみませんがグレン
先生」

「あ?なんだアイザ?」

「あの二人スコア稼ぎに集中してるようですが後の残ったクラスの連
中を全員倒すまで体力とか持つんですか?」

「あつ」

◇ ◆ ◇

「「「「「大いなる風よ」!」」」」」

「「「「「残響為る咆哮よ」!」」」」」

「「「「「白き冬の嵐よ」!」」」」」

「霧散せよ」

オレとシヨウに殺到してくる魔術を、黒魔【トライ・バニッシュ】で
打ち消す。

迫りくる突風と吹雪がぱあんと音を立てて弾け、魔力の残滓となつ
て空間に散華した。

手を組んだ他クラスの競技者は、ゴーレムを粗方撃破して20ポイ
ント以上のスコアを獲得したオレ達をなにがなんでも脱落させたい
あまりに遠慮がない。だが中々当たらないから焦りのあまりに魔力
のペース配分を忘れてしまってる。あんなにバカスカ撃てば魔力の
消費量は激しい。昼休憩を挟んだところで午後の競技に全力で挑む
のは難しいだろう。

想定通りだな。

とはいえ……………

「ぜえ、はあ……………」

「シヨウ、大丈夫か？」

「はあ…すまんアヤト。少しはしやぎすぎて魔力とか体力がそろそろまずい」

そりやあんなに動き回ればそうなる。シヨウはオレより体力が劣っている。

グレン先生の考えた戦法にはシヨウ本人の持久力を考慮されていなかった。断食の影響でそこまで頭が回らなかったかあのマダオがただのうっかりさんかどうかはこの際どうでもいい。

「シヨウ、【シヨック・ボルト】を放てる余裕はあるか？」

「あ、ああ…」

「ならオレが合図を出したら地面に向けて【シヨック・ボルト】を一発放て」

「え？なんで地面に？」

「後でわかる」

「…それやれば勝てるんだな」

「ああ、勝てる」

「……………そつか、じゃあなんとかなるな！」

目立つのは控えたいが負ければ酷い罰ゲームが待っている。

速攻で片を付けるか。

オレは他選手たちの攻撃を避けながら、魔術公式の構築を行う。

グレン先生のとでもわかりやすい基礎講座のおかげでいろいろとわかった。

黒魔術の『炎熱』、『冷氣』、『電撃』の三属呪文の術式構成は根元的には同じものが使われている。

導力ベクトルは根源素中の電素の振動方向と流動方向の二つだけなのだが、振動方向には加速と停滞の二つの振動方向。つまり、電素の振動が激しくなると『炎熱』に、止まると『冷氣』に変わる。

この二つのエネルギーを調節して1:1の比率で複合すれば――

できた。改変完了にかかったのは10秒くらいか。この程度なら一節で十分だな。

回避しながら他選手たちが入る射線に移動し、改変呪文を唱える。

「爆水衝波」

呪文が完成。魔力が大量の水へと変換され、オレの両手から吹き出す。

局所に集中させず、オレの視界に入るものを呑み込むような、広範囲にわたる津波のようだった。

「は!? ちよっ——」

「は、範囲が広い!」

「ごぼごぼ!」

想定外の攻撃に反応が遅れた連中と、残ったゴーレム達が押し寄せ、波に吞まれて場外へ流される。

『な、なんと驚くべき展開だあ!? 二組のアヤト選手、改変呪文なのか津波を発生! 四組、五組、六組、九組、ペアが場外に出てしまったのもいたため脱落! ゴーレムも撃破されたと判定され一気に二組に合計20ポイント加算された!』

一組、三組、七組、八組は残ったか。「エア・スクリーン」と「フォース・シールド」でなんとか持ち堪えたようだ。

まあ、即興だどここなもんか。

最後の仕上げはシヨウに任せるとしよう。

「す、すげー……」

「シヨウ、今だ」

「お、おう! 《雷精の紫電よ》!」

オレの合図とともに、水浸しになった地面に向けてシヨウがシヨック・ボルトを撃ち込んだ。

水は電気を通しやすい。

水浸しにしたところに電気が流れれば、流動性なんてものは関係ないわけで

「「「「「あばばばばば!?」」」」」

フィールドを駆けていった紫電が、足がずぶ濡れの競技者達の身体に一気に襲いかかる。

「な、なんで……………」

バチバチと派手な音を立てて感電した競技者達は、何が起こったかわからないままあつさりと倒れ伏した。

オレ達を倒すために手を組んだのは悪くなかった。が、相手が悪すぎたな。

『こ、ここで決着うううう！』『タツグロワイヤル』を制したのは二組のシヨウ・アヤトペアだあああああ！あんたら本当に魔術触れて2週間かあ!?!』

終幕の合図と共に実況の説明が会場内に響く。観客も予想外の決着に熱狂している。二組の席を見れば揃いも揃って歓喜に沸いていた。

「やったなアヤト！」

「ああ」

「なんだよ〜？少しくらい喜んで見せたりしても罰当たらねえだろお？」

「これでも喜んでるほうだが」

主に女装回避とかで。

「じゃあほれ」

シヨウはオレの前に右手を出した。

「なんだそれ？」

「ハイタッチだよハイタッチ。勝利を分かち合うんだよ」

「ああ、なるほど」

そういうのもあるのか。

オレも右手を上にあげ、ハイタッチというのをする。パンっと手のひら同士の当たる小気味よい音が競技場に響いた気がした。

不穏な動き

side. アヤト

午前最後の競技『タツグロワイヤル』に勝利したオレ達が二組のところに戻ってからには叩かれ褒められの揉みくちや状態だった。その際、オレの水系魔術をどう作ったとか聞かれたりした。この質問に関しては『グレン先生に最後の切り札として教えてくれた』と？こいて誤魔化した。グレン先生の戦法ミスを隠すのと同時に、グレン先生の株は急上昇とクラスの士気向上維持のためにはうってつけの？だ。あまり目立つのも好きじゃない。

グレン先生に耳打ちでオハナシし、本人もそういうことにした後、小一時間ほどの昼休みに入った。

競技場に集まっていた生徒達は学院内の学食に行く者、学院外の外食店に赴く者、あるいは弁当を用意してきた者と分かれて、そろそろと移動し始めていた。クラスの生徒達も一旦解散し、昼食のために各自分かれて移動し始めている。

「……………ん？」

今、誰かが目の前を横切った気がしたのだが、それらしき姿は見えない。

人の気配と足跡があるというのに、視界には映っていない。

認識障害……………いや、隠蔽か。

それに微かに感じるこの魔力の波長パターンには開会式の時に覚えがある。首のあたりについているのも含めて……………

「……………まあいつか」

あの人物がどこでなにしようとおレには関係ない。関わり合いになるのは避けたいし。

見えない要人への視線を外して止めていた足を動かす。

昼飯はどこで済まそうか。

確か学院の近くに安い飲食店があったはずだ。

「……………ん？」

学院中庭を歩いていると、見覚えのある小柄な女子が周りをきよろ

きよろしていた。

「どうした？」

「……ひゃっ!？」

少女はびくりと飛び上がり、こちらに振り向く。どこか小動物的な
雰囲気を持つその少女は、同じクラスメイトの………名前は確かり
ン!! テイティスだったか。

「悪い。驚かせて」

「あ………えっと、アヤト君」

振り向いたリンの顔は、なぜか少し泣きそうな顔をしていた。

「大丈夫か? なんかに泣きそうなんだが」

「そ、その……えっと……」

「……誰かを探しているのなら、一緒に探そうか?」

「え、えと……そう、なんだけど、その……アヤト君でもいいから……
その……」

とにかく誰かに自分の話を聞いてほしいという感じなのか。

「ひよつとして、競技のことで不安なのか?」

「う、うん、その……」

リンがおどおどしながら、少しずつ心の中をまとめるように呟いて
いく。

「あ、あのね、私、『変身』の競技を任せられているんだけど……その、
自信がなくて………変身の魔術は一生懸命練習してきたんだけど
……今日になったら緊張してきて……全然、上手いかわなくなっ
ちやつて……それで、私を他の誰かに代えてくれないかと、グレン先
生を探していて……」

「……リンはどうしたいんだ?」

「そ、それは……」

しばらくの間、リンは自分の心の内をさらうように押し黙って、そ
して――

「本当は……私も出たい……でも、皆に迷惑かかるから……せ、せつか
くクラスの皆が一丸になって一生懸命、優勝のために頑張っているの
に……私が足を引つ張っちゃったら、皆に申し訳なくて……その……

だから……私を、他の誰かに代えて……ほしくて……ッ！」

肩を震わせ、目尻に少し涙を浮かべてリンが心情を吐露する。

彼女が出たいのは間違いないだろう。だがプレッシャーの影響で萎縮した自分はクラスの優勝のために出るべきではないと、葛藤が混じっているだろう。

そんな彼女にだからこそ、オレはこの時、本心で言った。

「変身の魔術は好きか？」

「え？う、うん……私……昔から気が弱くて、優柔不断だけど……変身の魔術は、その……なんだか違う私になれるみたいで……」

「さつき競技に出たいって言ってたな。なら、それだけでいいじゃないか？」

「え？」

リンが泣きそうな表情からキョトンと色を変えてこちらを見た。

「で、でも！私が出たら、皆に迷惑が——」

「そもそもこれはお祭りだぞ？お祭りに足を引っ張るも迷惑もあるもんか」

「で、でも、皆で優勝目指すって盛り上がって……先生もそう言ってる……」

別に、あのろくでなしが何かよからぬことをたくらんでいるからってのもあるし……そこまで深刻に考えなくても……

といっても、リンは見た通り真面目そうだし、だからこそ悩んでいるのだろうか。

「あれのノリで始まったみたいなものだから、目一杯楽しめばいい。その上で優勝できればいいよな、くらいの程度だろうから気にしなくてもいいと思うぞ」

「……そう……なの？」

戸惑うリンに、オレはさらに言葉を畳み掛ける。

「真意はどうあれだ。クラスのため、榮譽のため、優勝のため……なんてそんな考えは、一度全部捨てろ」

「全部……捨てる？」

「あれもこれも考えて、抱え込まなくていい。競技に出るのは、リン自

身の為だ」

「私の………為？」

「好きなことを楽しんでやる。それで十分だ」

「あっ………」

「まあ、学院に通って二週間しか経っていないオレが何言っただと思っただろうがな。まだ不安なら担任に相談するといい」

ちょうど中庭に傍を餓死寸前の担任が徘徊しているのが見えた。

グレン先生に声をかけようとしたその時だった。

「おーいアヤトー」

中庭に、いつの間にかシヨウがやって来ていた。

「どうしたシヨウ？」

「いやーせっつかくだから昼飯に誘いに来たんだが、取り込み中か？」

「いや。もう終わった」

リンの方に向き直る。

「オレから言っただけでやれるのはここまでだ」

そう、これ以上は何もない。勝つ策を授けることも必要ない。

「じゃあオレは行くから。またな」

「う、うん………」

また…小さな声で挨拶が返された。

オレは振り返ることなく、片手を挙げることで応えて、シヨウと共にその場から立ち去る。

「なに話してたんだ？」

「ちよつとしたお節介だ。それよりどこで食べるんだ？」

「もう少しすれば着くよ」

『こ、の、お馬鹿ああああ——ッ！』

『ぎゃああああああああああ——ッ!?』

「ん？なんか聞こえなかったか？」

「いや、オイラにはなにも……おっ、いたいた」

シヨウの視線の先には、レイというもじやもじやのマダオと、東方の着物を着こなしてる老婆がいた。

「来たね。その子がそうなのかい？」

「おう。あつ紹介するよ。この人はアヤメⅡマダラメさん。オイラの祖母ちゃんを知り合いで、万事屋レイちゃんの大家だ。バーを営んでるからマダムって呼んでる」

シヨウが軽く紹介してくれた後、マダムという女性がオレに話しかけてきた。

「あんたがアヤトかい？」

「はい…アヤトⅡキヨハラです」

「シヨウが世話になってるみたいだね。試合見てたよ。あんな派手なのを使うなんて凄かったじゃないか」

「えっと、ありがとうございます」

一見高圧的に見えるが、話してみると親切そうな人だ。

「お昼はもう食べたかい？」

「いえ、まだですが…」

「なら一緒にどうだい？実はちよいと作り過ぎてね。残るのもあれだから男もう一人分いてくれると助かるんだけど」

「いや、俺が二人分食べばすむ話だろ」

「お前は今日なにもしてないだろ！」

食べ物匂いが漂う大きな箱にマダオの手が迫るも、マダムがその手をはたき止める。マダオの目つきが猥染みた何かになっているのは気のせいではない。

ん？なんか箱の傍に着物を着た猫がぼんやりと見えた気がしたが………気のせいかな？

「それで、どうするんだい？」

「とてもありがたい話ですが……いいのですか？」

「年寄りの厚意は受け取るもんだよ。それに食事中にシヨウの学院で様子を詳しく聞きたいしね」

「ちよつアヤノさん!？」

「いいじゃないか。減るもんじゃないし」

「………まあ、そういうことなら」

ただ飯が食えるのはありがたいしな。

「けっ、いいかクソガキ。ちゃんと均等に食べるんだぞ？欲をかい

俺の分まで食おうとすんなよな」

「その言葉、そっくりそのままバットで撃ち返しましょうか?」

目を離れた際にもじゃもじゃに取られないよう細心の注意を払いながら、マダムの手配した昼食にありつくのだった。

◇◆◇

生徒達が各々で昼食を取ろうとする中、ご存知金欠グレンIIレーダスはと言えば、空腹を堪えて生徒の相談に乗り、何だかんだの自業自得でシステイナに吹っ飛ばされ、そして飛ばされた先の森の中で、とある生徒の厚意によって久方ぶりの食事にありつけていた。

「ふー生き返った、生き返った。ほんと、マジ助かったわ、ルミア」

「あはは、それは良かったです。でも、お礼は私じゃなくてその女の子にお願いしますね」

たった今、グレンが余すことなく食したサンドイッチの数々はとある素直になれない女子生徒が相手に渡せないで廃棄しようとしていたのを、見かねたルミアが代わりに届けた物だ。まあとある女子生徒が誰であるかは鈍感でない限り察しがつくだろうが、生憎とこの口クでなしはその鈍感に含まれていた。

「おう、分かってるって。序でに美味かったって伝えといてくれ……ところで、ルミアのそれは自分の弁当か?」

グレンの目がルミアの抱える小さなバスケットを捕捉する。決して狙っているわけではない。ただ気になっているだけだ。目つきが猥染みた何かになっているのは気のせいだろう。

そんなグレンに苦笑いながらルミアはバスケットの表面を撫でる。

「これは、とある人に食べて欲しくて作ったんです。不器用だから見た目は不恰好になっちゃいましたけど、味は問題なく仕上がったので渡したいと思っただんですが……」

「ほほお?なら渡しにいいんじゃないの?」

「残念ながら、多分その人は受け取ってくれないと思うんですよ」

誰か察しが付いたグレンの無遠慮な物言いにルミアは肩を落とす。

「男だな」

「ち、違いますからね!」

「ここまで赤くなりながら言うとは最早肯定しているのと同じである。誰かは察しが付いてるグレンは後でそいつ弄ってやろうと企みつつ、

「まあいいや。そろそろ競技場に戻るか」

「はい」

グレんとルミアがベンチから立ち上がった。

その時。

「その貴方はグレン、ですよ?あの……少し、よろしいですか?」
立ち去ろうとする二人の背後から、不意に女性の声がかかる。呼び止められたグレンは、いかにも面倒臭そうに振り返った。

「はいはい、全然よろしくありません、俺達、今、すつごく忙し——つて、ええええええええええええええええ——ツ!」

グレンは背後から声をかけて来た人物の正体を知ると、素っ頓狂な叫びを上げた。

「じよ、じよ、じよ、女王陛下——ツ!」

そこにいたのは他でもない、アルザーノ帝国女王アリシア七世その人だった……。

「ど、ど、どうしてアナタのような高貴なお方が、下々の者のたむろするこのような場所に、護衛もなしで——ツ!」

突然、現れた女王の前に、グレンはひたすら恐縮しまくっていた。
「あ、いえ、その、さっきは無礼なことを言って申し訳ございませんでした——ツ!」

いつもの横柄で傍若無人な態度はどこへやら。グレンは畏まって片膝をつき、その場に恭しく平服する。

「そんな、顔を上げてくださいいな、グレン。今日の私は帝国女王アリシア七世ではありません。帝国の一市民、アリシアなんですから。さあ、ほら、立って」

「いや、そうは言ってもその……し、失礼します……」

グレンはおそるおそる立ち上がって、恐縮する。

「ふふつ。一年ぶりですね、グレン。お元気でしたか?」

「あ、はい、そりやもう。へ、陛下はお変わりないようで……」

「……貴方達にはずつと謝りたいと思っていました」

「あ、謝る……って、そんな……」

「貴方とセラ、そしてレイはこの国のために必死に尽くしてください。たのに……あのような不名誉な形で宮廷魔導士団を除隊させることになってしまつて……セラにも伝えてください。申し訳なかつた。彼女も私の不甲斐なさのせいで魔術行使が……」

アリシアは素晴らしいながらグレンに頭を下げる。

「いやいや、陛下がこんな社会不適合者に頭下げちゃ駄目ですつて！俺はただ仕事に嫌気がさして辞めただけのゴミくずなんで！それにレイとセラの件に関したつてあの時の俺に責任があるんで」

ぶんぶんと頭を掌を左右に振りながら、グレンはアリシアの謝罪を固辞する。

都合の良いことに——いささか都合が良過ぎる気もするが——周囲には誰もいなかったが、グレンは気が気ではなかった。

「で、陛下……その、今日はどういった御用向きで……？」

「そうですね。今日は……」

アリシアは視線を横にずらす。その視線が捕らえた先に、呆然と立ち尽くしているルミアがいた。

「……お久しぶりですね、エルミアナ」

そんなルミアに、アリシアは優しく語りかけた。

「え……」

陛下の発言に戸惑うルミア。当然だろう、彼女からしてみればいまだに信じられない光景なのだから。

ルミアは無言でアリシアの首元に視線をさまよわせる。そこに翠緑の宝石が納まった金細工のネックレスがかけてられているのを確認すると、なぜかルミアは目を伏せた。

「元気でしたか？見ない間にずいぶん綺麗になりましたね。フィーベル家の皆様とはどうですか？食事はしっかりしていますか？」

「あ、えっ……その……」

硬直するルミアをよそに、アリシアは本当に嬉しそうに言葉を連ね

ていく。

「ああ、夢みたい。またこうして貴女と言葉を交わすことができるなんて……」

そして、感極まったアリシアは、ルミアに触れようと手を伸ばす。

「エルミアナ……」

だが――

「……お言葉ですが、陛下」

ルミアは逃げるように片膝をついて平伏する。

「！」

「陛下は……その、失礼ですが人違いをなされております」

ぼそりと呟いたルミアの言葉に、アリシアは凍り付いた。

「私はルミア。ルミアⅡティンジェルと申します。恐れ多くも陛下は私を、三年前御崩御なされたエルミアナⅡイエルⅡケルⅡアルザーノ王女殿下と混同されております。日頃の政務でお疲れかと存じ上げます。どうかご自愛なされますよう……」

「……」

慇懃に紡がれるルミアの言葉に、アリシアは気まずそうに押し黙る。

「……そう、ですね」

そして、アリシアは寂しそうな微笑みを浮かべながら、目を伏せる。

「あの子は……エルミアナは三年前、流行病にかかって亡くなったのでしたね……あらあら、私はどうしてこんな勘違いをしてしまったのでしょうか？ふふ、歳は取りたくないものですね……」

そんなアリシアの哀愁漂う言葉に、グレンは複雑な表情で頭を掻く。ルミアは淡々と言葉を続ける。

「勘違いとは言え、このような卑賤な赤い血の民草に過ぎぬ我が身に、ご気さくにお声をかけていただき、陛下の広く慈愛あふれる御心には感謝の言葉もありません……」

「いえいえ、こちらこそ。不愉快な思いをさせてしまって申し訳ありません」

しばらくの間、沈黙が場を支配し、アリシアは何かを言おうとして

は、諦めたように口を閉ざすことを繰り返した。

そして――

「……………そろそろ、時間ですね」

未練を振り切るように、アリシアはグレンを振り返った。

「グレン。エル――……………ルミアを、よろしくお願いしますね?」

「……………わかりました、陛下」

グレンが何か物言いたげな表情で見送る中、アリシアは静かに去って行った。

やがてアリシアの姿が、中庭から見えなくなる。

「……………アリシア女王陛下」

自分を呼ぶ声にふと、アリシアが顔を上げる。周囲を見渡せば大きな大木の背後からアイザが現れた。

「貴方でしたか……………」

「お久しぶりです」

アイザはアリシアの前までいき、片膝をついて静かに平服する。

「三年ぶりですね。あの時エルミアナを救ってくれたこと、今一度お礼を言います」

「お気になさらず。たまたまその場に居合わせただけです……………彼女に会われたようで」

「はい……………拒絶されてしまいました。今更ですよね……………大人の勝手な事情で大事な一人娘を捨てておいて……………随分と身勝手ですよね……………あの子の気持ちをもっとよく考えるべきでした……………でも、我慢できなかったのです。あんな風に友人に囲まれ、尊敬できる先生に出会い、楽しそうに笑っている姿を見てしまったら……………」

「……………」

今にも涙を零しそうな勢いのアリシアの告白。娘に赤の他人として接されると分かっていたはずなのに、会いたいという願いが勝ってしまった。そして案の定、惨めな思いをして帰る羽目になっている。

一国を治める女王として、そして一人の娘の母親としても今のアリシアは見るに堪えない。

「この1年間彼女の護衛をして分かったことがあります。別にあなたが嫌いなわけではない……ただ恐れているだけなのでしょう、また貴女に拒絶されることを。彼女に貴女の真意を伝えたのですが……」
ちやんと伝わらなかったようだ。

これ以上アイザから何か言えることはない。この問題は帝国の、そして親子の問題であると弁えているからだ。二人の問題は、あの二人にしか解決できないのだ。部外者が何を口出ししても、それは嘘になる。問題の根底にある物が理屈ではなく感情である以上、どんな正論も慰めも、まったく役に立たないのだ。

「……………悲しみにくれてるところ心苦しいですが、陛下のお耳に入れておきたい情報がありました」

「なんででしょうか？」

「長官直々に聞いた話ですが、政府内の情報が外部に漏れてるようですよ」

「!!」

アリシアの悲痛な表情が驚愕に一変した。

「その話は本当ですか？」

「ご存知なかったのですか？」

「ええ、私の方には何も報告が来ていません」

帝国保安局情報調査室の長官がいくら秘密主義でも、情報漏洩……もとい裏切り者という問題を部下のアイザには伝えて、一番の上司に当たるアリシアに伝えていないのは不自然だ。

「あの長官が陛下に敢えて報告しなかったということは……………」

「私の周りの人間も警戒してのことでしょうか」

「わかりません。ですが万が一のことがあるので周囲の人間にお気を付けてください。誰が敵で味方なのかわからない今は特に」

「……………あまり身内を疑いたくありませんが致し方ありません……………」

アリシアはアイザの言葉を聞いた瞬間、国を納める陛下の表情を浮かべていた。

「…分かりました。こちらの問題はこちらで対処します。貴方は貴方の役目を果たしてください」

「御心のままに」

アリシアに頭を下げた後、アイザはその場から立ち去る。

残されたアリシアは、貴賓席へと歩みを再開した。

「陛下……」

並木道に並び立つ木陰に見知った姿があった。

やや白髪交じりの黒髪に髭、鋭い眼光、あちこち肌を走る古傷がいかに歴史の古強者を思わせる男だ。

王室親衛隊、総隊長ゼーロスだ。すでに初老の域にさしかかっているものの、四十年前の奉神戦争を戦い抜くことで鍛え抜かれたその士魂には微塵の陰りもなかった。

そんな彼が、なにやら切羽詰まった鬼気迫る表情でこちらの様子を伺っていた。

（おや、変ですね。どうして私のことを認識できたのでしょうか？ まだセリカの魔術が効いているはずなのですが……）

不思議に思いながらも、アリシアはこの忠義あふれる衛士に声をかける。

「あらあら、見つかってしまいましたね。勝手に外を出歩いてしまつて、すみません、ゼーロス。ところで……どうかしましたか？」

「少し、お話があります、陛下」

ゼーロスは音もなく木陰から出ると、アリシアの前に立ち、手を振り上げた。

それが合図だったのか。

「——ッ!？」

どこからともなく現れた数名の衛士が、あっという間にアリシアを取り囲んでいた。

「……まさか貴方が!？」

一方、その頃グレンはというと……

「もうグレン君どこ行ってたの？ずっと探してたんだよ」

「悪い悪い。ちよつとな」

むうつ、と不機嫌そうにむくれたセラに軽くしかられていた。

「それより、弁当作りすぎて余っちゃったんだけど……その、食べる？」

セラが手に掲げている大きめのバスケットを見て、グレンは目を輝かせる。

「おおー！一度ならず二度も食い物にありつけるとはついてるぜ！」

「二度？」

グレンの口から出た聞き捨てならない単語を聞いてセラはぴくつと反応する。

「ひよつとしてもう食べたの？」

「ん？ああ、どつかの誰かが作った廃棄寸前のサンドイッチをルミアからくれてな。すっげえ美味かったぜ」

「……………ふーん」

「あ？どうしたセラ？」

「別にいい」

それからしばらく不機嫌な白犬と、近くで耳まで真っ赤にした白猫が目撃されたそうなの。

◆◆

side. アイザ

あまり勝手に動かないで欲しいな……………。

魔術競技祭、午後の部が幕を開け、二組は午前と同じく快進撃を続けた。

一度はグレン先生と共に競技場へ戻ったルミアは、何を思ってたか目を離れた隙に競技場を抜け出していた。

気づいた俺はすぐに遠見の魔術【アキュレイト・スコープ】で彼女

の居場所を探す。

まずは学院校舎本館、西館、東館の周囲を確認し、学院付属図書館と図書館前広場、迷いの森入り口周辺、薬草菜園、魔術実験塔周辺と順に確認してもルミアの姿は見当たらない。

遠見の魔術【アキュレイト・スコープ】は光操作による遠隔視により、指定座標の観測地点が発する光を曲げて、術者の視覚に届ける術だ。対象指定魔術ではなく座標指定魔術のため、一旦観測対象を見失うと再補足が非常に困難になる。また、観測地点が発する光が、いかなる曲げ方をしても決して届かない状況：例えば真つ暗闇の中や、完全に光を遮断された建物の内側等の遠隔視は不可能だ。

流石に焦りを覚え始めた頃、学院敷地の南西端、学院を取り囲む鉄柵のかたわら、等間隔に植えられた木々の木陰にちらりと、見覚えある金髪が見えた。

「……見つけた」

「なにを見つけたんだ？」

「!?」

突然背後から声をかけられたため、すぐに遠見を解き、後ろを振り返る。

そこには午前最後の競技で水系魔術を披露した編入生アヤト＝キヨハラがいた。気配をまったく感じなかったぞ。

「驚かすな」

「悪い」

謝罪するも、表情が変わらないこいつは不気味だ。

タッグロワイヤルで見せた水系魔術はグレン先生の策という話だが、あの男の反応から嘘だというのはすぐにわかった。

練習の様子を観察したがあれを使った様子もなかった。

つまり、本番中にぶつつけ本番で改変を行ったことになる。あの弾幕の中でだ。

本当に学院に編入するまで魔術に触れていなかったのか疑わしい。加えて、こいつのまったく変化の無い無表情と無機質な瞳は、まるで人形が独りでに動いているかのような既視感を覚える。

こいつの身元調査の報告がくるまで気が休まらない。
とはいえ、今こいつに構ってる暇はない。

「すまない。しばらくここを離れる」

「離れるって、お前もルミアって子を探しに行くのか？」

「何故そう思う？というかお前も？」

「さつきグレン先生が探しに行った。あの子と『精神防御』で仲良さそうに見えたから。お前も心配してると思った」

「……別に心配していない」

「心配していないのなら駆けつけたりしないと思うが」

「……っ」

上手く反論できない。

あいつはあくまで護衛対象だ。それ以上でもそれ以下でもない。
護衛対象に特別な感情を抱くなど論外だ。

「……まあ、オレがとやかく言えることじゃないか」

ん？なんだ？心の内を見透かされたような感じは……………。
と、ここで止まつてる場合じゃない。

「……………とにかく、『殲滅戦』までには戻る」

「ああ、わかった。誰かに聞かれたらそう伝えておく」

競技場から離れ、ルミアの元へ向かう。

「ん？」

だが途中で奇妙な集団が遠目に見えて、思わず足を止めた。

その集団は全員が全員、身体の要所を守る軽甲冑に身を包み、緋色に染め上げられた陣羽織を羽織り、腰には細剣を佩剣している。

帝国軍の精鋭中の精鋭。最も女王陛下に忠義厚い者達で構成された、王室一族を何よりも優先して護衛する、王室の守護神——それが王室親衛隊だ。

ゆえに王室親衛隊は今回の女王陛下の学院訪問の際、当然のように女王の近辺警邏と護衛を務めているはずのだが——
なぜ連中が女王陛下の傍から離れて行動している？

しかも向かつてる先は――

嫌な予感がした俺は連中に気づかれないうちに密かに尾行する。
しばらくして嫌な予感が的中してしまった。

王室親衛隊の面々は、前方で競技場に向かつて歩いていったグレン先生とルミアの前で足を止め、二人を囲むように、音もない足捌きで素早く散開した。

「ルミア!! テインジェル……だな?」

「え? は、はい……そ、そうですけど……」

ルミアが返答した次の瞬間、衛士達は弾けたバネのように一斉に抜剣し、ルミアにその剣先を突きつけていた。

「お、おい!?! なんのつもりだ!?!」

グレン先生がルミアを庇うように前に出る。

「傾聴せよ。我らは女王の意思の代行者である!」

「ルミア!! テインジェル。恐れ多くもアリシア七世女王陛下を密かに亡き者にせんと画策し、国家転覆を企てたその罪、もはや弁明の余地なし! よって貴殿を不敬罪および国家反逆罪によって発見次第、その場で即、手討ちとせよ。これは女王陛下の勅命である!」

――は?――

作戦を考えた

「んだよ、ここ酒おいてねえのかよ」

「学び舎でそんなの売るわけないでしょうが！」

真昼間に酒が飲みたくなったアル中のレイが競技場外に配置された露店にないことを知り、「けつ、品揃え悪いな」とご機嫌斜めでその場から離れる。

「あくやっぱダメだな。アルコールと糖分とらねーとなんかイライラする」

「相変わらず自堕落な生活を送ってるようだなレイモンド」

「あ？」

ぼやきながら競技場へ戻ろうとしたその時、聞き覚えのある声が聞こえたと同時に、背中を久しぶりに感じる殺気が駆け巡る。

この場に似つかわしくないその気配を感じ取り、すぐさま腰に差していた木刀に手を伸ばし、殺気を感じた方向を見るレイ。

すると見覚えのある二人組が通りの向こうに立っていた。

一人は二十歳ほどの青年だった。藍色がかかった長い黒髪の奥から、鷹のように鋭い双眸が覗いている。すらりとした長身で痩せ肉だが骨太。その物腰は、落ち着いていると称するよりはむしろ冷淡さを色濃く感じさせ、ナイフのように触れてはならない致命的な鋭さをどこかに隠している——そんな雰囲気のある男である。

もう一人はまだ十代半ばの少女だった。ろくに櫛も通されていない伸び放題の青髪を後ろ髪だけうなじの辺りで雑に括り、印象的な瑠璃色の瞳は常に眠たげに細められている。華奢で小柄なその肢体や、精巧に整ったその細面はアンティーク・ドールを想起させる。笑えばさぞかし魅力的に映るのだろうが、その相貌には表情という表情が死滅しており、いかなる感情の欠片すらも読み取れない。

二人共黒を基調としたスーツと外套に身を包んでおり、外套には必要所に金属板やリベット、護りの刻印ルーンで補強されている。

一年前までレイとグレン、セラが羽織っていたものと同じ物だった。

「アルベルトにリエルじゃねえか。テメエらなんでこんなところ——」

レイが二人の存在を認知した瞬間。

小柄な少女——リエルが何かを口走りながら両手を地面につく。

すると魔力が紫電となつて爆ぜると共に、リエルの手には十字型の大剣が瞬時に生み出され、代わりにその場にあつた石畳がごっそりと消えた。

石畳を鋼の大剣に作り変えたリエルは、そのまま剣を担ぐように構え、レイに向かって弾丸のように突進してくる。

「いいいいやああああ——ッ！」

少女らしい高い裂帛と共にレイへ向けて跳躍。稲妻の如く鋭い一撃が振り下ろされる。

「つたく、ちつたあ学習しろ脳筋が」

レイは左脚を軸に、身体を時計回りに360度回転させることで大剣の軌道上から避ける。

一撃を紙一重でひらりと躲した後、回転の勢いに任せて、がら空きになっているリエルの後頭部へと木刀を振り下ろした。

「きやん!？」

もろにレイのカウンターを食らつたリエルはどきりと倒れ伏し、地面でびくびくと痙攣し始める。

「相変わらずカウンターに弱えな」

「一年経つても腕は鈍つてないようだな」

「おいアルベルト、リエル係ならちゃんと手綱を握つてろ」

リエルの無効化を確認したレイは傍観に徹していた青年、アルベルトに文句を言う。

「そんな係を請け負つた覚えはない。それに今までその女の手綱を握れた奴なんていたか？」

淡々と放たれるアルベルトの言葉の端々には、どこか確実に棘があつた。

「あー……うん。そうだったわ。悪いな」

帝国宮廷魔導士団特務分室、執行官ナンバー7『戦車』のリエルを一言で例えるならアホの子だ。高速錬成と近接戦闘能力は高いが知能が低い。

暴走脳筋イノシシ娘、ナチュラルボーン破壊神、がっかり斬殺天使、一緒に任務に就きたくない同僚ランキング万年ぶつちぎりナンバーワン、連携作戦を台無しにすることに定評があり、作戦なんて立てる意味ないだろう、だってリエルがいるから、と各軍閥から太鼓判が押されている。彼女と組んだ相棒には「リエル係」という不名誉な称号が与えられるとか。

レイがその欠点を改善しようと調きよ——教育を試みたことがあったが、まったく成果が出ず「アホに何を言っても無駄だ」とすぐ諦めたほどのアホさだ。

アルベルトの苦労をなんとなく察したレイは珍しく同情的だった。「つーか、なんでテメエらがここにいんだよ。競技祭の観戦に来た……ってわけじゃねえわな」

「お察しの通り任務だ」

「そっか。俺クビになった身だし、邪魔しちや悪いな」

「俺達に与えられた任務は女王陛下の護衛を務める王室親衛隊の監視だ」

「え？なに普通に任務内容言っちゃってんの？俺もう部外者なんだよ」

「俺達は一枚岩では無い。王室直系派、王室傍系派、反王室派、過激極右派、保守的封建主義者、マクベスの革新主義左派、帝国教会右派：アルザーノ帝国は様々な思想主義と派閥が渦巻く混沌の魔窟だ」

「あの、もしもしアルベルト君や？聞いてる？俺部外——」

「右派の筆頭、王室親衛隊に最近不穏な動きがあるとの情報が入った」
「おい、いい加減にしろ。わかってて言ってるんだろ？俺を巻き込むつもりで——」

レイの額に血管が浮き上がるがアルベルトはお構いなしに話を続ける。

「異能者差別に対する新しい法案が円卓会で閣議されるようになって特に顕著になったとの事だ」

「いやだから——」

「異能者を女王の名の下に法的に保護する事は神聖なる王室の威光に傷がつく、と考えてるのだろう」

「聞けやああああああ！今すぐその口閉じろ！それ以上俺にヤバそうな情報聞かせるんじゃないやねえええええ！」

帝国宮廷魔導士団の中でも精鋭中の精鋭である特務分室の任務内容を既に一般人であるレイに話すという事は、帝国軍法第六章、緊急特例四号条項に基づいて無理矢理協力させる腹積もりだ。

帝国軍がよくやる常套句を見てきたレイはすぐにそれを察し、アルベルトの両肩を掴んでグワングワンとシエイクするが——

「よって、俺達は王室親衛隊を監視していた」

手遅れだった。

「テメエまじでふざけんなよ！遠慮なしにベラベラ喋りやがって！聞いてない！俺は何も聞いてないからな！だからヤバそうなこと巻き込もうとするな！」

「俺だって最初は巻き込むつもりはなかった。だが事態が急転したからにはそういうわけにもいかなかった」

「あ？いい加減にしろよ。適当なことを言って俺を丸め込もうとしても——」

「王室親衛隊がお前たちの生徒、ルミアⅡティンジェル……エルミアナ元王女を殺そうと動いている」

「——は？」

◆◆

止めようとしたグレンは殴り倒され、ルミアは人気のない中庭の街路樹の下に王室親衛隊に連れて行かれた。後ろ手に縄をかけられ、四方から首筋に剣を突きつけられ、もはや身じろぎすることすらままな

らない。

「体の力を抜いて、動かぬことだ。急所を外せば長く苦しむことになる」

隊長格の衛士が剣を握りしめルミアの前に立つ。

「……………はい」

ルミアは一つ深呼吸をして目を瞑った。

ルミアはいつかこのような日が来るのではないか——そう覚悟していた。

元々、自分は三年前に死ぬはずだった。自分という存在は公になれば国内外に要らぬ混乱をもたらす猛毒だ。それゆえに国を守るために人知れずに殺されるはずだった。

だが、生かされた。

自分を哀れんだアリシアが、無理をして自分を生かしてくれたのだ。

ルミアはそれがやはり単なる幸運に過ぎないことも痛いほどに理解していた。

こんな日が、いつかやって来るかもしれない……………常日頃そう思っていた。

市井の赤き血の一人に落ちたとはいえ、ルミアという存在はアルザーノ帝国が抱えた爆弾のようなものだ。国を支える王女たる母が、いつかなんらかの事情で、止むを得ず自分を処分することを決意する日が来る……………いつも心のどこかそんな覚悟をしていた。

このあまりにも突然な処刑宣告は、つまりそういうことなのだろう。

(……………ああ、きっと最後だから会いに来てくれたんだ)

元々自分は三年前に死ぬはずだった。そんな自分は無理をして生かされていたのだ。

いつ殺されたっておかしくない。死んだって構わない。

だが、それでも——

(……………怖い、な)

こんな自分に本当の姉妹のように接してくれたシステイーナ、本当

の両親のように愛してくれたシステイーナの父母、仲の良かった学院の学友達やグレンとセラとレイ、そして——アイザ。皆とこんな形で別れなければならぬことがどうしようもなくて悲しかった。

誰か助けて、まだ死にたくない、と。

頭を抱えて泣き叫びたかった。

(やつぱり……死ぬのは嫌だな……)

つ、と。ルミアの目尻からこぼれた涙が頬を伝い落ちた——その時、ルミアの耳元に声が聞こえた。

「そのまま、目を瞑ってろ——」

「……えっ?」

しゅぱつ、と。

頭上で何か爆ぜるような音が鳴り響いた。

「「「うぎやああああああああ——ツ!?!」」」

死に至る灼熱の苦痛の代わりに、ルミアを襲ったのは耳を刺すような悲鳴だった。

「……ツ!?!」

ルミアが驚いて、思わず目を見開く。

「うあ、あああ……ツ!?!目が、目があくツ!」

「うう……み、見えない……何も見えない……ツ!」

ルミアが見たのは、剣を取り落として目を押さえて悶え苦しむ衛士達の姿だった。

「ただの「フラッシュ・ライト」だ。死にはしない」

「あ、アイザ君!?!どうして!?!」

いつの間にか右横に競技場にいる筈のアイザがおり、ルミアを縛っていた縄を解いていた。

「ぷぷーっ! 『対魔術装備に身を包んでるから三属呪文も精神汚染呪文も効かん』だなんて言っただのは何処のどなたでしたっけ!?!初級呪文が滅茶苦茶効いてるじゃないっすか!」

「グレン先生……!」

気絶していた筈のグレンが二人の元へと近づいてきていた。

「き、貴様は魔術講師……何故、さつき……」

「ああ、俺こう見えて拳闘の方が得意でね……あんな程度の打撃ならいくらでも外せるんだよ」

「ぐっ……貴様、我々に仇なすとはすなわち女王へい——ぐふっ！」

「ああ、いちいち話を聞くつもりないんで。せつかくのチャンス潰されたくないし」

衛士の一人が最後まで言い切るのを待たず、グレンがあつと言う間に全員手刀で沈めた。

「せ、先生……それにアイザ君も、王室親衛隊に手をあげるなんて……」

「ああ、うん……かなりヤバイことしちゃったかも……」

「俺はたまたま近くで競技の練習してたら、たまたま「フラッシュ・ライト」の光が連中のところにいっただけだ。だから実際に手を出したのはグレン先生だ」

「あつてメ、ナニ一人だけ助かろうとしてるんだよ!?被害を与えたお前も同罪じゃ!」

グレンがアイザに掴み掛る。

「それより急いで離れないと!こんなところ誰かに見られたら!」

「おおおお、落ち着け。と、とととにかくどこかにあるタイムマシンに乗って——」

「落ち着くのはあんただ」

「そ、そうだ!王室親衛隊にも話の通じる奴がいる。まずはそいつらと話し合って——」

「いたぞ——ツ!?あそこだ——ツ!?」

見れば向こうから、新手の衛士達がこちらに向かって駆け寄って来ていた。

「み、見ろ!同士達が殺られているぞ!」

「おのれ、大罪人に与する不屈き者め!我らが剣の錆にしてくれるツ!」

「志半ばで倒れた同胞の無念、必ず晴らしてみせる!」

「いや、死んでねえつつの」

良い感じに勘違いされてしまったらしく、衛士達は妙に殺気立ち、

もはやどうすることもできなさそうだった。

「先生、話の通じる奴なんていますっ。」

「うん、俺も自信なくなってきたわ……ていうか、キミ達、人の話は最後まで聞きましようって、お母さんに習わなかった!」

迫り来る衛士達が一斉に抜剣する姿に、グレンが頬を引きつらせて青ざめ、アイザはため息をついた。

「ど、どうするんですか!?このままじゃ先生達が——」

「落ち着けルミア、取り敢えず足止めする」

落ち着いた様子のアイザが指パッチンする。

すると、

「な、なんだ!?!」

「か、身体が重い……!」

グレンたちに迫って来ていた衛士たちが突然、その両肩に重荷でも乗せられたかのように、くず折れて、その場に倒れる。

「えっ、お前なにをしたの?」

「暴徒鎮圧用の重力結界です。予め魔術罫として仕掛けておきました」

「用意周到だな」

「とはいえ長くは持ちません。一旦ここを離れますよ」

「きやつ!?あ、アイザ君!?!」

アイザはルミアを横抱きに抱えると、一節のルーンを唱え跳躍する。

すると人の脚力ではありえない高さまで、二人の体が空へと舞い上がった。

黒魔【グラビティ・コントロール】。重力操作の呪文である。

グレンもアイザに遅れながら三節詠唱で二人を追いかけて学院を囲む鉄柵を大きく飛び越え、学院のその外へと出た。

呪文を解除すると二人は猛然と駆け出した。

「に、逃げたぞ!」

「追え!逆族を逃がすな——ッ!」

「く、くそ動けん」

「ああ、もう畜生！何でこう次から次へと！だから俺は働くなんて嫌だったんだよおおおおお！ええい、引きこもりバンザ——イツ！」

グレンの悲痛で切実な叫びがフェジテの街に響いた。

同時刻、グレン達の逃亡劇を遠見の魔術で眺めている男がいた。

「あらら、連中元お姫様を仕留め損ねちゃったか。やつぱり実戦経験のない素人連中は役に立たないな」

誰に聞かせるでもなく独り呟くその男の声色に落胆はない。それどころか口元に薄く、冷たい微笑を浮かべていた。

「でも、あつさり終わってしまうのも面白くない——もつとひりひりしないと」

想定外のことが起こって、とても面白い、そんな響きだ。

「おや？」

男の視界に、王室親衛隊とは別にグレン達を追いかけている人影が複数確認された。

「くくく。『星』に『戦車』に元『悪魔』か。かつての同僚達を交えて同窓会といったところかな？」

それから数分後。住宅街がある西地区の人気のない路地裏で、アイザは追っ手を完全に撒いたことを確信し、抱えていたルミアを下ろす。

「アイザ君…それに先生もどうして……？」

ルミアの顔は苦渋の色に満ちていた。

「わかってるんですか？このままじゃ、アイザ君も先生も……」

「いや、だって、お前見捨てたら白猫に叱られちゃうだろ？あいつの説教は耳にキンキンうるさいから嫌なんだよ」

「それいつものことですよ」

「ふざけてる場合じゃありません！……なぜ、私を助けたんですか？

今、先生も、アイザ君も、本当に危うい立場なんですよ？いつ殺されてもおかしくないんです。どうして二人とも、私のために、こんな無茶を……!」

「は？講師が自分の生徒を守るのは当然だろ？」

「俺は陛下からお前を守るよう命令を受けている。真偽がはっきりするまでこの命令は生きたままだ」

「お前そこは大好きなルミアを助けたからって言えばよこのツンデレぐぼお!」

からかい口調のグレンの腹部にアイザの肘打ちがヒットする。

「お、お前…今のモロ入ったぞ」

「うちの業界じゃ冗談も言うのも命懸けなんですよ。巫山戯てる暇があるならアルフォネア教授に話を聞いてください」

「あ？なんでセリカに？」

「あの人女王陛下と一緒に闘技場の貴賓席に座ってたでしようが」

「あっそうだった」

身体をくの字に曲げたままのグレンはポケットから取り出した遠隔通信の魔導器を起動して通信に入る。

「アイザ君……」

暗澹とした空気が場を支配する中、ルミアが切り出した。

「任務だから……助けたの？でも、いくら任務の為だからっていつてもこのままじゃアイザ君まで……」

「それはお前が気にすることじゃない」

「気にするよ!このままじゃ私だけじゃなくアイザ君まで……ッ!」

「状況を冷静に考えろ。本当に陛下がお前を殺すのなら他にやりようがあるだろう」

「え？」

「仮にも俺はお前の護衛を任されている。仮にお前を殺すのなら下手な衝突を避ける意味も込めてお前を殺す前に俺に一言あるか、護衛の命を解くかするぐらいはする」

「あ……」

「まず話が急すぎると思わないのか？何故魔術競技祭の日にお前を殺

す必要がある？世間の体裁を保つ為にも罪状とその証拠のでっちあげは事前に用意するだろ」

冷静に語るアイザの言葉に、ルミアもようやく冷静さを取り戻し始めてきた。

言われてみれば確かに話が急すぎる。

本当に殺す必要性があるのなら三年前に殺しているはずだ。

「諜報員としての経験上、物事は常に額面通りのものとは限らない。大抵は裏があることを隠すために？で塗り固めたものだ。今起こっていることもそれなんだろう。最悪自分が死ねば、全部解決できると思ってるなら大間違いだぞ」

「……………っ」

心の内を見透かされたかのような言葉にルミアは押し黙ってしまふ。

「おい、何言ってるんだ？ ふぎけんな！ 今俺は真面目に……………っ!？」

セリカと連絡してるグレンの様子がおかしい。神妙な顔つきでいくつか質問を重ねるがその表情は渋くなる一方だった。

「あ？それってどういう……………て、おい!？あの女……………変なこと言うだけ言って切りやがった。くそ……………俺ひとりでどうしろってんだ」
「どうでした?」

セリカとの連絡を終え、近づいてきたグレンにアイザはその結果を問い質す。

「ダメだった。なんでか分からんが、セリカは動けないらしい」

「歴代最強の魔術師が？なぜ?」

「聞いても言わねえんだよ」

「彼女でも手に負えない事態が発生したということでしょうか?」

「そういうことなんだろうな。だが、俺が女王陛下の元に来れば事態は解決できるらしい。俺だけがこの状況を打破できると言っていた」

「どういう意味かわかりますか?」

「いや、全然思いつかねえ」

「…つかえませんね」

「文句ならセリカに言え！」

とりあえず、アリシアの元へどうやって辿り着くかその方法を考えようとした矢先——強烈な殺気が襲いかかった。

「——ッ!?!」

グレンとアイザは殺気がした方向へと急いで顔を向けると、通りの向こうの建物の屋根の上に、三人の人影があった。

「リエルにアルベルト!?!どうしてここに——まさか、王室親衛隊だけじゃなく、宮廷魔導士団も動いていたのか!?!つてあれ?なんでレイもあっち側にいんだ?」

グレンが三人の存在を認識した瞬間。リエルが弾かれたように屋根を蹴り、建物の壁を駆け下りた。

「いけリエル!思いつきりブチのめしてやれ!」

「え?」

「ん、グレン覚悟」

レイの指示に従ってリエルが大剣を携えてグレンに斬りかかる。

「いや、ちょ——」

「やめんか」

「ぎゃんツ!?!」

だがアルベルトの放った威力低めのライトニングピアスが彼女の後頭部に直撃して阻止された。

（(え?なにこれ?)）

まったく状況が掴めない三人の前にアルベルトが降り立つ。

「久しぶりだな、グレン」

「あ、ああ……」

どこか咎めるように冷たい声色で挨拶してくる元同僚に、グレンは戸惑う。

「場所を変える。俺についてこい」

レイとアルベルトはリエルを引きずりながら路地裏の奥へと歩いていく。

「——どうします?グレン先生」

「行くしかないだろ」

「一応言っておきますけど、俺のことは話さないでくださいよ」

「わーっってるって。行くぞ」

ため息をつき、グレンは二人についていく。

「ルミア、行くぞ」

「う、うん」

そんなグレンに、アイザとルミアも急いでついていった。

「このお馬鹿！お前、一体、何考えてるんだ!？」

フェジテの路地裏、その更に奥まった場所。

リエルの襲撃の理由が『現役時代の時にお預けになった勝負の決着をつけたかった』だったと聞き、グレンが叫んだ。

「時と場合と状況を考えろ、このアホ！脳筋！おかげで死ぬトコだったわー！」

「……むう」

「てかなんでレイはこいつを煽るようなことしてんだ!？」

「あ？俺がこいつ襲われたのにお前だけ襲われなたってのが不公平だと思っただけに決まってるだろ?。」

「目茶苦茶最低な理由だな！」

「ちなみに俺は返り討ちにしてやったぞ」

「だろうな！お前くらいしかこいつ相手にそんなことできねえよ！」

「……………そろそろ話を進めるぞ。状況はとても深刻なんだがな」

「す、すまん。頼む」

アルベルトの態度は久方ぶりに再会した仲間へ向けられるものとしては、どこか冷ややかだ。グレンは気まずさを覚えながらそれに応じた。

アルベルトが調べた限りでは王室親衛隊の総隊長ゼーロスの主導の元、女王陛下を監視下におき、元王女であるルミアを抹殺しようとして動いている。その理由としてルミアが魔術とは異なる力——『異能者』である事が挙げられるが、不敬罪を犯してまで敢行する事なのか

という疑問が上がる。

「セリカはどうしたんだ？ほら、元・特務分室のナンバー21」

「女王陛下の傍らに居る。だが、何も行動を起こす心算はないように見える」

「わっかんねーなあ。セリカなら、いくらでも女王陛下を守って切り抜けられるはずなんだけどなあ…」

「もういい。考えても仕方ないことがある」

思索の膠着状態にしびれを切らしたようにリエルが割って入る。

「……いや、お前はもう少し考えような？」

「だから、わたしは状況を打破する作戦を考えた。グレンとレイがいるなら、もう少し高度な作戦が可能」

「ほう？言ってみろ」

「まず、わたしが敵に正面から突っ込む。次にグレンが敵に正面から突っ込む。そしてレイが敵に正面から突っ込む。最後にアルベルトが敵に正面から突っ込むばいい。…どう？」

「お前はいい加減、その脳筋思考をどうにかしろつての!?!」

「痛い」

呆れたグレンはリエルの脳天を鷲掴みし、ギリギリと万力のよう
に力を込めた。

(…情報通り戦車は馬鹿だな)

ルミアの側に立つアイザは内心呆れてしまう。

「馬鹿の考えた作戦なんてこんなもんか。ここは俺が考えた作戦でやるぞ」

「いや、お前もこいつ以上の馬鹿なんだけど」

リエルの馬鹿さに呆れるレイが提示した作戦は――

「まず、グレンリエルとアルベルトとアイザが女王様のところに突撃する。それを俺が連中に告げ口する。後は俺が褒美を貰って全部解決だ」

「さっきのよりも最低な作戦じゃねえかああああ!!」

「ぶべらあああ!!」

グレンの渾身のツツコミと右ストレートが炸裂した。

「なに仲間を差し出して一人だけいい思いしようとしてんだよ!?そんなんで解決すんのはテメエの懐事情だけじゃねえか!」

「さらっと俺まで差し出そうとしてるんですか?」

「巫山戯るのも大概にしろ。息の根を止めるぞ」

「ん、よくわからないけど取り敢えずレイをボコる」

生贄作戦を考えついたレイをグレンとアイザ、アルベルトとリイエルがゲシゲシと蹴る様子に、ルミアは苦笑いを浮かべながら見守っていた。

「もう馬鹿はあてにしねえ……とにかく女王陛下に直接面会すれば、この状況を打破できる」ゲシゲシ

「その根拠はなんだ?グレン」ゲシゲシ

「さあな?セリカがそうしろって言ったんだ。知ってるだろ?元帝国宮廷魔導師団、執行者ナンバー21『世界』のセリカⅡアルフォネアは、ケチで意地悪だが、意味のないことを言うやつじゃない。どの道このままじゃ物量差でジリ貧、それに賭ける。それに心強い味方もう一人いる」ゲシゲシ

「そいつは信じていいのか?」ゲシゲシ

「少なくとも、俺は信じられるね」ゲシゲシ

「……わかった。お前がそう言うのなら、俺も信じよう」ゲシゲシ

「それで、お前達を女王陛下の前に立たせるとして……俺達は何をすればいいんだ?」ゲシゲシ

「そうだな——」ゲシゲシ

「あの、せめて蹴るのやめてから説明してくんね!」

◆◆

「はあ……遅いなあアイザと先生……」

競技祭の指揮をセラと一緒にとっているシステイーナはボソツとそう呟く。レイのことは頭から抜け落ちている。

「そうだねえ……何かあったのかな?」

「あの二人ならルミアをすぐに見つけると思うんだけど……」

アイザ達がどうなっているかシステイナ達は知らない。まだルミアを探しているのかルミアと何かをしているのか分からないのだ。それに、システイナとセラで頑張ってはいるが競技祭の布陣を決めて総指揮をとっていたグレンがいないことで二組は徐々に士気が落ちかけてきていた。

「やっぱグレン君がいないと厳しそうだなあ…」

そうセラがボソツと呟いた時、システイナとセラの背後から覚えのある気配を感じ振り向く。

「もう、遅いわよ三人とも！つて…あれ？」

「アルベルト君にリエルちゃん？」

そう、二人が振り向いた先にいたのは、アイザとレイ、そしてアルベルトとリエルだった。

「セラ先生、お知り合いですか？」

「うん、前の仕事で同僚だったの」

「いやあさつき偶然会ってな」

「レイ君はなんでボロボロなの？」

「ちよつと転んだんだよ」

「グレンの昔の友人のアルベルトだ。この隣の女はリエル。魔術競技祭の後、旧交を温めようとグレンに招待されたのだが…奴は突然の用事が入ってしまった立って込んでいる」

その言葉を聞いて二組の生徒達は顔を見合わせる。動揺の色が隠せないでいる。しかし、アルベルトは淡々と生徒達に告げる。

「グレンの奴からこのクラスのことを任された。今から俺が奴の代わりに指揮をとる。そして、奴にお願いもされた、優勝してくれとな」それを聞いた二組の生徒達、そしてシステイナやセラも驚く。突然現れて指揮をとるから優勝しろ？グレンとセラ、あとレイの知り合いで許可証も持っている以上、信頼はできるのだろうかどう判断すれば良いのか分からず全員が困っているとリエルがシステイナの前までやってくる。

「お願い…信じて」

リエルはシステイナの手をとり真剣な眼差しでシステイナ

を見つめながらそう言った。

「——貴女達は……」

システイーナはしばらく黙り、そして頷いた。

「……わかったわ。うちのクラスの指揮監督をお願いするわ、アルベルトさん」

そんなシステイーナに、困惑の視線が集まる。

「大丈夫よ。この人達はきつと信頼できる。それに誰が指揮を取ろうと、私達のやることは変わらない。皆で優勝するんでしょ？」

「そ、そうは言ってもさ……」

「先生がいないと俺たち……」

しかし、生徒達は不安そうな表情をする。

「おいおい、あいつがいなくなっただけでここまで弱腰になるとはな。

けどテメエらが勝手に負けたらアイツ、『ぎやははは！お前らって俺がついてないと全っ然ダメなんだなあ！あつ、ごめんねえ、キミ達い、途中でボク抜けちゃって、てへぺろっ！』って言うぞ、絶対」

というレイの一言に全員が想像する。

いつもの通り憎たらしい表情で、いつものように皮肉たつぷりの口調で、レイの言った通りのセリフを言うグレンを。

むかつ！いらっ！かちん！

あまりにも有り得るその状況に、二組の生徒達は全員がむかつとした表情をする。

「言いそう……」

「ウザいですわ、それはとてつもなくウザいですわ……っ！」

「あのバカ講師に言われるのだけは我慢ならんな」

「ああ、もう、くそ！考えただけで腹立つ！わかったよ、やってやるよ！」

冷えかけていた熱気が戻ってきた。

「よし、こんなもんだな」

生徒達を焚きつけることに成功し、レイがうんうんと頷く。

「……レイが言うとうまく説得力があるな」

「褒めんなよ。照れるじゃねえか」

「褒めてねえよ」

アルベルトはしかめっ面をしながら髪をかいた。